

# 禁忌少年の月ノ森ライ フ

火の車

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

優れた人間、そう言われて自分以外を思い浮かべたことがない  
俺自身、一切それを疑問に思ったことはなかった

なんでかって？俺は生まれた時からそれが約束されてたからだ

「俺は禁忌から生まれた、人間の到達点だ。」

禁忌、その言葉が指す意味とは？

# 目次

|          |     |
|----------|-----|
| 月ノ森にて    | 1   |
| 副業       | 18  |
| 接触       | 28  |
| 接近       | 41  |
| ストーリーカー？ | 53  |
| 依頼       | 63  |
| 救出       | 75  |
| 夢        | 90  |
| 初ライブ     | 104 |
| 恋情       | 113 |
| 疑念       | 128 |

|           |     |
|-----------|-----|
| 出生        | 145 |
| 演奏者       | 166 |
| 自覚と普通     | 181 |
| 登校時間      | 207 |
| 普通プロジェクト  | 221 |
| 武闘派の女     | 236 |
| 警備任務      | 249 |
| 予定        | 278 |
| 美術展       | 290 |
| 遊園地デート 前編 | 304 |
| 遊園地デート 後編 | 319 |
| 風邪        | 345 |
| 最悪の依頼 1   | 359 |

|         |     |
|---------|-----|
| 彼氏の話    | 548 |
| カップルの雑談 | 536 |
| デート     | 518 |
| 花見の日    | 501 |
| 番外編     |     |
| 最終回     | 474 |
| 目覚め     | 460 |
| 希望      | 448 |
| 恨み      | 435 |
| 寒天の下で   | 422 |
| 最悪の依頼2  | 401 |
| 守りたいもの  | 390 |
| デート     | 379 |

|         |     |
|---------|-----|
| 休日      | 627 |
| 誕生      | 608 |
| 訪問      | 597 |
| 1か月前    | 585 |
| 悪戯      | 573 |
| 授業参観(?) | 561 |

# 月ノ森にて

ここは月ノ森学園

創立100年にもなる名門校

ここにいる生徒は金持ちか、コンクールで賞を取るような人物が通っている

教師「——ここまでは理解できたかな。」

？「あー、違う違う。」

教師「なんだと？」

？「それは前に言った商社に売らないと利益が13%落ちる。そんな事も分からないのか？」

そんな月ノ森学園に異彩を放つ人物がいた

“ 司 ”

教師「おい、柊木。」

司「うるさい。忙しいから黙れ。」

教師「(ビキツ)」

司「えっと、なんだつけ？ああ、あの商談が決まって追加130億か、でかした。」

俺はそれだけ言って、電話を切った

そして、パソコン画面を見た

司「ふむ。これで、今月20兆か。実に気分がいい。」

教師「柊木!!!」

司「ん？」

横からうるさい声が聞こえる

鬱陶しく思いながら、声の方に目を向けた

司「ええ、誰だったっけ？」

教師「お前のクラスで、数学の授業をしてる教師だ。」

司「ああ、そう言えばいたな、そんな奴。」

確か、前に紹介で言ってたな

司「それで、何の用だ？」

教師「何の用だ……じゃない!!!」

その教師は剣幕な表情で怒鳴ってきた

うるさい、唾液も飛んできてかかりそうになった

教師「月ノ森で授業を受けられると言うのに、なんだその態度は!!!」

司「うるさい、静かに話せ。」

教師「なっ!!」

俺は軽く手を振りながら、だるそうにそう言った

教師の表情は明らかに怒っている

司「それで、月ノ森の授業を受けられるって言ったか？」

教師「そうだ。」

司「じゃあ、月ノ森での授業は何か特別に得るものがあるのか？」

俺は最も疑問に思った事を質問した

司「是非教えてくれ。お前に対しての興味はそれだけだ。」

教師「……なら、教えてやろう。」

そう言つて、教師は黒板を指さした

そこには、数学の問題が書かれてる

教師「普通の学校の生徒は解けない、月ノ森の生徒なら解ける問題だ。」

司「ふーん。」

俺は周りを見渡して、耳を澄ましてみた

「なによ、この問題。」

「こんなの、普通は分かんないだろ。」

そんな声が聞こえて、全員、困惑してる

何が月ノ森の生徒なら解けるだ

教師「解いてみる、終木。」

司「…… はあ、出来るだけチョークに触りたくないんだがな。」

俺はそう言いながら、席を立った

教師（ふん！過去にあれを解けた生徒はゼロ！精々恥をかけ!!!）

司（つて、声が聞こえる聞こえる。）

俺は黒板の問題を見た

教師「どうしたー？解けないのかー？」

司「…… ふむ。」

俺は5秒ほど考えて、置いてあるチョークを持った

そして、黒板に式を手早く書いて行った

司「—— はい、終わり。」

俺は手についたチョークの粉を払いながらそう言った

司「おい、正解か見てみる。」

教師「ふん、いいだろう。（今に見てろ、どうせ……）」

教師はにやけ顔で黒板に書いてる式を見た

教師（どうせ、でたらめを書いたに決まって…… え？）



黒板を見てるうちに、教師の顔がだんだん青ざめて行った  
そして、何度も首が上下しだした

教師「あ、え、え……？」

司「どうだ？あつてるだろ。」

俺がそう言うのと、教師は俺の方を勢いよく向いた

目がかかなり血走ってる

教師「き、貴様あ!!この問題を知っていたな!!!」

教師はそう叫びながら、俺に詰め寄ってきた

司「知らねえよ。俺は普段、一切の勉強をしないからな。」

教師「なら!なんで、あの問題を解ける!!?ありえないだろう!!」

教師は俺に掴みかからんという勢いだ

顔も真っ赤だ

司「おいおい、言いがかりはよせよ。」

教師「はあ!?!」

司「お前は、月ノ森の生徒なら解けるって言ってたよな?」

教師「っ!?!」

司「解ける問題を解いて、なんで俺は怒鳴られないといけないんだ?言ってみろ。」

教師「う、つぐ……」

何も言えないらしい

そんな様を見て、ついつい笑いが漏れる

教師「な、何を笑っている！」

司「いやあ、お前が面白過ぎるんだよ。」

教師「なに？」

司「最初から俺に恥をかかせようとあの問題を解かせたんだろ？月ノ森の生徒なら解けるなんて真つ赤なウソだ。」

教師「……」

教師はうつ向いて、こぶしを握り込んでいる

唇も噛んじゃって、悔しいんだろうな

司「いやいや、俺は怒ってるわけじゃないんだぜ？」

教師「は、は？」

司「俺は嘘つきを悪いと思わない。」

俺は教師の肩を叩いた

司「ただなー。」

教師「！」

司「俺に突つかかったのはダメだったな？」

俺は優しい声でそう言った

まるで、幼稚園の子供をあやすみたいに

司「お前がつまらん、無能を量産する授業をしてる間に、俺は何億の金を生み出すんだぜ？」

教師「……」

司「それは、お前がもらうはした金とはわけが違う。そして、そのはした金を提供してやってるのも俺だ。」

教師「なんだと!？」

司「……それが分かったら、お前の取るべき行動は分かるよな？」

俺はそう問いかけた

そして、教師は慌てたように一歩下がって頭を下げた

教師「も、申し訳ありませんでした……!」

司「ああ、いいぜ。」

俺は肩を叩きながらそう言った

司「お前はまた一つ、賢くなった。誇っていいぜ？」

教師「……はい。」

司「それじゃあ、もう授業を再開してもいいぞ？」  
教師「……はい。」

教師は肩を落としながら黒板の前に戻って行った

俺はすぐに、自分の席に座り、パソコンを開いた

司（無駄な時間だったな。さてと。）

パソコンには社員からの定期連絡が入ってる

そこには得た利益が細かく表示されてる

司（まあ、失敗なんてありえない。なんせ、俺が全部を仕切ってるんだからな。）

俺はそんな事を考えながら、作業を進めていった

司「——うん？」

周りの雰囲気が変わったのに気づき、周りに目を向けた

そこには、各自で昼食をとる生徒の姿があった

司（俺も栄養補給するか。）

俺は鞆から、某カロリー食品とゼリーを取り出した

そして、作業を進めつつそれを口に入れた

司（ふむ、利益は朝から1.1%アップか。出来れば今日中に滞ってる3件の商談を

片付けたい。）

俺は片手で商談相手へのメールを打ちながら、ゼリーを食べていた

「あ、あの。」

司（予定通りだ。一旦は無茶な契約内容を叩きつけた、それで本来の要求が通せる。）

「ひ、柊木くん！」

司「？」

今日はやけに横から声を掛けられる日だ

作業もある程度すんで、俺は声の方に向いた

司「なんだ。」

「えっと、お弁当作って来たから、食べてほしくって。家、高級料理店だから味は――」

司「いらん。」

俺はそれだけ言って目線を戻した

「で、でも！」

司「聞こえなかったか？俺はいらんと言ったんだ。」

「はい……」

？「ちよつと！そんな言い方ないでしょ！」

司「あ？」

またうるさい声が聞こえて来た

訂正、今日はよく怒鳴られる日だな

「ふ、二葉さん……」

司「二葉？ああ、学級委員長の二葉つくしか。」

つくし「ええ、ごきげんよう。」

司「何の用だ。挨拶なんていらん。要件を話せ。」

俺は心底めんどくさそうにそう問いかけた

つくし「あなたのさっきの態度、流石にないじゃない！」

司「はあ……」

俺はそれだけを聞いてため息をついた

心底、馬鹿馬鹿しいと思ったからだ

司「二葉つくし、お前は勘違いをしてる。」

つくし「勘違い？」

司「俺は食べ物欲しいなんて頼んでない。」

つくし「分かってるわよ！でも、彼女は親切で持って来たんじゃないの!？」

司「それも勘違いだ。」

いるんだよな、こういうやつ

勘違いして生きてるような奴

司「親切つてのは、押し付けたらそれは迷惑になるんだ。有難迷惑なんて言葉もあるくらいだからな。」

つくし「なっ!」

司「俺に何の確認も取らず、勝手に持つてきて、断られた。これを聞いても俺が悪いと言えるのか?」

つくし「た、確かに、全部悪いとは言わないけど……」

司「それが答えだ。」

つくし「で、でも!断るにしても言い方つてあると思う!」

司「へえ。」

俺はそう言いながら、席から立ち上がつてあの女子の方に向いた

司「おい。」

「は、は、は。」

司「さつきは悪かった。」

「え?」

つくし「!?!」

司「実は、俺は小食であれとゼリーを食べると満腹になつてしまうんだ。悪かった

な。」

俺は優しい声でそう言った

「そ、そうだったんだ。」

司「ああ。惜しい事をしてしまった。折角の君からのお弁当だったのにな。」

「いえ、そんな事ないです！次からはもつと気をつけます！」

つくし「ええ!？」

女子はそう言つて、友人がいると思われる方に行つた

司「ほらな、こんなもんだよ。」

つくし「まさか、嘘ついて……!？」

司「当然だろ？俺が本心であんなこと思うと？」

俺はにやけ顔でそう言つた

つくし「さ、最低！」

司「最低？おいおい、冗談を言うな。」

俺は席に座り、足を組んだ

司「俺は必要のない物を食べなくていい、さっきの女子も嬉しそうに戻つて行つた、誰

が不幸になつた？」

つくし「そ、それは……」



司「納得してないのは二葉つくし、お前だけだ。」

俺は少しだけ、顔を近づけてこう言った

司「賢くなろうぜ？お前が折り合いをつければ、全てが丸く収まる。」

つくし「う、うう……！」

？「ふ、二葉さん……」

俺が二葉つくしにそう言うと、話に誰かが割って入ってきた

確か、こいつは……

司「倉田ましろ、だったか。」

ましろ「は、はい。こんにちは……」

つくし「倉田さん……？」

ましろ「その人の言ってる事は、間違ってるよ」

司「おお、分かってるな。」

俺は倉田ましろの方を見てそう言った

少し感心した

こいつに關しては他の生徒よりも、さらに普通な気配を感じてた

司「倉田ましろは少しは賢いみたいだな。」

ましろ「あ、ありがとうございます……」

つくし「も、もう！行こ、倉田さん！」

ましろ「あ、待つて……！」

二葉つくしと倉田ましろは教室の外に出て行った

俺はそれを見てから、画面に目を移した

司「……ん？」

画面を見ると、一通のメールが来ていた

俺はそのメールをすぐに開いた

司「……なるほど。」

俺はメールを確認し終わると、パソコンを閉じた

そして、時間は過ぎていった

放課後、俺は廊下を歩いていた

少し急ぎ足で、仕事に遅れないように

司（2時間か、間に合うか？）

俺は携帯で仕事内容を確認しながら歩いていた

仕事、と言っても副業だ

司（無断入国して、違法な取引、か。）

? 「——きやつ。」

司「!(やばっ)」

誰かにつつかつて携帯を落とした

俺はすぐに携帯を回収した

司「……悪いな。」

? 「ううん、大丈夫だよー。」

司「急いでる。失礼。」

俺は下駄箱の方に歩いて行つた

司(見られたか? いや、普通の奴なら大丈夫だ。)

俺は携帯画面を再度確認した

そこには、こう書かれている

『無断入国を行い、違法な取引を行う商会がございます。是非とも、あなたに仕事を依頼

したい。たやすい事でしょう。』

司「なるほどなー。」

俺は鞆に携帯をしまった

そして、肩を軽く回した

司(さて、行くか。)

俺は少し気合を入れて、歩いた

“？”

？「うーん、あれは何だったのかなー？」

ましろ「——広町さーん！」

七深「あ、しろちゃんー。」

ましろ「もうすぐ練習始まるから、探しに来たの。」

七深「あー、ごめんね。」

ましろ「ううん。大丈夫。」

七深「じゃあ、行こっかー、練習ー。」

ましろ「うん。」

二人は透子とつくしの待つ教室に向かった

その時、七深は……

七深（あれはー、なんだったんだろー？）

さつきぶつかった、男子の携帯画面に映ってた文字

全部は見えなかったが、一つだけ

七深（パンドラって、一体何だったんだろー？）

ましろ「広町さん？」

七深「あー、なんでもないよー。ごめんねー。」

二人は急ぎ足で練習場所の教室に向かった

そして、ここから彼、柊木司の月ノ森ライフが始まった

## 副業

夜の港

灯台からは光が放たれていて

海の方からは船が進む音が聞こえてくる

司「――準備完了だ。」

? 『こつちも大体飛ばし終わったよ。』

俺は今、港を一望できるクレーンの上にいる

程々にスペースもあり、今回の仕事に丁度いい位置だ

そして、通信の先には俺の仕事仲間がいる

司「あれが、今回のターゲットだな？」

? 『うん。麻薬に臓器、少しの人身売買もあるっぽいね。』

司「数は？」

? 『16人。』

司「そうか。」

俺はある装置を目に取り付けた

そこには飛んでいるドローンの映像がいくつか映っている

司「始めるぞ。」

そう言つて俺は、ライフルを構えた

俺は手始めに、前にいた3人を狙撃した

? 『——命中。』

司「残り13人は気づいたみたいだな。まあ、関係ないが。」

そう言いながら5発

銃口から放たれた銃弾はちょうど5人の頭を打ち抜いた

司「あと、8人か。」

? 『向こうは当然だけど、司の位置はつかめてないね。』

司「どこにこんな距離から撃つ奴がいる。」

向こうからの距離は一般的なスナイパーの約3倍

誰がこつちを補足なんてできるか

司「残りがコンテナの陰に隠れた。映像を回せ。」

? 『りょーかい。』

ドローンが移動して、写ってる景色が変わった

そこには、明らかに困惑してる男が5人

合図を送ってるが、ともかく姿を隠せるところだろうな

司「まあ、関係ないが。」

俺は少しライフルの位置を調節した

このライフルは特注、コンテナくらいはぶち抜ける

司「右側に3、左側に3、その少し手前に2か。」

俺は右側の3人を狙撃した

弾は見事に3人の脳天を打ち抜いた

その映像を確認すると、俺は残りの5人を狙撃

吸い込まれてると思うほど正確にコンテナを抜いて、2人の男の頭を打ち抜いた

司「——任務完了だ。」

? 『お疲れ様。』

司「依頼者の所に向かう。こっちに合流しろ。」

俺はそう言って、クレーンから飛び降りた

飛び降りた後、向こうから仕事仲間が歩いてきた

? 「いやあ、今日も命中率、ヘッドショット率100%！」

司「当り前の事を言うな、明石。」

響「あはは！ごめんごめん！」



こいつは明石響

表と裏、両方での仕事仲間だ

響「それにしても……」

明石はクレーンを見上げた

響「どうやって、ここからスコープなしで狙撃して、最後には飛び降りるのかなー？」

司「どうするもこうするもない。お前は呼吸をするのにコツを聞くのか？」

響「まあ、司にとってはそうだよー。」

司「無駄話はいらん。報酬を受け取って戻るぞ。」

響「りよーかい！」

俺と明石は待たせてる車に戻った

そして、依頼者のいるビルに向かった

俺たちが乗る車は、港近くにある高層ビルの前で止まった

俺と明石は車から降りて、ビルの中に入った。

中に入ると、エレベーターに乗り最上階に行った

「来ましたね。」

司「久しいな、柳真廣。」

響「こんばんはー！」

最上階に来ると、40代くらいの男がいた

今回の依頼人だ

真廣「これはこれは、柗木様。いや、ここではパンドラ様とお呼びした方がよいでしょうか？」

司「どつちでもいい。」

響「本日の依頼成功の報告に来ました！どうぞ！」

そう言うのと明石は柳真廣の前にパソコンを置いた

そこには、ドローンで撮影した映像が映し出されている

真廣「……素晴らしい。彼らに好きにされて困っていたのです。」

司「そうか。」

真廣「こちらは、依頼料の20億円になります。お納めください。」

司「ああ。」

俺は札幌の入った大きめのケースを受け取った

響「やったー！」

司「確かに受け取った。今日は帰る。」

真廣「はい。これからもよろしくお願いいたします。表でも、裏でも。」

司「いいだろう。」

俺はそう言つて、その部屋を後にした

響「いやあ！今日も大量だね！」

帰りの車で明石はそう言つた

あんな額、今日俺が稼いだ中での欠片にも満たないんだがな

司「まあ、仕事のリスクから考えればこの程度の額だろうな。」

響「あ、そっか。司は今日だけでもこれの何倍も稼いでるもんねー。」

司「そういう事だ。」

俺はそう言つて、さっき受け取つたケースを出した

司「これはやる。」

響「え!?!まじ?」

司「今更、この程度の額はいらなからな。」

響「あざーっす！」

明石は嬉しそうにケースを受け取つた

俺は軽く体を伸ばした

響「そう言えばさ、司つて月ノ森に行ったんだっけ？」

司「ああ、そうだ。」

少し時間が経つと、明石がそんな事を聞いてきた

響「どうだった？なんかすごい人とかいた？」

司「いない。」

響「うん、司に聞いたのが間違いだった。」

明石は頭を抱えながら呆れたようにそう言った

失礼なやつだと思った

響「やっぱり、月ノ森でも司に並ぶ子はいないのかー。」

司「当り前だ。普通の人間が俺に並べるわけがない。」

響「じゃあ、なんで月ノ森行つたの？」

司「家から近いからだ。」

家から近い、これ以上に素晴らしい理由はない

無駄な時間を最低限に抑え、仕事に時間を使える

響「うん、知ってた。」

司「そもそも、月ノ森が名門校って言われてることも3日前に知った。」

響「流石、天才は違うねえ。そりゃ、態度もでかくなるわ。」

明石は感心したようにそう言った

司「そう言うが、俺はお前を認めてるんだぜ？心理戦で俺に15分かかせた、十分な天才だ。」

響「うっわ、嫌みな奴。」

司「そうか？俺にとつては最高の誉め言葉のつもりなんだが。」

響「だから、あたし以外の友達いないんだよ。」

司「それは否定しない。」

俺は少し笑いながらそう言った

明石は困ったような顔をしている

響「司の事はある程度分かってるけどさ、ちよつとは友達作りなよ。」

司「いるじゃないか。」

響「学校で！」

明石は大きな声でそう言った

そう言われても、あんな馬鹿が多い場所で友人なんて作れない

司「ふむ。」

響「あたしは心配だよ。司の将来が。」

司「おいおい、俺ほど将来が約束されてる人間はいないぜ？」

響「そうじゃなくてさー、あるじゃん？人として初めて手に入れられる幸せって。」

明石は言い聞かせるようにそう言ってきた

こいつは俺の親か

響「あ、でも、司はダメかー。」

司「なにがだ？」

響「彼女とか、そう言うのー。」

司「ああ。」

何を言うかと思えば、そんな事か

司「しかも、そう言う相手の候補は明石くらいだな。」

響「いや♪」

司「だよな。」

響「司はねー、顔は良いんだけど。性格がねー。」

明石は頭を押さえながらそう言った

こいつ、本当に失礼だな

司「消去法にマジで答えるな。」

響「そう言うところだよ？」

若干怒ったような声だ

何でかはよくわからんが

響「はあ……」

司「あ、家に着いたな。」

響「あ、もう着いたの？」

司「ああ。じゃあな。」

俺は車から降りた

そして、運転手に話しかけた

司「明石を家まで送れ。俺の友人だ、丁重にな。」

運転手「かしこまりました、終木様。」

響「じゃあね！司！」

司「ああ。」

俺は車を見送ると、家に入った

こうして、俺の一日は終わった

## 接触

司「——素晴らしい。」

俺はいつも通り

学校の机でパソコンを広げ、仕事をしていた

昨日に滞つてた商談を決めたことにより、今日の利益は昨日から30%アップ  
グラフも右肩上がり続けてる

司（これから市場が急激に動くことはない。自動で金が入るだけだ。）

面白い事この上ない

何のリスクもなく、確な苦勞もしないで国家にある金の36%を手中に収める  
それで経済を回してるから、俺に逆らうやつはいない

司「……」

だが、困った

ここから俺は何かしらの報告があるまですることがない

俺は携帯を出して予定表を見た

司（会食の招待は2日後。副業もまだ仕事の話は来てない。あ、1週間後に弦巻との



約束があつた。）

基本的に俺の予定は埋まつてる

学校にいる間の仕事は代理人に任せてある

立ち回りは全て指示している

司（しまった。今日1日の予定が空いてしまった。）

そんな事をしていたら、俺自身の仕事は結構なくなる

代理人がいなかったら、少なくとも20年は動きっぱなしになる

司（うちの代理人は優秀だな。今度、会った時にボーナスを渡してやろう。）

俺はそんな事を考えながら

いつも動かし続けてる頭を止めて

ボーっとしたまま、時間を過ごした

司「——ん？」

気づけば、いつの間にか周りの生徒は鞆を持ち下校をしようとしていた

司（少しボーっとしすぎたな。）

俺はそう思いながら、席を立ち

下校の準備をして、教室を出た

教室を出て、俺は廊下を歩いていた

さつきまで頭を動かしてなかったからか、かなりすつきりしてる

司「……？」

廊下を歩いていると、何かの音が聞こえて来た

ギター、ベース、ドラムの音だ

司（月ノ森でバンドだと？）

月ノ森には音楽はクラシックしかないと思ってるようなつまらん奴らばかりと思っただけだ

俺は時間もあつたので、フラツと音が聞こえるほうに歩いて行つた

司（「さーて、どんな奴らがいるんだらうなー。」）

俺は教室の中を見た

司（あれは、確か。）

二葉つくしと倉田ましろ

あと、あれは、桐ヶ谷透子だったか

後は……

溜唯「何をしているのかしら？」

司「……生徒会か。」

瑠唯「ええ。生徒会の八潮瑠唯よ。」

八潮瑠唯、確か入学して最初のテストで1位だった奴か

瑠唯「あなたはここで何をしているのかしら？」

司「珍しい音が聞こえて、気になったから見に来た。それだけだ。」

嘘をつく意味もないので、俺は正直にそう言った

八潮瑠唯は俺の話を聞くと特に疑う様子も見せなかった

瑠唯「気持ちは分かるわ。確かに月ノ森では珍しいもの。」

司「お前がここに来てる理由は、これの監視つて所か。」

瑠唯「あら、良く分かっているわね。」

司「元は騒音つて苦情が生徒会に寄せられて、教室の使用許可を取り消そうとしたがそれが叶わず、お前が監視することが使用条件になった、つて感じだろ？」

瑠唯「大体正解よ。流石ね。」

司「お前を一目見ればわかった。そして、少し前に作った曲を持って来るくらいにはほだされたと。」

俺は八潮瑠唯の手元を指さしながらそう言った

紙の状態から見て、最近は使われてない物だろう

瑠唯「それは勘違いよ。しつこかったから提供してあげるのよ。」

司「まあ、それはそれでいいんだが。それ、バイオリンの曲だろ？バンドで使えるのか？」

瑠唯「知らないわ。」

司「うわ、鬼だ。」

透子「——そこでなーにやってんのー？」

俺と八潮瑠唯が話していると、教室の中から桐ヶ谷透子が顔をのぞかせていた  
少し話過ぎたか

透子「つて、まさか、柊木司!？」

司「ああ、そうだ。」

透子「うっそ！本物!？」

桐ヶ谷透子はそう言いながら俺に近づいて来た

透子「いつも、家がお世話になってます!」

司「家?」  
ああ、あの呉服屋の娘か。確かブランドも持ってるって聞いた。」

透子「はい！そうっす!」

司「その年でブランドを持つのか。中々の才能だな。」

SNSで人気もあって、人間が自然に周りに集まる人間

中々、商売に向いてそうな奴だ

つくし「あつ！柊木君！」

司「あ、ツインテール。」

つくし「私は二葉つくしよ！昨日呼んでたじゃない！」

もちろん知ってる、冗談だ

だが、昨日こいつを初めて見たが

なんだろう、このポンコツの気配は

透子「ちよ、二葉、知り合いなの？」

つくし「昨日、言い合いましたのよ！」

司「それで、俺のぼろ負けして倉田ましろに止められた、と。」

つくし「ま、負けてない！」

こいつの自信は果たしてどこから来てるんだ？

まあ、別にいいんだが

瑠唯「やっぱり、有名ね。」

透子「いや、当り前つしよ！世界一の実業家でかつ、その性格から王って呼ばれてる

んだよ！」

つくし「お、王!？」

司「ああ、そんな呼び方もされてたな。」

透子「よかつたら、あたし達の練習見て行きませんか？」

桐ヶ谷透子はそんな事を言ってきた

透子「次は絶対、あたし達が来るんで！」

瑠唯「流石に、そんな時間はないでしょう。」

司「そうだな、時間もあるし、面白みがあるからいいぞ。」

つくし「!？」

透子「まじ!?じゃあ、どうぞ！」

俺はそうして、練習場所の教室に招き入れられた

教室に入ると、残りのメンバーがいた

透子「客さんだよー!倉田ー!」

ましろ「お、お客さん?って、終木さん？」

七深「あれー?昨日の人だー。」

司「お前は……。」

昨日……

俺が接した人間は……

司「昨日、ぶつかった奴か。」

七深「そうだよー。」

司「確か、お前は…… 広町七深か。」

俺は一応、学年にいる全員の名前を把握してる  
その中でも特出してる人間はある程度調べてる

七深「おー、私の事、知ってるんだねー。」

司「ああ。」

こいつはいたって普通、という印象だ

学年順位も普通だし、月ノ森の水準にいる学生か

透子「じゃあ、練習再開しよ！八潮も曲持ってきてくれたし！」

つくし「ありがとう！八潮さん！」

ましろ「ありがとう。」

七深「ありがとうー、るいるいー。」

瑠唯「無駄口を叩いてないで活動を再開しないさい。」

八潮がそう言うと、4人は練習を再開した

俺は八潮の横に座りその様子を見ていた

司「……？」

練習の風景を見て、違和感があった  
演奏全体の印象としては、まあまあ

普通の人間は月ノ森生にしては普通と思うくらいだろう  
ただ……

司（広町七深、あいつだけ上手すぎないか？）

経験者か？

だが、月ノ森でベースをしてる奴なんて聞いたこともない

瑠唯「違和感があるかしら？」

司「ああ。」

俺が考えてると、八潮瑠唯が話しかけて来た

こいつ、何か知ってるな

瑠唯「彼女はずっと学年トップだった子よ。」

司「なに？」

瑠唯「芸術の分野でも注目を集めて、学年で最も期待されていたわ。」

まさか、そんな存在だったとは

もう少し過去のデータに目を向けるべきだった

司（じゃあ、つまり。）



そのくらいの人間なら、昨日の携帯の画面を見られてても不思議じゃない  
十中八九、どこかしらは見られてる

司「ふむ。」

だが、慌てるような問題じゃないな

見られてたところで、何も変わらない

だって、俺の副業は政府公認なんだから

俺がそんな事を考えてるうちに、4人の練習が終わった

透子「——こんなもんだねー！」

七深「おつかれー。」

まして「お疲れ様。」

つくし「お疲れ様！みんな！」

まるで部活動の後みたいな感じだ

透子「どうでした？あだし達！」

司「いいんじゃないか。今の所、雰囲気も悪くないし。」

俺はそう言いながら椅子から立ち上がった

司「ただ、一つ。アドバイスを送ってやるよ。」

透子「なんっすか？」

司「八潮瑠唯が持ってきたその曲、バイオリンの曲だから、そのままバンドに使えるいぜ？」

透子、ましろ、七深、つくし「あつ。」

俺がそう言うのと、4人は思い出したようにそう言った

少し考えれば分かることだが、考えてなかったんだろうな

透子「ど、どうしょ！」

ましろ「誰か、編曲できる人がいれば……」

七深「私がしてみようか？」

つくし「え？出来るの？」

七深「多分。」

透子「じゃあ、一旦は広町に任せる。」

七深「りようかい。」

俺はそんな会話を聞きながら鞆を持った

瑠唯「どうだったかしら？彼女たちは。」

司「そうだな、俺の見立てでは、すぐに頭打ちする。」

八潮瑠唯の質問にそう答えた

少し見て分かった

こいつらは世間から見られる月ノ森のブランドに見合っていない

司「色々理由はあるが、一つ言うとならば。」

瑠唯「？」

司「倉田ましろ、あいつだな。」

瑠唯「倉田さん？」

司「ああ、あいつが一番、普通の人間っぽいからな。」

俺がそう言うのと、八潮瑠唯は首をかしげていた

そして、もう一つ、思った事を言う事にした

司「後は、このバンド、メンバーが足りてないな。」

瑠唯「そうなのかしら？」

司「ああ。」

それからさらに、八潮瑠唯は疑問の表情を浮かべた

瑠唯「それをなぜ、私に言うのかしら？」

司「さあな。ただ、このバンドの5人目のメンバーになる可能性が高い人物を考えてた。」

瑠唯「まるで、その人物は私と言いたそうね。」

司「どうだろうな。」

俺はそう言って、教室を出た

司（どんな過程であれ、八潮瑠唯はあのバンドに入る。あいつは絆され過ぎだ。）  
俺はそんな事を思いながら、家に帰って行った

## 接近

俺は今、見るからに豪華そうなパーティー会場にいる

普段は嫌いだから俺はスーツを着ない

司「……」

響「テンション低いねー。」

司「明石か。」

俺が歩いてると、明石が話しかけて来た

まあ、来てるのは当然なんだが

明石はいつもはまとめてる髪を下ろし、赤いドレスに身を包んでる

一見すれば、名家の令嬢だ

司「…… 馬子にも衣裳。」

響「うん？なんか言った？」

司「なんでもない。」

俺が呟くと、人を凍らせそうな目で俺を睨みつけて来た

響「まあ、いいけどさ。てか、司はなんでそんなに疲れてるの？」

司「さつきまで、色んな奴に話しかけられてたからだ。」

響「あー、どっかの社長とか？」

司「それならマシだ。」

俺はため息をつけてからそう言った

こういう場で面倒なのは、社長の年寄りどもじゃない

もつとも面倒なのは

司「若い女、令嬢だ。」

響「あつ（察し）」

司「伴侶がどうやら、近況はどうやら、自分はどうかやら、鬱陶しい。」

頭が痛くなる

所謂、政略結婚、玉の輿狙い

響「た、大変そうだねー。」

司「…… もう帰ってやろうか。」

響「まだ開始1時間なんだけど？」

司「もう疲れた。」

響「うわ、いつも以上に真顔だ。」

これ以上ここにいと、本当にストレスで病むぞ

司「いいのか？俺も将来、あの年寄りどもみために禿げるぞ？」

響「いや、それどんな脅し？」

司「まあ、冗談なんだが。」

七深「——あー、柊木君だー。」

司「……」

今日は厄日なのだろうか

どうやら、神様ってやつは俺の事がたいそう嫌いらしい

七深「ごきげんようー。」

司「…… ああ。」

響（うわ、司の目が死んだ。）

今、自分がどんな顔をしてるかなんて容易に想像が付く

多分、死人のような顔をしてるんだろうな

七深「さつき妙に人だかりが出来てると思つたら、まさかだつたよー。」

響「こ、この子は司のお友達かなー？」

司「…… ちがー」

七深「そうでーす。」

司「いつ、俺は広町七深と友人になつた？」

今の所、俺の友人は明石のみだ

間違つても、2人以上いるわけない

響「おー！司の友達！」

司「話聞いてたか？耳が悪いのか？手術してやろうか？」

響「えー？いいじゃんー。司みたいな偉そうな男を友達って言ってくれてるんだよー？」

司「誰が偉そうだ。俺の態度は義務だ。」

七深「まあ、いいじゃんー。バンドの練習を見てくれた仲つて事でー。」

司「何がいいのかさっぱりだ。」

俺は間髪入れずにそう言った

いい加減疲れて来た

ここに在る意味はないし、もう帰ろう

司「……俺は帰る。」

響「えー！待ちなよー！」

七深「そうだよー、待つてよー。」

そう言いながら、二人は俺の前に立ちはだかつた

俺はもう、頭を抱えたい気分だ



司（少し、本気逃げにかかるか。）

七深「まーまー、ちよつと待つてよー。これを見てー。」

そう言うのと、一枚の紙を取り出した

見た感じ、何かが書かれている

司「……なんだ、それは。」

七深「見ればわかるよー。」

俺はそう言うので、広町七深からその紙を受け取った

司「……なるほどな。」

響（なんだろう？）

司「ついて来い、広町七深。」

七深「はーい。」

響「!？」

司（まあ、想像通り。見てたな。）

広町七深から受け取った紙には『パンドラ』と書かれていた

俺は主催者が用意している、個室に広町七深と向かった

個室は意外と広く、ホテルの一室のような部屋だった

司「――盗撮、盗聴機器はないな。」

機械から発せられるかすかな音はなかった

まあ、今更俺の弱みを握りたい資産家、社長はいないんだがな

七深「私ねー、今日は家族が自分の作品を売り込みたいって来たんだー。」

司「聞いてない。」

俺はそう言いながら椅子に座った

そして、広町七深も向かいの椅子に座らせた

司「それで、お前の目的は何だ。」

七深「目的？」

司「弱み程でもないが、俺の秘密を持つてる。つまり、今、この世で俺に交渉の余地があるただ一人の人間だ。」

七深「そうなんだ。」

俺の日本国内で握っている財は36%

そして、地球上で見れば、34%だ

これが、世界一と言われる由縁だ

そんな俺と金関係の契約をするのは、実質、完全勝利と言っても過言じゃない

七深「うーん、少し気になっただけなんだけどー。」

司「なに？」

七深「？」

こいつの呼吸、心音から判断して

嘘は一切ついてない

つまり、本当に目的がないって事だ

司「変な奴だ。」

七深「え？ふ、普通じゃない？」

司「ああ、異常だ。」

七深「じ、じゃあ、お金を用意してもらおうかー、ぐへへー。」

司「ふっ、なんだそれは。」

変な奴だ

変な奴過ぎて笑ってしまった

七深「おー、笑ったー。」

司「いや、俺も笑いはするぞ。」

失礼な奴だ

まるで、俺が笑わない人間みたいに言いやがつて

司「まあ、金くらい用意してもいい。いくら欲しい、言ってみろ。」

七深「い、いや、お金なんていらなんだよ……」

司「そうか。」

広町七深はそう言うのと

俺にこう聞いてきた

七深「柘木君は本当に、パンドラ、殺し屋をしてるの？」

司「ああ、そうだ。」

俺は迷いなくそう答えた

隠す意味なんて全くない

七深「なんで？柘木君はもう、実業家として成功してるのに。」

司「なんで？そうだな。」

なんで、この副業をしてるか

久しぶりにそんな事を聞かれた

司「向いてるからだ。」

七深「向いてる？」

司「そうだ。」

七深「ど、どういう事ー？」

司「俺は考えたんだ。自身が持つ能力を最大限に活用する方法を。」

これを初めて考えたのは小学校5年生の時  
そして、初めて手にかけてのもだ

司「俺は普通の人間とは圧倒的に違う。頭脳、身体能力、ありとあらゆるものが水準をはるかに上回る。」

七深「それなら、殺し屋じゃなくて、他でもよかつたんじゃー？」

司「言つただろ、俺は圧倒的に違うと。」

七深「？」

理解できないと言つた表情だ

まあ、そりやそうだ

司「俺が殺し屋を選んだ理由は等しく罰を与えるためだ。」

七深「っ！」

司「俺は罰を与える者。俺に依頼が来る奴はみんな、殺されて当たり前前の奴ばかりだ。」

俺は少し笑いながらそう言つた

司「禁忌に触れ、人の感情の箱が空けられ怒りが零れる時、その者に罰が降りかかる。それが、パンドラの名前の理由の一つだ。」

七深「そ、そっか……」

司「まあ、そういう事だ。」

俺はそう言つて椅子から立ち上がった

司「へえ、良い小物持つてるじゃねえか。」

七深「っ！いい、いつの間に……！？」

俺は広町七深のカバンから売り込み用と思われるこもを抜き取つた

司「これ、売り込み用か？」

七深「うん、一応……。」

司「ふむ。」

俺はそれをじつくりと見た

司「ほう……。」

かなり質の高いものだ

俺が見た中でトップクラス

普通の人間の上、別の分野で考えると明石レベルの仕事だ

司「これは、いくらで売るんだ？」

七深「そんなにお金取れないから、25000円くらいかな。」

司「ダメだな。」

俺は懐に忍ばせておいた財布を出した

そして、中にある金を数えた

七深「え？」

司「この品質、所謂、高級アクセサリー店にもなかなかない。」

俺は財布の中に入ってる札をすべて出した

司「ざっと150万。使われてる宝石から考えて、これが妥当だ。」

七深「い、いや、それは……」

俺はそう言つて机に札束を置いた

司「これは、口止め料の一部だ。」

七深「口止め料……？」

司「ああ。一つは俺の力の一旦、それと金だ。」

俺はそう言いながら出口の方に歩いた

司「じゃあな。」

俺は軽く手を振りながら部屋を出た

部屋を出て

俺は会場に戻るために廊下を歩いていた

響「——司。」

司「明石か。」

大体予想通り

どうせ、明石は聞き耳を立てていたんだろう

司「今日は喋り過ぎた。だが、パンドラがこれ以上、広がることはない。」

響「いや、それは心配してないよ。心配なのは司。」

司「俺？」

響「パンドラの意味はあれ一つじゃ——」

司「言わなくていい。」

俺は服装を整えながら、明石の前に言った

司「いずれ、時は来る。その時まで、俺は等しく罰を与えるだけだ。明石もそれまでは協力しろ。」

響「……りょーかい。」

俺はそう言つて、会場の方へ歩いた

明石も、俺の後ろについて会場に戻った



## ストーリーカー？

司（「なんだ。」）

放課後、廊下を歩いてると妙な気配を感じた

明らかにこつちを見てる

司（つけてきてるな。誰かは知らないが。）

さて、どうしたものか

ずつとつけられるのは俺の精神衛生上よくない

家まで付いて来ようものなら面倒以外の何もでもない

司（よし、逃げるか。）

俺はそう思い、走り出した

？「!!」

俺のストーリーカーもその様子を見て走り出したみたいだ

司（学校の中で撒くか。）

作戦は俺の下駄箱から遠い位置までストーリーカーを誘導

窓から飛び降りて下駄箱まで先回り、見つかる前に帰る

司「——と言ってもどこから飛び降りるか。出来れば階段を降りる時間をかけさせた  
いからそこそこの階から飛び降りたい。」

走りながらそんな事を考えていた

俺の方がはるかに足が速い

この調子なら逃げるのは簡単だ

司（さてと、後は飛び降りる教室だ。）

この時間じゃほとんどの教室が部活で使われてる

普通の人間に見られると、騒がれて後々面倒だ

出来れば、誰もいないか俺の事を知ってるやつがいる教室がいい

だとしたら……

司（よし、あそこに行こう。ちょうど音も聞こえるし。）

俺はある教室の方に向かって走って行った

“?”

“?” あそこの教室に入った。」

司が教室に入ったのを見ると、?もその教室に入った

透子「——うん?どーしたの?」

? 「ここに、男子が来ませんでしたか?」

つくし 「来てないです。ここは私達が使つてる教室だし。」

ましろ 「う、うん。」

? 「……」

? は疑いのまなざしを向けている

瑠唯 「何の用でここに来たんですか? 天空時さん。」

三久 「柊木司を追いかけてるのです。」

つくし 「柊木君を? なんですですか?」

三久 「それは言えないです。」

三久 は言葉を濁した

そして、周りを観察してる

三久 (もう逃げられた? 確かに、彼ならその窓から飛び降りても不思議じゃない。)

七深 「大丈夫ですか?」

三久 「はい、大丈夫ですよ。活動中に失礼しました。」

透子 「は、はい?」

三久 はそう言つて教室を出て行つた

そして、走つて行く足音が廊下に響いた

司「——行つたか。」

“ 司 ”

俺は窓の外から教室に入った

透子「な、なんだつたんだろ？」

つくし「何かしたんじゃないの？ 柗木君だし。」

司「失礼な奴だな。」

最初は窓から飛び降りて下駄箱まで走るつもりだった

だが、さっきの女子はすぐにここから離れた

この教室内を探すことなく

つまり、俺が窓を飛び降りて逃げられるのを分かつてゐるって事だ

瑠唯「あの人は日ごろ、かなり穏やかな人よ？ そんな人に追いかけられるなんて。」

司「誤解にもほどがある。俺はあんな奴初めて見た。」

透子「じゃあ、なんで探してたんだろ？」

司「ふむ……。」

俺の裏の顔を知つてる？

それにしても、何の狙いだ

司（少なくとも、日本国内じゃない。）

「確率が高いのは外国で俺の事を良く思つてない商会

俺の事を殺して、成り代わるのが狙いか

もしくは、俺に利益を潰された事への報復か

司（どつちにしても、面倒に変わりないな。）

七深「ねえ、柊木君、あれつて。」

司「ああ、そうかもなー。」

広町七深は流石に感づいたみたいだ

司（まあ、どつちにしてもあいつは使われてるだけだな。）

七深「どうするのー?」

司「知らん。ほっとく。」

普通の間人が俺を捕まえられるわけない

泳がせておいてもいいだろう

透子「てか、ちやうど柊木さんも来てるし見てもらおうよ!」

司「?」

ましろ「え、あの……」

透子「これ!見てくださいよ!」

桐ヶ谷透子は俺に何かかが書かれた紙を見せて来た

これは、歌詞か

つくし「これ、倉田さんが書いたんだよ！」

司「へえ。」

俺は内容に目を通した

これは、倉田ましろが書いたんだよな

司「倉田ましろの心情か。」

ましろ「は、はい。校訓の言葉も参考にして……」

司「いいじゃないか。」

俺はそう言つて、倉田ましろに歌詞が書かれた紙を渡した

司「後は、この歌詞を生かせる演奏をするだけじゃねえの？」

瑠唯「随分、優しい言葉をかけるわね。」

司「月ノ森生の中じゃ面白い部類だからな。評価はしてる。」

瑠唯「それじゃあ、前の頭打ちすると言うのは撤回かしら？」

司「それはない。」

俺はきっぱりそう言つた

人はそんな簡単に変わらない

司「まあ、見てろ。特に倉田ましろをな。」

瑠唯 「やけに倉田さんの名前を出すわね。好みなのかしら？」

司 「ないな。ただ、何か失敗した時にすぐに見失いそうだと思ったただけだ。」

瑠唯 「そうかしら？」

司 「ああ。」

俺は制服を正して

教室を出ようとした

司 「あつ。」

瑠唯 「どうしたの？」

司 「まだ、あのストーカー徘徊してるんじや。」

ちよつと話して完全に忘れてた

司 「……仕方ない。明石に頼むか。」

俺は明石に電話をかけた

響 『もしもし？どうしたの？』

司 「俺の学校にストーカーがいるんだが、助けてくれ。」

響 『ストーカー!?!』

司 「家まで特定されたくないから、逃走用にドローンを飛ばしてくれ。」

響 『それはいいんだけど、少し時間かかっちゃうよ?』

司「どの位だ？」

響『うーん、30分くらいかな。』

司「そのくらいは待つ。頼むぞ。」

響『りよーかい！』

そう言つて、俺は電話を切つた

司「後、30分か。」

透子「そんなに時間あるんですか？」

司「ああ。」

透子「じゃあ、見て行つてくださいよ！退屈させないんで！」

司「じゃあ、見て行くか。」

それから俺は明石が準備を終えるまで、4人の練習風景を眺めていた

その途中

七深「——ねえ、柊木君？」

司「なんだ。」

七深「聞きたいことがあるのー。」

広町七深は俺に少し近づいてこう聞いてきた

七深「バンドラのもう一つの意味って、なんなの？」



司「……！」

ここで聞いてくるか

思えば、あれから約1週間

整理がついててもおかしくない

気になっても不思議じゃないか

司「……さあな。」

七深「え？」

俺がそう言うのと同時に携帯が鳴った

明石からだ

準備が整ったみたいだ

響「飛ばし終わったよー！ルート解説始めるよ！」

司「ああ、わかった。」

俺は携帯を耳から話した

司「世話になった。また礼をしよう。」

七深「あ、ちよつと待って——行っちゃった……」

瑠唯「どうしたの？広町さん。」

七深「い、いや、なんでもないよ。」

七深（なんか、焦ってるように見えた。あれは……）  
こうして、少しおかしな放課後が終わった

“三久”

三久（――逃げられた……）

ほとんど人が残らない校舎で三久は立ちすくんでいた  
手には携帯が握られている

三久（まさか、あのパンドラがこの学園にいたなんて。）

三久は画面に映ってる情報を確認した

三久（今回の依頼はパンドラ、柊木司の身元を特定する事。）

三久は携帯を握りしめた

三久（殺し屋、パンドラ。絶対に見つける……！）

三久は勢いよく足を踏み出し、歩きだした

## 依頼

1週間前は散々だった

ストーカーに追いかけられて、何時間も帰るのが遅れた  
幸いだったのはためてる仕事が無かったことだ

司（「なんだ？」）

教室に行くと、多くの人間が群がっていた

何かで盛り上がってる、などではなく

全員が全員、困惑の表情を浮かべている

つくし「あ、柊木君！」

「あれが柊木か！」

そんな声が聞こえると、人ごみの中から一人の男子が俺に詰め寄ってきた

司「なんだ、この手は？」

その男子は俺の胸倉を掴んでいる

「とぼけるな！お前だろ！天空時さんをどこにやった！」

司「は？天空時？」

こいつは何を言ってるんだろう

天空時と言えば、前のストーカーの事だ  
どこにやった？

司「何のことだ。俺は知らん。」

「っ！」

俺は胸倉を掴んでた手を引きはがした

司「お前は確か、あの企業の跡継ぎか。」

「は、放せ！」

俺は少しずつ、握る手に力を入れる

手の中には少しずつ、骨の存在を感じる

司「お前の父親にはかなり資金協力をしてやってたんだがな。」

「ちよ、ま、折れ——」

手の中で、骨が碎ける感触がした

「ぎゃあああああ!!！」

男子は発狂しながら、地面に倒れた

腕を抑えて悶絶している

司「お前の父親との契約は破棄だな。潰れはしないとと思うが、今までのような贅沢は

出来ないと思え。」

俺はそう吐き捨てるように言っ、教室に入った

そして、自分の席に座った

教室の外では、さっきの男子を心配する声が聞こえる

司（はあ、面倒だな。）

俺はパソコンを開き、さっきの男子の親にメールを打った

内容は契約破棄

ついでに、息子の教育くらいしっかりしろだ

つくし「何やってるの!？」

司「あ?？」

つくし「あの先輩、腕折れちゃってるじゃない!」

二葉つくしは俺の前に立ってそう言った

司「それがなんだ?俺は無礼な奴に制裁を与えた、何が悪い?」

つくし「確かに、柊木君の事情を聞いてなかったけど、流星にやり過ぎだよ!」

司「あつそ。」

俺はそれだけ言っ、パソコン画面に目を移した

そこにはさっきのメールの返信がすごい勢いで来ていた

司（まあ、こここの契約が無くなるうが俺には一切問題はない。）

つくし「ちよつと！話を聞いて！」

なんて声を無視して俺は仕事を始めようとした

すると、校内放送が鳴った

『1年A組、柊木さん。理事長室にお越しください。』

司「……………なんだ。」

今日は朝から面倒事が多い

俺は席から立った

司（まあ、何か必要な話かもしれない。一応行くか。）

俺はそう思い、理事長室に向かった

つくし「もう！なんなの、あいつ！」

ましろ「ふ、二葉さん、言葉遣いが……………」

つくし「だって、あんなのおかしいじゃない！なのに……………！」

ましろ「そ、そうだけど……………」

つくし「あー！むかつくー！」

“廊下”

七深「——あれ？ 柊木君？」

理事長室に来た

俺はドアを開け、部屋に入った

そこには、どこかでみたことがある2人がいた

司「——天空寺の所のか。」

天空時源治、天空時華

確か、前のパーティーで挨拶に来てたな

源治「……柊木様。」

司「この間ぶりだな。」

俺はそう言いながら向かいのソファに座った

そして、すぐに本題に入ることにした

司「それで、今日は何の用だ。わざわざ学校まで来て。」

俺はそう切り出した

すると、2人の表情は一層、暗いものになった

華「娘が、行方不明になったのです。」

司「へえ。」

天空時華が口を開いた

正直、俺に言われても困る

どうせ、俺に居場所を聞くんだらう

源治「それで、昨晚。こんなものが送られてきたのです。」

司「ん？」

俺の予想に反して、天空時源治が何かの紙を出した

そこには、英文が書かれていた

司「これは……」

文面に目を通してみた

それは所謂、脅迫文だ

司（お前の娘は知り過ぎた。そして、我々の依頼を失敗した。）

依頼、つまりは俺の弱みか何かを探る事

失敗は期間内に成果を上げられなかったらう

司（殺してもいい、だが、100億払うなら命は考えてやる、か。）

子供が書いたみたいだな

馬鹿みたいだ

司「それで、これを俺に見せてどうしろと？」



源治「娘を、助けてほしいのです……！」

華「お願いします。柗木様、いえ、パンドラ様……！」

司「断る。」

俺はそう言った

2人は驚いたような顔で俺を見た

源治「な、なぜ！」

司「聞けば、お前の娘は俺を陥れる依頼を受け、失敗してこうなったらしいな。」

源治「！」

司「その時点で俺がその依頼を受けるメリットはない。自業自得だ。」

俺はこれに続けてこう言った

司「しかも、俺はお前の娘にひどい迷惑を受けた。なんで、そんな奴を俺が助けない

といけない。」

華「おっしゃる、通りです……！」

司「そもそも——」

バタン!!!

司「！」

俺が喋ろうとすると、理事長室のドアが勢いよく空いた

そして、数秒後、俺の右頬に鈍い痛みが走った

司「…………… 何の真似だ、広町七深。」

七深「……………」

目の前には広町七深がいる

その目は俺を鋭く睨んでいる

七深「…………… 最低だよ。」

司「なに？」

広町七深は静かな声でそう言った

俺は理解に苦しんだ

俺が最低？

七深「全部は聞けてないけど、最低だよ。」

司「なにがだ？ 悪いが俺には理解できない。」

七深「人が危ないのに、自分の都合ばかり優先して、こんなにお願ひしてる2人を

突き放して……………」

司「うるさい。」

七深「！」

俺は椅子から立ち上がりながらそう言った

司「俺はストーカー被害になって、迷惑をこうむった。だから、死のうが死ぬまいがどうだっていい。」

七深「柀木君の迷惑は……」

司「？」

七深「柀木君に迷惑かけるのって、死なないといけない程の罪なの……？」

司「……」

広町七深はそう問いかけてきた

七深「天空時先輩はそれだけの事で死んじゃうの……？」

司「……」

七深「それって、本当に等しい罰なの……？」

こいつ、よく覚えてるな

正直、等しいかどうかと言われれば等しくない

言ってる事は最もなんだろうな

司「…… チッ。」

俺は少し舌打ちをして

天空時の2人の方を向いた

司「おい。」

源治 「は、はい。」

司 「お前たちは依頼金200億でも俺に頼むか？」

華 「はい。お願いします。」

源治 「いくらでも、お支払いします。」

司 「……はあ。」

俺はポケットから携帯を出した

そして、明石に電話をかけた

響 『はいはい！』

司 「仕事だ。」

響 『仕事？なにになに？』

司 「天空時三久の救出、場合によっては誘拐犯全員を消す。」

響 『場所は？何か手がかりある？』

司 「おい、場所の手掛かりは。」

源治 「最後に目撃されたのは、〇〇の港です。5日ほど前です。」

司 「らしい。」

響 『オッケーオッケー！あのあたりの監視カメラ全部洗ってみる！』

司 「時間がない。今夜決行だ。今すぐ俺の家に来い。」

響『りよーかい！って、ええ!？』

明石がそう言うのと、俺は電話を切った

司「さてと。」

俺は上着のボタンを開けた

七深「柊木君。」

司「あ？」

七深「やつぱり、柊木君だねー。」

司「意味が分からん。」

俺はそう言いながら、部屋の外へ歩いて行った

司「広町。」

七深「え？どうしたのー？（今、呼び方が。）」

司「俺の早退届、出しとけ。」

俺はそれだけ言って、部屋を出て行った

---

部屋を出て、俺は廊下を歩いている

司（「あの女。」）

あの女、広町は中々、肝が据わってる

その辺の社長なんかは俺にぶつかっただけで土下座するのも珍しくない  
だが、あいつはあろうことか俺にビンタをしてきた

司「…… ははは。」

笑いが漏れる

あいつも異常だ

明石と同じ、変な奴だ

司「—— 気に入ったぜ、 広町。」

俺はそう呟いてから

教室でカバンを取り、 明石と合流するために自宅へ向かった

## 救出

響「——見つけた。」

明石がそう言うのと、俺はモニターに目を向けた

そこにはいくつもの、監視カメラの映像が映されている

響「多分、あたし達が仕事をした場所に行つて、そこで捕まったっぽい。」

司「という事は、誘導だな。」

響「その可能性が高いね。」

映像は進んでいき、天空時三久は黒塗りの車に放り込まれ

車が走つて行つた

響「ここから、少し走つて、着いたのはここ。」

司「……ほう。」

車は見覚えのあるビルの駐車場に入った

もう、真犯人は分かつた

司「柳真廣か。」

響「仕事場所はあたし達と依頼人しか知らない。」

司「英語で書いたのは海外の俺を良く思わない人物に見せかけるためか。バカ丸出しだな。」

俺は心底呆れた

つまり、前の依頼で殺した奴らは柳真廣がまいた罠か

俺の弱みを握るための罠

響「あつ、あのビルの中の監視カメラもジャックで来た。」

司「天空時三久の位置は？」

響「社長室の隣の部屋だね。社長室経由で入るのが正規ルートかな。」

司「なるほど。」

見たところ、天空時三久が閉じ込められてる部屋は窓などはない

外からの侵入は面倒だな

司「よし、作戦が決まった。」

響「どうするの？」

司「今回の作戦は天空時三久の救出、柳真廣の殺害だ。」

響「おお、そこまで行くんだ。」

司「パターンはB。明石はいつも通りの立ち回りで頼む。」

響「りよーかい！」



柳真廣は天空時三久を誘拐してから会社から離れてない  
つまり、いない間を狙うのは無理

だったら、パターンBで

狙う時間は……

司「狙うのは夜。定時から1時間を過ぎたころだ。」

俺はそう言って、今夜の準備を始めた

夜、もう5月下旬なだけあって若干蒸し暑い

俺は隣のビルから様子を見ていた

司「——そろそろ時間だ。」

俺はそう言って、立ち上がった

響「さあ、今回はどんな綺麗な花火を見れるかなー!」

司「いや、花火じゃねえよ。」

こいつはいつまでたつても態度が真面目じゃない

まあ、こんなのおふぎけ半分じゃないとやってられないが

司「明石はいつも通り、仕掛けながら中にいる人間を追い出せ。後は俺に任せろ。」

響「制限時間は？」

司「避難時間を考えて、10分。だ。」

響「何を考えたの？まあ、出来るけど。」

司「作戦開始。手早く終わらせるぞ。」

俺はそう言つて、ビルから飛び降りた

響「なんで、こんなところから飛び降りられるんだろ？ここ、9階なんだけど？」

“ 響 ”

あたしの仕事は仕掛けと避難誘導

でも、もう定時を過ぎてるだけあつてほとんど人はいない

あたしは携帯の画面を確認した

響「——普通の社員は全員、帰ったかな。」

後、残つてるのは社長の協力者と思われる社員だけ

響「さて、あとは司の言つてた位置に仕掛けて逃げますかねー。」

あたしはそう呟きながら、仕掛けを終わらせて

ビルの外に逃げた

俺の侵入ルートは前と同じエレベーター

なんかじゃない

司「——これが一番早いな。」

ワイヤーを引っかけて壁を蹴って登ってる  
どうやって、建物に入るかというと……

司「ダイナミックに……」

俺は体をひねって、助走をつけた

そして、勢いよく窓に向かって行った

司「邪魔するぜ！」

俺は窓ガラスを蹴り破って建物に侵入した

司「——よう、久し振りだな。柳真廣。」

真廣「っ！な、なに!？」

流石に予想してなかったみたいだ

柳真廣はかなり面食らったみたいだ

司「さて、俺が来た理由は分かるな？」

真廣「……もう、ばれていたか。」

司「中々、悪くない策だったぜ。ただ、相手が悪かった。」

俺は奴の横を通り過ぎて広いスペースに身を置いた

司「ちなみに、そこで隠れてるお前の協力者にはここで退場願おうか。」

真廣「!？」

俺は壁に向かって5発発砲した

壁の向こうからは、男5人の声が聞こえた

司「さて、もう仕事は9割終った。」

真廣「……クソ。化け物が。」

司「ははは、随分な言いようだな。まあ、負けが確定すれば遠吠えもしたくなるよな。」

俺はそう言いながら、銃口を向けた

司「ただの人間が、俺に太刀打ちできるわけないんだよ。だって、そもそもの次元が

違うんだから。」

俺はそう言って、奴の眉間を打ち抜いた

真廣「がっ——」

奴は崩れ落ちるように倒れた

司「さてと。」

俺は天空時三久が閉じ込められてる部屋の扉を蹴り破った

中に入ると、椅子に括りつけられた天空時三久がいた

司「なんだ、起きてたのか。」

三久「柊木、司……？」

司「見た目の割に可愛げのないやつだ。」

俺はそう言いながら天空時三久に歩み寄った

司「天空時三久。月ノ森学園2年生。ありとあらゆる分野を高いレベルでこなす才女。富裕層の間ではトラブルを解決するなどでも有名らしいな。」

三久「知ってるんだね。」

司「ああ。ストーリーカーの情報を知りたいのは当然だからな。」

俺はそう言いながら、縄をほどいてやった

司「このくらい、自分で解けたな。」

三久「力がなさ過ぎて無理だったの。」

司「ああ、そういう事か。」

俺は時計を確認した

あと、2分

司「さて、脱出するか。」

三久「え？——きや！」

俺は天空時三久を担ぎ上げた

そして、割った窓の方に歩いた

司「さあ、飛ぶぞ。舌嚙んで死ぬなよ。」

三久「と、飛ぶって…… きゃああああ！」

俺はあるものを頬り投げてから

窓から飛び降りた

司「——ここだな。」

俺は地面ぎりぎりぎりワイヤーを引っかけて着地した

この道具、汎用性が高すぎるな

ワイヤーを射出して、好きな場所に引っ掛けられて人2人を吊るせる

司「さて、走れ。」

三久「え？ちよつと——」

俺は天空時三久を引っ張って明石のいる方へ走った

響『——司ー、今どこー？』

司「天空時三久を回収した。今、お前の方に向かっている。」

響『あ！見えた見えた！』

少し視線を挙げると、明石が手を振っていた

響「うん！時間通り！」

司「当然だ。それで、仕掛けは終わってるな？」

響「うん！もう、上がる時間だよ！」

三久「仕掛けや上がるって、何の事——」

天空時三久が喋ろうとすると

ビルの方から爆発音が鳴った

三久「なっ!？」

司「任務完了。天空時三久の救出および、犯罪者の殺害。」

俺はそう言った

三久「な、なんで！こんな事！」

天空時三久は目に見て怒ってる

まあ、気にしないが

三久「なにも、殺すことなかった！警察に引き渡せば！」

響「これ、見て。」

三久「え？」

あれは、あらかじめ調べておいた柳真廣の罪状だ

殺す根拠だ

司「薬物の取引、人身売買、これが奴が裏でしてたことだ。」

三久「っ！」

司「奴は法で裁けない。だから、俺が裁いた。」

響「あの人は殺されても仕方なかった。正義なんて、通用しないから。」

俺は天空時三久の目を見据えた

良い目だ

正義感の強い、真っ直ぐな

だが……

司「この数日間、お前が体験したのは正義なんて全く通用しない世界だ。」

三久「正義が、通用しない……？」

司「ああ、そうだ。」

三久「……」

司「お前は関わるべきじゃない。この世界で勝つのは……」

天空時三久を見下ろすように前に立った

司「悪に罰を与える、悪だ。」

三久「……っ。」

司「明石、天空時家に向かう。連絡しろ。」



響「りよーかい。」

明石は携帯で電話をかけた

それからすぐに車が来た

司「明石。」

響「うん？」

司「天空時三久のケアを頼む。」

響「分かったよ。」

俺はそう言つて先に車に向かった

“三久、響”

響「——調子はどう？三久ちゃん！」

三久「……良くはないです。」

三久はすっかり、落ち込んでいた

自分が信じた正義が通用しない世界があつたことのショックが大きいのだ

響「ねえ、三久ちゃん。」

三久「はい……？」

響「司の事だけどさ。」

響は静かに話し始めた

声は優しい

響「司は確かに悪だけど、正義でもあるんだよ。」

三久「え？」

響「さっきの人身売買にかけられた人たち、全員、司が助けてるんだよ。」

響はそう言った

三久は目を見開いた

響「全員、司が買い取って。この後の人生を全うに生きられるように子供は学校に入れて、大人は自分のもとの働かせながら自分のしたい仕事を探してもらってね。」

三久「彼が、そんな事を？」

響「うん。」

響は軽くうなずいた

そして、神妙な表情になった

響「……ずっと、人を導く事しか出来ないんだよ。だって、誰よりも優れちゃつて  
るから。」

三久「それは、どういう事ですか？」

響「さあね！」

響は一転して、明るい表情でそう言った

三久はかなり驚いた表情だ

響「行こ！司を待たせちゃう！」

三久「ちよ、ちよつと、待っててください！」

二人は司の待つ車まで、歩いて行つた

司（来たか。）

しばらくすると、2人が車に乗ってきた

そして、車が出発した

三久「柊木司、君……」

司「なんだ。」

三久「今日は、ありがとうございます。」

そう言うと、天空時三久は深く頭を下げた

司「礼などいらん。依頼だ。」

俺はそう言つて、ペットボトルの水を飲んだ

渴いた体に、水はよく染みる

司「さて、ここからが依頼の話だ。」

三久「依頼の話？」

司「ああ、主に依頼金だ。」

そう切り出すと天空時三久の顔が引き締まった

企業のお嬢様の顔ってやつだ

司「今回の任務にはかなりコストがかかった。」

三久「はい。親は多分、いくらでも出すと言うと思います。」

司「だが、それはお前の救出でじゃない。」

響「！」

司「柳真廣の殺害は俺の勝手だ。コストは99%こっちだ。」

俺はそう言って、軽く手を振った

司「よって今回、依頼金を取るのは正当じゃない。だから依頼金はいらぬ。」

響「まー、そうだねー。」

俺は背もたれにもたれかかった

司「ただ、1%分頼みを聞け。」

三久「頼み？」

司「俺のストーキングをするな、それだけだ。」

俺はそれだけ言っただけ目をつぶった

三久「もう、しません。」

司「そうか。……俺は少し寝る。」

響「うん。お休み。」

三久「おやすみなさい。」

こうして、きわめて面倒な一日が終わった

## 夢

5月も終わりに近づいて来た

中間テストもいつの間にか終わってて、今日は返却日らしい  
全く興味が無い俺はテスト返しをしてようが仕事をしていた

司（——いい感じに事が運んでるな。今日この時点で200億か。）  
契約が滞ることもないし

社員の労働時間も抑えられてる

司（海外の反発してた連中も大人しくなった。しばらくは安心だな。）  
俺は軽く息をついた

まだ完全に安心とは言いい切れないが何かあるとも思えない

司（……眠いな。）

ここ数年、まともな睡眠をとってなかった反動か

睡魔に襲われる

司（今日は午前で終わり。少し寝れるな。）

俺はそう思い、目を閉じた

“夢”

司『ん、ここは……』

目を覚ますと、そこは白い花が隙間なく咲く花畑だった

俺はその真ん中で一人、立っている

司『ここは、室内か？』

少し遠いが

白い壁の存在が確認できる

そして、天井の構造を見た感じ、ドーム型の建物だと分かる

司『一見すれば野外、中々の技術だな。』

俺は少し感心しながらそう呟いた

こういう景色は嫌いじゃない

白というのは目に優しいからな

司『！』

しばらく周りを見渡していると

花畑に一筋の道が出来た

司『……俺にそこを歩けと？』

俺はそう問いかけてから

その道を歩いて行つた

司『……』

俺が進むごとに、花が避けて道が出来る

それに従つて、俺は歩き続ける

そして、少し歩くと、不思議なものを見つけた

司『——これは、なんだ？』

そこには、石でできた台座

その上には小さな箱がぽつんと置かれている

司『見ない形だな。いつのものだ？』

状態はかなり綺麗だ

だが、はるか昔に作られたような感じもする

まるで時間を止めて保管されてるみたいだ

司『…… どうやら、俺にこれを会わせなかったらしいな。』

花の道は台座の前まで続いている

道に従つて、その前に歩み寄つた

その箱は鎖で硬く縛られている



司『さて、これはどうするんだ？——！』

俺は疑問に思いながら箱に触れた

すると、箱を縛っていた鎖は溶けるように消えた

司『ははっ、流石にこれは予想外だ。』

俺は笑いながら箱のふたに手をかけた

ふたはまるで重さを感じない

そして、箱の中身が見えた

司『これは、赤……いや、赤黒いバラか？——っ！』

そう呟くと、そのバラの棘が俺の指に刺さった

そして、周りの風景が変わった

司『——花が、赤黒くなった？』

さつきまで天国の様だった白い景色は

赤黒い、地獄のような景色になった

司『これは。』

まるで血で染められたみたいだ

一体なんだ、この現象は

『——殺したな……』

司『?』

声が聞こえた

頭の上、天井からだ

俺は目線を上に移した

司『なに?』

ドーム状の屋根にはいくつもの死体が吊るされていた

その数は軽く数えても100は超えてる

『また殺した、126人目だ……』

『人殺し……』

司『見覚えのある顔だな。確か、5年前に殺した人体実験をしてた研究員か。』

俺は吊るされてる人間に話しかけた

吊るされてる人間たちは恨めしそうに俺の事を見つめている

司『まだ地獄に行つてなかったのか? しつこいな。』

『なんで、なんで私を殺した……』

『家族がいたのに……』

俺の声が聞こえてないみたいだ

枯れた声で、自分の事を話している

『あの実験も、娘を治すために……』

『この、人でなし……』

『お前のせいで、娘も死んだ……』

『お前も死ね……今すぐに……』

言葉を発する度に目が人間じゃなくなっていくてる

これは俺への恨みか

司『滑稽だな。』

俺は吊るされてる奴らを見てそう言った

司『お前は娘一人のために未来ある子供を何人殺した？それをまるで自分が被害者みたいに。』

『死ね……死ね……』

司『うるさいな。お前は死んで当然だった、だから殺された。これ以上お前に言う事はない。』

俺はそう言つて

赤黒いバラに触れた

司『確か、この花言葉って死ぬまで憎みますだろ？それと、周りの白い花はスノードロップ。花言葉はあなたの死を望みますだったか。』

俺は少し笑いながらそう言った

司『中々ロマンチックじゃないか。面白いぜ?』

『いの……』

司『ただ、バラはダメだな。』

俺はそう言つて、バラを吊るされてるやつに投げつけた

それは重力がないみたいに飛び、奴の目に刺さつた

『うぐっ……!』

司『お前死んでるから、これは当てはまらないな。返却だ。』

そう言つと、奴は全く動かなくなつた

まるで、魂が抜けたみたいだ

司『成仏したか?なんだ、呆気ないな。』

俺は来た道をたどるように歩いた

天井からは吊るされてる奴らの血がポタポタと降つてきてる

司『——また会おうぜ。地獄でな。』

俺が奴らに向けて語り掛けると

光に包まれて、目の前が真っ白になつた

司「——ん……………」

目を覚ますと

そこは教室だった

司「なんだ、夢か。」

七深「——あー、起きたー？」

司「……………なにしてるんだ。」

声が出た方に目をやると、横に広町がいた

こいつは別のクラスだったはずだが、なぜここにいる

七深「偶々、通りかかったんだー。」

司「そうか。」

周りを見ると、俺と広町以外誰もいなかった

もう下校時間か

七深「すごい熟睡だったねー。疲れてたのー？」

司「……………どうなんだろうな。」

七深「？」

疲れてるかと言われれば疲れてるのかもしれない

久しぶりに一日3時間以上眠った

頭がすつきりした気がする

司「それで、通りかかったお前は俺の隣の席に座ってる。」

七深「前の事、謝った方がいいと思つて。」

広町はそう言つてきた

ああ、前のぶつたことか

七深「あの時はごめんね。」

司「別にそんな事は気にしてない。」

あの程度、気にするほどの痛みでもなかった

司「むしろ、俺はお前を面白いと思つたぞ。」

七深「え？」

司「そこら辺の企業の社長やらがあんな事してみろ、首つり自殺するぜ？」

俺は笑いながらそう言つた

広町は困惑の表情を浮かべている

七深「ふ、普通じゃない？」

司「ああ、異常だ。」

七深「そ、そつか……」

司「？」

残念そうな表情だな

司「用はそれだけか？なら俺は帰るぞ。」

七深「あ、一個あつた。」

司「なんだ？」

七深「今度ね、私達、初ライブなんだ。」

司「へえ、そうか。」

ライブ、か

さてさて、どうなることやら

七深「あ、見に来る？」

司「時間があればな。」

七深「うん。」

司「まあ、初めてのライブだし、楽しめばいいんじゃないやねえの。」

七深「うん。ありがと。」

広町はそう言うのと、椅子から立ち上がろうとした、が

七深「あつ——」

司「！」

広町はふらつき俺の方に倒れて来た

完全に油断してた俺は受け止める事が出来ず広町と一緒に倒れた  
までは、よかった

七深「ん!？」

司「……………」

広町は俺に覆いかぶさっており

俺と広町の唇は、重なっていた

それに気づくと、広町はすぐに俺の上から飛びのいた

七深「あ、ああ……………／＼／＼」

司「……………」

広町の顔は見る見るうちに赤くなった

七深「ご、ごめん……………!」

司「広町?」

広町は一言そう言うと、教室から走って出て行った

七深（や、やっちゃったよ、あんなの駄目だよ、普通じゃないよ。）

司「……………いや、なんで逃げた?」

七深「!？」



一応、ほっとくのはまずいと思って追いかけて来た

俺はため息をつきながら広町を見た

司「俺は気にしないぞ。お前は気にするかもしれないが。」

七深「うん……」

司「反応出来てない俺にも非はある。一応、謝っておく。」

俺はそう言った後、振り向いて教室の方を向いた

司「広町。」

七深「な、なに？どうしたの？」

司「ライブ、もうすぐやるんだったな。」

七深「う、うん。」

司「折角だ、行く。」

七深「え？」

司「それだけだ。」

俺はそれだけ言っつて、歩きだそうとした

七深「柗木君！」

司「なんだ？」

すると、広町が俺を呼んだ

俺は目を向けた

七深「私、頑張るよ。」

司「ああ、頑張れよ。」

俺はそう言った後

軽く手を振りながら、教室へ歩いて行った

しばらく、背中に広町の視線を感じた

“七深”

七深（……なんなんだろ。）

心臓がうるさい

流石にあんなことあって、走ったら当たり前だけど

少し、感じが違う気がする

七深（普通、じゃない……）

透子「——おい！広町——」

七深「あ、とーこちゃん。」

透子「なにしてるのー？練習始まる……って、広町？」

七深「？」

とーこちゃんは私の顔を見ると不思議そうな顔をした

どうしたんだろう

透子「なんで、そんなの顔赤いのー？」

七深「顔が赤い？」

透子「うん！りんごみたいだよー！」

顔が赤い

なんでなんだろう？

七深「うーん、走ったからかなー？」

透子「そう？じゃあ、練習行こ！ライブは近いよー！」

七深「おー。」

私は透子ちゃんについて、練習場所の教室に行った

これって、なんなんだろう？

気になるけど、今はライブを頑張らないと

そう思って、私は気持ちを切り替えた

## 初ライブ

響「——ねー、司ー。」

今日は日曜日だ

明石は昨日から俺の家に泊まりで仕事をしてた

そして、ほんの30分前、持ち込んだ仕事が終わったのだ

司「なんだ？」

響「暇だよー。」

司「そうか。」

確かに最近は大変地獄の前触れかと疑うくらいには落ち着いてる

休みが作れる程度には時間が出来てしまうのだ

響「そうか、じゃないよー！」

司「お前は俺に暇つぶしなんて高度なことができると思ってるのか？」

響「いや、暇つぶしを高度なんて言うのは司くらいだよ。」

俺はそんな事を言いながら携帯のカレンダーを確認した

基本的に予定しか書きこまれてない

そういえば……

司「あつ。」

響「どうしたの？」

司「明石、出かけるぞ。」

響「え？どこ？」

司「ライブだ。」

俺がそう言っていると、明石は目を丸くした

響「ライブ!? 司が!？」

司「失礼だな。」

響「え、いや、司だよ？」

本当に失礼極まりない

俺を何だと思ってるんだ

司「俺は呼ばれてるから行くが、明石は連れて行かなくてもいいな。」

響「行きたい!!」

司「……うるさい。」

響「ほら！早く行こ！早く！」

司「あー、分かった分かった。」

俺はそう言うのと、自室に戻り、外用の服に着替えた  
そして、明石とともに家を出た

会場については調べておいた

場所も覚えてる

響「——いやあ！楽しみだなー！」

司「そうか。」

家を出てからずっと、明石はハイテンションだ

いつも、テンションが低い方ではないが、今日は異常だな

司「ここだな。」

暫く歩くと、会場に着いた

結構な人数がいる

最近バンドが流行ってるらしいし、当然と言えば当然か

響「うわあ！結構人いるねー！」

司「そうだな。」

響「早く入ろ！司！」

司「そうだな。」

俺たちは受付でチケットを確認して会場内に入った

フロアに入ると、すごい熱気を感じた  
ちらほら月ノ森の生徒もいる

桐ヶ谷透子辺りが呼んだんだろうな

響「いくつかバンド出るみたいだけど、司はどのバンドを見に来たの？」

司「一番手。月ノ森で結成されたバンドだ。」

響「へえ！じゃあ、やっぱりすごいのか？」

司「……さあな。」

響「？」

しばらく、ステージの方を見てると

4人が出て来た

透子『どーも！あたし達、ツキノモリ（仮）です！』

MCは予想通り、桐ヶ谷透子だ

この民衆の前でここまで話せるのはあいつくらいだろう

つくし『えー、コホン。まずは私達のオリジナルの曲から聞いてください。』

二葉つくしがそう言うと、演奏が始まった

聞いたことのある曲だ

俺が聞いた時よりも上手くなってる

司「……………」

フロア内も盛り上がっているとさえ言えば盛り上がってる  
だかな……………」

そんな事を考えてるうちに、4人は下がって行った

響「いいじゃん！初めてのライブにしては上出来だし、他もこんな感じだよ！」

司「……………」

明石がそう言ってる間に次のバンドが出て来た

そして、演奏を始めた

『わあああああ!!』

響「!?!」

会場はさっきの何倍もの盛り上がりを見せた

天と地、それくらい違う

響「ど、どういう事?」

司「さあな。」

俺はそう言っただけで出口の方に歩いた



響「ちよ、司！見て行かないの？」

司「俺はあくまで、広町の客だ。」

俺はそれだけ言つて、フロアの外に歩いて行つた

透子「——あ、柊木さん！」

フロアの外に出ると、4人が歩いてきた

フロアの盛り上がりを感じて見に来たんだろう

司「よう。」

透子「き、来てたんすね！ありがとうございます！」

司「広町に呼ばれてな。」

桐ヶ谷透子の態度はいつもと違う

目に見えて困惑してる

七深「私達のライブ、どうだった？」

司「良かったんじゃないか。前に聞いた時よりも上手くなつてた。」

つくし「そ、そう。」

ましろ「あ、ありがとう……」

司「お前たちのこれからに期待しておく。月ノ森音楽祭だったか、楽しみにしてる

ぜ。」

俺はそれだけ言って、出口の方に歩いた

響「司！あ、ライブ良かったよ！頑張ってたね！」

透子「は、はい。」

俺たちは会場を出た

響「——司！」

司「なんだ。」

歩いてると、明石がやっと追いついてきた

何か言いたげな表情だ

響「あれって、あの盛りあがりの差ってなんなの？」

司「簡単な事だ。お前も答えを言ってる。」

響「え？…… あっ。」

明石は気づいたみたいだ

あの会場の盛り上がりとの差は演奏技術もある

だが、それ以上に

司「あいつらはブランドに負けてるんだよ。」

響「そ、そっか。皆、月ノ森の生徒っただけで過剰な期待をするから……」

司「俺の予想はあいつらは絶対に頭打ちする。」

初めて見た時からずっと思ってた

あいつらには崩れる部分が多すぎるからな

司「月ノ森のブランドで期待するのは客だけじゃない。あいつら自身もだ。」

響「どういう事？」

司「自信過剰なんだよ。だから、失敗すれば絶対にもう一度、もう一度すれば絶対に成功する、そう思う。」

響「それが、破滅への道、って事？」

司「違う。それは、全員が生粋の月ノ森生ならの話だ。だが、一人、いるんだよ。そうじゃない奴が。」

俺が思う、破滅への道

きっかけは恐らく

司「ボーカル、倉田ましろ。あいつはこのまま行くと、必ず潰される。」

響「！」

司「今はそう言う世の中だ。」

俺はそう言っただけ、歩き始めた

響「そこまで分かってるなら、なんで、教えてあげないの？」

司「意味がないからだ。」

響「意味がない？」

司「俺が仮にこのことを教えたとしたら、あのバンドは薄くなって駄目になる。」

響「薄くなる……：：：：：：そういう事。」

明石は理解したみたいだ

俺がこのことを教えたとしても、それは表面上の解決にしかならない

つまり、根っこは何も解決されない事だ

そんなものに意味はない

司「あいつらのターニングポイントに必要な人物はいる。後はそいつの立ち回りしだいだ。」

響「じゃあ、司は何もしないの？」

司「さあな、必要なら多少首を突っ込むかもな。」

響「珍しいね。司がそこまで最真にするなんて。」

司「面白そうだからな。」

そんな会話をしながら、俺たちは家に帰って行った

これから、どうなるんだろうな

## 恋情

突然だが、俺の家は高層マンションだ

最上階の一フロアが俺の家

それより下には従業員や子供が住んでる

三久「――あ、終木君。」

司「……………」

ここに俺が住んでる事は誰にも知られていなかった

そう、俺の家の前にこいつがいるわけないんだ

司「…………… なんて、ここにいます。天空時三久。」

三久「あなたをつけている間に住居を特定出来たんです。」

司「ストーカーか。」

いや、ストーカーだった

まあ、元ではあるんだが

俺は大きなため息をつきながら話しかけた

司「何の用だ。俺もお前がここを通らない事は分かってる。」

三久「一緒に学校に行きましょう。」

司「は？嫌だ。」

俺はそう言つて学校の方に歩いた

天空時三久は駆け足で俺を追つてきてる

三久「ま、待つてください。」

司「嫌だ。お前と学校に行つたら仲が良いと言うあらん誤解を招く。」

三久「あ！」

俺は走り出した

そして、真つ直ぐ学校に向かった

司「——はあ、疲れた。」

全力で走り、学校に着いた

走つたことに關しては一切疲れてない

家の前に同じ学校の人間がいたという事実には疲れてるんだ

七深「——あー、柊木君ー。」

司「広町か。」

下駄箱に来ると、広町がいた

今まで知らなかったが、意外と近かったらしい

七深「おはようー。」

司「ああ。」

七深「今日は朝から目が死んでるねー。どうしたのー？」

司「…… ストーカーがいて、疲れた。」

七深「え？また？」

司「ああ。」

俺はそう言いながら下駄箱を開けた

すると、中に手紙が入ってた

司「……」

七深「お、おー。」

俺は静かにそれを開けた

内容は放課後に屋上に来てほしい、というものだった

七深「これが、普通のラブレター？」

司「……」

俺はその手紙を静かに下駄箱に入れ直し

勢いよく、閉めた

七深「な、なにしてるのー？」

司「無視だ。」

七深「えー、なんでー？」

司「なんでもだ。」

丁寧なことに差出人の名前が書いてた

天空時三久だこの時点で無視する理由に十分だ

俺は取り出しておいた靴に履き替えた

司「よし、教室行くか。」

七深「いやいや、手紙取りなよー。」

司「断る。」

三久「——ひどいじゃないですか。」

司「…… チッ」

もう追いついて来たか

普通の中の上なだけはある

三久「女子からの手紙ですよ。受け取ってくださいいよ。」

司「知らん。」

三久「なんで、そんなに私を避けるんですか。」



司「胸に手を当てて考えてみる。」

三久「？」

俺がそう言うのと、天空時三久は俺の胸に手を当てて来た

一瞬の出来事で頭の中が真っ白になった

七深「!？」

司「……………何をしている。天空時三久。」

三久「え？胸に手を当てろって言っていたので。」

司「お前は自分の罪状を思い出すのに、他人の胸を触ろうと思うのか？」

三久「冗談ですよ。」

天空時三久は笑いながらそう言ってきた

ただ単純にうざすぎるんだが

司「……………はあ。」

俺は心底疲れた

こういう時の最良の対処法は無視だ

俺はそう思い教室の方にゆっくり歩きだした

三久「待ってください。」

司「……………」

三久「ま、また、行きますからね！」

七深「……？」

俺は後ろに天空時三久の声を受けながら

教室に歩いて行った

七深（なんでだろ？今、少し胸が痛かったような？）

学校というものは俺にとって退屈なものでしかない

社員からの定期報告を見てたりするだけで時間が過ぎていった

司「——もう、こんな時間か。」

気づけばもう、昼休みになっていた

俺は鞆の中から某カロリー食品とゼリーを出した

司（最近は安定しすぎて退屈だな。）

俺は嵐の前の静けさの様なものを感じながら

パソコン画面を見ていた

三久「——不健康ですね。」

司「!？」

俺は席から飛びのいた

そして、俺は話しかけて来た人物を見た

司「何をしている。」

三久「お弁当、食べませんか？」

司「は？」

困惑している

こいつは何を言ってるんだと

だが、質問の返答だけはすぐにてた

司「いらん。」

俺はそれだけ言うと、席に座りなおした

周りからは、色々な声が聞こえてくる

「あれって、天空時先輩だよな？」

「う、うん。」

「なんで、柊木君に？」

「家の資金援助、主従関係、色々考えられる。」

「もしかして、恋人同士だったりして？」

司「……… チツ。」

本当に面倒だ

こいつの狙いは何だ

司「お前は何を企んでる。」

三久「え？」

司「俺を陥れて、何かする気か？」

こういう時はストレートに聞くのが一番だ

目的次第なら仕留めればいいだけの事だ

三久「お礼を、したいんです。」

司「は？」

三久「この間、助けていただいたことの。」

司「……いらん。」

俺は静かな声でそう言った

出来るだけ周りの人間に聞こえないように

司「あれはあくまで依頼だ。礼を言われる筋合いはない。」

三久「後、もう一つの目的があるんです。」

司「なに？」

三久「少し、場所を変えていただけじゃないでしょうか……？」

司「……」

俺は心底面倒に思いながら  
教室から出て、屋上に移動した

屋上に来た

人一人いないな

司「それで、もう一つの目的とは何だ。」

俺は屋上に来るとすぐに本題に入ろうとした

天空時三久は俺の方をまっすぐ見た

三久「私は柊木君に助けられてから、ずっとおかしいんです。」

司「おかしい？」

ビルから飛び降りた時に何か体に負荷がかかったか？

それとも、爆発音で聴覚に何か影響したか

三久「私は最初、貴方の事を悪だと思っていました。」

天空時三久は話し始めた

それにしても、第一印象最悪だな

三久「ですが、あなたに助けられて。あの日、人身売買にかけられた人たちの事を聞

きました。」

司（明石か。）

三久「柊木司、パンドラは悪じゃなかった。たぐさんの人を救う正義だったんです。そう思うと、私の頭はぐちゃぐちゃになりました。」

まあ、イメージが180度変わったわけだし

そりゃあ、考えもまとまらないだろうな

司「バカな奴だ。」

三久「え？」

司「最初のお前の考えは間違えてない。パンドラの俺は悪だ。」

俺はそう言った

天空時三久は目を丸くした

司「お前は何もわかってない。」

三久「どういう事、ですか？」

司「確かに俺は多くの人間を救ってるんだろうな。」

三久「はい、確かに、救っています。だから――」

司「だがな。」

三久「？」

司「人を殺せば、他に何をしてようがそいつは悪なんだよ。」

三久「っ！」

そう言うと、天空時三久の顔が強張った

俺は続けて話した

司「俺は今までに何百人もの人間を殺してきた。」

三久「……………っ。」

司「血なんて、いつの間にか赤い絵の具を見てると何ら変わらなくなった。」

初めて人を殺したのは小学生の時だった

最初こそ、戸惑いがあった

だが、いつからだだったか何も感じなくなったのは

司「こうなるまで人間を殺した奴はどうやっても正義になんてなれない。それが俺だ。」

三久「……………」

司「そういう事だ。」

俺はそう言って扉の方に向かった

もう話すことなんてないだろう

三久「待ってください。」

司「……………なんだ。」

天空時三久は俺を呼び止めた

まさか、まだ話すことなんてあるのか

三久「悪なのは、あなた自身なんですか？」

司「……なに？」

三久「真に悪なのは、あなたの行いだけなんじゃないですか？」

司「行い？」

三久「罪を憎んで人を憎まず、そう言う言葉があります。だから、あなたもそうなんじゃないですか？」

司「もう一つ、教えてやる。」

これを知ってるのは、明石だけだ

そして、これが俺の最大の罪であり

悪である理由

司「俺は」

三久「——え？」

その時、天空時三久の時間は完全に止まった

まるで、温度が消えたようでもあった

司「俺は生まれた時から、罪なんだよ。」



三久「それでも……」

司「？」

天空時三久は俺の服を掴んだ

そして、こう言った

三久「私には関係ありません……！」

司「なにがだ——」

三久「私はあなたに恋情を抱き続けます。」

俺はたいそう驚いた

想像してなかった事態だった

三久「私はあなたの正義を知りました。今更、そんな事を言われても、私には関係ありません……！」

司「……そうか。」

俺は少し笑った

そして、俺は天空時を見た

司「天空時。」

三久「え？（呼び方が……）」

司「お前は変な奴だ。金と外見以外で俺を評価する人間がいるなんてな。」

三久「それは、誰もあなたを知らないだけです。」  
司「だがな。」

俺は静かな声で、優しく

天空時にこう言った

司「——やめとけ。」

俺はそう言った後、屋上を去った

俺は放課後の廊下を歩いてる

もう夏に近いのもあり、外はまだ明るい

司（——後味悪いな。）

天空時は多分、もう俺にそう言う思いを抱くことはないだろう

だが、これでいい

これが正解なんだ

透子「——行くよー！倉田ー、二葉ー、広町ー！」

つくし「うん！次のライブこそ！」

ましろ「う、うん………」

七深「がんばろー。」

司「ふっ。」

あいつらの姿が見えた

まだ、大丈夫みたいだな

そう思っていると、俺の携帯が鳴った

司（……仕事か。）

俺は携帯画面を確認した

人体実験場の殲滅か

俺は内容を確認すると、明石に電話をかけた

司「明石。」

響『はいはい！仕事？』

司「ああ。詳細はすぐに送る。今夜、決行だ。」

響『りよーかい！』

俺は明石との電話を切り

仕事の詳細を明石に送った

司「行くか。」

俺はそう呟いてから

歩を進めた

## 疑念

夜、俺は今、山奥にいる

周りは木々に包まれ、川の水が流れる音が聞こえる

見晴らし良い崖だけあって、色々な情報が入ってくる

司「——あれか。」

響「うん。」

そんな大自然の中にある、不自然な人工物

ここが今回のターゲツトだ

俺は建物の詳細を見た

響「地上5階、地下に1階。実験対象の人は結構まばらにいるかも。」

司「そうか。」

俺は画面を凝視した

そこに載っているのは、ここでの研究内容だ

司「……」

響「大丈夫？司。」

司「……何がだ。」

響「いや、やっぱり何でもない。」

司「そうか。」

俺はそう言ってから

立ち上がり、軽く準備運動をした

司「明石はいつも通り、遠くからのナビゲート。俺は侵入して殺していく。」

響「りよーかい。」

司「始めるぞ。」

俺はそう言って、崖から飛び降り

研究所に向かって行った

---

研究所の前には武装した2人がいる

まあ、関係ない

俺は2人の関節部分に向けて銃を発砲した

「ぐっ!?!」

「な、なんだ!」

司「よう。」

いくら武装してたとしても

関節部分は薄い事が多い

「お、お前は、終木司!」

司「ここを潰しに来た。通してもらうぞ。」

「ま、待て!」

俺は二人の頭を打ち抜いた

そして、敷地内に侵入した

司（確か、このガラスは全部、防弾ガラスだったか。）

俺は建物を見た

窓がない部分は事件対象の人間が閉じ込められてるんだろう

だが、4、5階の部屋はそれがない

つまり、侵入ルートがあるって事だ

司（これなら、簡単に終わりそうだな。）

俺は懐から、いつものワイヤー射出機を出した

そして、それを引っかけて建物の壁を登った

いつしかの地上2桁階のビルに比べれば低いことこの上ないな

司「防弾ガラスは割れない。なんて、そんな単純な思考じゃ殺されるぜ。」

俺は体を置きく振り

勢いをつけて、ガラスを蹴り破った

司「——さあ、俺の任務開始だ。」

建物内に入ると、そこには所長と思われる人物がいた

すぐに俺はその人物に銃を突きつけた

司「——お前を殺しに来た。」

「っ！お、お前は——」

司「非人道的な人体実験の数々、お前は何人殺した？」

「ま、まさか、終木司か……？」

司「——」

こいつ、なんで、俺を知ってる

まさか、こいつは

いや、待て、そんなはずない

司「……お前はまさか。」

「ああ、君の事はよく知っているよ。どうだい？この世で唯一、到達点に達した人間の気分は——っ！」

俺はやつが言葉を言いきる前に胸を打ち抜いた  
間違いないこいつは……

やつは血を吹き出しながら後ろに倒れた

司「お前の話を聞く気はない。さっさと死ね。」

「くくっ、あははははは！」

司「！」

終わった、そう思っていると

やつは死ぬどころか大声で笑い出した

だが、出血の量からして生き伸びるわけがない

「それでいい！お前はそれでいいんだ、柗木司！お前が殺すことで私の研究成果が証明される！もつとだ！もつと……！」

やつはそう言いながら息絶えた

俺は銃を下ろした

司「……」

まさか、この研究が続けられてたとは

俺は棚に入ってる、研究ファイルを見た

司「……っ！」



## 『人体強化改造計画』

資料にはそう書かれていた

ありとあらゆる人間、動物を組み合わせて

人類を超えた新人類を作り出す

成功例0、類似成功例……

これ以上は印刷ミスなのか見る事が出来ない

司「……まあいい。これが、収容者のリストか。」

俺はファイルに挟まっていたリスト

そして、マスターキーを取り出し、所長室を出た

建物の中はかなり綺麗だ

今現在も使われているのが良く分かる

「お、お前！　ぐはっ！」

「止まれ」

司「……」

俺は出くわした研究員を片っ端から気絶させながら進んでいる

収容者は、全員救出する

俺は所内のある部屋を目指して走った

司「ここか。」

目的の部屋に着いた

ここに、収容者がいる

俺は持つてきておいた、キーを使って扉を開けた

「誰？」

中に入ると、何人もの人間がいた

男、女、大人、子供

全員が関係なく部屋に閉じ込められてる

俺はゆっくと語りかけた

司「お前たちを救出しに来た。」

「救、出……？」

「本当に？」

「た、助かるの……？」

そんな声と共に全員が俺の方に群がって来た

全員、かなり痩せてて、服装も最低限のものだ

十分な食事と衣類を与えられていなかったんだろう

司「ここ以外に收容されてる場所はあるか。」

「一応、夜はここに全員が集められてます……………」

司「そうか。」

人数はざつと、120人

まばらに收容されてる可能性があったことを考えれば、かなり手間を省けた

このくらいの人数なら用意してたバスなんかは全員を乗せられる

「待つて……………」

司「なんだ。どうした。」

「お父さんとお母さんが……………」

司「ふむ。誰か、場所を知ってるやつはいるか！」

「僕、さつきまで一緒にいました。」

司「案内しろ。」

「はい。」

俺は一人を案内人にし

それ以外には全員、外に出るように指示を出した

そして、ある程度全員が外に出た後、俺たちは子供の親が連れていかれたという部屋

に向かった

「さつきは、この部屋にいました。」

案内されたのは、いくつか離れた

実験室と書かれた部屋だった

俺は懐からマスターキーを取り出した

司「入るか。」

俺は鍵を開け、部屋に入った

中に入ると……

残酷な光景が広がっていた

司「……チツ。」

床には何らかの薬品が入った大量の注射器

そして、部屋の真ん中にはポツンと拘束用の椅子

その椅子には、ただ座ってるように見えるが

息絶えた、子供の親と思われる二人の死体があった

「、これは……？」

司「実験の一環だろう。」

親2人はまるで陸にあげられた深海魚のような死に方をしている

目は黒目の位置がおかしい、薬品で中毒になったんだろう

しかも、2人の身体は異常に発達している

転がってる薬品の効果はこれなんだろう

司「これが実験中の人体を強化する薬なんだろう。」

「そ、そんなものが……」

司「もう少し遅ければ、お前もこうなっていたかもな。」

「ひっー」

馬鹿げた実験、俺はそう思う

人間を生きてる間に改造して強化するのはほぼ不可能だ

司「おい、その2人に触ってみろ。」

「え？はい？」

案内人の男は2人の死体に触れた

すると、2人の死体はボロボロと崩れた

「ひい!!!」

司「こういう事だ。肉体自体が改造について来ない。成功率は万に一つよりも低い。」

これに耐えるのは、それこそ

最初からそう生まれるようになっていないといけない

司「もう、ここに用はない。外に出るぞ。」

「は、はいー！」

俺は案内人にそう言つて、その部屋を後にし  
建物の外に出た

響「——司ー！」

外に出ると、明石がもう全員をバスに乗せていた  
運ぶ用意はもう整つてゐるみたいだ

響「もう、ほぼ全員乗つたよ。」

司「そうか。よくやつてくれた。」

響「でもー。」

「あの、お母さんとお父さんは………？」

さっきの子供がそう聞いてきた

子供の目は不安の色に染まっている

俺は少し黙り、子供にこう告げた

司「お前の親は死んだ。」

「え……？」

司「俺からはそれしか言わない。」

「そ、そんな……」

子供は地面に膝をついた

目からは大粒の涙が流れている

響「だ、大丈夫!？」

司「……」

俺は黙ってその場を離れた

後ろからは子供の泣き叫となだめる明石の声が聞こえた

俺は少し森の中の開けた場所の真ん中に立っていた

空には綺麗な月が見える

司（後味悪いな。）

そんな綺麗な物を見ても

俺の気分は全く晴れない

司（……クソみたいな実験しやがって。）

俺は拳を強く握り

歯を食いしばった

馬鹿げてる、ただの人間を改造なんてできない

司「クソが。」

ガサガサガサ!!!

司「？」

考え事をしてると、近く草が揺れた

何かが近づいて来てる

熊「……！」

木々の隙間から、巨大なクマが出て来た

体長は3mほどだろう

明らかにこつちを威嚇してる

司「なんだお前。」

俺は動じることなく、クマに話しかけた

熊は血走った眼で俺を睨みつけている

今にも食いついてきそうだ

司「さっさと森に帰れ。死ぬぞ。」

熊「グルルルル……！」



司「……」

一定の距離を保って様子を見てきてる

熊からすれば、もう喧嘩が始まってるんだろうな

さつきから俺の周りをウロウロしてる

熊「———グリアアア！」

熊が俺に牙をむいてきた

数メートルの距離を時間にして一瞬にして詰めて来た

司「……はあ。」

それでも、俺はため息しか出ない

だつて……

司「無駄だ。」

俺は熊の頭上に飛んだ

そして、両目を潰し、熊の眉間を殴った

そうすると、クマはうめき声をあげながら倒れた

司「———他の生物と違い、知能が発達し発展したのが人間だ。」

俺は独り言でそう呟いた

熊はさつきから全く動く様子がない

司「だが、悲しい事にその中で俺が生まれてしまった。」  
人間の欠点

他の生物にあつて、人間にないもの

そのほとんどを補い、限りなく完璧なスペックに近づいてしまった

司「普通の動物が俺に勝てるわけないんだよ。」

俺はそう眩き、明石の待つ方に歩いて行つた

森の開けた真ん中には目を潰されてる以外の一切の外傷がないクマが残された

俺が戻ると、もう、バスは全て出発していた

明石は迎えるの車に乗って待つていた

司「——待たせた。」

俺は車に乗り込んだ

そして、車が出発した

響「今回の依頼もあっさりだったね。」

司「そうだな。だが。」

響「？」

司「今回の依頼は何かがおかしい。」

響「え？」

明石は不思議そうに首を傾げた

確かに一見すれば、ただの違法な研究所を潰すだけの依頼だ  
だが……

司「あの男に会った。」

響「え、ま、まさか……！」

司「ああ。そのまさかだ。」

明石は困惑の表情を浮かべている

まあ、それはそうだろうな

司「そして、実験失敗の人間がそのまま残されていた。」

響「！」

司「そのまま、処分もせずだ。」

これもおかしい

普通の研究所なら、失敗は処分するか

サンプルとして保存したりするはずだ

響「まるで、司が来るのが分かってたみたい。」

司「あの研究員の少なさ。もしかしたらな。」

今回の依頼人のプロフィールを見た

司「いい噂を聞かないやつだ。もしかしたら、な。」

響「うん……」

俺はそう言った後、背もたれにもたれた

そして、ため息をついた

司「だが、この程度じゃ俺は乱れない。」

響「うん。わかってるよ。」

司「ひとまず、今日は終わりだ。」

俺はそう言って目を閉じた

こうして、少しの疑念を残し依頼が終わった

## 出生

6月も下旬に入った

あの仕事から、俺のマンションには住人が増えて

そろそろ、1つじや手狭になった

司（……ふむ。）

今日1日、俺はずっとマンション建設の手配をしている

今俺が住んでるマンションの横にもう一個くらい作ろうと思ってる  
司（まあ、少し時間はかかるが、思いのほか早く終わるそうだな。）

出来るだけ多くの人員を使って、早く仕上げる

完成は少なくとも、冬辺りになるだろうな

司「……ふう。」

一息つくともう周りに生徒はいなかった

外を見ると、雨が降りしきっている

司「梅雨だな。」

俺は荷物をまとめながら、そう呟いた

そして、教室を出た

下駄箱に来た

俺は靴を履き替え、ドアの前に立った

司「あ、傘がないな。まあ、車を呼べばいいだろう………って、あれは。」

電話をかけようとする

知った顔が視界に入ってきた

司「何をしている、広町。」

七深「あ、柊木君。」

広町は俺に気付くと、軽く手を振って、こっちに近づいて来た

司「こんなところで何をしている。帰らないのか？」

七深「帰ろうと思ってたんだけど、傘持ってきてなかったんだよ。」

司「そうか。」

今朝は確かに、雲一つない空で

雨が降るなんて想像もつかなかった

傘を持つてなくても不思議じゃない

七深「いやー、困っちゃうねー。」

司「ああ、そうだな。」

俺はそう言いながら、電話をかけた  
目的は車を呼ぶことだ

司「車を一台、月ノ森まで。」

俺はそれだけ言うと、電話を切った  
そして、携帯をしまった

司「おい、広町。」

七深「んー？」

司「車、乗せてやるよ。」

七深「え？」

司「いらぬならいい。」

七深「ううんー、助かるよー。」

司「そうか。」

広町の返事を聞くと

俺は壁にもたれかかった

司「……バンドの調子はどうだ。」

俺は待ち時間が暇だったから

広町にそう尋ねた

七深「あれから、もう1つライブイベントに出たけど、まー……」

そう言いながら、広町は目をそらした

上手くいつていないだろう

七深「でも、これからだよー。これからもっと、上手くなって行く…… 予定だからー。」

司「予定、か。」

これは、もう少しかかるな

俺は携帯のSNSを開いた

司（…… これからだぜ。お前たちは。）

七深「何見てるのー？」

司「…… メールだ。」

俺はそう言つて、携帯をしまった

そして、校門の方を見た

司「車が来たぞ。」

七深「うんー。」

話していると、車から運転手が傘を持って歩いてきた



俺は運転手に広町も乗せると言う旨の事を伝えた

司「行くぞ、広町。」

七深「でも、車まで傘ないよー？」

司「ん？入ればいいだろう。」

俺はそう言つて傘を指さした

そうすると、広町の肩が跳ねた

七深（こ、これは、俗に言う相合傘……！普通っぽい！）

司「行くぞ、広町。」

七深「うん！」

広町はそう言つて、傘に入つてきた

そして、車の方に歩きだそうとした

司「……？？」

七深「うん？」

その時、音楽室の方からピアノの音が聞こえた

なにか、自然と耳に入つて注目してしまう

そんな演奏だ

七深「なんだろう、これ……？」

司「いい演奏、そう言っておこう。」

七深「そうだねー。」

司「まあ、行くぞ。」

七深「うんー。」

俺たちは車の方に歩きだした

“七深”

七深（……あれ？）

柊木君と一緒に歩いてると

不思議な感覚に襲われた

七深（なんだろう、これ？）

胸がどきどきして、嬉しくて

そんなに長い距離じゃないのに、長く感じる

七深「あれ、柊木君……？」

司「なんだ？」

少し柊木君を見ると

肩が傘から出てて、少し濡れてる

司「ん？どうした？」

七深「……………え？」

気づけば、私は柗木君にくつついてた

目的は傘から柗木君が出ないようにする事  
でも……………

七深（あの感覚が強くなった……………？）

さつきよりも胸がどきどきして

嬉しくて、顔も熱くなっちゃう

七深「……………肩、濡れちゃってるよー／＼／＼」

司「そうか。」

距離にしたら、50mもないのに

このくつついて歩いてる時間が永遠に感じる

七深（この気持ちって、なんなんだろう？）

私はこの気持ちの招待を考えた

でも、今の短い時間じゃ、この答えは出せなかった

“ 司 ”

車の中では、降りしきる雨が窓に当たる音が聞こえてくる

浅く聞けば、ただの雑音

だが、よく聞こうとすれば、良さというものはある

俺はそんな事を思っていた

七深「——ねー、柊木君ー？」

司「なんだ。」

七深「柊木君のお家ってどこなのかなー？」

少し車に揺られてると

広町がそんな事を聞いてきた

司「……俺の家か。」

俺は窓の外を指さした

広町は指を指した方に目を向けた

司「ここだ。」

七深「へー、柊木君ってマンションに住んでたんだー。何回の何号室に住んでるのー

？」

司「最上階。1フロアだ。」

七深「え？そんなことできるの？」

司「ああ。」

広町は不思議そうに首を傾げた

まあ、1フロアで生活するのは珍しいかもしれないな

司「まあ、そういう事だ。」

そんな話をしてるうちに、地下駐車場に来た

ここには、俺の名義で所有してる車が数多くある

こんなに車があるのには理由がある

まあ、そんなことはいいだろう

司「じゃあ、後は自分で説明しろよ。」

俺が車から降りようとすると

運転手が首をかしげていた

司「おい、どうした。」

運転手「そ、それが、車が動かなくなっちゃってしまいました……」

司「なに？」

故障か？

まあ、こんなこともあるだろう

司「じゃあ、他の車を使えばいい。」

運転手「実は……」

司「なんだ？」

俺は運転手からある説明を受けた

どうやら、この車以外は放置期間が長すぎて

車両的な不備がある可能性があるらしい

だから、走らせられないと

司「……ふむ。」

正直、この車は全部乗るために買ったわけじゃない

だから、確かに不備があってもおかしくない

運転手「申し訳ございません……」

司「いや、これは管理者、つまり俺に責任がある。自分から余計な責任を被ろうとするな。」

俺はそう言つて、広町の方に行つた

司（さて、どうするか。）

広町の家はここから帰るのはキツイ

傘を貸すとか、そう言う問題じゃない

司（……はあ。）

仕方ないか

幸いにも、広町一人だ

俺の正体、いや、もう一つの顔も知ってる

見られて困るものなんてない

司「おい、広町。」

七深「どうしたのー？」

司「取り合えず、車がどうにかなるまで時間がかかる。ついて来い。」

七深「うんー。」

俺と広町は近くにあるエレベーターに乗った

俺の住んでる階には他の住人が来れないように鍵をつけてある

持つてるのは勿論、俺だけだ

長い時間エレベーターに乗っていると

俺の住んでる階に着いた

七深「——おー。」

エレベーターを降りると、広町は感慨の声を上げた

一般的なマンションより圧倒的に広いだけあつて

俺の生活スペースはかなり広いのだ

司「ついて来い。」

七深「うんー。」

そこそこ長い廊下を進んで

俺の部屋に向かった

俺の部屋に来た

マンションの中だが二階建てのような構造になつてゐる

これは設計段階で、一部屋に大人数が住めるように考えた結果だ

七深「おー、すごいねー。」

司「普通だろ。」

俺は鞆をテーブルの上に置き

ソファに座つた

司「適当にくつろげ。」

七深「はーい。」

そう言つて、広町は俺の横に座つた

七深「おー、圧倒的座り心地ー。」

司「そうか？」



気にしたこともなかった

俺はそんな事を思いながら、携帯を見た

司（車の修理は夜までかかるか。まあ、いいだろう。）

俺は携帯を置いた

そして、ここからの事を考えた

七深「ねー、柊木君ー？」

司「ん、どうした。」

考え事をしてると、広町が話しかけて来た

俺は広町に目を向けた

七深「家族はいないのー？」

司「……？」

俺は広町の問いかけに首を傾げた

それに広町はさらに首を傾げた

司「家族はいない。死んだ。」

七深「え……？」

俺がそう言うと、広町は驚きの声を上げた

そして、申し訳なさそうな顔をした

七深「ご、ごめん……」

司「うん？なんでだ？」

変な奴だな

俺の家族が死んだ事を聞いただけでなんで謝るんだ？

司「なぜ謝る？別にどうでもいい事だろう。」

七深「え、いや、だって……」  
「両親が亡くなって……」

司「いいんだよ、別に。」

俺はソファの背もたれにもたれかかった

司「俺は今更、そんな些細な事は気にしてない。」

七深「些細……？」

司「そうだ。まあ、親というやつは俺の人生を決定付けた。」

そう、俺の人生は生まれた瞬間に決まった

生まれた時から、俺は優れていることが決定してた

それ故に……

司「…… 決定付けて、俺の人生を壊したのも親だ。」

七深「壊した？」

司「そうだな……」

俺はもたれるのをやめて、体を前に乗り出した

そして、広町に目を向けた

司「パンドラの正体を知ってるお前には教えてやるよ。」

俺はそう言つて、本棚からあるファイルを出した

そして、それを広町の前に広げた

七深「これって、なんの書類？」

広町は首をかき上げて、書類をまじまじと見ている

再度、ソファに座った

司「簡単に言うと、実験結果だ。」

七深「実験？」

司「ああ。」

七深「それって、なんの？」

広町はそう尋ねて来た

俺はファイルの中の一枚の書類を取り出し

テーブルの上に置いた

七深「え、これって……」

司「遺伝子操作、つてやつだ。」

七深「!!」

俺がそう言うのと、広町は目を見開いた  
そりゃ、普通じゃ聞きなれないからな

七深「ど、どういう、こと……？」

司「昔話、というか。聞いた俺の生まれた経緯を教えてやる。」

俺はそう言つて

話を始めた

司「俺の父親は投資家、母親はそここの家出身の令嬢だった。」

七深「……」

司「母親はプライドが高く、自分の子供は絶対に全てにおいて優れている、そう思っていた。だが、現実は違った。」

七深「どういう事？」

司「俺の前に生まれた子供、つまり、俺の兄にあたる人物はあまりに不出来だった。身体能力、知能、免疫など、ありとあらゆる能力があまりにも低すぎた。」

七深「そ、それで、どうなったの……？」

広町はそう聞いてきた

俺は静かに、答えを口にした

司「殺された。」

七深「っ!!」

司「病気のまま部屋に一人、閉じ込められ。碌な食事も与えられず、病死か餓死かも分からない死に方をしたらしい。」

俺がそう言うのと、広町は苦い表情をした

司「そして、俺の親は考えた。自分たちの年齢的に子どもは後一人が限界、でも、もし、またあんな不出来な子供が出来たら、と。」

俺の親は子供を愛する気はなかった

優秀な子供を愛する気しかなかった

司「そこで、至った結論は。」

七深「……遺伝子操作で優れた子供を強制的に作る。」

司「そういう事だ。人生最大の投資、そう言つて父親は何兆もの金をかけた。」

七深「そ、そんなに!?!」

広町は驚きの声を上げた

司「成功率は数億分の1、その程度だった。だが、俺は生まれてしまった。」

七深（生まれて、しまった?）

司「まあ、生まれるまでの流れはこんな感じだ。」

俺は一息ついた

広町は困惑の表情を浮かべている

七深「じ、じゃあ、両親はなんで亡くなったの？」

司「簡単な事、投資家の失敗の末、自殺だ。」

七深「！」

司「簡単。俺が生まれてすぐに株価が急落。俺に金をかけすぎて金がなくなり、父親と母親は首を吊って自殺した。」

それだけ、俺はそう言った

広町は暗い顔をしている

司「これが、俺が生まれた経緯と親がいない理由だ。」

七深「そ、そんな事が……」

司「まあ、親が死んだことなんて何の問題でもない。」

七深「問題じゃない？」

司「ああ。問題は俺が生まれたことだ。」

そう、これが問題だ

俺が犯した、最初で最大の罪

それは、禁忌から生まれ、禁忌そのものだと言う事

司「パンドラのもう一つの意味は俺自身だ。」

七深「……禁忌。」

司「そう。禁忌から生まれた禁忌そのもの、それが俺。パンドラの意味はその戒めだ。」

広町の瞳は揺れ動いてる

何を思ってるか、良く分からないな

司「生まれた時から俺はこんな風に生きることを選定付けられてる。それが、壊したって事だ。」

七深「壊したって、どういう事？」

広町はそう問いかけて来た

俺はその問いに答えた

司「俺は普通に生きる事が出来ない、そういう事だ。」

七深「普通に、生きられない……？」

司「そりゃ、作られて、どう考えてもオーバーな能力を持つてる。俺は勝者として生きることを強いられてるんだ。」

生まれた瞬間から、勝者である事

それは言わば、ズルだ

そんな事を認めない奴だって、絶対に出てくる

司「…… だから、いずれ、罰が来る。」

七深「え？」

司「なんでもない。」

俺はそう言つて、ソファから立ち上がった

司「折角だ、飯くらい出してやる。帰りも遅くなるし、ちようどいいだろう。」

七深「う、うん。」

俺はそう言つて、キッチンの方に向かった

“七深”

私は分からなくなった

七深（全部分からなかった……）

さっきの罰つて言葉

あれの意味も分からない

でも、柗木君が生まれた経緯を聞いて

七深（柗木君つて…… なんなんだろう……？）

柗木君が分からなくなった

すごい人、それだけの認識から



七深（すごく、可哀想……）

そう言う認識になった

普通に生きられない、つまり、自分の強制的に与えられた才能を受け入れて生きる事  
才能は変に期待されたり、嫉妬を生んじやうから

七深（私だつたら、耐えられるかな……？）

普通に生きるつて選択肢があつた、私

最初からそれが無い、柊木君

そう思うと、胸が苦しくなつて、悲しい気持ちになる

自分の事じゃないのに、それと同じくらい悲しい

その気持ちに、私自身も戸惑つてる

七深「……私は、どうしたいんだろう……？」

私の心はまるで、鉛みたいに重たくなつた

## 演奏者

“七深”

昨日の出来事がずっと、頭から離れない

あれから、私は柗木君にご飯を食べさせてもらって

車の修理が終わった後、家まで送ってもらった

私はその間、柗木君とともに話せなかった

透子「——広町？」

七深「え？あ、ど、どうしたのー？」

透子「いや、なんかボーっとしてたから、どーしたのかなって。」

七深「な、なんでもないよー。」

瑠唯「……」

私がそう言っても、皆は心配そうな顔をしてる

そんなに今の私、おかしいのかな？

つくし「最近はずっと練習だったし、疲れてるんじゃない？」

七深「だ、大丈夫だよー。」

ましろ「でも、顔色悪いよ。大丈夫……？」

しろちゃんにそう言われるほど

今の私の顔色悪いんだ……

瑠唯「今日の練習は引き上げるのをお勧めするわ。」

七深「るいるい……？」

瑠唯「そんな状態での練習、意味がないもの。」

透子「まー、そうかも。」

つくし「私も賛成！広町さん！ゆっくり休んで！」

ましろ「うん。」

七深「え、あの……」

透子「じゃあ、かいさーん！」

とーこちゃんがそう言うのと

皆はそれぞれ帰る用意を始めた

私は茫然として動けなかった

つくし「広町さん！なにやってるの？」

七深「あ、ご、ごめん。すぐに出るよ。」

ましろ「急がなくてもいいよ。」

私はすぐにベースをケースに入れて  
練習場所の教室を出た

“ 司 ”

昨日は広町の様子がおかしかった

まあ、あの話を聞いて気分が良くなかったんだろう

司（……あの様子じゃ、もう俺に近づくことはないんだろうな。）

正直、少し名残惜しい気もする

久しく見つけられなかった、面白い人間

それがいなくなるのは多少、残念には思う

司（お笑いだな。俺にもまだ、人間の心が残ってたとは。）

そんな事を考えてると

どこかから、ピアノの音が聞こえて来た

司「……この音は。」

昨日、聴いた演奏と同じだ

なぜか聴き入ってしまう、そんな演奏

司「この音は音楽室からだな。」

俺は少し興味が沸き

演奏者がいると思われ、音楽室に向かった

音楽室の前まで来た

俺が向かつてる間も演奏奈鳴りやむことはなく続いていて

いつも何も感じない

廊下を歩く、という事でさえ

少し、心地よく感じた

司「——入るか。」

俺はそう呟き、音楽室に入った

音楽室に入り、最初に目に入ったのは

カグヤ「……」

無心でピアノを弾いてる

夕日に照らされる銀髪を一つにまとめた

女とも取れる容姿の男だった

カグヤ「……誰ですか。」

司「お前は、十条カグヤか。」

カグヤ「司さん……?」

十条カグヤはそう眩くと

俺の方に歩み寄ってきた

カグヤ「お久しぶりです。」

司「ああ。お前は一応、元気そうだな。」

十条カグヤとは3年前に会ったことがあった

そして、奴を見て俺はあの演奏に納得した

司「ピアノは続けてたみたいだな。」

カグヤ「はい。あれから、自分のためにピアノを弾き続けています。」

司「いいじゃないか。あの時みたいな、つまらない事はしてないみたいだな。」

カグヤ「はい。自分の才能の使い方は自分で決めろ、あの言葉は今でも覚えています。」

司「そうか。まあ、楽しそうでいいんじゃないか?」

俺は十条カグヤの肩を軽くたたいた

カグヤ「司さんは……どこか変わりましたね。」

司「なに?」

奴は急にそんな事を言ってきた

俺が変わった？

そんな感覚は一切ない

司「俺は別に変ってない。今まで通りだ。」

カグヤ「そう、でしょうか？」

司「ああ。」

奴は少し首をひねったが

それ以上、俺の事を言及して来なかった

カグヤ「僕はこの辺りで失礼します。時間なので。」

司「ああ。じゃあな。」

俺は十條カグヤが部屋から出て行くのを見た後

窓の外を見た

司「…… 変わった？俺が？」

いや、そんな事はない

俺は俺のままだ

司「…… なんだ？」

窓に映る自分の姿を見ると違和感があった

何かが違う、俺じゃない？

俺はそう思いながら、窓に近づいた

司（……なんだ、これは。）

窓に映る俺の姿は普通の人間が見れば何も変わらない

だが、俺にはわかる

今の俺の目には

司（迷いが、ある？）

信じ難い

俺に、迷いだと？

今まで自分を信じ切って、迷いを知らなかった俺に？

司「…… チッー」

俺は窓から目をそらした

これ以上自分の姿なんて見ても時間の無駄だ

そう思って、俺は音楽室から出た

司（疲れてるだけだ。明日になれば治ってるに決まってる。）

俺はそう言い聞かせながら廊下を歩いた

足音がいつもより大きい



かなり苛立ってるんだろな、今の俺は

司（俺は何も迷ってない。金を稼ぐ事、殺すことしか考えてない。俺はそれだけの生  
物だ——）

七深「——あ、ひ、柗木君……」

司「……広町？」

廊下の曲がり角

俺はそこで広町と出くわした

七深「ご、ごきげんよう……」

司「……ああ。」

広町は気まずそうに挨拶をしてきた

それを見て、俺は変な感覚に襲われた

司（……なんだ。）

七深「き、昨日は、ありがとう。」

司「……別に、いい。」

こんな事、今までなかった

訳が分からない

気持ちが悪い

七深「じ、じゃあ、またね……」

司「おい、広町！」

名前を呼んでも、広町は止まらず

どこかに走って行った

俺は広町の方に伸ばしてた手を静かに下した

追いつこうと思えば、追いつける

でも、追いかけてようと思わない

司「……っ。」

俺はポケットに手を突っ込んだ

そして、そこからすぐに立ち去った

司（クソ。なんだこれは。気分が悪い。）

俺は心の中でそう吐き捨てた

“ ましろ ”

ましろ（——お、遅くなっちゃった。）

私は使ってた教室のカギを職員室に返して

透子ちゃん達が待ってる所に向かっていた

本当は走つちやダメだけど、今はほとんど人もいないし  
少しくらい、いいよね

ましろ「——きゃ！」

カグヤ「……っ」

廊下を走つてると

曲がり角から出て来た人にぶつかった

ましろ「ご、ごめんなさい……」

カグヤ「……」

すごく、綺麗な人

綺麗な青い目には私の姿が写ってる

さつきから何も喋らないし

表情も変わらない

ましろ（お、怒ってるのかな……）

私は目を合わせないように目をそらした

怖くて、動けない

ましろ「……っ！」

カグヤ「……」

ぶつかっちゃった人が私に向かって手を出してきた

私は怖くなって目をつぶった

叩かれるのかな、痛いのは嫌……

カグヤ「……大丈夫？」

ましろ「……え？」

カグヤ「ごめん。少し考え事をしてて気づかなかった。」

その人は私に怒るどころか

逆に謝って、私に手を差し出して来た

私はすぐ戸惑った

ましろ「は、はい。ご、ごめんなさい……」

私はその人の手を取って立ち上がった

見た目に反して、すごく力強くて

よく見れば、男子の制服を着てる

ましろ（お、女の子みたい。すごく、綺麗……）

カグヤ「怪我はないかな？」

ましろ「だ、大丈夫です。」

カグヤ「それなら、よかった。」

そう言つて、少し優しく微笑んだ

夕日に照らされて、更に綺麗に見えて

つい、見とれてしまった

ましろ「……」

カグヤ「どうしたの？」

ましろ「な、なんでもないです……」

カグヤ「？」

この人は誰なんだろう

私は彼を凝視してしまう

カグヤ「まあ、怪我がなかったのは良かった。僕は行くよ。」

ましろ「！」

そう言つて、彼はどこかに行こうとした

私は気づいたら、声をあげていた

ましろ「あ、あの！」

カグヤ「はい？」

ましろ「あの、その……」

つい呼び止めちゃったけど

なんて言えばいいんだろう

カグヤ「どうしたの？」

ましろ「あの、その。お名前はなんですか……？」

やっとの事で絞り出した言葉がそれだった

もう、完全にナンパみたいになっちゃってる……

カグヤ「僕は十条カグヤ。君は？」

ましろ「倉田ましろ、です……」

カグヤ「倉田ましろさん、か。うん、いい名前だね。」

ましろ「！／＼／」

カグヤ「僕に行くよ。また会えるといいね。倉田さん。」

ましろ「は、はい……！」

彼はそう言って、どこかに歩いて行った

私はその背中を見えなくなるまで、見続けてた

ましろ（十条、カグヤ君……）

透子「——おい！倉田——！」

ましろ「と、透子ちゃん。」

透子「もー、何やってんのー？」

ましろ「ご、ごめん……」

透子「いや、別にいいんだけど……ん？」

ましろ「？」

透子「ちゃんは私の顔を見ると、不思議そうな顔をした  
そして、まじまじと見てきた

ましろ「ど、どうしたの？」

透子「いや、なんか倉田の顔、赤くない？」

ましろ「え？」

私は自分の顔を触った

確かに、いつもより熱い気がする

この感じ、思い当たることは……

ましろ「……」

透子「倉田ー？」

ましろ「な、なんでもない！／＼／＼」

透子「え？あ、うん？」

ましろ「い、行こ、透子ちゃん！」

透子「ちよ、押すなって倉田ー！」

ましろ（な、なんなのかな……）

私は熱い顔と激しく動いてる心臓を落ち着けるように大きく息をした  
その後は、透子ちゃんと二葉さんと虹を飲みに行った



## 自覚と普通

司「——チツ。」

俺は今、虫の居所が悪い

胸の内がむかむかしてる

ベキイ………！

司「あ？」

変な音がして、手元を見てみると

パソコンのマウスを握り潰してた

司「………チツ。不良品が。」

周りの生徒（いや、あの、今完全に握力で壊したように見えたような………？）

司「………」

今、なんでこんなに機嫌が悪いのか自分でも分からない

ただただ、むしゃくしゃしてる

司「………チツ。」

俺は行き場のない怒りを感じながら

授業時間を過ぎた

“ 七深 ”

頭が痛い、ガンガンしてる

視界は授業中からずっとフラフラしてる

七深 「——っ……」

透子 「ちよ、広町。大丈夫!？」

七深 「だ、大丈夫だよー。」

口ではそう言うけど

実際には全く大丈夫じゃない

正直、1時間目が終わっただけなのに、もう限界

透子 「マジでヤバいじゃん！保健室行きなつて！」

七深 「う、うん。やっぱり、そうしようかな……」

私はそう言つて、椅子から立った

座つてた時よりもフラフラする

七深 「じ、じゃあ、行つてくるよー。」

透子 「連れて行こうか？」

七深「だ、大丈夫大丈夫ー。」  
私はそう言いながら、教室を出た

視界が揺れてる

まるで、目が回ってるみたい

学校の中なのに、今、自分がどこにいるか分からない

七深（う、うーん、これはキツイ……）

まっすぐ歩けない

男子「大丈夫かい、広町さん？」

七深（だ、誰……？）

男子「具合が悪そうだね。この僕が保健室までエスコートしてあげよう！」

誰か分からない人が手を伸ばしてきてる

ぐるぐる回る景色の中、にやけ顔の男子が見える

「（くくつ、ラッキーだ。これなら合法的に触り放題。保健室に行けばあばよくば……

！）」

七深（や、やば——）

手を避けようと一歩下がると

体勢が崩れて、膝が折れた

男子「広町さん！」

時間がゆっくりに感じる

駆け寄ってくる男子

顔は相変わらずにやけ顔で、正直、下心が丸見え

でも、もう体が言う事を聞かないから、逃げられない

私は目を閉じた

七深「——？」

倒れて床に体が地面に打ち付けられると思った

けど、そんな事なくて、体は誰かに受け止められた

七深（誰だろう？あの男子かな。でも、それにしてもは優しくて、丁寧……………）

司「——こいつに触るな。殺すぞ。」

七深（え……………？柘木く、ん……………）

私は聞き覚えのある声を聞きながら

それを夢と思いながら

意識を手放した

“ 司 ”

休み時間

俺は教室の居心地が悪くて廊下に出てた

それで気分が晴れるわけでもなく

相変わらず俺はむしゃくしゃしていた

司「——あれは、桐ヶ谷透子？」

廊下を歩いてると

桐ヶ谷透子の姿が見えた

司「おい、何をしてる。」

透子「柗木さん！いや、あのですね。」

司「なんだ。」

俺は桐ヶ谷透子の視線の先を見た

司「……あれは。」

そこには、見るからに調子が悪そうにフラフラ歩いてる広町の姿があった

司「あれはどうした。」

透子「いや、なんか体調が悪いらしくって。ついて来なくてもいいって言われたけど、心配になって。」

司「そうか。」

男子「——大丈夫かい、広町さん？」

司、透子「！」

俺たちが話していると、広町に話しかける男子がいた

気色悪いにやけ顔で、下心が丸出しだ

透子「あ、あいつ！」

司「誰だ。」

透子「あいつ、気になる女子に近づいてはセクハラしようとしてみんなに避けられるやつなんですよ！」

司「……へえ。」

俺は広町の方に視線を移した

広町はさつきよりも調子が悪そうだ

男子「具合が悪そうだね。この僕が保健室までエスコートしてあげよう！」

奴はそう言って、広町に手を伸ばした

その手は広町の腰辺りに向かってる

七深「……！」

透子「——あいつ！広町に！とつちめてやる!!」

桐ヶ谷透子が広町の方に近づいて行った

司「……！」

広町の体勢が崩れた

あの転び方、体を打ち付ける

男子の手は相変わず、広町の方に伸びてる

司「広町……！」

俺は気づけば、広町の方に走って

広町を受け止め、奴の方を睨んでいた

司「——こいつに触るな。殺すぞ。」

透子「え!?!い、いつの間にも!?!」

男子「……おいおい。俺は親切のつもりだったんだけど?」

男子は分かりやすくとぼけてる

目線の先は広町の首より下だ

俺はあまりの気分の悪さに奥歯を噛んだ

男子「どけよ。広町さんはこの僕が連れて行く。」

そう言つて、奴は広町に手を伸ばした

俺はその手を払いのけた

すると奴は顔をしかめた

男子「…… 何の真似かな？」

司「俺は言つたはずだ。触るなど。」

透子「！（な、何!?この感じ?）」

男子「お前に何の権利がある？先に声をかけたのは僕だぞ！」

司「……」

男子「君はあの柵木司だろ？だが、そんな君にも、僕と広町さんを引き裂く権利はない！」

奴はそう言つて再度広町に手を伸ばした

口元はにやけて、目線はさつきと同じだ

完全に勝ち誇つた顔をしている

男子「分かつたなら、さつきと広町さんを僕に——ッ!？」

司「…… お前は勘違いをしてる。」

俺は奴の腕を掴んだ

ミシミシと音が鳴る

奴は苦悶の表情を浮かべている

男子「い、痛い！痛い!!」



司「権利があるかないか決めるのはお前じゃない……」

男子「折れる折れる!!折れる!!!」

司「俺だ……!」

ベキイ!!

朝にマウスを握り潰したときと同じような感覚がした

奴の骨は折れたんだろう

男子「あああああ!!!」

司「俺は同じことを言うのが嫌いだ。そしてお前は同じことを二回した。」

俺はしゃがんだ状態から広町を抱えたまま立ち上がった

そして、左の拳を強く握った

男子「ま、待ってくれ!う、腕が折れてるんだ!」

司「関係ない。お前の骨が折れることに何の意味もない。」

男子「え、何を……? ——ぐふうううう!!!」

俺は奴の顔を殴った

流石にて加減はした

だが、奴は蹴つ飛ばした空き缶と同じ様に飛んでいった

司「俺が折りたかったのは、お前の自惚れたその心だ。」

男子「し、しよんなあ……！」

司「お前、金輪際、広町に近づいてみる。」

俺は思いつきり、奴を睨みつけた

奴は小さく声を上げた

司「……次は本当に怪我だけで済まさねえぞ。」

男子「ひいいい!!」

男子は悲鳴を上げると同時に気を失った

まるで、壊れた人形のように動かない

俺は軽く息をついた

透子「ひ、柊木さん!」

司「……なんだ。」

透子「広町、助けてくれてありがとうございます。」

司「……気が向いただけだ。」

俺はそう言うのと、桐ヶ谷透子は奴の方を見て

少し引きつった顔をした

透子「でもあれ、大丈夫なんですか……?」

司「大丈夫だ。腕と心以外は何も折ってない。」

俺はそう言いながら、財布を出した

そして、中に入ってる一万円札を全部、桐ヶ谷透子に渡した

司「病院に連れて行かせる。それで払えばいい。足りなければ言え。」

透子「は、はい！柗木さんは？」

司「俺は……」

俺は腕の中にいる広町を見た

完全に寝てるみたいだ

目の下のクマもひどい

司「こいつを保健室に連れて行く。」

俺はそう言いながら、広町を抱きかかえた

すると、桐ヶ谷透子は目を丸くした

透子「え？（これって、所謂、お姫様抱っこってやつ!?)」

司「なんだ？」

透子「い、いえ！何でもありません！お気をつけて！」

司「ああ。」

俺はそう言つて、保健室に歩いて行つた

透子「はあー、ロマンチックだなあー。」

“透子”

あたしは広町を抱きかかえて保健室に行った柗木さんを見送った後あの男子の方に目を向けた

見れば見るほど、一回しか殴られたようには見えない

透子「さてと……。その2人！」

「は、はい！」

「ど、どうした？」

透子「その奴、運ぶの手伝って！あたしは先生に報告行くから！」

「わ、わかった！」

「任せといてくれ！」

2人はそう言うと、あの男子の方に駆け寄って行った

でも、態度は不本意って感じ、嫌いだったんだろうね

周りにいる女子も結構スカツとしたって顔してるし

透子「さて！先生に報告しに行こ！」

あたしは職員室に向かって行った

“七深”

夢を見た

私は暗い空間で、水の上に立ってる

七深『——ここ、どこだろう？』

周りを見ても、当り前だけど何にも見えない

七深『うーん、なんなんだろう、これ？』

私が周りを見回しながら観察してると

突然、下にある水が光を放った

それはまるで、暗い部屋で見るテレビ見たい

七深『な、なにになに？』

しばらく、水を見てると

水面に何かの映像が映った

これは、この間、柗木君の家に行った時のだ

七深『……ッ。』

前に聞いた話がそのまま、聞こえてくる

私は耳を押さえない、けど、何故か体が動かない

誰かに抑えられてるみたい

七深『柗木君……っ』

聞けば聞くほど、悲しい気持ちになる

七深『あれ……？』

気づくと、涙が流れてた

私はそれを不思議に思った

七深『なんで、泣いてるんだろ……？』

理由は柗木君が可哀想と思ってるから

でも、それだけで泣いたりしない

だって、可哀想と思っても私は泣いたことなんて無かったから

七深『じゃあ、なんで……？』

分からない

なんで、私は泣いてるんだろう

七深『柗木君は……』

最初は放課後に廊下をぶつかって

その後、とーこちゃんからすごい人だって聞いた

それで、パーティーで会って、初めて笑った顔を見た

勝手に笑わないと思ってたから、少し驚いた

それで、パンドラの話の聞いて、私は凄いつて思った

私みたいに才能を隠して、周りと同じようにする

そんな事をしないで、逆に周りとの違いを受け入れる

才能というものを使いこなしてる

すごいと思ってたから、天空時さんの時は怒った

理由は単純、柊木君に失望したくなかった

それだけで、柊木君を叩いた

でも、柊木君は私の話を聞いて

天空時さんを見事に助けて見せた

七深『……あの時かな、私の呼び方、変わったのって。』

広町七深から広町になって

少し、距離が縮まった気がした

最初は不思議に思ったけど、結局は嬉しかった

そして……

七深『……あつ。』

画面が切り替わって、あの時

柊木君が教室で寝てた時になった

あの時は柊木君の人間らしい一面を見た

穏やかな寢息を立てて寝てる姿は

普通の男の子と何も変わらなかつた

そして、あの時に……

七深『!?!?!』

柗木君とキスをしてしまった

完全に事故だつた

私は逃げちゃつたけど、柗木君は簡単に追いついて来て

私を氣遣つてくれた

七深『……!』

そう、あの時から柗木君を見ると

鼓動が早くなるようになった

七深『……』

柗木君とは別のクラスだけど

少し見かけたりすると嬉しくなつて

それだけに、下駄箱に手紙が入つてた時は焦つてた

あの時は何でか分からなかつた

でも、少しわかつてきた



七深『……好き、なのかな？』

そう呟くと、何かが繋がった気がした  
柗木君が他人から、すごい人になった  
それは才能を使いこなしてたから

七深『でも、実態は少し違った。』

本当は望んで使いこなしたんじゃない  
強制的に才能を与えられて

使いこなさざるを得なかった

つまり、柗木君はずっと、拘束されてた

それで可哀想と思った

その前から、私は柗木君が好きだったから  
自分の事と同じくらい悲しくなって

胸が苦しくなって

泣いてたんだ……

七深『そういう事、だったんだ……』

納得した

私にとって柗木君は凄い人じゃない

柊木君は……

七深「——んう……？」

目を覚ますと、私は保健室のベッドの上にいる  
記憶が曖昧になってる

誰が運んでくれたんだろ？

司「………起きたか。」

七深「ええ!?ひ、柊木君?／／／」

つい、私は驚きの声をあげてしまった

そんな様子を見た柊木君は不機嫌そうな顔をした

司「………俺で悪かったな。」

七深「い、いや、そうじゃなくて………」

司「まあ、そんな事は良い。」

そう言うと、柊木君はペットボトルを渡してきた

見た感じは新品みたい

司「飲め。」

七深「あ、ありがとう。」

私は飲み物を受け取つて

それを口に含んだ

すごく、体に染みてるように感じる

七深「……………」

司「……………」

すごく気まずい

夢で自分の気持ちがあつたのは良かった

でも、あの日から柗木君を避けちやつてたから

何を話したらいいか分からない

司「……………」 広町。「

七深「！」

私がそんな事を思つてると

柗木君が口を開いた

司「お前は俺をどう思う。」

七深「え？」

司「前の話を聞いて、お前はどう思った。」

柗木君は真剣な顔でそう聞いてきた

司「あんな話を聞いたら、俺に失望もしただろう。」

七深「うん。してないよ。」

司「なに？」

私が首を横に振ると

柗木君は驚いた顔をした

七深「…… 私は、可哀想だつて思ったよ。」

司「可哀想だど？」

七深「うん。」

私が深くうなずくと

柗木君は何も言わなかった

うつ向いてて、顔が上手く見えない

七深「柗木君？」

司「…… くつ。」

七深「！」

司「あはは!!」

七深「ええ!!」

柗木君は急に笑い出した

いつもからは考えられないくらい  
大きな声で

七深「な、なんでー？」

司「いや、可笑しくてな。俺を可哀想と言う奴を初めて見た！」  
笑いながらそう言ったかと思うと

次は一転して、暗い顔になった

司「だが、まあ、間違つてはないんだらうな。」

七深「……」

司「俺は普通には生きられないからな。見る目によつては可哀想なんだらう。」

柘木君は私の持つてる事を言い当てた

でも……

七深「でも、柘木君はまだ、普通に生きられると思う。」

司「ん？」

七深「柘木君なら、頑張れば普通に生きること出来ると思う。」

司「ふむ。」

柘木君は首をひねった

いまいちピンと来てないみたい

司「俺は普通の人間と作りが違う。無理だろう。」

七深「出来るよ！」

司「？」

七深「一人でできないとしても、仲間がいれば！」

司「仲間？もつと現実的じゃないだろう。俺だぞ。」

むうー、妙に説得力があるのが……

でも、気付いてほしかつたなあ……

七深「私、私がいるよ！」

司「広町？」

七深「私は柘木君の仲間になれるよー！」

私は胸を張ってそう言った

柘木君は首をかしげて、不思議そうにしてる

司「普通、か。」

七深「うんうん。普通は良いよー。普通・ザ・ベストー」

司「怪しい宗教の勧誘か。」

そう言いながら、柔らかに笑ってる

すごい、こんなの初めて見た

司「でも、いいかもな、それ。」

そう小さく呟いて

柊木君は私を見た

司「やってみるか。普通とか言うやつを。」

七深「！」

司「興味が沸いた。」

柊木君はそう言う

私に向かって手を差し出して来た

司「一緒に普通になるんだろ？じゃあ、よろしくだ。」

七深「うん！」

私は柊木君の手を握った

司「それで、まずは何をするんだ？」

七深「えー？えーつとねー……」

私は返答に困った

普通、普通……

司（大丈夫なのか？これ。）

七深「——あ！」

司「お。」

思いついた

普通の友達がすることの一つ

これだよ！

七深「連絡先、交換しよー。」

司「連絡先？なんでだ？」

七深「普通の友達は何、連絡先を交換するんだよー（多分）」

司「……」

七深（む、無理がるかな？）

柊木君は何かを考えこんでる

流石に咄嗟に思いついたことじゃ、納得しないかな？

私は不安に思いながら、柊木君を見た

司「……なるほどな。」

七深（え？）

司「クラスの連中も後で連絡する、写真を送れ等の会話をした記憶がある。連絡先の交換は正しいかもしれない。」

七深「う、うん、そうだよー（？） 広町は普通博士だからねー（？）」



司「じゃあ、交換するか。」

七深「うん！」

その後、私達は連絡先を交換した

柗木君はプライベート用の携帯らしい

司「……………」

七深「どうしたのー？」

司「違和感があつてな。」

七深「違和感？」

司「これだ。」

俺は携帯画面を広町に見せた

司「明石以外の連絡先が入るのが初めてでな。違和感があつた。」

七深「う、うん……………」（か、悲しすぎる。）

司「でも、まあ、俺はこれで満足だ。」

柗木君はそう言つて、立ち上がった

司「もう放課後だ、俺は帰る。」

七深「じゃあ、私も行こつとー。」

私もベッドから立ち上がった

体が流石に重く感じる

司「じゃあ、行くか。」

七深「そうだねー。(今は、これでいいかなー。)」

私は心の中でそう呟いた

七深(これから、アピールすればいいかなー／＼／＼)

そう思いながら、私は

柊木君の後ろをついて行った

## 登校時間

ピンポーン

司「……なんだ……」

朝、俺はインターフォンの音で目を覚ました

俺は体を起こした

司「誰だ。こんな朝早くに。」

もちろん、宅配なんて頼んでない

明石は基本的に平日、俺の家に来ない

司（宗教か新聞の勧誘か？）

俺はそんな事を思いながら

インターフォンの画面を見た

七深『柗木君ー、やつほー。』

司「……」

宗教の勧誘だったか

俺は通話のボタンを押した

司「なんでこんな時間に来た？」

七深『あ、おはようー。』

司「質問に答えろ。」

七深『えー？一緒に学校に行こうと思ってー。』

司「……そうか。」

アポを取れと言つてやりたい

俺はそう思いながらため息をついた

司「エレベーターに乗れ。乗ったら鍵を開けるからその階のボタンを押せ。」

七深『はい！』

俺はそう言つて、エレベーターの方に向かった

ランプが下の階から順番に点灯してる

俺はエレベーターの前で広町を待っていた

少し待つと、エレベーターがこの階に来た

七深「——いえーい、広町参上ー！」

司「おはよう、広町。」

七深「うん！」

司「取り合えずついて来い。」

俺はそう言つて、リビングに使つてる部屋に向かつて歩きだした

広町は俺の横に並んできた

七深「ねー、柊木君ー。」

司「なんだ。」

七深「ここつてお部屋沢山あるけど、何に使つてるのー？」

司「そうだな。仕事部屋、自室、リビング……。」

七深「？」

司「…… 後は全部物置（空き部屋）だ。」

七深「ええ!?! こんなにたくさんあるのに!?!」

広町は驚きの声を上げた

俺も部屋の使つてなさを驚いてる

何のためにこんなところに住んでるんだ

司「あつ、後は明石が止まりに来るのに使つてる部屋があつた。」

七深「誰？」

司「前にパーティーで俺と一緒にいた、あいつだ。」

七深「あの人か…… っつて、あの人、泊ったりするんだー。」

司「ああ。」

そんな話をしてうちに、リビングに使ってる部屋に着いた  
俺たちはその部屋に入った

広町をリビングに入れた後

俺は制服に着替えたり、洗面をした

一通りの作業を終え、俺はリビングに戻った

七深「——広町クイズー！」

司「は？」

リビングに戻ると

突然、そんな事を言ってきた

表情はかなりのドヤ顔だ

七深「広町は今までと違うところがあります！どこでしょー？」

司「夏服。」

七深「え？」

答えを言うと広町は呆気にとられた表情をした

俺は首をかしげながら広町を見た

司「どうした？不正解か？」

七深「い、いや、正解なんだけど……え？」

司（なんだ？）

七深「な、なんで答えられたの？」

司「は？」

広町はそんな事を言ってきた

俺は呆気にとられた

パツと見れば制服が違う事なんて分かる

それなのに、まるで難問に正解したような反応をしてる

俺がなんでか聞きたい

七深「こういうのって、大体、男子は分からないものなんじゃ？」

司「いや、分かるだろう。」

俺はため息をつきながらそう言った

広町も気を取り直したように

落ち着きを取り戻していた

七深「ま、まあ、そうだよね。」

司「当たり前だ。分からない奴は病院行きだ。」

七深「で、どうどうー？」

司「何がだ？」

広町はそう言いながら

俺の前で一周回った

七深「夏服広町だよー？ 似合うかなー？」

司「似合うんじゃないか。」

七深「え？」

司「？」

広町は今日はやけに驚くな

そんなに不思議なことが起きてるのか

七深「いや、柗木君なら、制服に似合うも何もあるかーとか言うと思ってた。」

司「なんで、似合うか似合わないの二択でそんな回答をするんだ。」

こいつの中で俺はどんなイメージなんだ

俺は少しの疑問を覚えた

七深（あれ？でも、柗木君の中では似合わないって選択肢もあつたんだよね？でも、似合うって言ったの？）

司「？」



七深「……／＼／＼」

司（なんなんだ？）

それからしばらく、こんな感じのやり取りをした  
そして、時間になると、俺たちは家を出た

月はもう7月に入った

夏らしい温度を感じた

皮膚が少しチリチリして、アスファルトから熱気が伝わってくる

七深「——いやー、夏だねー。」

司「そうだな。」

七深「そうだなって言っても、柗木君はそんなに暑そうじゃないねー。」

司「そうか？」

七深「うんー。年中、温度変わらなそうー。」

司「そこまで行くともう人間じゃねえよ。」

俺は若干呆れながらそう言った

流石に温度は感じてる

司「——ん？あれは。」

七深「どうしたの？」

暫く歩くと、見覚えのある姿が写った

もう学校の近くだ、いても不思議じゃない

司「知り合いがいた。」

七深「え？どこどこー？」

司「あの銀髪の奴だ。」

俺はそう言つて、少し歩くスピードを上げた

広町もそれについてきた

司「——おい、十条カグヤ。」

カグヤ「司さん？おはようございます。」

司「ああ。」

七深「知り合いつてこの人ー？」

司「ああ、そうだ広町。十条カグヤ、お前も聞いたことくらいはあるんじゃないか？」

七深「確か、ピアノがすごい人だよねー？音楽室で弾いたりしてると聞いて聞いたことあるー。」

司「大体はそんな感じだ。」

俺がそう言うのと、十条カグヤは広町に頭を下げた

カグヤ「初めまして。十条カグヤです。」

七深「広町七深ですー。」

カグヤ「まさか、明石さんや弦巻さん以外に司さんが呼び捨てにする人がいるなんて。」

七深「え？そんなに珍しい事なんですかー？」

カグヤ「はい。かなり珍しいです。全人類で3人しかいませんから。」

十条カグヤはそう言うのと

俺の方を見た

カグヤ「僕もそうなりたいたいのですが、中々、そういう訳にもいかないの。」

七深「へえ、そうなんだー。」

カグヤ「広町さんは一体、何をなさったんですか？」

七深「え？えーつとねー。」

司「そいつは俺をひっぱりたいんだよ。」

カグヤ「ええ!？」

司「そんな肝が据わってるやつ、面白くないわけないだろ？」

カグヤ「ま、まさか、司さんにそんな事が出来る人間がいたなんて。」

十条カグヤはかなり驚いてるようだ

まあ、そりゃあ驚くとは思う

カグヤ「……す、すごいですね、広町さん。」

七深「え？そんなに重大な事なの？」

カグヤ「当然です。普通の人がそんな事をすれば確実に消されますよ。」

七深「消される!?!」

カグヤ「はい。やはり、広町さんは特別なようですね。」

七深「わ、私は普通だよー。」

カグヤ「恐れ入りました。流石、司さんが認めたお人です。」

そう言つて、深く頭を下げた

はたから見ると、この状況は結構面白いな

俺は今にも腹を抱えて笑いそうだ

ましろ「——あ、あれつて、十条カグヤ君……？」

司「倉田ましろ？」

ましろ「あ、お、おはようございます……。」

司「ああ。それで、どうした。」

ましろ「え？」

司「十条カグヤを見ていたようだが。」

俺がそう言うと、倉田ましろの顔が真っ赤になった  
カグヤ「あれ、倉田さん？」

ましろ「! / / /」

カグヤ「また会えたね。」

ましろ「は、はい…… / / /」

カグヤ「？」

七深「おやおや、これはー？」

司「なんだ？」

横を見ると、広町がニヤニヤして2人を見ていた

俺は不思議に思いながら広町を見た

七深「これは、恋の予感……！」

司「恋？」

七深「そうだよー。しろちゃんの顔見て見なよー。」

司「？」

俺は広町がそう言うので

倉田ましろを観察した

司「……ふむ。」

頬がほんのり赤い

呼吸も若干だが不自然だな

目線も顔見たりそらしたりで安定してない

七深「しろちゃん、絶対に恋してるよ！」

司「そうなのか？」

七深「そうだよ！漫画と同じ症状だよ！」

司「そうか。」

カグヤ「倉田さんは何組なのかな？」

ましろ「えっと、A組です……」

カグヤ「そうなんだ。じゃあ、司さんと一緒なんだね。仲良くしてあげてね。」

司「おい、それは聞き捨てならない」

ましろ「は、はい……」

司「いや、はいじゃねえよ。お前は俺の事苦手だろ。」

あのお人よし天然ボケ野郎、とんでもない事を言いやがったな

俺は頭を抱えた

七深「……ふふふ。」

司「おい、笑ってんじゃねえぞ。」

七深「い、いや、ごめん…………… ふふふ……………」

広町は横で腹を抱えて笑ってる

十条カグヤ、あの野郎

カグヤ「——僕も司さんに呼び捨てにされるようにひっぱたいてみるよ。」

司「いや待て、何の話をしてやがる。」

俺は不穏な言葉を聞きつけ

2人の会話に割り込んだ

カグヤ「いや、司さんをひっぱったけば、呼び捨てにされるのかなど。」

司「それを実行してみろ、ぶん殴るぞ。」

七深「くつ、ふふ……………！」

司「お前はいつまで笑ってる？」

ましろ「あ、あの……………」

司「なんだ？」

突然、倉田ましろが話しかけて来た

俺は振り向き、倉田ましろを見た

ましろ「仲良く、しましうね……………？」

司「……………」

もう大体、予想してた

それにもかかわらず、返答が思いつかず  
俺から出た言葉は……

司「……もう、勝手にしろ。」

それだけだった

こうして、俺の今日の一日が始まった



## 普通プロジェクト

七深「——普通プロジェクトー！」

司「なんだそれは。」

放課後、俺はあいづらがバンドの練習をしてる教室に呼ばれた

そして、広町は朝に続きまた訳の分からない事を言い始めた

透子「お！なんか面白そうなことやってんじゃん！」

つくし「いや、普通プロジェクトってなに!？」

七深「そのまま、普通を指すプロジェクトだよー。」

ましろ「普通を指す？」

倉田ましろ、二葉つくし、桐ヶ谷透子は疑問の表情を浮かべている

心なしか、八潮瑠唯も首をかしげてる

司「それで、何をするんだ。」

七深「そうだねー。」

俺が質問すると、広町は考えるような仕草をした

瑠唯（そもそも、普通とは目指すものなのかしら？）

七深「うーん、何があるかなー?」

透子「まずはさ、自己紹介じゃね?」

司「自己紹介だど?」

透子「いや、普通を知るなら己とお互いを知れ?みたいな?」

七深「おー、流石とーこちゃんー! ナイスアイディアー!」

正直、良く分からない理由だが

普通を理解してない俺が口をはさむのは野暮だな

ここは乗っておくことにしよう

透子「じゃあ、一番手! 行きます!」

桐ヶ谷透子が手を挙げた

なんかノリが宴会の一発芸だな

透子「桐ヶ谷透子! バンドではギターしてます! 好きな食べ物のカップ焼きそば! 趣味はSNSと服のデザイン! 月ノ森のカリスマと言えば私って覚えてください!」

溜唯(こういう流れなのね。)

七深「流石とーこちゃん、良い自己紹介だねー。」

司(いい自己紹介ってなんだ?)

俺は心底疑問に思ったが

それを飲み込んだ

透子「じゃあ、次、二葉！」

つくし「ええ!?!コ、コホン!二葉つくしです!A組の学級委員長です!趣味はヘアア  
レンジ!」

透子「え?そうだったんだ!」

つくし「知らなかったの!?!」

透子「いやあ、知らなかったわー!」

桐ヶ谷透子は頭を掻きながらそう言った

二葉つくしは少しむくれている

透子「まあ、いいや!次、倉田!」

つくし「ええ!?!」

ましろ「倉田ましろです。嫌いな食べ物ほうれん草、グリーンピース、ニンジン……」

透子「なんでそんなマイナス!?!もうちよつとあるじゃん?」

ましろ「えつと、趣味は編み物、です。」

司「ほう。」

透子「そうそう!そう言うの!いい趣味じゃん!」

ましろ「う、うん。ありがとう。」

桐ヶ谷透子、こいつ、意外に苦勞人か？

透子「じ、じゃあ、次、広町！」

七深「はいはい。広町七深です。好きな食べ物は辛い物、趣味はおまけ集めの普通の女の子です。」

司「普通ってなんだ？（哲学）」

透子「ま、まあ、普通の自己紹介だったし、多少は！じゃあ、次、八潮！」

瑠唯「……私も？」

透子「いいじゃんいいじゃん！乗り掛かった舟ってやつだよ！」

瑠唯「はあ……八潮瑠唯。以上よ。」

八潮瑠唯は面倒そうにため息をつきながらそう言った

これには桐ヶ谷透子も苦笑いだ

透子「じゃあ、最後に柗木さんっすね！どうぞ！」

司「ああ。」

と言つても、俺の自己紹介か

何を言うんだ

司「柗木司だ。好きなものは、金、成功。」

透子「暗い！倉田とは別ベクトルで暗い！」

司「そうか。」

透子「何か、特技とか！」

司「特技は、金を稼ぐことと、ころ——」

まずい、口が滑った

完全に油断してた

ましろ「ころ？」

司「……コロッケ早食い。」

七深「ふふ……」

透子「そ、そうっすか！あれ熱いからコツいりますよね！」

司「…… ああ、そうだな(?)」

俺は何を言ってるんだろう

広町は笑いをこらえてるし

七深「じゃあ、自己紹介はこんな感じでー。」

司「聞く以上に高度なものだったな。」

七深「普通は難しいんだよー。(柊木君は完全に自滅してたけどー。)」

司「まあ、いい。次は何をするんだ。」

七深「そうだねー…… あつ、あれとかいいかもー。」  
司「？」

七深「所謂、寄り道だよー。」

司「寄り道？」

広町がそう言った後、何だかんだあつて

俺たちは学校を出た

---

俺たちが来たのは少し広い公園だ

八潮瑠唯は帰り

メンバーは残りの4人と俺だ

透子「——ここ！」

司「これは？」

そこにあるのは車が屋台になってるもの

建てられてる旗にはクレープと書かれている

ましろ「クレープ？」

透子「そうそう！ やっぱり女子高生と言えばクレープ？ みたいないな！」

司「俺は男なんだが。」

七深「まーまー、気にしない気にしないー。」

司「いや、重大な問題なんだが。」

俺がそう言っても4人は聞こえてないよう

クレープの種類を選んでいた

七深「柊木君は何にするー？」

司「これだ。」

俺がそう言うと、レジに金額が表示された

司「おい、店員。」

店員「はい？」

司「ここでカードは使えるか？」

店員「はい、一応使えますが？」

司「じゃあ、支払いはこれだ。」

店員「へ!？」

透子「そ、それって！」

つくし「ぶ、ぶ、ブラックカード!？」

司「ああ。」

俺は基本的に使うために財布に現金を入れてない

なんですか、小銭が出るのが鬱陶しいからだ

大量の車も、ブラックカードの裁定基準をこなすためだ

司「何をしてる？早く支払いを済ませろ。」

店員「は、はい！」

それから、俺はクレープの支払いを済ませ

近くのベンチに座った

透子「いただきまーす！」

ましろ「あ、あの、お金は……。」

司「いらん。はした金だ。」

つくし「ま、まさか、ブラックカードまで持ってたなんて……。」

透子「いやあ、流石としか言えないわ。」

七深（これは普通なのかな？）

各々、クレープを食べ始めた

4人は座り、俺は立ったまま食べてる

七深「座らないの、柊木君？」

司「いい。女を立たせると印象が悪い。」

俺はそう言いながら、クレープを食べた



甘い、こんなの久し振りに食べた

司（結構、美味しいな。）

七深「ねーねー、柗木君ー。」

司「なんだ？つて、座らないのか？」

七深「柗木君が座らないなら立つてようかなーつて。」

司「変な奴だ。」

俺は呆れたような声でそう言った

広町は笑みを浮かべながらクレープを食べている

俺も少し、クレープを食べ進めた

七深「柗木君ー。」

司「なんだ。」

七深「クレープ一口頂戴ー。」

司「ああ、別にいいぞ。」

ましろ、透子、つくし「!？」

七深「わーい。」

広町は俺のクレープを一口食べた

七深「美味しいねー。」

司「そうだな。」

七深「柗木君の味がしたー……って、あ／／／」

司「……自滅するなよ。」

透子（え？なにこの顔？てか、柗木さんの味って何？知ってるの？）

広町は自分の発言で顔を赤く染めた

まじで知ってるから否定も出来ないし

完全な自爆だな

ましろ（こ、これ、すごい会話なんじゃ……聞いてないって事にしよう、そうしよう。）

つくし（え、え？／／仲いいって思ったけど、そう言う関係なの？／／／）

七深「あ、ひ、柗木君も食べなよー。」

司「俺も？別にいらんないんだが。」

七深「普通の友達は一口あげたら、一口返すんだよー。」

司「へえ、そうなのか。」

透子（え？そうなの？）

俺は差し出された、広町のクレープを食べた

俺のと味が違う

ほぼ同じ材料なのに、この違いは何なんだろうか

ましろ（ひ、広町さんへの信頼が高すぎる……？）

つくし（普通って、女の子同士か恋人同士とかじやないのかな？）

司「この味も美しいな。」

七深「それでしょー。広町一押しー。」

司「広町の味がしたな。美味かった。」

七深「!?／／／」

透子、ましろ、つくし「ええ!?!」

さつき広町が言ってたし

これは完全な悪乗りだ

七深「や、やだなー、そんなのあるわけないじゃんー／／／」

司「あるだろ。仮にもお前が口に入れたものだけ?」

七深「そ、そうじゃなくてえ……／／／」

透子「あ、あー! 2人とも! 早く食べないと!」

つくし「と、溶けちやうよ!」

ましろ「う、うん!」

司「それもそうだな。」

七深「う、うんー……」  
それから俺たちは残ってるクレープを食べた

クレープを食べた後、俺たちは解散することになった

透子「——じゃあ、アタシらこっちなんで！」

つくし「さようなら！ 広町さん！ 柊木君！」

ましろ「さようなら。」

七深「うんー、またねー。」

司「またな。」

俺たちはそうして別れた

そして、俺は広町と帰ることになった

俺たちはしばらく歩き、人通りがない道まで来た

七深「——いやー、楽しかったねー。」

司「そうだな。」

七深「これは、普通の青春だった気がするよー。」

司「そうなのか？」

判定が良く分からないが

まあ、普通だったんだろう

そう思う事にしておこう

司「……………ふむ。」

七深「どうしたのー？」

司「気になることがあってな。」

七深「？」

広町は不思議そうに首をかしげてる

俺は考える仕草を取っている

七深（柊木君がこんなに考えるなんて、どんな内容なんだろう？）

司「……………」

七深「何を考えてるのー？」

広町は心配そうに顔を覗き込ませてきた

俺は動じることなく、広町の顔を見た

司「……………ふむ。」

七深「柊木君？」

司「なあ、広町。」

俺は広町の顔を少し持ち上げた

広町の顔は瞬く間に真っ赤になった

七深「え……………」

司「気になってたんだ。」

七深「な、何が……………」

司「広町の味って、どんなだろうってな。」

俺はそう言って、ゆっくり広町に顔を近づけた

七深「だ、ダメだよ、こんな所で……………」

司「……………」

七深「ひ、人も通るかもしれない……………」

司「……………」

七深「私達、そんな関係じゃないし……………」

司「……………」

七深「え……………」

俺は広町の様子を見て笑いが漏れた

広町は困惑してる

司「冗談だ。そんなことしない。」

七深「う、う……………」

司「それにしても、そう言う関係じゃないって……くくつ。」

七深「……柗木君なら、よかったかもしれないよ。」

司「そうなのか？」

七深「!//」

司「まあ、何もしないけどな。」

俺はそう言って歩き始めた

七深「も、もー!//」

司「ははは！お前は意外といじり甲斐があるぜ！」

七深「……いじわる//」

俺たちはこんな会話をしながら

各々、家に帰って行った

## 武闘派の女

「な、なんだって……？」

「偽物？影武者？」

「何かの陰謀かも……」

司「……」

授業中、周りからはそんな俺に向けた声がちらほら聞こえてくる

まあ、俺自身、その理由は自覚してる

司「……ふむ。」

俺は今、真面目に授業を受けている

パソコンも開かず、教科書とノートを開き

視線は黒板に集中している

これは広町の普通プロジェクトの一環だ

普通の学生生活を送る、らしい

司（それにしても、つまらん。）

分かり切ってる授業の内容



周りからは驚きの声以外聞こえない

「こんなのが普通なのか？」

司（「こんなの何面白んだ？」）

俺は授業の内容が頭に入ることもなく

そんな事を考えながら授業時間を過ごした

昼休みになった

俺はいつも通り、カバンから持ってきてる食料を取り出した

七深「——柊木くんー。」

司「広町？何しに来た。」

七深「一緒にお昼ご飯食べようと思ってー。」

司「別に構わん。」

七深「じゃあ、少し椅子をお借りしてー。」

広町はそう言いながら

空いてる席の椅子を持ってきて

それに座った

そして、弁当を広げた

七深「そう言えば、授業はどうだったー？」

司「つまらん。」

俺は短くそう答えた

広町はやっぱりねーとでも言いたそうな顔をしていた

七深「柗木君には簡単だよねー。」

司「小学生の授業を受けてる気分だ。」

そう言いながら、ゼリーを口に入れた

七深「それだけでたりるのー？」

司「足りる。」

七深「そうなのー？」

広町は首をかしげながらそう言ってきた

司「なんだ。」

七深「いやー、育ち盛りなんだから、もっと食べたほうがいいなーと思って。」

司「ふむ。」

そうは言われても、俺はこれ以外何も持ってきてない

今から何かを食べようにも無理だ

司「まあ、何も無いし。いいだろ。」

七深「じゃあ、これあげるよー。」

司「？」

七深「あーん！」

司「……………」

広町は弁当のおかずを差し出して来た

表情はかなりニヤニヤしてる

七深（ふふふ！この間の仕返しだよ！精々、恥ずかしがればいいよ……………！）

司「あーん。」

七深「!？」

司「うん。美味しいな。」

俺は一切、動じることもなく

差し出されたおかずを食べた

広町は目に見えて困惑してる

七深「な、なんで!？」

司「お前が食えと言ったんだろう。」

七深「そ、そうだけど……………  
／／／

広町は周りを見た

俺は広町の目線の方向を見た

「え、何、今の？」

「広町さん、普通に食べさせてたよ？」

「もしかして、あの二人……」

こんな感じの声がいくつも聞こえて来た

司「何言ってるんだ？こいつら。」

七深「な、なんなんだろうねー／＼／＼」

司「ふむ。」

広町は顔が赤いままそう言ってる

その時、教室のドアが勢いよく空いた

司「広町、頭ぶっけんなよ！」

七深「え？——きや！」

俺は広町を後ろに突き飛ばした

それと同時に、机が真つ二つになった

司「……騒々しい客だな。」

俺はため息をつきながらそう言った

俺の机があつた場所にいるのは

長い赤髪をなびかせた、長身の女だった

? 「――柗木司あ……!」

奴は俺の名前を呼ぶと

また、俺の方に突進してきた

? 「ぶっ飛ばしてやるよ! このクソ男が!」

司「何を言ってるが知らんが、暴れるな。」

? 「――!」

俺は奴の突進を避けた

奴は掃除道具入れに飛び込んだ

七深「え?」

? 「ちっ!!」

司「暴れるな、と言ったぞ。」

? 「!」

俺は奴を睨みつけた

司「広町まで巻き込もうとしやがって。お前、俺に殺されても文句言えねえぞ。」

? 「へえ、いいねえ! 上等だ!」

司「ふん。」

奴は性懲りもなく

また、突進してきた

俺は奴の首に狙いを定めた

司（首をへし折る。）

？「死ねやー!!!」

三久「——やめてください!!!」

司、？「!」

俺は手を止めた

奴の突進も止まった

司「天空時？」

？「何しに来た、三久！」

三久「龍奈さんが柘木君の所に向かったと聞いたんです！」

天空時は俺たちの方に近づいて来た

三久「申し訳ございませんでした、柘木君。」

司「別にいい。だが、何なんだ、こいつは。」

俺はそう言つて奴の方を見た

龍奈「俺は獅子王龍奈、三久の友達だ！」

司「獅子王龍奈か。」

聞いたことがある

富裕層の中でもかなりの武闘派だったか

こいつも月ノ森にいたのか

司「獅子王龍奈、お前が来た理由は大体予想がつく。」

龍奈「そうか。」

司「その上で聞く。お前は何で来た？」

俺がそう聞くと獅子王龍奈は少し黙り

さつきからは想像もつかない静かな声でそう言った

龍奈「三久の仇だ。」

司（やっばりな。）

想像通りだ

俺は軽いため息をついた

龍奈「三久を泣かせた男がいるって聞いてな。」

三久「だから、龍奈さんは誤解してます！」

龍奈「え？」

三久「あれは、その色々あつて……でも、私が悪いんです。」

龍奈「ど、どういう事だ？」

獅子王龍奈は明らかに困惑してる

司「はあ……」

七深「だ、大丈夫？ 柊木君。」

司「なんだ、俺が危なそうに見えたか？」

七深「見えなかったけど、もしもの事があつたら……」

司「ねえよ。ただの人間相手だぞ。」

俺はそう言いながら、弁当箱を広町に渡した

司「危なかったのはこっちだ。もう少しで弁当ごとやられるところだった。」

七深「え？」

司「あいつが机を割る前に片付けておいた。戦闘時も崩さないように気を使ったぜ。」

俺は少し笑いながらそう言った

広町は少しため息をついた

七深「柊木君って心配するだけ損だよー。」

司「まあ、そうかもな。」

龍奈「――柊木司！」

七深「！」



俺と広町が話していると

獅子王龍奈が大声で俺を呼んできた

司「なんだ。」

龍奈「悪かった……！」

獅子王龍奈は頭を下げながらそう言ってきた

広町はポカンとしている

龍奈「まさか、三久がお前に告白してフラれて、それで泣いてたんで、知らなかったんだ！」

司（あつ。）

七深「え？」

三久「!?／／／」

獅子王龍奈はそれはもう大きな声でそう言った

教室内や近くの廊下にいる生徒は大体聞こえただろう

奴の声は大きすぎる

龍奈「なんだ？」

司「……はあ。」

三久「り、龍奈さんの……／／／」

龍奈「え？」

三久「龍奈さんのバカー!! // //  
パシン!!!」

そんな乾いた音が教室に響き渡った

司「…………… 哀れだな。」

三久「ひ、柊木君っ! // //」

司「な、なんだ。」

三久「私はまだ、諦めてませんから! // //」

司「はい？」

三久「今日は、それだけです! // //」

そう言って天空時は教室から出て行った

教室は水に打たれたように静かになった

龍奈「…………… なんでだ？」

司「俺でも分かった。あれはお前が悪い。」

龍奈「…………… わかんねえ。」

司「お前は……………」

俺は頭を抱えたい気分だ

こいつの鈍感さというものはかなり問題だ

司「もう少し、勉強しろ。人の気持ちってやつをな。」

龍奈「……そうだな。」

司「さて、飯再開だ、広町。」

七深「……今日は教室戻る。」

司「は？」

七深「……バカ。」

広町は小さな声でそう言つて

教室を出て行つた

司「……なんでだ。」

龍奈「多分、お前は悪くねえよ。」

司「そうか。」

龍奈「ああ。」

それから、俺は獅子王龍奈と握手を交わした

なぜか、こいつとは似た性質を感じた

ただの直感なんだが

龍奈「お前はお前で、大変なんだな。」

司「今、一番大変だったのはお前だったかな。」

俺が嫌みつたらしくそう言うよ

獅子王龍奈は笑いながら背中を叩いてきた

龍奈「悪かった！これやるから、許せ！」

司「いや、飴かよ。」

龍奈「ははは！」

俺は獅子王龍奈の大雑把さと

広町のあの態度の謎に頭を抱えながら

昼休みの時間を過ごした

## 警備任務

司「——分からん。」

土曜の朝

俺はリビングの椅子に座って考え事をしてる

内容は昨日の広町の事だ

司（バカ？あれはどういう意味だ？）

俺は広町の前で馬鹿な真似をした覚えはない

事実、弁当箱を返すところまでは普通だった

思い当たることは広町を突き飛ばしたことだったが

様子を見ると、これは違うらしい

司（じゃあ、なんだ？広町は何に腹を立てたんだ？）

全く分からん

俺は何もしてないはずだ

じゃあ、何だと言うのだ

響「——ふぁー、おはよー、司ー。」

司「起きたか。」

時計に目を移すと朝八時だった

俺は椅子から立ち上がり、明石の方を見た

司「さっさと寝癖を直してこい、だらしない。」

響「はい。」

明石はそう返事しながら洗面所の方に歩いて行った

俺はそれを見届けた後、自室に向かった

その途中、仕事用の携帯を見た

司（今日の予定は……なんだこれ？）

予定表を見ると、見慣れないものがあつた

司「祭りの、警備？」

俺はこんな仕事を受けた覚えはない

そして、犯人は分かつた

というよりも、一人しかいない

司「……明石か。」

俺は多少怒気を含んだ声を出した

そして、リビングの方に向き直つた

司「——明石!!」

俺は勢いよくドアを開けてリビングに入った

響「あつ。」

司「お前は何を勝手に予定をいじってる……って、お前、それ。」

俺は文句を言おうとした時

ある事に気が付いた

明石の手に何か握られている

あれは……

司「お前はなぜ、俺の携帯を持つてる？」

響「あ、あははく。」

司「……」

響「ゆ、許して☆」

そう言った瞬間、まるで石でもぶつかったような音が部屋に響き渡った

響「——いったー!!!」

司「加減はした。」

俺はそう言いながら椅子に座った

そして、明石を睨みつけた

司「さて、何か言いたいことはあるか？」

響「つ、司、友達出来たんだねー！」

司「なんだ、もう一発欲しいのか？ 欲しがりだな。」

俺は拳を握りながらそう言った

そうすると、明石は手を前に出した

明石「ご、ごめんって！ あれでしょ！ 予定！」

司「なんだ、良く分かつてるじゃないか。褒美にもう一発ゲンコツだ。」

明石「そ、それは勘弁！」

明石は俺から距離を取った

正直、こんな距離一瞬だが

元からする気もないので再度椅子に座った

司「まあいい。なんであんな事をした。」

響「えーつと、お祭りに行きたかったから？」

司「……………」

響「今まで殺しの仕事ばつかでこういうの無かったじゃん？ だから、お祭りに行きたいなーって……………」



明石は少し拗ねたような声でそう言ってきた

確かに俺と明石の仕事の主な内容はパンドラ、つまり殺しだ

俺はともかく、明石は普通の高校生

心がすり減つても不思議じゃない

司「……はあ。」

俺はため息をついた

本当は祭りとかには行きたくなかったんだが

司「いいだろう。引き受けてやるよ。」

響「ほんとに!？」

司「ただし、あくまで仕事だ。メインはそっちだ。」

響「うん!じゃあ、三久ちやんとこの辺だからカグ君呼ぶね!」

司「仕事と言ったのが聞こえなかったか?」

そう言う俺の言葉は明石に届いてないらしく

ハイテンションのまま電話をかけ始めた

司（まあ、いいだろう。）

最悪、このくらいの仕事なら一人で片付ければいい

楽しそうな雰囲気壊すのは野暮だからな

響「〜♪」

夜になった

祭りの主催者のもとに行き

仕事の概要を聞き、自由の身となった

司「……」

明石は天空時と十条カグヤと合流すると別行動

俺は少し、警備の仕事だ

女「——あれ？財布ない!？」

女2「え!?!うそ!？」

女「さつきまであったのに？」

司「……」

俺は周りの人間を観察した

そして、俺の方に歩いてくる男を見た

司（呼吸、挙動からして、あいつか。」

男（くつくつく、祭りは絶好の稼ぎ時だぜ——）

ドス!!

俺は男の首に手刀を当てた

そして、その流れでポケットの中にあつた財布を抜き取つた

司「おい。」

女「はい？」

司「落としてた。」

女「あ、私の！ありがとうございます！」

司「気を付けるんだな。」

俺はそう言つて、また歩きだした

後ろからはさっきの女の声が聞こえる

まあ、無視するんだが

司（本当に無法地帯だな。）

祭りの夜というのはどうも秩序が緩む

屋台の中にある、くじ引きの詐欺

人ごみに紛れてセクハラを働く輩

あと、その気の陰には逢引きをしてる男女がいた

司「……はあ。」

俺はため息をしながら歩いた

こんな秩序も何もない場所、どう警備しろというんだ

司（そろそろ時間か。）

俺は時計を確認し

明石と待ち合わせてる時間になった

俺はその場所に向かった

神社の鳥居の前に行く

明石の姿が見えた

明石「——司——！」

司「全員、集まったみたいだな。」

三久「こんぼんは、柗木君！」

カグヤ「こんぼんは、司さん。」

司「ああ。」

明石、天空時、十条カグヤは全員、浴衣を着ている

俺は軽く頭を搔いた

司（これ、俺が浮くんじじゃないか？）

三久「あの、柗木君？」

司「なんだ。」

三久「浴衣、どうですか？／＼／＼」

司「似合うんじゃないか。」

三久「！／＼／」

天空時は黒に花柄のある浴衣を着ている

容姿は優れてる方だろうし、似合うんだろう

俺はそんな事を思いながら明石の方を見た

響「さー！お祭りを楽しもー！」

カグヤ「はい、そうですね。」

三久「は、はい／＼／」

透子「——あれ、柗木さんじゃね？」

司「？」

祭りの会場に行こうとすると聞き覚えのある声に呼ばれた

俺は声のした方向に顔を向けた

司「……」

七深「ごきげんよー、柗木君ー。」

司「ああ。」

明石「あれ？司の友達？」

司「……携帯のだ。」

ましろ「じ、十条君……／／／」

カグヤ「おや、倉田さん？」

十条カグヤは倉田ましろに近づいて行った

カグヤ「倉田さんも来てたんだね。」

ましろ「は、はい／／／」

カグヤ「倉田さんも浴衣なんだね？」

ましろ「これは、透子ちゃんに借りました／／／」

カグヤ「なるほど。うん、良く似合ってるよ！」

ましろ「ありがとうございます……／／／」

響「え？カグ君まで？」

明石は驚いた様子でそう呟いた

まあ、俺も少し驚いてるが

司（まさか、十条カグヤが俺や明石以外とあんなに話すとは。）

響「ねえ、司！」

司「なんだ。」

響「この子たちも一緒に回ろうよ！」

透子「あ、いいですね！」

俺の知らない間にそんな話が進んでいた  
てか、馴染むのが早すぎる

七深「いいねー。ね、柊木君？」

司「俺は別に構わん。」

広町の問いかけに俺はそう答えた

広町はニヨニヨとした表情で俺を見てる

七深「ねー、広町の浴衣はどうかなー？」

司「ふむ……」

俺はそう言われると、広町をじつと見た

広町が来てるのは優しい橙色で綺麗な模様の浴衣だ

司「……」

七深「ね、ねー？／／／」

司「……」

七深「あ、あんまり見られると／／／」

司「似合ってるな。」

俺はからかうように笑いながらそう言った

広町の顔は真っ赤になつて

七深「もー！／＼／＼」

司「ははは！」

どうやら、広町の機嫌は直つてゐるらしい

今までと変わらない距離感で楽しく会話ができる

響（あー、あの子かー。）

司「一緒に回るんだつたな。」

七深「うんー！普通っぽいでしょー？」

司「そうなのか？」

響（なんか、仲いいなー……）

透子「じゃ！皆で祭り行きましょー！」

という桐ヶ谷透子の声の後

俺たちは祭りの会場に入つて行つた

司「——十条カグヤ。」

カグヤ「はい？」



俺は会場に来てすぐ、十条カグヤに話しかけた

十条カグヤは不思議そうに首を傾げた

司「お前は倉田ましろと回れ。」

カグヤ「え？」

司「分かったな？」

カグヤ「はい、僕はいいですよ？ですが、なぜ？」

司「聞くな。（明石にこう言えと言われたただけだ。）」

俺はそう思いながら十条カグヤに背中を向けた

“カグヤとましろ”

2人は他のメンバーと分かれて祭りを回っていた

カグヤ「——倉田さんは何がしたい？」

ましろ「え、えっと、その／＼／＼（な、なんで2人で？／＼／＼）」

カグヤ「？」

ましろ「えっと……／／／」

ましろはモジモジとして一向に上手く話せない

カグヤは首をかしげながらましろを見ている

カグヤ「そうだ、あれに行かないかな？」

ましろ「あれは、金魚すくい？」

カグヤ「そう。今までしたことじゃなくてね。」

ましろ「じ、じゃあ、これにしましょう！」

2人は金魚すくいの屋台に行き

お金を払った後、水槽の前にしゃがんだ

カグヤ「わあ、たくさんいるんだね。」

ましろ「はい、そうですね！」

カグヤ「出来るだけ、たくさん救い上げてあげよう。」

そう言いながらカグヤは金魚すくいを始めた

カグヤ「……」

ましろ（すぐく真剣……）

ましろは真剣に金魚すくいをしているカグヤの横顔を凝視していた

ましろ（十条君に、すくわれる……）

“ 空想 ”

きれいな水の中の世界

私は閉ざされたかごの中にいる

ましろ『……』

もう一生、このままここにいるのかな？

ここから出られないのかな？

そんな不安が心によぎる

手を伸ばしても空にある月には手が届かなくて

希望もなにもないんだよって言われてるみたい

ましろ『私はここから出られないのかな……』

カグヤ『——そんな事はないよ。』

ましろ『え？』

私の目には

綺麗ば金髪が月に照らされた男の子

十条君が写っている

彼は優しく微笑んでいて、その表情はとつてもきれい

ましろ『な、なんで。』

カグヤ『君を助けに来た。』

ましろ『！』

カグヤ『一緒に来てほしい。僕の、お姫様。』

ましろ『く！／／／』

彼は私に手を差し出して来た

その手はまるで私を新しい世界に連れて言ってくれる扉みたいに見える。私は吸い寄せられるようにその手を取った――

“現実”

カグヤ「――倉田さん？」

ましろ「……え！？ど、どうしたの？」

カグヤ「ボーっとしてたみたいだから、どうしたんだらうって。」

カグヤは心配そうにましろを見ている

ましろは空想に浸ってた恥ずかしさで顔が真っ赤になった

ましろ（こ、こんな時に空想に浸るなんて／／／）

カグヤ「しないの？金魚すくい。」

ましろ「す、する／／／」

ましろはほいを見ずに沈め

金魚すくいを開始した

カグヤ「すごく上手だね！」

ましろ「そうかな？／／／」

カグヤ「うん。僕は12匹しか救えなかったから。」

ましろ「そ、それは十分すごいよ……あつ。」

喋りながら金魚すくいをしていた

ましろのほいは破れた

ましろ「や、破れちゃった……」

カグヤ「ごめん、話しかけちゃつて。」

ましろ「ううん、私が下手なだけだから……」

ましろは沈んだ声でそう言った

カグヤ「倉田さんは上手だったよ？」

ましろ「え？」

カグヤ「倉田さん、金魚を桶に入れるときとっても優しかったし、とっても上手だよ。」

カグヤは微笑みながらそう言った

ましろは目を丸くしていた

カグヤ「次に行こつか。」

ましろ「うん……！」

その後も2人は楽しく祭りを回った

“ 司 ”

俺たちは

俺、広町、明石、天空時、桐ヶ谷透子、二葉つくしで回っている

響「ねー、司ー！」

司「なんだ。」

響「りんご飴買ってよー！」

明石はそう俺にねだってきた

俺はため息をついた

司「はあ、別にいいが屋台は見つけてあるのか？」

響「うん！少し先にあるよ！」

七深「!？」

明石はそう言いながら俺の腕に抱き着いてきた

司「おい、くつつくな。」

響「いいじゃん！」

司「……… チツ」

こういう時の明石は俺の言う事なんて聞きやしない

俺は半ばあきらめて屋台に行くことにした

七深「むう…… 柊木君！」

司「なんだ広町—— って、おい。」

広町は俺の名前を呼んだと思うと

明石とは反対の腕にくっついてきた

三久（で、出遅れた！）

司「…… 暑い。」

七深「いいでしょー。」

響「むっ。」

司「…… なんだこれ。」

俺は頭を抱えたい気持ちになった

こいつらが何をしたいのか全く理解できない

何よりも暑い

透子「—— なにあれ？」

つくし「昨日も教室に来てたし、仲が良いんだよ！」

透子「二葉、こっち見て言ってみ？」

つくし「……」

それから俺は5人にりんご飴を買った

そしたら、2人も離れた

司（「暑かった。」）

俺はそう思いながら、ベンチに座った

響「いやー！りんご飴なんて久しぶりに食べたよ！」

透子「久しぶりに食べると美味しいですよねー！柊木さん、あざっす！」

つくし「で、でも、また柊木君が払ってるよ？いいの？」

司「構わん。」

つくし「そ、そうなの？ありがとう！」

三久「ご馳走様です。」

七深「ありがとうー。」

こいつらは礼を言わないと死ぬ病なのか？

別にこんなのどうでもいい

俺は若干呆れながら空を見上げた

その時、インカムから音声が届こえた

『会場北側で刃物を持った男が暴れています！今すぐ来てください！』

司「……………チッ。」

俺は軽く舌打ちをついて



ベンチから立ち上がり、歩きだした

三久「柗木君、どこにいくんですか？」

司「……トイレ。」

俺は短くそう答えて

指示された現場に向かった

強盗「——来るなあ！近づくなあ！」

現場に着くと、そんな声が聞こえて来た

俺は人ごみをすり抜けながら、犯人の顔を確認した

強盗の懐には人質と思われる女の子が包丁を突き付けられている

母親「娘を返してっ！」

強盗「だったら、ここにいる全員の財布を差し出すように頼むんだな！お母さんよお  
！」

母親「お願いします！皆さん、あの人に財布を渡してください!!」

人質の母親は周りの人間にそう懇願した

だが、一部の人間は同情して財布を出したが

ほとんどの人間は財布を出す気もない

強盗「早く金を出せえ！こいつを殺すぞ!!」

母親「ま、待って！お願いします!!娘を娘を助けて!!」

司（……茶番だな。）

俺は心の中でそう吐き捨てた

冷静に考えて、ここにいる人間には母親の心なんて関係もない

それにも関わらず、周りに懇願する

その理由は娘を助けるだけだ

司（だが。）

もつと茶番なのは犯人の男だ

見るからに刃物を人間に向けることに動揺してる

見るからに素人だ

しかも仮に人質を殺さずに解放したとしても

この人数に顔を見られてるんだ、すぐに捕まる

強盗「早くしろ！本当に殺すぞ!!」

母親「ああああ！お願い！誰か、誰か!!」

司「——なら、殺せばいいじゃないか。」

強盗、母親「！」

俺はそう言いながら人ごみの前に出た

周りの視線は俺に全て集まってる

司「お前は馬鹿か？本当に殺す人間は一瞬で殺すぜ？」

強盗「な、何だお前は！」

司「俺か？俺は警備員だ。」

俺は軽い口調でそう答えた

犯人は刃物をさらに人質に近づけた

女の子「ひっ！」

母親「ま、待って！あなた、なんて事言うの!?!この人でなし!!」

司「事実だ。それと、お前は人というものを理解してない。」

母親「え……？？」

司「お前の娘はあれの言う通り、金さえ出せば助かっていた。じゃあ、なんで今、ま

だ人質になってる？」

母親「そ、それは……」

司「答えは簡単、お前の娘なんてこの場にいる人間には関係ないからだ。」

母親「！」

母親ははっとした表情になった

そして、周りを見た

周りにはこの騒動を動画で撮ってるやつ

友達同士でヒソヒソ喋ってるやつなど

様々な人間がいる

司「そういう事だ。茶番なんだよ、お前らのしてる事は。」

俺はそう言うのと、犯人の方を見た

そして、軽く息を吐いた

司「さあ、さっさと殺せよ。」

強盗「へ、へえ、いいんだな！本当にいいんだな!？」

司「いいから、さっさとやれ。」

俺は急かすように犯人にそう言った

すると奴は威勢がよさそうに叫んだ

強盗「そ、そうかよ！残念だったな！ここに居るのはクズばっかだったぜ！」

女の子「嫌……」

犯人は包丁を振り上げた

司（今だ。）

その瞬間、俺は一瞬で距離を詰めた

強盗「なっ！」

司「ふっ。」

俺は奴の顎を殴り、気絶させた

犯人は泡を吐きながら倒れてる

司「やれとは言つたが、妨害しないとは言つてない。」

女の子「お、おかさあん!!!」

人質の女の子は母親の方に駆け寄つた

そして、母親と固く抱擁している

母親「よかつた、よかつた………！」

司「ふん。」

俺はその様子を見た後

その場を離れた

司（実につまらん茶番だった。）

俺は歩きながらそう考えていた

あの強盗が人質を殺す瞬間に刃物を振り上げるのは分かつてた

素人がやりがちなミスだからだ

その気になれば、常人でも対処できる

まるで、ままごともでもしてるような気分だった

司「…… チツ。」

響「——司——！」

司「ん？」

歩いてると、後から十条カグヤ、倉田ましろ含めた全員が走ってきた

俺は後ろに振り向いた

司「なんだ、もう合流してたのか。」

響「なんだ、じゃないよ！どこ行ってたの？」

司「トイレだ。」

俺は少し怒ってる明石にそう答えた

すると、天空時が会話に入ってきた

三久「トラブルの解決をしてたんでしょう。ここに来る途中、騒ぎがありましたか

ら。」

司「トラブルなんてなかった。あれは茶番だ。」

七深「でもー、手が腫れてるよー？」

司「——！」

気が付くと、広町が俺の手を握っていた

俺の手は顎を殴って、確かに赤く腫れている

七深「もー、怪我してるじゃんー。」

司「ふん。」

響「司、手、出して！手当てするから。」

司「いや、なんで救急セットなんて持つてるんだ。」

響「いいから！」

俺は明石の勢いに押され

大人しく手を出した

カグヤ「それにしても、流石、司さんですね。話し声を聞いた限り、犯人は刃物を所持してたらしいじゃないですか。」

ましろ「え？は、刃物？」

司「あんなのないのと一緒にだ。」

透子「いやいや！アタシらだったらビビッて動けないですって！」

つくし「そ、そうかも……」

俺はため息をつきながらこいつらの話を聞いた

響「はい！手当て終わり！」

司「別に大したことはないんだがな。」

響「ダメ！司は自分の力ですぐに体壊すんだから！」

明石はそう言いながら、また俺の腕にくっついてきた

司「おい、明石！つて、広町、お前もか！」

七深「柗木君を拘束ー！広町からは逃げられないよー？」

広町はニヤニヤしながらそう言ってきた

明石もニヤニヤしてる

司（こ、こいつら………！）

三久「ま、また出遅れた。じゃあ、わたしは背中から………！」

司「やめろよ天空時。」

三久「ダメです！私も柗木君を拘束します！」

天空時はそう言うのと、俺の背中にくっついてきた

もう、なんだこれは、暑いにもほどがある

透子「うっわ、すごいことになったねー！」

つくし「あれ、歩けるの？」

ましろ「す、すごいね………」

カグヤ「流石、司さんです。」



響「じゃあ、お祭り再開だよー！」

七深「行こっか、皆ー。」

三久「そうですね！」

司「いいから、離れろ、お前ら!!!」

俺の叫びはまるで聞こえてないように扱われ

天空時は服を掴むだけになったが

結局、俺は帰るまで3人に拘束されたままだった

## 予定

今日は月曜日にして、終業式の日だ  
期末テストとやらは受けるだけ受けて

結果などは教師たちに丸投げした

司（――明日から夏季休暇か。）

夏季休暇なんて仕事以外やることはない

社員の休暇についても言い渡してある

俺の仕事もそこまで多くない

司（本当の休暇になりそうだな。）

七深「柊木君ー！」

司「広町か。」

考え事をしながら歩いてると

後ろから広町が歩いてきた

七深「ごきげんよー。」

司「ああ。」

七深「もー、柊木君も言つてよー。」  
司「断る。」

広町は少しむくれながらそう言つてきた  
俺はまったく気にしてないが

七深「ま、いいやー。」

司「切り替えが早いな。」

七深「柊木君は夏休みに予定あるー？」

広町はそんな事を聞いてきた

その目はかなり輝いてる

司「あまりない。例年より暇だな。」

七深「そうなんだー！」

司「？」

俺がそう言つたと広町は笑みを浮かべた  
俺はそれを変に思いながら広町を見た

七深「じゃあ、一緒に遊びに行こうよ！」

司「遊び？」

七深「うん！普通の友達に夏休み一緒に遊ぶんだよ！」

司「へえ、そうなのか。まあ、そこそこ時間も面白いぞ。」

七深「やったー！」

広町は嬉しそうにしてる

俺はそれを見て小さく笑った

七深「じゃあ、私は教室行くねー！また連絡するよー！」

司「ああ、わかった。」

広町はそう言った後、手を振りながら教室に行った

俺はそれを見送り、教室に入った

教室に入ってから早いで

体育館に移動し

本当なら参加する気もなかった終業式に参加

教室に戻って課題の配布

夏休みの注意事項を言う

教師「——それでは皆さん、月ノ森生の自覚をもつて夏季休暇を過ごしてください。」

そしてこの、どこから突っ込めばいいか分からない言葉

俺はツツコミなどを飲み込み、席を立った

廊下に出ると多くの生徒が夏休みの予定について語り合ってた

人の事は言えないが、こいつら暇だな

俺はそう思いながら廊下を歩いていた

龍奈「――行けつて三久！いけるよ！」

三久「ちよつと、聞こえちやいます！龍奈さん！／＼／＼」

司「ん？」

大きな声が聞こえて、声の方を見ると

天空時と獅子王龍奈がいた

司（何やってるんだ？あいつら。）

天空時は2年、獅子王龍奈は3年

わざわざ1年のフロアに来る意味がない

俺は呆れながら2人の方に近づいて行つた

すると、向こうも俺に気付いたようだ

龍奈「よう！」

司「よう、じゃねえよ。何してるんだ。」

龍奈「三久が話したいことがあるらしいんだ！」

司「天空時が？」

俺は天空時の方を見た

天空時は顔を赤くしている

三久「あ、あの、夏休みに私にお時間をいただけませんか……？  
／／／」

三久「だから、その、一緒にお出かけがしたいんです……  
／／／」

天空時は小さな声でそう言った

獅子王龍奈は後ろでニヤニヤしてる

司「俺には先客がいる。」

三久「そ、そうですか……」

俺がそう言うのと天空時は悲しそうな声を出した

俺は不思議に思いながら次の言葉を発した

司「だから、そいつが指定してない日ならいつでもいい。」

三久「え？」

司「今年は例年よりも時間がある。俺に拒否する理由もない。」

俺がそう言うのと、獅子王龍奈が天空時の肩を持った

龍奈「な？いけただろ？」

三久「は、はい！」

司「天空時、行きたい日を連絡しろ。」

三久「え？でも連絡先が……」

龍奈「あ、なぜか手帳とペンを握ってた！これに書けそうだなあ！」

司「……大根か。」

龍奈「まあ、これに連絡先書けよ！な？」

司「まあ、いいだろう。」

俺は手帳とペンを受け取り

自分の連絡先を書いた

そして、それを天空時に渡した

司「ほら、連絡先だ。」

三久「ありがとうございます！」

司「じゃあな。」

俺は2人に背を向けて歩きだした

龍奈「いやあ、ラッキーだったな！約束を取り付けるだけじゃなくて連絡先までゲットできたぜ！」

三久「はい！」

龍奈（てか、あいつ字が綺麗過ぎじゃねえか？）

学校を出た

外は夏本番なだけあって肌がチリチリする

司（暑い。）

俺はそこそこ暑さを感じる

暑いか寒いか、どっちが嫌いかわられると

暑い方が嫌いだ

カグヤ「——司さん。」

司「十条カグヤか。」

学校を出て少し歩くと、後から十条カグヤが来た

司「何か用か。」

カグヤ「司さんを見かけたので。」

司「そうか。」

カグヤ「途中までご一緒しても？」

司「別に構わん。」

そうして、俺は歩くことを再開した



最近、人と歩くことが多くなったと思う

まあ、別にいいんだが

カグヤ「——そう言えば、司さんは夏季休暇の予定は会いますか？」

司「ある、と言うか今日出来た。」

暫く歩くと、十条カグヤがそんな事を聞いてきた

俺は事実をそのまま伝えた

カグヤ「そうなんですか？」

司「ああ、広町と天空時に誘われてな。」

カグヤ「そうなんですか？」

司「ああ。」

カグヤ「じゃあ、僕と似たようなものですね。」

十条カグヤが気になることを言った

似たようなもの、こいつも何かあるのか？

司「お前も何かあるのか？」

カグヤ「はい、倉田さんに誘っていただきまして。」

司「ほう。」

俺は十条カグヤを見た

倉田ましろが、そういう事というのはもうわかってる  
司「ふむ。」

カグヤ「司さん？」

司「お前は倉田ましろをどう思う？」

カグヤ「倉田さんを出すか？そうですね……」

十条カグヤは考えるようなそぶりを見せた

そして、少しして答えた

カグヤ「面白い人でしょうか？」

司「へえ、後は？」

カグヤ「後は、可愛らしいでしょうか？」

司「ふむ。」

まあ、十条カグヤがマイナス感情を持つわけないか

俺は少し考えた

司「……まあ、いいんじゃないか。」

カグヤ「？」

司「こつちの話だ。」

カグヤ「あ、僕はここまでですね。」

司「そうか。」

カグヤ「はい。それでは。」

そう言つて十条カグヤは歩いて行つた  
俺も自分の家の方に向かつた

マンションに帰つてきた

建物内は涼しくていい

俺は一息ついた

響「——司——！」

司「明石？」

マンションに入ると、明石がいた

今日はそんな予定はなかつたはずだが

響「やーつと帰つて来たね！」

司「何か用か？」

響「用と言えば用だよ！」

明石はそう言いながら近づいて来た

明石が用とは珍しい

何かの仕事か

響「夏休み、一緒にどっか行こうよ！」

司「は？」

響「いいでしょ、時間あるし！」

明石はそう言つて、携帯を見せて来た

響「夏休み最後の日、空いてるでしょ？」

司「別に出かけるのは良いが、広町と天空時にも誘われてる。それ次第だ！」

響「！」

明石の肩が跳ねた

そして、悔しそうな顔をした

響（先越されたかー。）

司「どうした。」

響「ううん！なんでもない！じゃあ、2人の日程が決まったら連絡してね！」

司「ああ、分かった。」

響「じゃあねー！」

そう言つて明石はマンションから出て行つた

俺はそれを見た後、軽く頭を掻いた

司「……結局、忙しくなるんだな。」

俺はそれが自分自身の宿命なんだろうと思いつながらエレベーターに入って行った

## 美術展

朝、俺は駅前のベンチに座っていた

何故、座っているかというと、待ち合わせだ

夏季休暇に入つてすぐの土曜日

駅前には腐るほどの時間を持て余してゐる有象無象が腐るほどいる

司（……暑い。）

俺はそんな事を思いながら

待ち合わせてる人物を待っていた

そして、10分後、そいつは来た

三久「——お待たせしました。」

司「…… やつと来たか。後3分以内来なかつたら帰つてた。」

今日の待ち合わせてたのは天空時だ

俺は遅れてきた天空時に不機嫌そうにそう言った

三久「今来た、くらい言つてくれてもいいじゃないですか。」

司「こんな所で嘘をついて何になる。」

三久「……ですよね。」

天空時は肩を落とした

俺はベンチから立ち上がった

司「それで、今日はどこに行くんだ。」

俺は天空時そう尋ねた

すると、天空時は気を取りなおした様子で話を始めた

三久「今日は美術展に行こうと思っています。」

司「美術展だと？」

三久「はい。近くの施設で期間現でしているんです。」

司「へえ。」

美術展か

まあ、室内だったら涼しいし

下手に動き回るより全然いい

三久「あの、興味がありませんでしたか……？」

司「ない事はない。そこにあるもの次第だ。」

百聞は一見に如かず

口で絵の良さなんて伝わるわけではない

俺は見てからすべてを判断する

司「行くぞ。外は暑すぎる。」

三久「は、はい！」

そうして、俺達は美術展をしている施設に向かった

施設に来ると

俺たちは美術展の受付を済ませた

そして、作品が展示されている場所に行った

そこには期間限定にしてはかなり多い作品が飾られてる

司「へえ。」

期待してたかと言われると

全く期待してなかった

だが、結構いい作品もある

三久（意外と楽しそう、なのでしょうか？）

司「……これ、書けるな。」

三久「いや、とんでもない事をサラッと一言わないでください。」

司「なんだ？」



三久「いえ、なんでもありません。」

天空時はそう言つて、作品に視線を向けた

俺は不思議に思つたが、また作品を見た

司（先人と呼ばれる奴らの絵は面白いな。何を考えてこれを書いたかさっぱりわからん。）

こいつらはまさか、ある一つの分野なら俺の理解を超えられる天才だったんじゃないか？

だったら空気を読めと言いたい

現代に生まれてこい

俺はそんな事を思いながら絵を見てた

三久「——あの、そろそろ移動しませんか？」

司「？」

三久「もう、7分もここで留まっていますよ？」

司「そうか。」

三久「行きましよう。まだ、作品はありますよ。」

天空時がそう言うので

俺達は別の場所に移動した

俺たちは次に像が置いてあるエリアに来た

ここにも中々、奇抜な作品があつた

司「——おお。」

俺が目をつけたのはショーケースに入つてる

魚の頭を模して造られた像だ

青色に輝いていて、無駄にクオリティが高い

かなり年季が入つてる

司「この作者は何を意図してこれを作つたんだ？」

三久「さ、さあ？」

司「普通の人間ならこんなものを作ろうとも思わないだろ。」

十中八九、こいつはまともな奴じゃない

多分、相当な変わり者だ

そして、間違いなく天才だ

三久（柘木君の目の付け所が独特過ぎます……きつと、天才にしか見えてない世界

があるのでしよう。）

司「この作者に一回くらい会つてみたいな。」

三久「もう何年も前に亡くなってる方みたいですが。」  
司「そうか。」

なんで、俺が天才認定する奴はみんな死んでるんだ  
もうちよつと気合入れて生きろ

司「さてと、次行くか。」

三久「え？もういいんですか？」

司「ああ、こいつの迷宮はもういい。」

三久「？（迷宮？）」

司「行くぞ。」

三久「あ、ま、待ってください。」

俺たちは移動した

それから、俺達は色々な作品を見た

それで、分かったことがある

俺は大部昔の絵が受けて

近代の絵はあまり受けない

司「——ん？」

三久「どうしまして……って、あれは？」

一か所、異様に人が集まっている場所があった  
見えずらいが、何かの絵が飾られてるらしい

司「なんだあれ？」

三久「分かりません。何かすごい作品があるのでしょうか？ ちらほら、見たことある  
方もいますし。」

司「へえ……。」

俺は人ごみの方に歩いて行つた

天空時は俺の後ろをついてきた

司「——これは。」

人ごみをかき分け

俺は作品の前に来た

三久「すぐく、綺麗。」

どこかの海中の風景を地上にいるように見て描いたような絵

流石に俺もゾツとした

これを書いたのは魚人かなんかなのか？

それくらいにリアルだ

お俺は作者の名前を見た

司「！」

三久「こ、これは……！」

絵の下にある作者の名前が書かれたカード

そこに書かれてる名前は魚人のものでも

すでに死んでるものでもなかった

俺も天空時も知ってる

『広町七深』という名前だった

三久「ひ、広町さん？」

司「な、なんだと？」

流石に驚きを隠せない

これをあの広町が？

俺は腕に付けてるあるものを見た

司「納得した。」

あの時、軽いノリで買ったこれは想像よりもすごい物だったらしい

青い宝石使われてるブレスレット

このクオオリティ、この絵を見れば納得いった

司（八潮が言っただのはこういう事か。）

三久「かなり混んでますね。移動しましょう。」

司「ああ、そうだな。」

俺と天空時はその場から移動した

移動した後、俺達は時間を見て

近くのレストランに入った

そして、注文を済ませ、料理を待っていた

三久「——それにしても、驚きましたね。」

司「ああ。」

そこで俺たちはさっきの事を振り返っていた

天空時はまさかと言った表情だ

三久「私も広町さんの噂は聞いたことがありました、でも、まさかあそこまでとは……。」

司「そうだな。」

三久「柘木君は知らなかったのですか？」

司「あいつが芸術の分野で優秀だったことは知っていた。」

俺は水に口をつけた

冷たい水は頭を冷やしてくれる

司「天空時、これを見ろ。」

三久「ブレスレット？」

俺は腕に付けてたブレスレットを外して

天空時に見せた

三久「凄く高価そうですね。これをどこで？」

司「広町から買った。」

三久「え？」

天空時は目を丸くした

まあ、そりやそうか

三久「彼女は一体、何者なんですか？」

司「元天才だ。間違いない。」

三久「元？」

司「今のあいつは普通の女だ。本人もそれを望んでる。」

三久「望んでる？」

司「ああ。」

店員「——お待たせいたしました。」

俺たちが話してる途中

店員が料理を持ってきて

テーブルにそれを置いた

俺たちは食事を始めた

三久「どういう事なんですか？」

司「そのままの意味だ。」

俺はパスタを口に運ぶ前にそう言った

天空時は首を傾げた

三久「なぜ、あれほどの才能がありながらそれを放棄するような真似を？」

司「……」

天空時のその言葉にフォークが止まった

俺には多分、それが分かってる

三久「柊木君？」

司「才能は嫉妬と過度な期待を生む。」

三久「！」

司「あいつはそれが嫌で、普通を目指したんじゃないのか。」



俺はそう言つて、パスタを口に運んだ  
多分、これが正解だと思う

誰しも、俺みたいに周りを気にしないわけじゃない

嫉妬や期待に耐えられないことだってあるだろう

司「……まあ、期待がうつとおしいのは分かるがな。」

三久「え？」

司「なんでもねえよ。はい、ごちそうさま。」

三久「早いです。」

俺は食後のコーヒーを手を取った

コーヒーは年中、必ずホットだ

しばらくして、天空時も食事を終えた

三久「お会計に行きましょうか。」

天空時はそう言つて財布を出そうとした

俺はそれを止めた

司「いらん。」

俺はそう言つて、レジに歩いて行つた

そして、俺はカードを出した

司「これで。」

店員「か、かしこまりました。」

店員はある程度の店だけあって

少し顔が引きつってたが、素早く会計を済ませた

店員「あ、ありがとうございます。」

司「ああ。」

三久「はい。」

俺たちはそうして、その店を出た

店を出て、俺達は待ち合わせをしてた駅前に戻ってきた

三久「——今日はこんなものにしておきましようか。」

司「そうか。」

三久「あまり長く外にいてもですし。今日行きたかった場所もいけましたし。」

そうやって天空時は止まってる車の方に歩いて行つた

そして、途中、俺の方を向いて手を振ってきた

三久「ごきげんよう、柊木君。」

司「ああ、じゃあな。」

ニコツと天空時は笑うと

体の向きを戻し、今度は真っ直ぐ車の方に行つた

そして、乗り込んですぐに車は出発した

司「さて、俺も帰るか。」

そう呟いて

俺もその場を後にした

## 遊園地デート 前編

透子「——と、いう訳で会議を始めます！」

司「何のだ？」

俺は広町と呼ばれ、とあるカフェに来た

そこには、バンドの4人がいる

透子「そりゃあ、倉田と十条をくつつけるんですよ！」

ましろ「と、透子ちゃん、声おつきい……／＼／＼」

司「ああ、そういう事か。」

納得した

女子高校生はこういうのが好きだと

広町が言ってた

つくし「それで、柗木君に聞きたいことがあるの。」

司「まあ、個人情報に関わること以外なら答えてやる。」

七深「おー、流石ー！」

司「時間があるし、面白そうだ。」

俺はそう言つて、コーヒーを口に含んだ

普通に美味しい

透子「まず、聞きたいんですけど。十条つて好きなやつとかいるんですか？」

司「俺はそんな話は聞いたことないな。」

透子「だつて、倉田！」

ましろ「い、一回一回、呼ばないで……／＼／＼」

むしろ、十条カグヤが女と話すことが珍しい

確か、この間も縁談を断つたと聞いた

つくし「じゃあ、好みの女の子とかは？」

司「ふむ……それは聞いたことがないな。」

七深「そうなの？」

司「ああ。だから、今聞いてみよう。」

俺はそう言つて、携帯を出し

十条カグヤにメールを送つた

ましろ「だ、大丈夫なのかな。そんな急に……？」

司「問題ない。あいつは俺の連絡には例外なく……」

携帯が鳴つた、メールだ

相手は勿論、十条カグヤだ

司「遅くても1分以内に返すからな。」

七深「は、早い……！」

司「さて、なんて書いてるか。」

ましろ「……」

透子「倉田、覗かないで見せてもらえよ。」

ましろ「！」

メールを確認した

俺は書いてる内容を読み上げた

司「支えがいのある子、らしい。」

透子「お、おー。」

司「まあ、お人よしだからな。」

つくし「でも、これなら。」

七深「シロちゃんはあるんじゃないかなー？」

あり、どころか完璧だと思う

倉田ましろってむしろこの要素が大部分じゃないか？

俺はそう思う

司「まあ、一旦、あいつの好みは良いだろう。本来の議題に行くぞ。」

透子「そうつすね！じゃあ、一週間後に控えた十条とのデートについて！」

桐ヶ谷透子はそう言うとうと

机の真ん中に携帯を出した

透子「あたし的には行く場所の候補はこんな感じ！」

つくし「水族館に遊園地、プール……」

司「桐ヶ谷透子の趣味全開だな。」

七深「でも、デートと言えばって感じするよねー。」

透子「でしょ！」

司「だが、問題があるぞ。」

俺がそう言うとうと、4人がこつちを向いた

俺は倉田ましろを指さした

司「倉田ましろがどうかは知らんが、十条カグヤは結構喋らないぞ。」

ましろ「え？そんなんですか？」

司「は？」

ましろ「十条君、お祭りの時もかなり話してくれましたけど……」

司「……まじか。」

「あいつの富裕層の間では無口で有名だぞ  
俺と明石にはかなり喋るが

それ以外の人物に……

司「もうこれ、会議はいらないな。」

透子「え？」

司「一週間後、行先はここだ。」

俺は桐ヶ谷透子の携帯を指さした

七深「遊園地？」

司「ああ。」

つくし「根拠は？」

司「あいつが喋るならこの選択肢の中のどれでもいい。だが、この時期のプールは混みすぎるから話すどころの問題じゃない。水族館は少し落ち着き過ぎだ。」

ましろ「な、なるほど。」

司「遊園地なら、倉田ましろが倉田ましろでいたら勝ち確定だ。」

ましろ「？」

俺がそう言うのと倉田ましろは首を傾げた

俺は桐ヶ谷透子の方を向いた



司「桐ヶ谷透子、当日の倉田ましろの服装はこんな感じにしてくれ。」  
俺は携帯画面を見せた

透子「おお！いいっすね！」

司「じゃあ、後は頼んだぞ。」

透子「はい！行くよ、倉田！」

ましろ「ち、ちよ、透子ちゃ——」

そうして、倉田ましろは桐ヶ谷透子に引つ張られていった

そして、俺達は3人、店内に残された

七深「すごい勢いだっただねー。」

つくし「ま、まあ、透子ちゃんだし。」

司「俺達も出るか。」

そう言つて俺は椅子から立ち上がり

さつさと会計を済ませて、店を出た

七深「——ねー、柗木君ー。」

司「なんだ？」

歩いてる途中、広町が話しかけて来た

俺は広町の方を向いた

七深「私も遊園地行きたいなー。」

司「？」

七深「私達も行こうよー。」

司「まあ、別にいいぞ。」

俺はそう言つて、携帯を出した

そして、予定を確認した

司「あつ。」

七深「どーしたの？」

司「俺の予定、空くの一週間後だ。」

七深「？」

司「倉田ましろたちと被るな。」

七深「わ、わー。」

そんな事もあつたが

俺と広町も一週間後、遊園地に行くことになった

つくし（わ、私の事忘れてる!?!自然にデートの約束したし!）

カフェでの会議？から一週間が経った

司「——何をしてるんだ？」

七深「ふふふ、シロちゃん達の尾行だよ。」

俺と広町は2人の尾行をしてる、らしい

広町、これをしたかっただけだな？

司「尾行したいなら、そう言えればいい物を。」

七深「いやー、一回やってみたかったんだよ。」

広町は笑顔でそう言った

そう言えば、広町に読めと言われた漫画でこんなのがあったな

七深「あ、来たよ！」

司「ん？」

俺は広町の視線の方に目を向けた

噴水の前の待ち合わせ場所に倉田ましろが来た

七深「おー、可愛いねー！」

司「あれなら外れなしだろ。」

倉田ましろの服装は

白のワンピース型の服だ

機能性も考えてと桐ヶ谷透子に頼んでおいた

いい仕事をした

七深「むう……」

司「なぜ、俺の太ももをつねる。」

七深「シロちゃんを見る目がいやらしかったから。」

司「なんでだ。」

全く身に覚えのない罪なんだが

まあ、別にいいだろう

司「十条カグヤも来たみたいだな。」

七深「そーだねー。」

司「どうした？」

広町が何故か怒ってる

あれか、女という時に他の女を見ていると失礼ってやつか

俺がそんな事を考えてるうちに2人が駅に入っていた

司「さて、俺達も行くか。」

七深「うんー。じゃあ、駅行こっかー。」

司「駅？」

七深「え？」

俺はあるものを指さした

そこにはバイクが止まってる

司「俺は人混みが嫌いだ。あれで行くぞ。」

七深「どうやって？」

司「2人乗りだ。」

七深「!?!?!」

司「さあ、行くぞー。」

俺はそう言って

バイクの方に歩いて行った

広町も小走りで後ろをついてきた

司「——ほら、これ付けろ。」

俺はそう言って、広町にヘルメットを渡した

女が付けるものだから、一応、新しく買った

七深「あ、ありがとー／＼／＼」

司「なんだ？」

七深「なんでもないよー／＼／＼」

司「そうか。じゃあ、乗れ。」

俺はヘルメットをつけて

バイクにまたがりながらそう言った

広町は後ろに乗った

司「しつかり掴まっておけよ。」

七深「どこに？」

司「そうだな、俺の肩でも腰でもいい。取り合えず、飛ばされないようにしろ。」

七深「わ、分かったよ／＼／」

司「！」

広町はそう言うのと

俺の身体に腕を回して

抱き着く形になった

司「まあ、いいだろう……行くか。」

七深「しゅっぱーっ！」

俺はバイクを走らせた

“カグヤとましろ”

カグヤ「——混んでるね。」

ましろ「う、うん……：：：／／／／」

電車の中は破裂するほど満員だ

人が人を押し、熱気がこもっている

カグヤ「大丈夫？ 苦しくない？」

ましろ「だ、大丈夫……：：：／／／／」

カグヤ「そう、よかった。」

カグヤはましろに笑いかけた

今の2人は密着状態

ましろの心臓は電車と同じ

破裂寸前だ

ましろ（じ、十条君がこんな近くに／／／良い匂い、かっこいい……：：：／／／／）

カグヤ（倉田さんの顔が赤い。やっぱり、電車の中も暑いし、少し辛いのかな。）

ましろ「っ！」

カグヤ「？」

突然、ましろの肩が跳ねた

カグヤはましろの顔を見た

ましろ（さ、触られてる……？）

ましろは変な感触を感じていた

その手は確実に悪意を持って触りに来てる

中年（ぐふふ！気弱そうな女子高生！ラッキー！）

カグヤ「……あなたか。」

中年「!?」

カグヤは中年の腕を掴んだ

そして、睨みつけた

中年「な、何をするんだ？」

カグヤ「倉田さんから手を離してもらえないかな？」

中年「は？な、何を言ってるんだ？これは偶々……」

カグヤ「この電車は混んできると言っても強制的に体が密着するほどじゃない、手がそんな位置に行くわけがないですよね？」

中年「っ！」

カグヤ「あなたが倉田さんから手を離して、次の駅で降りるならこの手は放します。

離さない場合は……」

中年「は、放さない場合は……？」



カグヤ「この腕の保証はしません。」

中年「!？」

カグヤはいつもよりはるかに低いトーンでそう言った

その目は完全な殺意に満ちている

カグヤ「僕は家庭の事情で武道を少し嗜んでます。腕一本、折ることくらいは可能ですよ。」

中年「ぐ、ぐう……!」

『○○○○○○。お出口は右側です。』

カグヤ「さあ、どうしますか？」

中年「クソ！」

中年はそう言つて電車から降りて行つた

電車の中の人もかなり減つた

カグヤ「大丈夫？倉田さん？」

ましろ「う、うん。ごめんなさい……。」

カグヤ「僕こそごめんね。もつと気をつけておくべきだったよ。」

カグヤはましろに頭を下げた

ましろは胸の前で手を振りながら首を振つた

カグヤ「あ、席が空いたね。座ろう。」

ましろ「う、うん。」

ましろはカグヤに言われるまま

席に座った

カグヤ「もう大丈夫だよ。もう、誰も倉田さんに手を出させないから。」

ましろ「!／／／」

カグヤ「楽しく遊ぼうね。」

ましろ「う、うん!／／／」

そうして、2人は電車が目的地に着くのをゆっくり話しながら待った

## 遊園地デート 後編

しばらくバイクを走らせ

俺と広町はバイクを置き遊園地に入った

司「——中々、遠かったな。」

七深「そうだねー。」

司「ほら、これももつとけ。」

俺はそう言つて広町にあるものを渡した

この遊園地内で使える乗り物のパス、らしい

司「そこで買った。」

七深「おー、流石ー！」

広町はそう言いながら

それを腕に巻きつけた

俺はそれを確認した後、遊園地の入り口の方を見た

司「あいつらも来たみたいだ。」

七深「きや！／／／」

俺は広町を引っ張って

物陰に移動した

司「十条カグヤは耳がいい。ある程度距離がないと気付かれるぞ。」

七深「そ、そうなんだ………  
／／／／」

司「ん？どうした？」

広町の様子を確認すると、顔が赤かった

だが、別に体調不良という様子ではない

七深「な、なんでもないよー………  
／／／／」

司「そうか。」

俺はそう言っ、十条カグヤと倉田ましろの方を見た

2人はパンフレットを見ながら話してる

これからの行動についてだろうな

司（さて、どう動くか。性格的に想像は出来るが。）

七深「むう………」

司「………？」

2人の方を見てると

広町が腕を掴んできた

司「なんだ？」

七深「2人のこと見すぎだよ。」

司「尾行と言つてただろう。」

七深「それでも、もうちよつと私の事を見てくれても……………」

広町はし小さな声でそう言つた

服を摘まんてる手は少し力を増している

司「……………」

七深（お、怒つてるの、かな……………？）

司「ははは！」

七深「え？」

司「可愛いやつだ！いいだろう、尾行はやめだ！遊ぶぞ！」

俺はそう言つて広町の手を掴んだ

七深「!?／／／」

司「俺も遊園地なんて生まれて初めてだからな。楽しみだ。」

七深「う、うん……………／／／」

司「さあ、行くぞ。」

俺と広町は遊園地の中を進んで行つた

“ ましろ ”

カグヤ「——それじゃあ、まずはどこに行こつか。」

ましろ「うーん。」

私達。パンフレットを見ながら

行く場所を考えていた

カグヤ「まずは、この、コーヒーカップ辺りに行く?」

ましろ「うん!」

十条君はコーヒーカップに興味が沸いたのかな?

私達はコーヒーカップに移動した

コーヒーカップに來ると

あまり並ぶこともなく乗ることが出来た

ましろ「——わわっ!」

カグヤ「大丈夫?」

ましろ「う、うん。大丈夫。」

カグヤ（結構、急に動いた。）

コーヒーカップはアナウンスの後  
急にスタートした

それで、私は驚いて声をあげちゃった

こんな事でも心配してくれる十条君は凄く優しい

カグヤ「そう言えば、倉田さん？」

ましろ「どうしたの？」

カグヤ「コーヒーカップってどう楽しむものなのかな？」

ましろ「え？」

十条君の言葉に私はかなり驚いた

まさか、コーヒーカップお知らないのかな？

ましろ「えっと、この真ん中にあるハンドルを回すんだよ？」

カグヤ「なるほど。」

そう言つて、十条君はハンドルを持った

カグヤ「よいしょ……… っとー！」

ましろ「っ!？」

十条君は掛け声を出すと

ハンドルを力いっぱい回した

カグヤ「——おお……！」

ましろ「きや！」

カツプがすごい勢いで回ってる

やばい、酔っちゃいそう

ましろ「じ、十条、君……！」

カグヤ「あつ。」

十条君はハンドルの勢いを弱めた

これ、腕力で何とかなつたっけ？

カグヤ「だ、大丈夫？」

ましろ「う、うん。」

カグヤ「ご、ごめん。」

十条君は申し訳なさそうにしてる

その様子を見ると「全くだよ。」なんて言えない

ましろ「ふっ、ふふふ！」

カグヤ「倉田さん？」

少し落ち込んでる十条君が可愛くって

つい、笑ってしまった



十条君は困った顔をしてる

ましろ「ごめん、つい………！」

カグヤ「??」

いつもは落ち着いてて、声のトーンを変えないのに今は慌てて私に謝ってる

その様子がすごく可愛らしい

ましろ「十条君って、意外と可愛らしいね。」

カグヤ「え?」

ましろ「だって、いつもはそんな顔しないもん。」

カグヤ「顔?」

十条君は不思議そうに自分の顔を触ってる

その様子も可愛い

カグヤ「僕って表情変わったんだ。」

ましろ「いや、変わるよ?」

カグヤ「………?」

十条君は不思議そうな顔をしてる

どうしたんだろう?

カグヤ「ねえ、倉田さ——」

係員「降りられますかー？」

カグヤ、ましろ「!？」

お、驚いた

いつの間にか、カップが止まってたみたい

それで、係員さんが声をかけに来てた

私達は指示に従ってカップから降りた

“ 司 ”

七深「——ねー、あれ乗ろー。」

司「あれ？」

俺は広町が指を指してる方を見た

あれは……

司「ジェットコースターと言う奴か。」

七深「うん！ここのジェットコースター結構有名で楽しいんだー！」

司「ほう、面白そうだ。」

前にも言ったが

俺の心情は百聞は一見に如かずだ

司「よし、行くぞ。」

七深「広町、りよーかいー！」

俺と広町はジェットコースターに向かった

有名と言われてただけあつて

やっぱりここは並んだ

暫く並ぶと、俺達の番が来た

係員「バーを下げます！」

司「バー？つて、なんだ？」

七深「これだよー。」

広町が指を指すと

赤色のバーと思われるものが下ろされた

そして、動きが制限された

司「なんだこれ？」

七深「安全のためのものだよー。」

司「安全？別にいらないだろう。」

七深「まあ、柗木君はいらないかもしれないけど、普通の人はいるんだよ。」  
司「そんなもんなのか。」

そんな会話をしてるうちにジェットコースターがスタートした  
最初はかなりゆっくりらしい

司「ふむ。」

七深「あがつてるねー。」

コースターは段々と上に上がって行ってる

さつき、レールの形を見た限り

ここから急降下するんだろうな

七深「——来た！」

司「うん？」

広町がそう言うとは

コースターが急降下を始めた

七深「わー！」

司「ふむ。」

まあまあ、速度は出てる

だが、安全バーが必要なほどでもない

司「おっ。」

そう思つてたら、一回転した

別にこれがどうのこうの無いが

まあ、普通ならバーがいるか

司（別にこのくらいの高さから降りても大丈夫だな。）

それからコースターは激しい動きを続けた

だが、別に人間の範囲内のものは怖いと感じなかつた

そんなこんなで、ジェットコースターが終わった

ジェットコースターが終わつた後

俺たちはベンチに座つた

司「——ふむ。」

七深「い、いまいちだったかなー？ 私は結構楽しかつたけど。」

司「まあ、人間向けだったからな。」

俺は考えながらそう言つた

多分、速度が足りないんだろう

司「まあ、あれ自体が楽しいのとは違うが。」

七深「ん？」

司「楽しそうにしてるお前を見るのは結構、楽しかった。」

七深「え!?! / / /」

司「これも楽しみ方だろ。」

俺はそう言っつてベンチから立ち上がった

司「飲み物買っつてくる。」

七深「う、うん / / /」

俺はその場を離れ、自動販売機に行つた

“七深”

終木君は私の神経を逆なでしてくる

シレつとああいう事言っつて

私の心臓を早くする

七深（ほんと、ああいうところだよね…………… / / /）

顔が熱い

ただの言葉でここまで影響されてる

胸が苦しいのに、それが心地いい

七深「…………… やっぱり、好きだなあ…………… / / /」

司「あ？何がだ？」

七深「!?／／／」

“司”

自販機から戻つて来ると広町が何か呟いてた  
何のことを言つてたんだ？

七深「ひ、柊木君ー、戻つてきてたんだ／／／」

司「自販機に行つただけだしな。ほら。」

七深「わわっ！」

俺は広町に買つてきた飲み物を投げた

広町は慌ててそれをキャッチした

七深「か、買つてきてくれたんだ。」

司「自分の分だけ買つてもな。」

俺は広町の隣に座つた

そして、買つてきた飲み物を開けて

それを飲んだ

司「で、さつきは何のことを言つてたんだ？」

七深「え？」

司「好きがどうか。」

七深「!／／／」

俺がそう聞くと

広町の顔が真っ赤になった

七深「え、えつと、それは……／／／」

司「なんだ？」

七深「心の確認って言うか、なんて言うか……／／／」

広町が何を言ってるのかよく分からない

それにしても……

司「好き、か。」

七深「柊木君？」

司「好きって、何なんだろうな。」

七深「え？」

俺は理解出来てない

好き、つまり好意というものが

どんな書物を呼んでも

ネットで調べても



その内容はあまりに抽象的だ

司「ほんと、分かんねえな。」

俺はそう言ってから、ベンチから立ち上がった

司「もう昼だ。飯行くぞ。」

七深「う、うん……」

俺たちはどこか飯を食べる場所を探しに行った

七深（今の柅木君、少し悲しそうだった様な……）

“ ましろ ”

お昼を過ぎた

私と十条君はフードコートでお昼ご飯を食べた

カグヤ「——次はどこに行こつか？」

ましろ「うーん。」

私はパンフレットを見た

やっぱり、多くて迷うなあ

カグヤ「あれ、なんだろう？」

ましろ「え？——あれって……」

十条君が指を指してたのは  
遊園地の雰囲気からかけ離れた  
おばけ屋敷だった……

ましろ「ひっ……！」

私達はお化け屋敷に入った

十条君が興味津々だったから

カグヤ「これがあの、お化け屋敷……！」

ましろ「……」

こんな雰囲気の中

十条君は目を輝かせてる

それを見ると、何か湧き上がるものが……

カグヤ「……？」

ましろ「十条君……？」

カグヤ「倉田さん、こつちによって。」

ましろ「？」

十条君があまりにも真面目な顔で言うので

私はそれに従って、十条君の横に行った  
カグヤ「じゃあ、行こつか。」

ましろ「う、うん——って、きやあ！」

少し進むと、私がいち歩先から

仕掛けが作動した

カグヤ「やっぱり。」

ましろ「な、なんで？」

カグヤ「えっと、音が聞こえたから？」

ましろ「ええ!?!」

十条君は当たり前みたいにそう言った

え？私には全く聞こえなかったんだけど？

カグヤ「次は3メートルくらい先にあるよ。」

私達は少し進んだ

すると、仕掛けが作動した

ちようど、3メートルで

ましろ「す、すごい……」

カグヤ「こんなにうるさいとバレちゃうんじゃないかな？」

ましろ「い、いや、普通は聞こえないんだよ……？」  
カグヤ「え？ そうなんだ？」

忘れてた、十条君は月ノ森生だった

いや、それだけで説明つかないけど

ましろ（あれ？ おばけ屋敷ってこんなのだっけ？）

カグヤ（おばけ屋敷ってこういうものなのかな？）

私はそんな疑問を覚えながら

仕掛けの有無をナビゲートされながら

おばけ屋敷の中を歩いた

あれから、しばらく遊園地で遊んだ

そして、気付くころには周りには暗くなっていた

カグヤ「——もう、こんな時間？」

ましろ「早いね。」

時計を見ると、もう7時

結構遊んだなあ……

ましろ（つて、あれ？ 何か忘れてるような？）

そう言えば、透子ちゃんに何か……  
ましろ「あつ。」

カグヤ「？」

ここつて確か、夜にパレードやるんだっけ  
それで、透子ちゃんが……

透子『そこでアタックつしよ！』

つて、言つてた

アタック、アタック……？

ましろ「！／／」

カグヤ「倉田さん？」

アタックつて、告白するの？

無理だよ、無理無理

カグヤ「あ、何か来たよ。」

ましろ「あ、パレードだ。」

カグヤ「そんなのあつたんだ。」

ましろ「うん。見よつか。」

私はそう言つて、パレードに視線を移した

すごく綺麗で、楽しい音楽が鳴ってて

キラキラ輝いてる

カグヤ「綺麗だね。」

ましろ「うん。」

十条君も綺麗だつて思ってるみたい

私は十条君の方を見た

ましろ「……」

真面目な顔でパレードを見つめてる

それはパレードに負けないくらい綺麗で

青くて大きな瞳には吸い込まれちゃいそう

カグヤ「どうしたの？倉田さん？」

ましろ「え、あ、なんでもないよ！」

カグヤ「そう？」

十条君はそう言うど

私に笑いかけて来た

カグヤ「今日はありがとう、倉田さん。」

ましろ「え？」

突然、十条君がそう言ってきた

カグヤ「今日は凄く楽しかったよ。」

ましろ「私こそ、楽しかった！」

カグヤ「そう？」

ましろ「うん！」

私がそう答えると

十条君は優しく微笑んだ

カグヤ「おっと、パレードは過ぎて行ったみたいだ。帰ろうか。」

ましろ「うん、そうだね。」

カグヤ「時間も遅いし、送って行くよ。」

私達はそうして、遊園地から出て

私は最後まで、十条君と一緒にいる幸せを噛み締めた

“ 司 ”

司（——あいつらは帰ったみたいだな。）

俺は観覧車から地上の様子を見ていた

それで、2人が出て行くのが見えた

七深「何見てるのー?」

司「なんでもない。」

俺はそう言っ

正面の広町に目を向けた

七深「綺麗だねー。」

司「そうだな。」

地上はライトアップされている

遊園地の景色はすごく綺麗だ

司「……ふむ。」

俺は携帯を出してカメラを起動した

そして、それを広町に向けた

司「広町ー。」

七深「どうしたのー?」

広町が顔を向けた瞬間

俺は写真を撮った

司「へえ。」

七深「ち、ちよつとー、急に撮らないでよー!」



司「いいだろ、別に。」

俺はそう言つて

携帯をしまった

広町は不服そうな顔をしてる

七深「むー。」

司「なんだその顔。」

七深「広町、不服でーす。」

司「あつそ。」

俺はそう言つて、顔をそむけた

広町はずっと機嫌が悪そうに見える

司「はあ、いつまでそうしてるんだ？」

七深「だつてー。」

司「そう言うなつて。なんなら、一つくらい頼み聞いてやるよ。」

七深「え？」

司「？」

広町が目を丸くしてる

俺は首をかしげながら広町を見た

司「ほら、何か言ってみろ。」

俺は笑いながら広町にそう言った

広町はうつ向いて、何かを考えている

観覧車も頂上に差し掛かってきた

広町「……じゃあ、キスしてって言ったら、してくれる……？／＼／」

司「っ!？」

なんだ、これ

今、心臓が跳ねた？

司「……ふーん。」

七深「!／／／」

俺は広町の顔を持ち上げ

顔を近づけた

なぜか、心臓が早く動く

意味が分からん

司「やってやるよ。」

七深「んっ……／／／」

俺は広町と唇を重ねた

あの事故の時とは違う

長く、深い

司「——これでいいだろ。」

七深「う、うん………／＼／＼」

俺はそう言つて

観覧車の外を見た

今、ちようどてっぺんだ

司「………」

七深「ねえ、柊木君。」

司「なんだ。」

俺は広町の方を向いた

七深「ありがとう、柊木君！／＼／＼」

司「っ!!」

広町は笑顔で、顔を真っ赤にしながら

俺に礼を言つてきた

その瞬間、俺の心臓は激しく動いた

司「………別に、ただのキスだろ。」

七深「嬉しかったよ？／＼／＼」

司「……………っ。」

治まらない

なんだよこれ

今まで、こんなことはなかった

司「……………これ終ったら、帰るぞ。」

七深「うん！また2人乗りだね！」

司「……………ああ。」

俺はそうだけ答えて

残りの観覧車の時間を景色を見て過ごした

その間、俺の心臓が治まることはなかった

## 風邪

遊園地に行った日から

特に予定が入ることもなく夏季休暇を過ごした

結局、あの現象も謎のままだ

司「——あつ。」

リビングで考え事をしてると

ある事を思い出した

今日は夏季休暇最終日

司「明石に連絡するの忘れてた。」

俺はそう思つて、携帯を手を取つた

そして、明石に電話をかけた

司「明石か？前に行つてた出かけると言う話だが。」

響『ごめん、行けそうにない……』

司「？」

電話に出た明石の声がおかしい

少し、枯れてる？

響『いやー、風邪ひいちゃって……』

司「明石が？珍しいな。」

響『あたしの免疫力は司と違って人並みだからねー。』

明石は少し笑いながらそう言った

だが、かなり苦しんだ声をしてる

司「そういう事なら仕方ない。またの機会だな。」

響『うんー。ばいばい……』

明石はそう言って電話を切った

俺はテーブルに携帯を置いた

司（予定が無くなったな。）

俺は天井を見上げた

司（「——」そう言えば、あいつ、一人暮らしだったよな。）

10分ほどボーっとした後

俺はそんな事を思った

明石の声を聞く限り、かなりの重症だ

司「……チッ。」

俺はソファから立ちあがり

服を着替えて、財布を持った

司「暇だし、様子を見に行つてやるか。暇だし。」

俺はそう呟いてから

マンションを出た

“響”

今回の風はかなりの重症っぽい

のど痛いし、頭痛いし、熱出てるし

何よりも倦怠感が強すぎ

響（「はあ、なんでこんな日に限つて……」）

ほんとなら、今日は司と出かける予定だったのに

ついてないなあ……

響（司じゃないけど、あたしは神様に嫌われてるのかな？）

あたしはそんな事を思いながら天井を眺めた

そう言えば、飲み物も食べ物も切れてる

流石にヤバいかも……

響「…… 買いに行かないとだよね。」

あたしはそう言つて体を起こした

響「うっ……」

やっぱきつい

頭フラフラする

響「コンビニ行こ……」

ピンポン

あたしが部屋を出ようとすると

インターフォンが鳴った

響「え？ 誰？」

特に今日、誰かが来る予定はなかったし

なんだろう？

あたしは重い足を引きずつて玄関に行つて

扉を開けた

響「——はい、どちら様ですか……？」

司「俺だ。」

響「え？ 司？」



扉を開けていたのは  
いつもと変わらない仏頂面の司だった

“司”

明石は一瞬、困惑の表情を浮かべた後

俺を家に招きいれた

響「それで、何しに来たの？」

司「暇だから様子を見に来た。」

俺はそう言っ

持ってきた袋を机に置いた

司「どうせ、お前の事だから飲み物も食料も不足してるだろ。」

響「良く分かってるねー。」

明石は頭を掻きながらそう言った

俺は呆れてため息をついた

司「たくっ……」

響「あはは……」

俺は時計を確認した

もう昼時だ

司「さっさと横になれ。飯を用意する。」

響「ええ!？」

司「なんだ。」

響「つ、司が優しくて怖い。」

司「気絶させるぞ。」

響「あーごめんごめん！」

こいつ、本当は元気なんじゃないか？

そうは思ったが

見ればこいつの調子が悪いのは分かる

呼吸音と心音が少しおかしい

響「じゃあ、お言葉に甘えて、横になろうかなー。」

明石はそう言って、敷いてる布団に入った

俺はそれを確認すると、持ってきた食材をキッチンに広げた

司「さて、さっさと作るか。」

はつきり言おう

俺は料理も出来る

和食からタイ料理まで（？）

ありとあらゆるジャンルの料理を作れる

病人食といったら…… おかゆか

俺はさっさとおかゆを作った

司「——ほら、出来たぞ。」

響「わーい！」

司「感謝して食え。」

俺はそう言つて明石の前におかゆを置いた

そして、椅子に座った

響「美味しい！」

司「当然だ。」

明石は嬉しそうにおかゆを頬張つてる

俺はその様子を眺めていた

響「司つてやつぱ、偉そうなこと以外は完璧だよねー。」

司「一言余計な奴だな。」

俺は明石を睨みつけながら言つた

明石はそれに気づくと、慌てた表情で謝つてきた

響「ごめんって！」

司「ふん、今日は特別に許してやる。」

響「あははー、ありがとー。」

そう言うのと、明石は食事を再開した

そして、数分後、明石は食事を終えた

響「——ごちそうさま！」

司「じゃあ、薬飲んでさっさと寝ろ。」

俺は明石に薬を飲ませ

食器を下げた

明石は布団をかぶった

司（それにしても、明石が体調不良とは珍しいな。）

俺はそんな事を考えながら

洗い物を進めた

そして、洗い物が終わった

司「——じゃあ、俺は帰る。」

響「え？」

司「なんだ。」

俺が帰ろうとすると

明石が何かを言ってきた

俺は明石の方に顔を向けた

響「帰つちやうの……？」

司「そりや帰るだろ。」

響「本当に……？」

司「何が言いたいんだ。」

響「一緒にいて……？」

明石はそんな事を言ってきた

こいつは何を言ってるんだ

年だけなら俺より上だろう

響「一人じゃ心細いんだよ……」

司「……はあ。」

俺はため息をついて

明石の横に座った

司「寝るまではいてやる。」

響「うん、ありがと。」

明石はそう礼を言うとうつくりと目を閉じた

響「ねえ、司。」

司「なんだ。」

響「なんで、今日は来てくれたの？」

明石は俺にそう問いかけて来た

俺は静かに答えた

司「暇でかつ、本来お前に使う時間だったからだ。」

響「そっか……」

司「いいから寝ろ。バカが。」

響「うん。」

それから、20分ほどすると

明石が眠りについた

司（「やっと寝たか。」）

俺はため息をつきながら明石を見た

良い顔で寝やがって

俺は心の中で悪態をつきながら

明石の寝顔を見た

司「……………」

寝てるやつを見ると

こつちまで眠くなってくる

司「……………寝るか。」

俺はそう呟いて

床に寝ころび、目を閉じた

“響”

響「……………んっ……………」

目が覚めた

どのくらい寝てたんだろ

窓から入ってくる日の色的に夕方かな

響「司はもう帰ったかな……………って!?!」

司「……………zzz」

横を見ると

なんとも綺麗な寝顔があった

あたしは口をふさいだ

響（司、いてくれたんだ……）

あたしは体を起こして

眠っている司を見た

寝顔だけ見れば、いつものあの偉そうな感じは全くしない

響「快眠ですかー？王様ー？」

司「ん……」

あたしが頬に触れると

司は嫌そうな顔をした

響（それにしても、感慨深いねー。）

最初の頃なんて

こんな姿を見せる事なんて全くなかったのに

今となつてはだよ

響（でも、あたしを見つけられたのは司なんだよね。）

初めて司に出会ったのは海外の闇市

そこで、あたしはいつも通り商売をした

その時、どこかの大商會が言いがかりをつけてきて



あたしはどこかに連れて行かれそうになった

流石にあの時は死ぬのを覚悟した

でも、その当時から活躍してた司がそこを通りかかって

何十人もいる外国人を倒して、あたしを助けてくれた

響（あの時から変わらず、司は偉そうだよね。）

司から初めてかけられた言葉は

挨拶でも、心配の言葉でもなくて

「お前は使えそうだな」だった

あの時は驚いたな

だって、あの時の司、中一だよ？

そんなあたしより小さかった子がそんな事言うんだよ？

やばいでしょ？

響（ほんと、大きくなったねえ。）

司と出会って、3年

殺し屋に巻き込まれたり、色々あったけど

赤の他人から、信頼できる人物になって

そして、今は友達になって

次は……

いっつも偉そうで、口が悪くて

でも、なんだかんだ

今日みたいに暇だからとか建前言つて

一人のあたしを心配してくれるくらい優しい

響（そんな司を、好きになった……）

あたしは司の頭を撫でた

司はくすぐったそうに身をよじった

響（だから、いつか、この気持ちを伝えて。ずっと、こんな風に司と一緒にいたい。）

そんな事を祈りながら

あたしは司が目覚めるのをしばらく待っていた

## 最悪の依頼1

夏季休暇が終わり

今日から2学期だ

つまらん始業式を聞き流し

教室に戻ると、色々な連絡を受けた

担任「――もうすぐ、月ノ森音楽祭です。」

司「……」

そう言えば、あいつらどうなったんだ？

広町にもしばらく会ってないし

よくわからん

そんな事を考えてるうちに

ホームルームが終わった

司「……？」

教室を見回すと

倉田ましろと二葉つくしの表情が暗かった

すると、2人が教室から出て行った

司「俺も帰るか。」

俺はそう呟き、教室を出た

校門に行くまでの中庭で

見知った姿があつた

ましろ「……………これ、知ってる？」

司「！」

俺は物陰に隠れた

これは、まさか……………

ましろ「私達の事、話してる人見つけたんだ……………」

倉田ましろはそう言つて携帯を出した

やっぱり、来たか

つくし「『月ノ森のバンドなんか残念だったね……………？』

七深「『あの学校の子にしては普通な感じ……………』」

司「……………」

だいたい、想像通りだ

だが、これじゃない  
もつと、爆弾がある

七深「――『月ノ森のボーカル、思ったより平凡だった。』『あの学校ならもつと歌える子いそうな気がするけど。』」

司「……これだ。」

間違いない、こうなることは分かっていた

倉田ましろは月ノ森の水準ではない

だから、印象で語られればこうなる

司「……ふん。」

練習を見る限り

倉田ましろは練習に精力的だった

だからこそ、批判を受けた時の反動がでかい

そして、性格を見る限り

倉田ましろは間違いなく、人に当たる

つくし「――出来なかつたら人のせいなの!?!そんな事言うなら、もうやらなくていい

!!」

二葉つくしのそんな声が聞こえた

ここが、分岐点

間違はなく、あいつらの未来に関わる

司（今は俺が手を出すべきじゃないな。）

カグヤ「あれ、司さん？」

司「十条カグヤか。」

カグヤ「何をしているんですか？」

司「何もしてない。」

俺はそう言って

校門の方に体を向けた

司「あ、そうだ。」

カグヤ「？」

司「倉田ましろが思い悩んでる。」

カグヤ「え？」

司「後はお前次第だ。」

俺はそう言って、歩いて行き

学校を出た

“カグヤ”

昨日の司さんの言葉は何だったのだろうか

倉田さんが思い悩んでる？

僕は何も分からないままボーっと廊下を歩いていた

カグヤ「——あれは、倉田さんと八潮さん？」

廊下を歩いてると

窓際で2人が話してるのが見えた

僕は曲がり角に隠れて、聞き耳を立てた

ましろ「——私は練習にはいかない。もうバンドはやめるから……」

カグヤ（え……？）

それから、倉田さんは八潮さんに事情を話した

僕はそれを聞いて、変な気持ちで沸いてきた

倉田さんがバンドをしてる事は知ってた

でも彼女はそれを話そうとはしなかった

ましろ「あれからバンドやめるの止めに来てくれなかったし……」

カグヤ「——！」

それから倉田さんと八潮さんはしばらく話し込んだ

八潮さんの言葉は的を射たおおよそ正しい物だった  
倉田さんは周りの人にすがってて

八潮さんが言ったように甘えてる、のかもしれない  
カグヤ（でも……）

倉田さんの気持ちだつて分かる

人には従ふことのできる人が必要だから

そんな事を考えてると、八潮さんが離れた

倉田さんは動いてない

カグヤ（……行かないと。）

僕は拳を握り締め

倉田さんの方に歩いて行つた

カグヤ「――倉田さん。」

ましろ「じ、十条君……」

倉田さんは暗い顔をしてる

僕は倉田さんの隣に立つた

カグヤ「八潮さんとの話、聞いたよ。」

ましろ「！」



そう言うと、倉田さんは僕から顔をそむけた

ましてろ（十条君に……き、嫌われる……でも、どうせ私だから、嫌われるよ  
ね……）

カグヤ「僕の話聞いてほしいんだ、倉田さん！」

ましてろ「え？」

僕は倉田さん呼び止めた

倉田さんは足を止めてくれた

カグヤ「僕は倉田さんの気持ちが分かるよ。」

ましてろ「十条君……？」

カグヤ「僕も倉田さんみたいにピアノをやめようと思ったことがあるから。」

ましてろ「!？」

倉田さんに話し始めた

カグヤ「僕は小さい時からピアノをしてて、何回もコンクールに出て、賞を取ってた。  
両親も良く褒めてくれた。」

ましてろ（やっぱり、私とは違う……）

カグヤ「最初はピアノは僕の特別だって、そう思ってた。でも、学年が上がるたびに  
変わって行ったんだ。」

ましろ「変わって、行った……？」

カグヤ「両親が段々とピアノを褒めてくれなくなつたんだ。」

ましろ「褒めてくれない……？」

カグヤ「うん。それで、僕は必死にピアノを弾いた。もつと賞を取れば、結果を残せばまた褒めてくれるって、そう思って、必死に練習した。」

嫌な記憶が蘇ってくる

あの、光なんてない、時が……

カグヤ「でも、そんな事はなくて、ピアノが嫌いになつたこともあつたよ。」

ましろ（十条君が……）

カグヤ「そんな時、お父様が開くパーティーでピアノを披露しろって言われたんだ。」

ましろ「パーティーで？」

カグヤ「その時、僕はこれが最後だつて思つてた。人前なら、お父様もお母様も言葉では褒めてくれる。ここで終われば、特別で終れるから、ここでやめようって、そう思つてた。」

僕は少し顔をあげた

カグヤ「そこで、司さんに出会つたんだ。」

ましろ「柊木君に……？」

カグヤ「僕の演奏を聞いた司さんは、こう言ったんだ『つまらん演奏をして楽しいか？』って。」

ましろ「!」

カグヤ「その時、僕は何かに射抜かれたような感覚があったんだ。そして、この言葉で全て分かった。」

ましろ「言葉……?」

カグヤ「『自分の才能の使い方は自分で決める。』ってね。」

ましろ「柊木君、らしいね……」

カグヤ「僕もそう思うよ。でも、あの言葉は確実に僕を救ってくれた。僕のピアノを生き返らせてくれた。」

僕は語気を強めた

あの時の気持ちに蘇ってくる

カグヤ「僕が今、僕自身のためにピアノを弾けてるのは間違いなく、司さんのお陰なんだ。」

僕は分かった

僕は司さんに導かれた、だから

次は僕が倉田さんに同じようにしないとイケないって

倉田さんのバンドってものを死なせちゃいけないんだって

ましろ「そんな事が、あったんだ。」

カグヤ「うん。だからね。」

ましろ「え？」

カグヤ「僕にはやめるのを止めてくれた人がいたから、僕は君を止める。」

ましろ「!!」

カグヤ「倉田さんが何のためにバンドをするか、それを、見つけてほしいんだ。」

カグヤ「今は見えないかもしれない。だから、自分の感情に従って、転んだとしても、また立ち上がれるって、僕はそう思ってる。」

僕はそれだけ言って

倉田さんに背中を向けた

カグヤ「またね、倉田さん。」

僕は自分の教室に向けて

歩いて行った

“ 司 ”

司「……ふっ。」

十条カグヤめ

人の言葉を使いやがって

司「成長したじやねえか。」

自分の才能を使えなかった、小僧が

次は人を導く人間になる、か

世の中分かんねえな

司「よくやったな、十条。」

俺はそう眩きながら、廊下を歩いた

もう、倉田ましろは大丈夫だ

後はどう流れても、あいつはバンドに戻るだろう

司「——ん？」

廊下を歩いてる途中、電話がかかってきた

明石からだ

司「どうした？」

響『司、依頼だよ。』

司「明石の方にか？珍しいな。」

響『今夜、直接話がしたいって。』

司「直接？」

パンドラに直接会って依頼？

そんな事、3年ぶりだぞ

司「…… まあ、いい。今夜だな。」

響『うん。』

司「今夜、依頼主の所に行く。落ち合うぞ。」

響『りよーかい！』

明石はそう言って電話を切った

俺は携帯をポケットにしまった

司（……なんだ、この胸騒ぎは。）

俺はそれの正体を考えながら

放課後までの時間を過ごした

夜、俺と明石は豪華な屋敷に来た

規模だけなら、弦巻の屋敷と変わらない

響「——広いねー。」

司「ふん。」

俺たちは屋敷の中の主の部屋を指している  
案内の使用人も出さないと、無礼な奴だ  
そんな事を思つてるうちに、主の部屋に着いた  
俺たちはその部屋に入った

司「――？」

中に入つてもだれもいない  
どういう事だ？

司「明石、避ける。」

響「っ！」

俺は明石を後ろに引つ張つた

明石がいた場所には、矢が突き刺さつていた

響「こ、これって！」

司「ご挨拶だな。よく教育されてる事だ。」

俺は肩を回した

次仕掛けてきたら、俺も仕掛ける

？『――ははは！お見事！』

響「!」

司「…… 志木小鞠。」

志木『お久しぶりでございます、柊木殿!』

こいつは面倒だ

良い噂を聞かない

それにさっきの行動

そして、俺が仕掛けようとした時に引く判断力

司「直接姿を見せないとは、不敬だな。」

志木『申し訳ございません! 柊木殿の前に出るのは恐れ多く。』

志木小鞠は気持ち悪い笑みを浮かべながらそう言った

目の前にいるこいつは映像だ

確実に俺を警戒してる

司「それにお前、今、明石を狙ったな?」

志木『申し訳ない! 少しあなた様を試したのです!』

司「試した?」

志木『今回の依頼を達成できるか、分からないでございませうからねえ!』

鬱陶しい



こいつ、目の前にいたら絶対に殴ってた

司「もういい。今回の依頼内容は何だ。」

志木『そうでございますね。では、こちらの画面をご覧ください!』

志木小鞠がそう言うとは

でかいスクリーンが出て来た

そして、そこに映像が映し出された

司「——は?」

響「こ、この子って……!」

スクリーンに映ってるのは

よく知ってる……

志木『あなた様にはこの、広町七深を殺してほしいのです!』

司「……」

志木小鞠はそう言った

志木『出来ますよね? 生きる伝説、パンドラ様なら?』

司「…… チツ。」

響(そんな依頼、司が受けるわけない!)

司「…… いいだろう。」

響「え？」

俺は静かにそう答えた

横の明石は驚きの声を上げた

司「決行日はいつだ。」

志木『そうですね…… 月ノ森音楽祭の夜、なんていかがでしょうか？』

司「…… いいだろう。」

志木『その他の依頼の事項はその書類にあります！どうぞ！』

司「…… ふん。」

俺は目の前の書類を手を取った

そして、扉の方に歩いた

志木『それでは、くれぐれも死なないように気を付けてくださいませ！』

部屋を出る直前

そんな言葉が聞こえた

響「—— ちよ、司！」

司「……」

響「なんで、何も言わないの!？」

俺たちは屋敷の中から出た

響「——司!!」

司「そろそろいいだろう。」

屋敷から少し離れた位置で

俺は明石の声に反応した

明石は少し怒っているようだ

響「なんであんな依頼受けたの!?!あの子、司の友達でしょ!?!」

司「気付いてなかったのか?」

響「何に!?!」

司「あの部屋、そこら中に機関銃があつたんだぜ。」

響「え?」

明石が驚きの声を上げた

あの部屋にあつた機関銃は30

あらゆる方向から隙間なく俺たちを狙えるようにしてた

司「多分、俺達が依頼を断つたらあれを使う気だつたんだろうな。」

響「な、なんでそんな!」

司「それは依頼の事項が書かれてる紙と奴の最後の言葉でわかる。」

俺は明石に紙を渡した

明石はそれに目を通した

響「――普通に時刻とか、依頼料とかしか……え？これ？」

司「失敗条件、柘木司の死亡だ。だが、そこには仕事名、パンドラと書かれてない。」

響「じゃあ、あの人の狙いって……」

司「俺を殺すことだろうな。」

響「っ！」

俺がそう言うとは

明石の肩が跳ねた

司「奴が今日、俺の前に現れなかった理由は俺の前に出たくなかったで間違えない。だって、俺がこれを察することを分かっていたから。もう一つは、もしもの時、俺達を簡単に殺せるようにだ。」

響「じ、じゃあ、どうするの？依頼をすっぽかす？」

司「それは出来ない。」

響「え？」

司「今回のターゲットは広町だ。つまり、友人、俺の弱みになる人間だ。」

響「そ、そうだけ。」

司「奴は十中八九、俺たち以外の殺し屋を呼んでる。」  
響「！」

司「それなら、俺を殺すのにも使えるし、仮に俺たちが依頼をすつぽかしても、奴らが広町を殺す。」

だつたら、殺し屋を全員殺せばいい、とは思う

だが、それにはリスクがある

殺し屋の数が不明なうえに

俺の浅い部分の思考を読み取れる奴の存在

絶対に何らかの対策をしている

少なくとも一人は俺たちを確認できるぎりぎりの位置で

俺の死亡を確認する奴がいるだろう

響「ど、どうするの？それじゃあ、どうしようもないじゃん！」

司「大丈夫だ、策はある。とっておきのな。」

響「え!?!それって、どういうの!?!」

司「そうだなあ、まずは……」

俺は考える仕草を見せた

明石は首をかしげている

響「司？」

司「俺と出かけようぜ、明石。」

響「——え？」

俺がそう言った後

明石の呆気にとられた声が

夜の街に木霊した

## デート

“響”

司が何を考えてるか分からない

何か策があるって言ってたけど

急に出掛けるぞなんて……

響（ほんとに、何考えてるの……？）

司の建てる作戦はいつでも聞けば納得する

だから、こんな事、初めて

それだけに、すごく胸騒ぎがする

響「何する気なの、司……」

あたしは小さくそう呟いた

そして、明日の司と出かけるのに備えた

待ち合わせの10分前

あたしは司と待ち合わせしてる場所に来た

言われた通り、お昼ご飯は済ませた

司「――来たか、明石。」

そこに行くともう、司がいた

いつも通り、外に出る用の服装

時間をきっちり守るのも、司らしい

響「お待たせー！待った？」

司「俺も今来た。10分前に来るとは殊勝な事だ。」

司は優しく笑いながらそう言った

その様子にあたしはかなり驚いた

こんな顔の司、滅多に見ないから

司「早く着いたことだし、行くぞ。」

響「うん！って、どこ行くの？」

司「遊びだ。」

響「遊び？」

司「明石は確か、ゲームが好きだったな。」

響「うん、そうだけど？」

司「じゃあ、行くか。」



司はそう言うど

どこかに向けて歩きだした

あたしは司の後ろをついて行つた

司「——着いた。」

響「え？」

司がそう言つて、足を止めた場所は

ゲームセンターだった

あたしは目を丸くした

司「確か、しばらく通つてた事もあつただらう。」

響「そ、そうだね？」

司「だろ？じゃあ、遊ぼうぜ。」

そう言つて、司はゲームセンターの中に入つて行つた

司「——それで、何か面白いゲームはあるのか？」

響「うーん。」

あたしは少し考えた

結構あるんだよねー

響「なんか色々してみようよ！」

司「まあ、そうだな。」

響「じゃあまず、あれ！」

あたしはパンチングマシーンを指さした

司は不思議そうな顔をしてる

司「なんだあれ？」

響「パンチングマシーンだよ！」

司「殴るのか？」

響「そうだよ！」

司は小さく笑って

それに近づいて行った

ずっと気になってたんだよね

司「さて、やるか！」

司はそう言って

マシンにお金を入れた

司「行くぞ……！」

そう言つて、司は

機体の叩く部分を思いつきり殴つた

司「……？」

響「え!？」

スコアが出る画面には

エラーつて書かれてる

嘘、そんな事ある？

響「強すぎて、測れなかった？」

司「ふむ。」

司は何かを考えてる

まあ、機械だな、とか思つてるんだらうなー

響「まあ、司だつたらこれくらいやつても不思議じゃないよねー。」

司「そうかもしれないな。」

響「次の行こ！」

あたしはそう言つて

司の手を取つた

司「?」

司は不思議そうな顔をしてたけど

大人しくあたしについてきた

響「次はこれどう?」

司「これはなんだ?」

響「これはね、太鼓の○人だよ!」

司「なんだそれ?」

響「まあ、やってみればわかるよ!」

司「ふむ。」

司は台にお金を入れた

あたしは最低限の叩く場所とかを説明した

響「これ行ってみなよ!」

あたしはそう言って

『幽○ノ乱』を押しした

もちろん、最高難易度で♪

響(あたしでもこれをクリアするのはかかったからねー!)

司「……ほう。」

司は少しニヤツとすると

すごい速さでバチを動かした

響「え？」

司「まあまあだな。」

響（いやいやいや！）

それから、司は順調にコンボを重ねた

そして……

響「——ぜ、全良……」

司「意外と簡単で楽しいな。もっと難しいのはないのか？」

響「ま、参りました……」

司「？」

駄目だ

司に常識なんて通用しない

それが2次元であろうが何であろうが

司から見れば全部、手のひらの上みたい

響「次行こうか！」

司「ん？ああ。」

それから、あたし達は色々なゲームで遊んだ  
その度に司がいかにすごいのが分かった

遊びにおいてもなんでもできる

天才としか言いようがない

でも、何だかんだ楽しかった

司「——もうこんな時間だな。」

響「え？つて、もう7時!？」

どんなに遊んでたんだろ？

少なくとも5時間は遊んだんだよね？

楽しすぎて時間の感覚無くなってた

司「明石。」

響「うん？」

司「ついて来てくれ。」

響「え？うん？」

司がそう言うので

あたしは司の後ろについて行った

歩いてきたのは

浜辺だった

遠くの施設だけあつて海も近かったみたい

響「——こんな所でどうしたの？」

司「まあ、座ろうぜ。」

響「？」

あたしは近くのベンチに座った

妙に司の声が落ち着いてる

司「今日は楽しかったか？」

響「うん、すごく楽しかった！」

司「ふっ、そうか。」

司が優しく笑ってる

今日は司が機嫌を悪くすることなかったような……：

そう思うと、急に怖くなってきた

司「こんな風に明石と遊んだのは初めてだな。」

響「それは、司が誘ってもかなかつたからでしょー？」

司「そうだったか？」

響「そうだよー！ほんとに来なかつたんだから！」

司「ははは、悪かった。」

司は笑いながら謝ってきた

あたしは少しむくれてる

司「………これが初めてなんだな。」

響「？」

また、司の声が低くなった

あたしは司の方を向いた

響「どうしたの？」

司「明石に頼みがある。」

響「頼み？」

なんなんだろ

次の依頼の話かな？

響「それはなにかな？」

司「明石、俺の後継者になってくれ。」

響「え？」

司ははつきりとした声でそう言った



それから、あたしの頭は真っ白になった

## 守りたいもの

月ノ森音楽祭まで残り1週間

もう、時間はほとんど残されてない

とりあえず、色んな場所をあたることにした

司「——おい、十条。」

カグヤ「あれ？司さん？って、呼び方変わってないですか？」

司「ああ、この間の倉田ましろとの話を聞いてな。」

俺はそう言つて、十条の胸を叩いた

すると、十条は驚いた顔をした

司「成長したじゃねえか、小僧が。」

カグヤ「ありがとうございます？」

司「それで、聞きたいことがあるんだが。」

カグヤ「はい？」

司「倉田ましろとはどうだ？」

カグヤ「倉田さんですか？特にあれから何もありませんが？」

十条カグヤは首をかしげながらそう言った  
そんな様子を見て、俺はため息をついた

司「たくつ、お前と言う奴は。」

カグヤ「？」

司「お前は倉田ましろをどう思ってるんだ？」

カグヤ「え？」

そう言つて、十条は考え始めた

こいつ、鈍感すぎるだろ

カグヤ「ほっとけなくて、可愛らしくて、一緒にいると楽しいです。遊園地に行った  
時も楽しかったですし。」

司「へえ。」

カグヤ「司さん？」

司「倉田ましろはお前の特別だと。」

カグヤ「！」

こいつは基本的に人に感想をあまり言わない  
だが、ここまで並べたとすると、あるぞ

司「お前、倉田ましろの事が好きなんじゃねえの？」

カグヤ「！」

司「どうだ？」

カグヤ「……」

俺がそう言うのと、十条は下を向いた

そして、数秒後に顔を挙げた

カグヤ「よく、分かりません。」

司「！」

カグヤ「僕は人を好きになったことがありません。だから、これがどういったものか。」

十条は自分の胸を押さえた

司「お前のそれが答えだ。」

カグヤ「え？」

司「人の感情なんて、理解しようとしたって出来ん。だから、自分がどう思うかだ。」

カグヤ「……はい。」

司「ほら、これやるよ。」

俺は話し終わった後

ある書類を渡した

カグヤ「これは？」

司「音楽室の使用許可書だ。月ノ森音楽祭の日の。」

カグヤ「どうして、これを僕に？」

司「知らん。後はお前の思った通り動け。」

カグヤ「ええ？司さん？」

司「じゃあな。」

俺はそう言つて、教室を出て行つた

司「——いた。」

俺は廊下でその人物を見つけると

歩いて近づいた

司「おい、八潮瑠唯。」

瑠唯「柊木君、何か用かしら？」

八潮瑠唯はいつも通り、機嫌の悪そうな顔をしてる

俺は構わず話した

司「バンドに入つたみたいだな。」

瑠唯「ええ、そうね。」

司「ふーん。」

瑠唯「何か言いたそうね。」

司「いや、我ながらいい予言をしたと思つてな。」

俺は笑いながらそう言つた

八潮瑠唯は俺の方を睨みつけて来た

司「まあ、それはいいんだ。」

瑠唯「さつさと本題に入りなさい。これから練習なの。」

司「そうだった。」

俺は頭を切り替えた

司「お前に頼みがある。」

瑠唯「頼み？あなたが私に？」

司「ああ。」

瑠唯「……天変地異の前触れかしら？」

こいつの俺へのイメージはとりあえず分かつた

だが、俺は気にせず話を進めた

司「月ノ森音楽祭の日、広町の家に行けるか？」

瑠唯 「広町さんの家に？なぜ？」

司 「…… 広町を殺せと、依頼が来た。」

瑠唯 「！」

司 「だが、狙いは広町じゃない。俺だ。」

瑠唯 「どういう事？」

司 「説明する。」

俺は八潮瑠唯に全ての事情を話した

そして、なぜ、俺が八潮瑠唯に声をかけたか

こいつを引き金にするためだ

司 「お前にこれを渡しておく。」

瑠唯 「これは……！」

司 「広町を守るために、頼んだ。」

俺はそれだけ言って

八潮瑠唯の前から立ち去った

瑠唯（彼は、まさか……）

---

こいつらが最後だ

俺は奴らを屋上に呼び出した

龍奈「――何の用だ、柊木ー！」

三久「り、龍奈さん、もう少し静かに。」

司「よう、2人とも。」

俺は2人の前まで歩いた

司「お前たちに話がある。」

龍奈「話い？」

三久「なんですか？」

2人は首をかしげながら

俺の方を見る

司「まずは、天空時。」

三久「はい？」

司「多分、お前とは月ノ森音楽祭後は会えなくなる。」

三久「え……？。」

天空時は目を丸くした

獅子王龍奈も表情を引き締めた

龍奈「どういう、事だ。」





司「俺になかったものが、生まれた気がしたんだ。」

三久「なかった、もの……？」

司「漠然と、闇の向こうに。」

龍奈「……」

司「命を懸けて、守りたいものが。」

三久「つ!!」

俺ははつきりとそう言った

何なんだろうな、この感覚は

胸の内が暖かくて、良く分かんねえ

龍奈「……そうか。」

司「俺の代わりはもういる。出来れば、力を貸してやってくれ。」

俺はそう言って

屋上から立ち去ろうとした

三久「待って、ください……」

司「……すまない、天空時。」

俺はそれだけ言って

屋上から出た

“三久”

すまない、彼は確かにそう言った

この言葉の意味を理解するのなんて容易です

でも、でも……

三久「私が欲しいのは、そんな言葉じゃないんです……」

龍奈「三久……」

もう、彼の心が私に來ることなんて無い

彼は常に余裕をもって人を助けようとする

でも、今回は命を懸ける、そう言いました

つまり、私は命を懸ける対象にはなれない

そんな事、分かっているんです……

三久「だからせめて、嘘でも、死なないって言うってくださいよ……！！」

龍奈「……」

三久「私に少しくらい、止めさせてくださいよ!!」

龍奈（……無理だ、三久。）

私は涙を流しながら叫んだ

聞こえてるかもしれない

聞こえていてほしい

龍奈（覚悟を決めた男は、例外なく、止めれないんだよ。）

三久「柊木君……!!!」

私はそれから

声にならないような声で叫び続けました

そして、いつの間にか意識を失っていました

## 最悪の依頼 2

司「——いよいよ、か。」

月ノ森音楽祭当日

校内はその話題で持ちきりだ

司「……」

俺は今、屋上で座ってる

教室は落ち着かない

カグヤ「——司さん。」

司「十条か。」

カグヤ「おはようございます。」

こいつはいつも通り

無表情で声のトーンが変わらない

だが、なんで、ここに来た

司「何か用か。」

カグヤ「……はい。」

十条はそう言うとは

俺の目をまっすぐ見てこう言った

カグヤ「司さん、あなたは……………」

司「……………聞こえたか。」

カグヤ「はい……………」

十条が答えた後

俺は立ち上がった

司「それでなんだ。止めにでも来たか。」

カグヤ「いえ。」

司「！」

カグヤ「僕にあなたは止められない。だから、後悔しないようにここにきました。」

十条は俺に真っ直ぐ体を向けた

そして、こう言った

カグヤ「僕を導いてくれて、ありがとうございます。」

司「！」

カグヤ「あなたは永遠に僕の英雄であり続けるでしょう。」

司「……………そうか。」

俺はそう短く答えた

そして、立ち去ろうとした

カグヤ「だからこそ……」

司「……？」

カグヤ「死なないでください……！」

司「……っ。」

十条はこぶしを握り締めてそう言った

あふれ出したように出た言葉は

確かな重さがある

カグヤ「お願いです、死んでも、死なないでください……！」

司「……めちやくちやだな。」

俺は振り返り

十条の頭に手を置いた

司「十条。」

カグヤ「……はい。」

司「お前は、幸せになれよ。」

カグヤ「っ!!!」

司「じゃあな。」

俺はそう言っ

屋上から立ち去った

“カグヤ”

カグヤ「……司さん。」

僕はさつきまで手が乗ってた頭を触った

今にも消えそうな感触にあの言葉

そして、司さんから出てる音

僕にはわかってしまう

あの人は、死ぬんだと

僕の英雄は愛する人を守るために死ぬんだと

ましろ「——じ、十条君……？」

カグヤ「倉田さん。」

ましろ「な、何してるの……？」

カグヤ「道を、見てたんだよ。」

僕は優しく笑いながら

倉田さんにそう言った



カグヤ「……天に続く、道を。」

ましろ「え……？」

カグヤ「あ、ごめんね。」

僕は目の前に立ってる倉田さんを見た

カグヤ「ねえ、倉田さん。」

ましろ「どうしたの？」

カグヤ「今夜、僕のピアノを聞いてくれないかな。」

ましろ「え？十条君のピアノ？聞きたい！」

カグヤ「じゃあ、月ノ森音楽祭の後、迎えに行くよ。」

ましろ「うん！」

カグヤ「じゃあ、僕は行くところがあるから。またね。」

僕はそう言つて、屋上から出て行つた

音楽祭が始まつて

俺はステージを見てる

もうすぐ、あいつらの出番だ

透子『初めまして、M o r f o n i c a ですよ！』

あいつらが出て来た

桐ヶ谷透子がM cをしている

今までと面構えも違う

ましろ『聴いてください、金色へのプレリユード………！』

司「！」

初めて聞く曲だ

俺が見た初ライブから今日のライブ

こいつらの世界は確実に進んだ

演奏から、それが顕著に表れてる

音は口ほどにもものを言う、ってな

司「——ふっ。」

演奏が終わると、俺は小さく笑った

そして、心の底から拍手を送った

司「いい仲間になったな、広町。」

俺はそう呟いて

その場を後にした

“七深”

月ノ森音楽祭でのライブが終わった  
最高に青春って感じがして

とってもいいライブだったと思う

瑠唯「――広町さん。」

七深「るいるい？どうしたの？」

瑠唯「今日の反省をしたいのだけけど、この後、アトリエに集まれるかしら？」

七深「る、るいるい真面目だね。」

透子「なーに言ってるの！」

瑠唯「！」

るいるいと話していると

とーこちゃんが話に入ってきた

透子「八潮、ライブの成功祝いしたんでしょ！」

瑠唯「？」

七深「あー、そういう事かー。」

つくし「いいね！やろうよ！」

七深「そういう事ならー！」

ましろ「あ、あの！」

今度はしろちゃんが大きな声を出した  
どうしたんだろう？

ましろ「私、行くの遅れる……」

透子「え？どつかいくの？」

ましろ「えっと、十条君に……」

透子「え!?十条!?そういう事なら行ってきなつて!すぐに!」

ましろ「よ、夜だから……」

つくし「よ、夜!?!」

透子「うわ、ま、まじかー!」

瑠唯（話がずれてしまったけれど、まあ、いいわ。）

それからしばらく、私達はライブの成功を喜び合った

“司”

夜、俺は広町の家から少し離れたから場所にいる

もうすぐ、行動開始時刻だ

響「——司。」

司「……遠くで待機してると言ったはずだが。」

響「ごめん。でも、話がしたくて。」

明石はそう言つて、俺の目の前まで来た

目が涙で潤んでる

響「司……。」

司「……っ！」

明石が俺に抱き着いてきた

司「……やめろ。」

響「嫌……。」

明石は俺から離れようとしな

逆に力が強まった

響「好きだよ、司……。」

司「っ！」

明石は突然、そう言つた

俺は体から力が抜けた気がした

響「ほんとはもつと、ちゃんとやうつもりだった……。」

司「明石……。」

明石の腕に縛られてるみたいだ  
動く事が出来ない

響「好き、大好き……」

司「っ。」

響「だから、離れないで、離れないでよ……っ！」

明石のその声はひどく悲痛に聞こえた

でも、俺は決心したんだ

司「…… すまない、明石。」

響「っ……」

俺は明石にそう言うのと

今着てる上着を明石に着せた

そして、優しくこう言った

司「俺は、広町が好きになった。」

響「！」

司「だから、もう、引けないんだ。」

俺はそう言って、立ち上がった

司「10年分の立ち回りは書き留めてある。天空時も十条も手を貸してくれるだろ

う。」

響「司……」

司「後は、任せた。」

俺はそう言つて、広町の家に向かった

“音楽室”

夜の月ノ森の音楽室に2つの影があつた

カグヤ「——じゃあ、好きな所に座つて。」

ましろ「うん！」

ましろはカグヤにそう言われると

ピアノに一番近い椅子に座つた

それを見てカグヤはピアノの前に座つた

カグヤ「ねえ、倉田さん。」

ましろ「どうしたの？」

カグヤ「今日、本当なら倉田さんのためにピアノのを弾きたかつたんだ。」

ましろ「え？」

カグヤ「でも、変わったんだ。」

カグヤはこぶしを握り締めた

ましろは戸惑っている

カグヤ「……行くよ。交響曲第5番『運命』」

カグヤはピアノを弾き始めた

“ 司 ”

夜のアトリエ

八潮瑠唯からの連絡によると桐ヶ谷透子と二葉つくしがいる  
だが、電気が消えてるのを見ると、多分、寝てるんだろう

司（――右側にスナイパー6人、左に8人。）

完全に殺しにきてる

だが、まだ俺を狙ってくる気はないみたいだ

司「入るか。」

俺は手はず通り、八潮瑠唯が明けてある窓から

アトリエの中に侵入した

七深「――うわあ！」

司「広町、お前を殺しに来た。」



七深「え……？」

俺がそう言うのと、広町は目を見開いた

七深「な、なんで……？」

司「…… 依頼だ。」

出来る事なら

ここで、俺を嫌いになつてくれ

そして、忘れてくれ

七深「や、やめてよ、ドツキリか何かなんでしょ……？」

司「……」

七深「な、何か言つてよ……」

広町は夢でも見てるような顔をしてる

そりやそうだ、こいつは殺されるようなことなんてしてないからな

司「パンドラはお前を殺すことができる。覚悟してもらう。」

七深「今までの事、全部嘘だったの……？」

司「つ……！」

広町は悲しそうな顔でそう言った

心臓が痛い

嘘なんてなかった

広町と過ごした時間に嘘なんてあるはずないんだ

七深「ね、ねえ、答えてよ！」

司「俺は——」

バン!!!

司「——ぐっ……!!!」

七深「え？」

瑠唯「……」

八潮瑠唯が放った銃弾は

俺の胸を打ち抜いた

響『——司あ!!!』

俺にも、普通の人間と同じ部分があった

それは、血管の強度だ

ライフリング加工された銃なら

皮膚をぎりぎりさいて、血管を壊せるんだ

七深「柊木君!!!」

司（——あー、うるさい……）

広町が駆け寄ってきた

七深「な、なんで！」

瑠唯「……彼の頼みよ。」

七深「たの、み……？」

八潮瑠唯が静かに声を出した

広町は困惑してるみたいだ

瑠唯「広町さんを彼の犠牲にしないために……」

七深「え？ど、どういう事？分かんないよ……」

広町はそう言いながら目に涙を浮かべている

俺の臉もとじ始めた

七深「ま、待って！目を開けてよ！死んじやうよ!!」

司（……広町。）

まだ、意識が残ってる

でも、もう持たないんだろうな

司（さつきまで殺されそうになってた相手に近づきやがって。ほんとに……優し

いやつだな。）

体の感覚がなくなってきた

今、俺はどうなってるんだろう

七深「起きて！起きてよ!!」

瑠唯「……………」

広町の声が遠くに聞こえる

迎えが近いな

司（ありがとう、広町。）

温度なんてもうほとんど感じてないのに

何故か温かい

司（次の俺は普通だから、その時は……………）

意識が闇に落ちていく

もう、終わりだな……………

司（その時こそはまたお前に出会って、必ず、好きだつて伝える。）

七深「柊木君!!!」

さようなら、広町

“カグヤ”

カグヤ「——！」

泣かないって、泣かないって決めた  
なのに、なのに……

ましろ「じ、十条君……？」

カグヤ（なんで、涙が……！）

僕は無心でピアノを弾き続けた

手元なんて見えない

でも、感覚で弾ける

カグヤ（何となくわかった。）

伝わって来たんだ

僕に、全て……

僕はピアノを弾き終えた

カグヤ「…… さようなら、僕の英雄。」

ましろ「十条君……」

僕は月に照らされた音楽室で

涙を流し続けた

“響”

響「司、司あ………!!!」

涙が止まらない

司は今、死んだ

『明石。』

響「!」

私のパソコンから

司の声が聞こえた

あたしはパソコンに飛びついた

司『まだ、やるべきことがある。見て、そして確認しろ!』

響「っ!!」

あたしはパソコンを開いた

そして、画面を凝視した

志木『ははは! 奴は死んだかあ!?!』

そこには、前に行った

主の部屋の映像が映されてる

司が死んでから、12分

志木『もう、配置してる者たちは引き上げて良い! 報酬は大量に用意しよう!』

響「この……!!!」

今すぐ、この男を殺したい

あたしの手で殺したい

響（あと、1分!!!）

司は用意してた

あの男が司が死んでから

15分は出てこない

逆に15分経てば必ず出てくるって

全部わかってたから

響（——来た!!）

『ドオオオオオン!』

私が見てる画面は爆発音と同時に砂嵐になった

これが、司の作戦

あいつらが司の死亡を心臓の停止で判断することを読んで

司の心臓が止まって20分で爆発する、爆弾

響「……」

この爆弾が爆発すること

それは何よりの、司が死んだ証拠  
あたしはその場で崩れ落ち  
大粒の涙を流した

“ 七深 ”

何も分からなくなった

るいるいが柗木君を撃つて

私の腕の中にいる柗木君は冷たくなって

私は声を上げ続けてた

瑠唯「…………… 広町さん。」

七深「…………… ごめん、近づかないで。」

瑠唯「……………」

私の腕の中には冷たい柗木君

私はそれを抱きしめ続けてる

七深「ねえ、起きて、起きてよ、柗木君……………」

そう言っても、柗木君は反応しない

七深「またドッキリなんですよ？だって、寝てるみたいだもん……………」



瑠唯「……」

七深「もう、驚いたから、十分だから、起きてよ!! ねえ、柊木君!!!」

瑠唯「…… 彼は、もう。」

七深「うるさいっ!!!」

瑠唯「っ!」

七深「柊木君はこれから起きるんだよ!! いるいは黙ってて!!!」

私は柊木君を撫でた

触ってれば起きるかもしれない

それで、触るな、って言ってくれるかもしれない

七深「——全然、起きないや——」

瑠唯「っ! 広町さん!」

私の意識はどこか、闇に落ちて行った

帰ってきてよ、柊木君……

## 寒天の下で

“七深”

あの日から、私の日常は変わった

七深「……………」

A組の教室から、机が一つなくなった

廊下側の窓から見えた、あの姿が消えた

まるで、最初からなかったみたいだに誰もそれを認識してない

七深「うっ……………!!」

吐き気がする

あの感触が今でも私の腕には残ってる

段々、冷たくなっていった

私の中で、柊木君が消えていくのを感じた

ましろ「——ひ、広町さん……………!!」

七深「し、しろちゃん……………」

つくし「だ、大丈夫!?! 顔色悪いよ!?!」

気が付けば、目の前に2人がいた  
すぐく心配そうな顔してる

七深「だ、大丈夫だよ」

つくし「ほ、ほんとに？」

七深「う、うん、ごめんね、こんな所で」

私は2人に軽く手を振りながら

その場を後にした

“ 瑠唯 ”

今もあの日の感覚が残ってる

引き金を引いて、人を撃った、あの感覚を

ひどく、あの銃の引き金は重かった

瑠唯（……私、人を殺したの？）

私の視界は真っ赤に染まって

彼の胸からは血があふれ出してた

そんな彼を抱く、広町さんの目は

瑠唯「……っ。」

明確な殺意を持っていた

あの夜、もしも、近づいていたら……

瑠唯「……ごめんなさい。」

そんな言葉が口から洩れた

誰に許しを求めてるか分からない

広町さん？それとも、彼を迎えに来た女性？

それとも、彼自身……？

カグヤ「——八潮さん。」

瑠唯「……あなたは、十条君。」

カグヤ「奇遇だね。こんな所で。」

ここは、中庭のベンチ

誰でも使う場所に偶然なんてない

瑠唯「何か、用かしら。」

カグヤ「少し、話がしたいんだ。座ってもいいかい？」

瑠唯「……ええ。」

私がそう答えると

彼は一礼して、私の隣に座った

カグヤ「……………」

空気が重い

彼もまた、柊木君を慕っていた人の一人

きつと、私を恨んでいるわ

瑠唯「……………」私を殺しにでも来たのかしら。」

カグヤ「そんな事はしないよ。」

瑠唯「！」

カグヤ「君の音が危うかったから、声をかけたんだ。」

彼はそう言いながら

花壇を眺めてる

音が、危うかった？

カグヤ「君は何も、責任なんて感じなくてもいい。」

瑠唯「……………」

カグヤ「君は司さんの願いを叶えたんだから。」

瑠唯「……………」そう。」

私はスカートを掴んだ

十条君は私を安心させようとしてるのか

優しい声色で話をしている

瑠唯「……………一つ、聞いて良いかしら。」

カグヤ「何かな？」

瑠唯「彼は、柗木君はどんな人物だったの？」

私はそう彼に問いかけた

すると、十条君は表情を変えないまま

口を開いた

カグヤ「……………才ある故の孤独を誰より知った人物だったよ。」

瑠唯「……………そう。」

カグヤ「人を導くことは出来るのに、自分を導いてくれる人は誰もいない。こんなに苦しい事ってあるのかな。」

そう言う十条君の表情は

ひどく苦しそうで、悔しそう

カグヤ「僕はもう行くよ。」

瑠唯「ええ。」

カグヤ「今日は冷えるから、これを着ておくと良いよ。」

彼はそう言って、上着を私にかけて来た

人の温度を感じる

瑠唯「あなたは、大丈夫なの？」

カグヤ「大丈夫だよ。八潮さんこそ、風邪をひかないようにね。」

そう言つて十条君は校門の方に歩いて行つた

私は一人、暗くなつてきた中庭に残つた

“カグヤ”

僕には使命がある

それは、司さんのように人を導く事

多くの人々を苦しみから解き放つこと

カグヤ「……」

僕が司さんの穴を少しでも埋められるように

そう思つても、司さんの様にはできない

あの人の偉大さを再認識する

今まで何万人の人を導いてきた司さん

1人も導けない僕

カグヤ（やっぱり、僕はダメなのか……）

ましろ「——十条君！」

カグヤ「倉田さん……」

学校を出る直前に

倉田さんが後ろから走ってきた

少し、慌ててみるみたい

ましろ「な、なんで上着着てないの？」

カグヤ「人に貸しちゃって。」

僕は少し笑いながらそう言った

倉田さんは慌てて巻いてるマフラーを外した

ましろ「これ、使って！」

カグヤ「え？倉田さんが寒いんじゃない？」

ましろ「私は大丈夫だから。」

倉田さんはそう言って

僕にマフラーを巻いてくれた

すごく暖かくて

優しい香りがする

カグヤ「ありがとう、倉田さん。」



ましろ「ううん、全然！」

倉田さんは凄く優しい

この前、僕が泣いてた時も

優しく、話を聞いてくれた

そして、一緒に悲しんでくれた

カグヤ「暖かいね、このマフラー。」

ましろ「それ、私が作ったんだ。趣味で何だけど。」

カグヤ「それはすごいね。」

ましろ「えへへ……！」

僕がそう言うと

倉田さんは嬉しそうに笑った

それから、僕たちは一緒に帰ることになった

やっぱり、今日は冷える

昨日までとは全然、違う

ましろ「——あの、十条君。」

カグヤ「どうしたの？」

暫く歩くと

倉田さんが口を開いた

ましろ「さつき、なんであんなに苦しそうな顔をしてたの？」

カグヤ「っ！」

倉田さんに見られてたのか

これは、隠せないかな

カグヤ「…… 自分の駄目さが悔しいんだ。」

ましろ「え？」

カグヤ「司さんがいなくなつて、傷ついた人はたくさんいるんだ。」

ましろ「うん……」

カグヤ「僕はそんな人たちを導いてあげたいんだ。少しでも、良い道へ。」

僕は奥歯を噛んだ

言えば言うほど、自分の無能さが刺さる

カグヤ「でも、僕は司さんみたいにはできない……」

ましろ「……」

カグヤ「僕は誰も導けない。何もできないんだ……！」

僕と司さんは違い過ぎる

八潮さんだつて、まだ迷い続けてる

ましろ「柗木君みたいにするのつて、そんなに大切なの……？」

カグヤ「え……？」

倉田さんは僕の目をまっすぐ見てそう言った

ましろ「確かに、柗木君は常識なんて通用しないくらいすごいよ。でも、あれは真似しようとしてもできないよね……」

カグヤ「それは……」

全く持つて、その通りだと思う

司さんの真似は誰にもできない

あの人はあまりにも規格外すぎるから

でも、僕は……

カグヤ「でも、僕が司さんの代わりをしないと……」

ましろ「十条君は十条君だよ！」

カグヤ「!!」

ましろ「柗木君の代わりをするのはいいけど、十条君が柗木君にならなくてもいい！十条君には十条君なりのやり方があるはずだから！」

カグヤ「倉田さん……」

初めて、彼女のこんな声を聞いた

必死で、訴えかけるような

ましろ「十条君が私に話してくれた時……」

カグヤ「！」

ましろ「あんな風に人を導けるのが、十条君だと思う。あの言葉を聞いて、私はバンドに改めて向き合えたから。」

カグヤ「……そっか。」

僕は愚かだ

何もかも、倉田さんの言う通りじゃないか

僕は司さんになるのに躍起になってただけだ

カグヤ「ありがとう、倉田さん。」

ましろ「ううん、偉そうに言っでごめん……」

カグヤ「そんな事はないよ。」

僕は少し笑いながらそう言った

カグヤ「……」

ましろ「？」

僕が僕のままでもいいなら

僕は自身の道を進む

その道は僕一人で行けない

だからこそ、正直に言おう

カグヤ「僕は、倉田さんが好きです。」

ましろ「え……？ // //」

僕は驚く倉田さんに手を差し出し

続けてこう言った

カグヤ「これから進む道は倉田さんと歩きたい。」

ましろ「…… // //」

倉田さんはうつ向いてる

手が震える

ましろ「…… 私も // //」

カグヤ「！」

ましろ「私も、十条君が好き！ // //」

その言葉を聞いた瞬間

僕の心は幸せでいっぱいになった

カグヤ「ありがとう、倉田さん。」

僕は倉田さんにそう言った  
その時だけこの寒天の寒さを  
全て、忘れられた

## 恨み

“透子”

あれから、広町は変わった

透子「——広町ー、テストの順位どうだったー？」

七深「1番だったよー。」

透子「え!?マジ!？」

まず、自分の才能を隠さなくなった

ありのままの広町でいるようになった

勉強でも、バンドでも、芸術分野でも

広町は圧倒的な力を発揮してる

透子「やっぱすごいよねー。」

七深「そうー?これくらい当たり前前だよー。」

広町は普通になることをやめた

今は逆に普通から離れようとしてる

まるで……

透子（柗木さんみたい……）

態度は全然違う

けど、周りとのあまりに違う様子は

柗木さんに重なるものがある

七深「今日はバンドの練習だったよねー。行こー。」

透子「そうだね、行こ。」

あたしは広町と一緒にバンド練習をする

教室に向かった

“つくし”

つくし「——皆、休憩にしよ！」

ましろ「そうだね。」

私達は借りてる教室で練習をしてる

月ノ森音楽祭の事があるから、前みたいに苦情が来ることもない

だから、練習で困ることはない

つくし（でも……）

広町さんはアトリエには行けないって言って以来



アトリエの事を何も話そうとしない

それだけじゃなくて、移動教室の時、A組の前を絶対に通らなくなつた  
どんなに時間がギリギリでも、回り道をしてる

きつと、教室の中が目に入るのが怖いんだ

つくし「す、すごいね！広町さん！今日も絶好調！」

七深「えへへへ、ありがとー。」

広町さんは生氣のない目のまま、無邪気に喜ぶ

私はそんな様子に少し、狂気すら感じる

生氣のないまま無邪気に喜ぶ広町さんは

まるで、人形みたい

瑠唯「広町さん……」

七深「…… なに？八潮さん？」

瑠唯「…… 何でもないわ。」

七深「…… あつそ。」

つくし「ちよつと、喧嘩はダメだよ！」

七深「えー？喧嘩なんてしてないよー？」

瑠唯「……」

一番変わったのは、これかもしれない

広町さんが八潮さんに明らかな敵意を持つようになった

どんなに穏やかな時でも、八潮さんが話しかければ

恐ろしく冷たい目をする

流石の八潮さんもこれにはかなりこたえてる

七深「……………」

つくし（広町さん……………」

教室内の空気が重たくなる

会話に入って来ない2人も気まずそうにしてる

正直、私も今すぐここから逃げちやいたい

透子「——あー！」

4人「！」

透子「なんか今日、調子出ないから終わり！」

透子ちゃんはその大きな声を出して

ギターを片付け始めた

ましろ「私も……………」

七深「そ、そうー？じゃあ、終わろつかー……………」

つくし「そ、そうだね！次頑張ろ！」

瑠唯「……ええ。」

こんな状況で仕切ってくれる透子ちゃんは凄く頼もしい

本当はリーダーの私がこんな風にしないとイケないんだけど

そんな事を思いながら、私はドラムを片付けた

そして、全員、教室を出た

“ 瑠唯 ”

4人と別れた後、私は一人で廊下を歩いている

日も傾いて来て、もうすぐ夜になる

瑠唯「……っ。」

私は広町さんのあの目を思い出した

冷たく、鋭い、刃物みたいだった

そして、元々、赤みを帯びてる彼女の瞳は

この上ないくらいに濁って、まるで

あの日に見た血の様だった……

瑠唯（……結果が全て。）

私は心の中でそう呟いた

広町さんの好きな人を撃ち殺した

だから、敵視されてる

当り前の結果

私は、右腕を抑えた

瑠唯（……怖い。）

何かに足が引つ張られるように、足が重たくなる

ただの廊下なのに、底なし沼を歩いてるようを感じる

そして、すぐ後ろにあの目があるようにも感じる

瑠唯「ハア……ハア……」

息が苦しい

気分も悪くなってきた

視界が揺らぐ

瑠唯（もう、ダメ……）

私は体の力が抜け

重力に従って体が落ちて行つた

？「——危ない！」

瑠唯「……？」

その時、私を受け止める誰かの存在を感じた  
私の意識はそこで途切れた

瑠唯「——っ！」

私が目を覚ますと

そこは保健室のベッドの上だった

一体、誰が……

三久「起きましたね。」

瑠唯「あなたは、天空時さん……？」

横を見ると

そこには天空時さんが座っていた

三久「調子はどうですか？」

瑠唯「もう、大丈夫です。」

さつきまでの不調は無くなってる

ひどい汗をかいてる

瑠唯「天空時さんが、ここまで？」

三久「いえ、違います。」

瑠唯「え？」

三久「私は廊下で意識を失っていた八潮さんを運んだだけです。」

じゃあ、あの私を受け止めた人物は、一体……？

上手く聞き取れなかったけれど、どこかで聞いたことがある……

三久「ちよūdōよかったです。」

瑠唯「？」

三久「八潮さんにお伺いしたいことがあるのです。」

そう言うと、天空時さんの表情が引き締まった

私は激しく息をのんだ

三久「…… 柗木君を撃つたのは八潮さんだと、聞きました。」

瑠唯「…… つ。」

想像通り

彼女また、彼を慕っていた人物の一人

それも、広町さんと同じ方向で

瑠唯「…… 間違い、ありません。」

私は小さな声でそう言った

もういつそ、殺すなら一思いに殺してほしい

三久「そんな風にしなくてもいいですよ。私もあなたを恨んではいませんから。」

瑠唯「え……?」

三久「彼も、あなたを犯罪者にしたいとは思っていません。その意思に反することをしようとも思いませんから。」

天空時さんは優しい声でそう言った

その表情はすごく優しい

三久「それに。」

瑠唯「?」

三久「私には、彼が死んだようには思えないのです。」

瑠唯「!」

三久「彼は月の様な人ですから。」

瑠唯「月……?」

私は彼女の言った身が分からなかった

柊木君が、月?

三久「今夜は月が出ていませんね。」

瑠唯「はい、そうですね。」

三久「もしかしたら、ですよ。」

天空時さんは窓の外を指さしながら

こう言った

三久「今は彼が新月で見えてなくて、月が出ればまた見えるようになるかもしれないって思うんです。」

瑠唯「そう、ですか……。」

三久「でもまあ、こじつけでしかないのですが。」

瑠唯「素敵な、考えだと思えます。」

三久「そうですね。」

天空時さんは小さく笑うと椅子から立ち上がった

三久「それでは、帰りましょうか。夜も遅いので。」

瑠唯「はい。すみませんでした。」

私は頭を下げ、ベッドから起き上がった

それから、天空時さんと共に学校を出た

“ 七深 ”

分からない



あの日から、私はグチャグチャになった

さつき、倒れそうになつたるいるいを受け止めた

でも、どうしたらいいのか分からなくなつて

そのまま置いて来てしまった

七深「……………」

自分の心が分からない

本当は誰も恨みたくない

でも、どこかから、恨みって言う黒い感情が生まれてくる

七深「……………分からないよ。」

心の整理がつかないから、るいるいに冷たく当たってしまった

でも、本当に恨んでるのは、るいるいじゃない

そんな事は分かつてる

七深「誰、なの……………？」

見えそうで見えない、あの姿

るいるい、じゃない

私を殺すことを依頼した人、でもない

もつと他の誰か、そんな訳ない

七深「……………」

闇の向こうにぼんやり、姿が見える

その時、鏡に私の姿が写った

七深「…………… あっ」

その時、分かった

こいつだ、私が恨んでるのは

七深「消えて!!!」

私はそう叫んだあと

目の前にある鏡をたたき割った

手にはガラスの破片が無数に刺さってる

でも、痛いなんて思わない

七深「…………… 柗木君は、これよりも痛かったから。」

私はそうつぶやいて

地面に落ちた、自分の血を見た

七深「…………… こんなもの、なんでもない。」

ごめんね、るいるい、皆

私、やっと見つけられたよ

悪いのは、最初から全部私だった  
だから、

私が恨んでるのは、私自身だった

七深「……ごめんね、ごめんね、皆……」

私はしばらくそう眩いた後

自分の家に帰って行った

## 希望

透子「——ちよ、広町!？」

七深「？」

朝の月ノ森学園で透子の声が響いた  
それに対して、七深は首を傾げた

透子は慌てたように声を出している

透子「ちよ、何その傷!？」

七深「あー、どうでもいいから、ほっといて良いよー。」

透子「いや、よくないでしょ!」

七深の手には無数の切り傷がある

しかも、1つ1つが深く

血が止まってる分、さらにグロテスクに見える

つくし「——どうしたの?そんなに大声出して?」

透子「広町がケガしてんの!これ!」

つくし「ええ!？」

七深「もー、大げさだなー。」

透子、つくし「大げさじゃない！」

2人は同時に突っ込んだ

当の本人は気にしている様子は無い

瑠唯「……何を騒いでいるの？」

七深「あ、るいるいだー。おはよー。」

透子、つくし、瑠唯「!？」

七深「？」

3人は昨日までとの態度の差に驚いた

呼び方も戻ってる

表情も穏やかだ

瑠唯（ど、どういう事？）

七深「どうしたの、るいるい？」

瑠唯「な、なんでもないわ。」

瑠唯は明らかに戸惑っている

透子「って、そうじゃなかった！」

七深「？」

つくし「保健室行くよ！」

七深「な、なんで？」

七深は2人に連れられて

保健室に向かった

透子「——ほら！手出して！」

保健室に來ると、透子が手当ての用意し

そして、手当てを始めた

瑠唯「これは、なんなの？」

つくし「わ、分からないんだよ。」

透子「どうしたの、広町？」

七深「えー？」

七深は少し考えるそぶりを見せた

そして、話を始めた

七深「えーつとねー、アトリエの中にあつた鏡全部割っちゃつてー。」

透子「はあ!?!」

つくし「なんで!?!」

七深「私が写つてるから。」

瑠唯「……？」

3人は七深の言葉に戸惑っている

つくし「ど、どういう事？」

七深「…… 私が恨んでるのは私自身だから。私が邪魔なんだよ。」

透子（や、やばいじゃん！）

3人は冷や汗を流した

一瞬、空間の温度が下がった気がした

瑠唯「…… 死んだりしないわよね？」

七深「え？しないよ？」

瑠唯（それなら人まず、大丈夫なのかしら。）

七深「だって、死んじやったら楽になっちゃうから。」

つくし、透子、瑠唯「え？」

七深は笑顔でそう言った

七深「柗木君が苦しんだんだから、私も苦しまないといけないよね？だったら、必要なのは死ぬことなんかじゃなくて生きてまま苦しむことだと思うの。」

七深は嬉々としてそう語っている

だが、目に光はない

七深「どうしたのー?」

透子「な、なんでもないよ。」

つくし「う、うん!」

瑠唯「……」

七深「そう?じゃあ、私は行くねー。手当てありがとー。」

そう言つて、七深は保健室から出て行つた

室内には、3人が残された

透子、つくし、瑠唯「……」

3人の空気は極めて重い

あの七深の様子は異常だ

透子「あれ、なんなの……?」

つくし「わ、分かんないよ。」

瑠唯「恨んでる、と言つてたわね。」

つくし「自分を恨んでるって、どういう事?」

透子「さ、さあ……?」

透子とつくしは首をかしげている



良く分からないと言った様子だ

瑠唯（……まさか。）

透子「八潮？」

つくし「どうしたの？」

瑠唯「なんでもないわ。私達も教室に行きましよう。」

瑠唯がそう言った後

各自、教室に戻って行った

放課後になった

今日はバンドの練習もなく

学校で全員、解散となった

透子（……なんだかなー。）

透子は今日一日、七深の様子を見た

七深は相変わらず、穏やかな物だった

だが、危うさもひどい

カグヤ「桐ヶ谷さん。」

透子「あ、十条。」

ましろ「私もいるよ。」

つくし「私も。」

瑠唯「私もいるわ。」

透子が廊下を歩いてると

4人が歩いてきた

透子「どうしたの？」

カグヤ「少し、集まって話が見たいんだ。」

透子「話？」

瑠唯「天空時さんたちも呼んでるわ。」

透子「う、うん。で、どこ行くの？」

カグヤ「司さんの家だよ。」

それから、5人は三久と龍奈の2人と合流し

司のマンションに向かった

---

少し歩き、司のマンションに着いた

カグヤ「明石さん、皆さんを連れてきました。」

響『うん、入って。』

響にそう言われると

7人はエレベーターに乗り

最上階に上って行った

響「——いらつしやい、皆。」

エレベーターが付くと

響が7人を出迎えた

そして、リビングに案内された

カグヤ「——それで、話とは何なんですか？」

リビングに着くと

カグヤが最初に口を開いた

三久「広町さんだけ呼んでないと言う事は……」

透子「広町に話しづらい事、ですか？」

響「うん。ある意味ね。」

響はそう言つて少し息をついた

部屋の中に緊張が走つた

響「あの日からもう、2週間。大体の事は話が入ってきてるよ。」

つくし「はい……………」

ましろ「……………」

透子、瑠唯「……………」

4人は暗い顔をした

響は少し頷いた

響「うん、聞いてるよ。」

龍奈「それで、話って何なんだ？」

龍奈は響にそう問いかけた

響「まず、結論から言うよ。」

響は少し空気を吸った

そして、こう言い放った

響「――司はまだ、完全には死んでないよ。」

7人「!!」

響「でも、生きてもない。」

三久「つまり、仮死状態、という事でしょうか？」

響「まあ、そうだね。」

そう言うのと、響は説明を始めた

響「司は普通ならもう死んでるはずだった。心臓近くの血管が破損したから。」  
瑠唯「……はい。」

響「でも、搬送された病院でその破損が塞がったの。」

三久「！」

ましろ「や、やっぱり、すごい。」

全員目を丸くしてる

流石司だと、そう思ってる

龍奈「でも、広町を呼ばなかったって事は、何かあるんだろ。」

響「正解です。今回は過度な希望を持ってほしくなかったんです。」

透子「それって、どういう事なんですか？」

透子がそう聞くと

響はすぐに答えた

響「今回、司が目を覚ます確率は極めて低いんだよ。」

三久「多分、一気に血を失い過ぎたからでしょうか。」

響「そうだよ。それでも、常人ならショック死ものだけだね。」

つくし「でも、よかったよね！死んではないわけだし！」

ましろ「うん！そうだよね！」

2人のその言葉から

場の空気が少し軽くなった

響「3日、この間に目覚めないと死亡判定になる……. . . . . と思う。」

龍奈「随分、あいまいなんだな。」

響「だって、司だよ？何しでかすか分かんないじゃん。」

三久「ふふつ、間違いないですね。」

カグヤ「司さんですからね。」

少し笑った後、カグヤと三久の2人の表情が変わった

カグヤ「何かあれば、言ってください。最大限、協力します。」

三久「天空時もお協力いたします。」

響「ありがとう。でも、大丈夫だよ。」

響はそう言って、口角を少し上げた

響「そんな事したら、司、怒るから。」

カグヤ「そうかも……. . . . . いえ、そうですね。」

三久「『俺に恩が出来るなんてカツコつかねえ。』とかいいそうですね。」

瑠唯（さりげなく、柊木君へのイメージが酷いわね。）

透子（あと、3日。）

こうして、7人に情報が渡った  
そして、希望が生まれた

## 目覚め

“アトリエ”

平日の朝

七深「——っ。」

アトリエの中では

ガラスが散らばり

床には血が滴っている

七深「…… あは、あはは………！」

その部屋の真ん中で

七深は不敵に笑っている

七深「ごめん、ごめん、ごめん………！」

すると、今度は泣きだした

七深はしきりに謝り続けている

七深「痛い、痛いよ………」

七深は血が流れる右手を抑えた



血はさらに流れ、床にぼたぼたと落ちていく

七深「でも、まだ、駄目……………　まだ、柗木君は許してくれない……………」  
そう呟き、七深は泣き続けた

“月ノ森”

つくし「——広町さんが、来てない？」

昼休み

月ノ森の中庭でそんな声が響いた

透子「うん……………」

瑠唯「体調不良などの可能性はないの？」

透子「それが、先生に聞いたんだけど、連絡入ってないって……………」

ましろ「そ、それって、まずいんじゃない？」

つくし「い、いや、そうとは限らないよ！」

そう言うつくしの顔も不安の色がある

昨日見た、七深の自傷

それに加えて、今日の無連絡の欠席

透子「これ、行った方が良くない？」

瑠唯「そうね。放課後に行ってみましょう。」

ましろ、つくし「う、うん。」

それから、4人は不安を感じつつ

放課後までの時間を過ごした

---

4人は放課後、広町家のアトリエに来た

透子「——広町——いるー!?!」

ましろ「ち、ちよつと、透子ちゃん。」

透子「つて、あれ?」

つくし、瑠唯「!」

透子がドアノブに手をかけると

ドアは鍵が掛かってないのか

あっさり開いた

瑠唯「やけに、不用心ね。」

つくし「いやいやいや!おかしいよね!」

ましろ「ど、泥棒とか……」

透子「やばいじゃん!入るよ!」

透子はアトリエの中に入った  
それに3人も続いた

アトリエの中はかなり荒れている

床に散らばった、割れたガラス

その中にちらほら、赤い跡が付いてるものがある  
ましろ「――こ、これ……………」

瑠唯「…………… まずいわ。」

透子「八潮？」

瑠唯はそう呟くと

周りを見渡した

七深「――なにしてるの……………」

つくし「ひ、広町、さん……………」

瑠唯（…………… 遅かった。）

4人の前に現れた七深は

髪はボサボサで

服も破れていて、ほぼ裸

そして、両手からは真っ赤な血がしたたり落ちている

七深「バンドの練習……？」

透子「そうじゃなくて！なんで、そんな事になってんの!？」

七深「……？」

七深は透子の言葉に首をかしげている

やはりと言うべきか、目は死んでる

つくし「すごい怪我してるじゃない!」

七深「怪我……？あ、これ。」

ましろ「い、痛くないの……？」

つくしがそう言った後、

ましろは恐る恐るそう聞いた

七深「痛いよ、すごく。」

瑠唯「ならなぜ、そんな事をしているの？」

七深「……罪があるから。」

透子「つ、罪?」

つくし「そんなの、広町さんにはないよ?」

七深「私のせいで、柊木君は死んだんだよ?」

4人「!!」

七深は低い声でそう言った

4人はその様子に背筋が凍った

七深「ここで、胸を撃たれて、痛かったよね、苦しかったよね……………」

瑠唯「……………つ。」

七深は胸を押さえながらそう言った

七深「あの日から、ずっと、夢の中であの光景が出てくるの……………」

ましろ「っ!」

七深「きつと、柗木君がまだ怒ってるから……………」

瑠唯「それは、ないわ。彼は……………」

七深「……………もう、今日は帰って。」

七深は小さな声でそう言った

つくし「で、でも……………」

七深「帰って!!」

ましろ「……………うん。」

4人は七深の気迫に押され

アトリエを出た

4人はアトリエを出た後

公園のベンチに集まっていた

透子「あれは、完全にやばい。」

透子は最初にそう言い放った

他の3人はうつ向いている

瑠唯「彼女の精神はもう、限界ね。」

つくし「私達の話なんて、聞く耳持たなかったね……………」

ましろ「うん……………」

4人は肩を落とした

そして、大きなため息をついた

透子「あの雰囲気、それこそ、終木さんの言う事しか聞かなそうだった……………」

つくし「じゃあ、もし仮に目覚めなかったりしたら……………」

透子、瑠唯、ましろ「……………」

つくし「……………考えるのはやめよつか。」

最悪のケースを想像しても仕方ない

何より不謹慎だと思い、つくしは話すのをやめた

その時、ましろの携帯が鳴った

ましろ「あ、十条君。」

透子「十条？」

ましろは電話に出た

カグヤ『もしもし、倉田さん！』

ましろ「十条君？どうしたの？」

カグヤ『今、周りに広町さんいる!?!』

ましろ「え？いないけど……」

ましろがそう言うと

カグヤは慌てたような声を出した

カグヤ『さつき、広町さんがアトリエから出たって連絡が入った!?!』

ましろ「!?!」

カグヤ『もしかしたら、もう近くに——』

七深「——皆。」

ましろ、つくし、瑠唯、透子「!!」

電話の途中

突然、七深が公園の木の間から出て来た

カグヤ『っ！しまった！』

ましろ「ど、どうしたの？」

カグヤ『気を付けて！もう、きみたちの周りに来てる！』

ましろ「来てる？」

？「——やっとなって来たか、広町七深。」

七深「……誰。」

七深がそう問いかけると

そこから中から男たちが出て来た

織元「俺は織元。柊木司の秘密を聞きに来たんだ。」

透子「柊木さんの、秘密？」

織元「ちよーつと、噂を耳にしてな。」

つくし「まさか。」

織元「柊木司が、死んだってな。」

七深「っ!!」

織元がそう言うのと

七深は目を見開いた

織元「俺たちが聞きたいのは、誰が柊木司の会社を継いだかだ。」



瑠唯「…… そんな事が分かって、何になるのかしら。」

織元「もちろん、奴に成り代わる。」

七深「……」

織元「そして……」

織元が手を挙げると

5人は瞬く間に囲まれた

透子（しまった！）

織元「お前らには、この計画に協力してもらおう。人質だ！」

モブ「柗木司亡き今！俺たちは怖いものなしだ！」

織元「さあ、精々、役に立つてもらおうぞ。」

そう言つたと同時に

男たちは5人に近寄つた

透子「ちよ、こつちくんな！」

織元「お前ら、こいつら運んどけ。」

男たち「おう!!」

5人「っ!!」

5人はそうして、トラックに乗せられ

どこかに運ばれていった

“ 病室 ”

病室には機械の無機質な音が響いている

響（―― まずいことになった！）

そんな病室の中で

響はある事を考えていた

響（まさか、司の情報が洩れてたなんて！カグ君が向かったけど、間に合う訳ない！）

響は焦っていた

司の情報が洩れてる以上

相手は心に絶対的な余裕がある

しかも、今回の相手は……

響（ヤクザ、織元組なんて……！あいつらは本当に司以外は手も出せないのに！）

このままじゃ、5人は無事では済まない

司の情報が漏れる可能性は極めて0だった

でも、ばれた

司の立ち回りにも、このパターンは書かれてない

響「どうしたら、いいの……？」

打つ手がない

カグヤや三久、龍奈の力を入れても

あの組織に手出しは出来ない

しかも、5人の身は向こうに握られてる

響「何か、何か……！」

響は思考を巡らせた

司「……っ。」

響「！」

その時、機械の動きが変わった

さつきよりも激しく動き出した

響「ま、まさか！」

響がそう叫んでたちがると同時に

病室内にある機械は全て、ショートした

司「——ここはどこだ。」

響「司!!」

司「明石——って、おい。」

響は司に抱き着いた

司は煙たそうにしてる

響「よかった、よかった……！」

司「そうか。」

司はそう言うと

自分についてる点滴をすべて外し

そして、ベッドから立ち上がった

司「広町が、危ないんだろ。」

響「え!?! な、なんで!?!」

司「聞こえたんだよ。あの世までな。」

司は肩を回した

そして、外の景色を見て

忌々しげな顔をした

響「司……？」

司「……どうやら。」

響「！」

司「俺はたいそう、神と言う奴に嫌われてるらしい。」

司は微笑みを浮かべながら  
明石にそう言った

## 最終回

はつきり言おう

俺は今、かなり怒っている

もう、爆発寸前だ

響（――こ、こわっ。）

司「……」

怒りすぎて、もはや笑顔になってきた

まあ、全身の血管がはちきれそうになってるわけだが

司「明石。」

響「な、なにかな！」

司「広町はあのゴミのたまり場にいるんだな？」

響「う、うん！監視カメラの映像的にいるはず！」

司「そうかそうか。」

俺は頷きながらそう答えた

そして、病室のドアの方に歩いて行った

司「…………… 明石。」

響「は、はい！」

司「今回は、本気だ。」

響（う、うわー！やばいよ、ガチギレだよ！）

司（さて、行くか。）

俺は病室から出た

そして、服を着替え

ゴミのたまり場に向かった

“カグヤ”

カグヤ「——っ！」

モブ「お前は、十条カグヤ！」

僕は織元組のアジトに来た

明石さんの情報では倉田さんたちはここにいる

カグヤ「倉田さんたちを返してもらおう。」

モブ「ああ？倉田さん？」

モブ2「あの女だろ！バーカ！誰が返すかよ！」





響「——やばっ！カグ君、もう侵入しちやった！」

明石は突然、そう叫んだ

十条、まさか、倉田ましろを助けに

司「……そうか。」

響「ちよ、なんでそんなに落ち着いてるの!？」

司「一切、問題がないからだ。」

俺がそう言うのと、車が止まった

どうやら、着いたみたいだ

俺は車から降りた

車から降りると

出入口の前には、いかにも下っ端な奴らがいる

俺はそいつらに近づいて行つた

モブ「と、止まれ！」

司「……」

モブ2「つて、あれって……？」

モブ3「ひ、ひひ、柊木司あ!？」

モブ4 「い、いや、人違いだ！あいつは死んだはずだ！」

モブ5 「そうだ！織元さんがそう言ってた！」

そう言うともブどもは俺の方に歩いてきた

こいつら、マジで人違いと思ってるのか

まあ……

司 「…… 好都合だ。」

モブたち 「がはっ!!!」

俺は奴らの頭に水平に蹴りを入れた

全員、頭が割れた

司 「決めた。お前らは今日、全員潰す。」

俺はそう呟き

建物内に入って行った

“カグヤ”

建物内はやっぱり、巡回が多くいる

でも、音を頼りに行けば

モブ 「おい、侵入者が入ったぞ！」

モブ2 「は!?マジかよ!」

モブ 「お前も探せ!」

カグヤ (……… 行つてくれたか。)

こういう時、混乱して

いつもなら理になつてゐる巡回ルートから外れてくれる

そこを通り抜けていく

カグヤ (……… この音。)

倉田さんたちの声

いるのは、多分

カグヤ (織元貞次がいる場所。)

あの男だけは油断できない

身体能力は司さんに次ぐとすら言われてる

カグヤ (でも、構つてられない。)

どんな手を使つても、倉田さんたちだけは助ける

僕は音がする方へ急いだ

カグヤ 「倉田さん!」

ましろ「じ、十条君！」

音がする部屋に來ると

やっぱり5人がいた

織元「來たか、十条カグヤ。」

カグヤ「織元貞次……！」

織元「おいおい、そんなに怒るなよ。」

彼は笑いながらそう言ってきた

カグヤ「……倉田さんたちを返してもらおう。」

織元「なんだ？話が早いやつだな。」

カグヤ「1分1秒、君のもとに倉田さんを置きたくないんだ。」

織元「まるで汚物を見るような目だな。」

僕は彼を睨んだ

だが、気にしている様子は無い

織元「まあ、別に返してもいいが。」

モニカ「！」

カグヤ「っ！やめろ！」

彼は倉田さんたちに銃を向けた

織元「俺としても、目的があるからな。今返すとなると死体だぜ？」

カグヤ（くっ……！）

織元「まあ、先に死体になるのはお前だがな！」

カグヤ「なっ！」

彼がそう叫ぶと

周りのドアから銃を持った人たちが出て来た

織元「お前はここに誘導されてたんだよ。」

カグヤ「誘導……まさか！」

織元「やけにここまで、簡単に来れただろ？」

そういう事か

結果を焦って、意図まで考えられてなかった

織元「お前を殺せば、その奴らも口を割るかもしれない。」

ましろ「や、やめてください！」

織元「仕方ないだろ。お前らが口を割らないからな。」

つくし「十条君！逃げて！」

透子「やばいって、この状況は！」

カグヤ「……ダメだ。」

ここに来た時点でこんなものは覚悟してる

そして、僕は倉田さんを捨てて逃げる事なんてできない

ましろ「十条君！逃げて！」

カグヤ「逃げない！」

織元「……ほう。」

カグヤ（せめて、5人だけでも助ける。）

僕は倉田さんの方を見た

そして、微笑みかけた

ましろ「っ！ま、まって、十条君！」

七深「に、逃げなよ！このままじゃ、しろちゃんまで……」

瑠唯「あなたも、柊木君のようにするきなのか!?」

カグヤ「頭がいなくなれば、君たちの機能は落ちる。君だけでも、倒す。」

織元「いい目じゃないか。」

彼は少し笑うと

右手を挙げた

織元「その覚悟に免じて、一瞬で殺してやるよ。うー」

ドン!!!

織元「なんだ！」

カグヤ「何かが、崩れる音？」

発砲指示の直前

何かが壊れる音が聞こえた

まるで、建物を取り壊すときみたいな

織元「何事だ！」

モブ「わ、わかりません！」

そう言ってる間に段々と音が近づいてくる

そして……僕から見て右側の壁が砕けた

七深「——え？」

織元「な、なんで、てめえが!!」

カグヤ「司さん！」

そこから出て来た姿はまさしく鬼神

目は殺意の色で染まり

音だけでその怒りの度合いが分かった

“ 司 ”

広町の服が乱れてる

これ、そういう事か？

司「……おい、ゴミども。広町に何をした？」

織元「ふん、想像してみろよ。」

司「……そうか。」

俺はそう呟いて、腰に差してる短剣を持った

そして、周りのゴミどもの方に走った

モブ「き、来た——」

モブたち「ぎやああああ!!!」

司「ふん。」

俺は周りにいたゴミを全部切った

そして、血を振り払い、短剣をしまった

織元「なに!？」

司「さて、ゴミ野郎。」

織元「！」

俺は低い声でそう言った

すると、奴の肩が跳ねた



司「今から俺はお前を殺す。」

織元「へえ。」

そう言うとな奴は椅子から立ち上がり

俺の方に歩いてきた

織元「まあ、そう言うなよ。柊木。」

奴は笑いながらそう言った

織元「本来、俺達は仲良くするべき同類なんだぜ？」

司「何のことだ？」

織元「俺も、お前と同じ生まれだってことだよ。」

カグヤ、七深「なっ！」

司「……」

織元「俺もお前と同じ遺伝子操作で生まれたんだぜ？」

奴は俺にそんな事を言ってきた

そして手を広げた

織元「仲良くしように、兄弟！俺と一緒に金を稼ごう！その女たちも返す！」

司「……ほう。なら、さっさと解放しろ。」

俺はそう言って、広町たちの方に近づいて行った

司「久しぶりだな、広町。」

七深「っ！柊木君！後ろ！」

織元「——しねえ!!!」

司「ああ、知ってる。」

織元「!？」

俺は奴が振ったナイフを掴んだ

そして、奴の指を全て折った

織元「ぐっ……!!」

司「そもそも、俺はお前らを潰すと決めてたんだぜ？」

織元「お、お前!!」

司「あと、お前が俺と同じ生まれという事は知ってた。あの依頼の日からな。」

織元「っ！」

司「あの研究所にお前の手下どもを紛れさせたんだろ。」

俺がそう言う

奴は目を見開いた

織元「き、気付いてたのか！」

司「ああ、書類に書いてたからな。」

俺は尻もちをついてるやつを見下ろした

司「お前はさつき、兄弟と言ったな。」

織元「そ、そうだろ！俺とお前は――」

俺は奴が言葉を言いきる前に

奴の首を搔つ切った

奴は力なく倒れた

司「感情移入出来ねえな、ゴミには。」

俺はそう吐き捨て

広町の方に向き直った

七深「ひ、柊木君、なんだよね……………？」

司「俺以外の誰に見えてんだ？」

七深「ほ、本当に……………！」

司「――」

広町は俺に抱き着いてきた

俺はそれを受け入れた

七深「生きてたんだね……………！」

司「ああ、地獄から舞い戻って来たぜ。」

俺がそう言くと、広町は泣き叫んだ  
その間、俺は広町の頭を撫で続けた

七深「怖かった、怖かったよお……！」

司「……」

七深「私が柗木君を殺したと思って、ほんとに、怖かった……！！」

司「……：そうか。」

腕の中にいる広町を見て

この世に帰ってきたのは正解だったと思った

こんなに危うい気配、初めてだ

七深「好き、好き、大好き……！」

司「!？」

七深「だから、もう、絶対に私から離れないで……！！」

司「……」

七深「柗木君……？」

俺は広町を抱きしめる力を強めた

司「俺も、広町が好きだ。」

七深「！」

司「だから、命を懸けても守りたかった。」

七深「もう、絶対にしないだね。」

司「…… ああ、分かった。」

広町はひどくやせ細ってて

手も傷だらけだ

これを見れば、俺は失敗してたんだと

容易に分かる

司（もう、広町が死ぬまで死ねないな。）

透子「——おめでとー！広町ー！」

司「？」

つくし「おめでとー！」

ましろ「おめでとー、広町さん！」

瑠唯「…… よかったわね。」

七深「うん…… ！」

しばらくして

俺は広町を放した

カグヤ「あの、司さん？」

司「なんだ。」

カグヤ「先ほど、なぜ織元貞次の言葉を聞いた後、怒りの音が強くなったのですか？」

司「そりゃ、広町が汚されたから——」

七深「え？私何もされてないよー？」

司「は？」

俺は目を見開いて

広町の方を見た

司「…………… どういう事だ。」

七深「私、この服のまま外出ちゃって、それでー。」

透子「特にそういう事されたりは、ないですね。」

司「……………」

七深「あれれー？まさか、柗木君、そのことでさらに怒ったのかなー？」

司「……………」

七深「いやー、愛感じちゃうなー。」

ましろ（ひ、柗木君にあの態度……………）

瑠唯（凶太いわね、広町さん。）

俺は織元貞次の机に近づいた

そして、それに手刀を落とした

透子「な、なにやっつてんすか!？」

司「……精神統一だ。」

俺は心を落ち着けた

そして、奴はもつと苦しめて殺せばよかつたと思つた

七深「柊木君ー。」

司「……なんだ。」

七深「……私を汚すのは、柊木君だよー?／＼／＼」

司「そういう事を言うな。」

七深「いてっ!」

俺は広町にデコピンを当てた

広町はでこを抑えた

司「取り合えず、お前はさっさとその体を直せ!栄養失調になつてるだろ!」

七深「は、はーい／＼／＼」

司「なんで自分の言つた事で顔を赤くするんだ。」

俺は呆れながらそう言つた

司「さてと、帰るか。」

七深「そうだねー。」

透子「いやー！ハードな体験だったー！」

つくし「こんなの、もうごめんだよ……」

瑠唯「……全くな。」

ましろ「じ、十条君……」

カグヤ「倉田さん？」

ましろ「あの、その……」

カグヤ「？」

ましろ「手、繋いちゃ、ダメかな……？／／／」

カグヤ「もちろん、いいよ。」

後ろでイチャついてる2人の会話を聞かないようにして

俺たちは建物の外に出た

響「——皆ー！」

外に出ると、明石がこっちに走ってきた

帰りの車もある

響「大丈夫だった？」



司「俺は何の問題もない。寝起きの運動にすらならなかった。」

響「司の心配はしてるけどしてないよ。」

司「あっそ。」

俺がそう言うよと

明石は他の奴らの所に行った

容体の確認とか、色々な事をしてる

司「…… そうだな。」

俺はその間、ある事を考えた

考え終わると同時に明石が戻ってきた

響「皆は大丈夫そうだったよ！」

司「そうか。」

俺はそう答えた後

明石に話しかけた

司「明石。」

響「ん？ どうしたの？」

司「お前に話がある。」

響「話？」

明石は首をかしげている

俺はその証にこう言った

司「パンドラは、廃業にしようと思う。」

響「！」

司「もう、俺がやるべきことじゃない。」

響「……：そっか。もう、七深ちゃんど。」

司「ああ。」

俺が答えると

明石は笑顔になった

響「幸せになりなよ、司！」

司「ああ。」

響「あつ、後！」

司「？」

響「あたしも、司の会社返すよ！」

司「え？いや、別にやったものだからいいんだが。」

響「あたしには荷が重いの！あれは司にしか務まらない！」

司「……：そうか。」

そういう事なら、仕方ないか

俺はため息をついた

響「おかえり、社長！」

司「……ああ。」

七深「何話してるのー？」

司「何でもねえよ。」

俺はそう言いながら

広町の方を見た

七深「そうー？」

司「そうだ。」

俺はそう言つて広町の手を取つた

七深「！／／／」

司「帰ろうぜ、広町。」

七深「うん！」

響「……幸せになつてね、司。」

こうして、俺はこの世に帰ってきた

広町と結ばれて、やっと、俺は人間になれた

司「ありがとう、広町。」

俺が小さく呟いた言葉は

横にいる広町にも気づかれる事なく

秋晴れの空に消えていった

“ 数年後 ”

晴れの日の教会

そこには多くの人間が集まっており

その視線は一転に集中している

司（——ふっ。）

その視線の先に俺はいる

俺は今、花嫁を待っている所だ

司（それにしても。）

こんな日になると、色々な記憶が呼び起こされる

感覚的には一瞬の時間だったんだが

そう思っていると、大きな扉が開いた

司「！」

七深「……………」

そこから、ドレスに身を包んだ花嫁が姿を現した  
いつもの態度はどうしたと言いたいが、まあ

司「……………綺麗だな。」

つい、そう言葉が出た

そう思っていると、花嫁が歩いてきた

七深「ふふー、どうー？」

司「綺麗だ。」

七深「そ、そう……………／＼／＼」

響「司ー！立派になって……………！」

龍奈「いいぞー！柊木ー！」

三久「立派ですね、確かに。」

透子「あたしが繕った甲斐あったなー！」

つくし「おめでとう！ななみちゃん！」

瑠唯「おめでとう。」

ましろ「綺麗だなあ……………」

カグヤ「大丈夫だよ、ましろさん。」

ましろ「?」

カグヤ「次は、ましろさんの番だから。」

ましろ「カグヤ君……」

／／／

という感じに声をかけてくる

最後の2人はイチヤついでるだけだが

まあ、これもいつも通りか

七深「皆、相変わらずだねー。」

司「ああ、全くだ。」

これには俺も苦笑いだ

七深「ここまで、早かったねー。」

司「そうだな。」

花嫁さんも俺と同じ考えだったらしい

俺たちは笑いながら、来てる奴らを眺めてる

それから、俺達はプログラムを進めた

神父「——それでは、誓いのキスを。」

七深「さあ、ドーンとおいで。」

司「そんな勢いでしたらお前の首が飛ぶぞ。」

七深「怖いなー。」

司「ふっ。」

俺は小さく笑った

司「これからもよろしくな、七深。」

七深「うん！司君！」

俺たちはそうして、唇を重ねた

その時、ひととき大きな歓声が上がリ

その分、俺たちの心は幸せで満ちていった

司「死ぬまで離れねえぞ。」

七深「私は、死んでも離れないよ。」

俺達はそう言いあつた

これが俺たちの繋がりだ

司（……ふっ。）

今日が結婚式という区切りだが

これもまだ、始まりだ

俺たちにはまだまだ、未来がある

まあ、どんなものが来ようと

俺と七深が全て、  
従えて見せるさ



## 番外編

## 花見の日

季節は春

俺は今、桜の木の下でシートに腰を下ろしている

司「——はあ……」

カグヤ「司さん、大丈夫ですか？」

司「大問題だ。」

周りには、広町たちの知り合いと言われる女が多くいる

正直、今日、来る気は全くなかった

だが、広町に泣き脅しされ、来ざるを得ない状況になったのだ

司「なぜ、女ばかりのこの空間に俺達がいるんだ。」

カグヤ「僕は倉田さんに呼んでいただいたので。」

司「お前、彼女に従順すぎるだろ。」

俺はため息をつきながらそう言った

十条は首をかしげている

カグヤ「僕たちも挨拶に行きませんか？倉田さんたちがお世話になってる方々だそう  
ですから。」

司「はあ、仕方ないか。」

俺は重い腰を上げた

そして、十条と共に挨拶に向かった

司、カグヤ「……」

挨拶に出た矢先

俺たちはデカイ壁にぶち当たった

そう、俺達は知らない人物に話しかけるすべを持たないのだ

基本的に俺と十条は挨拶に来られる側だからな

司「おい、どうするんだこれ。」

カグヤ「どうしましょう……」

司「取り合えず、初手はお前が行け。」

カグヤ「すいません、不可能です。あまり、初対面の人とは……」

司「ああ、知ってた。」

カグヤ「そう言う司さんは？」

司「俺が初手に行ってみろ、確実に喧嘩になるぞ。」

カグヤ「あっ（察し）」

十条は何かを察するような声を出した

こいつ、最近、失礼になって来たな

まあ、気にはしないが

司「それで、どうするんだ。このまま足踏みもしてられんだろう。」

カグヤ「そうですね。取り合えず、可能な限り頑張りましょう。」

司「善処はしよう。」

そうして、俺達は二手に分かれた

“木の陰”

七深、ましろ「——いいなあ。」

木の陰で2人の様子を伺っていた2人はそう呟いた

ましろと七深は2人を凝視している

ましろ「十条君、あんなに人見知りして、可愛いなあ……」

七深が（それは、しろちゃん、人のこと言えないよねー。）

ましろ「七深ちゃん？」

七深「なんでもないよー。それにしても……」

七深は司の視線を送った  
そして、ため息をついた

七深「あの偉そうなのを若干気にしてる感じが、たまらないよー」  
ましろ（そこなの？）

恋は盲目という言葉の通り

2人にとつては汚点と言える部分も

ましろと七深には受けているようだった

ましろ「それにしても、あの2人、私達に気付いてないのかな？」

七深「えー？大丈夫だよー。こんなに賑やかなんだしー」

ましろ「そう、なのかな？」

ましろは首を傾げた

七深は司の方を見た

司（気付いてるんだが。）

カグヤ（聞こえてるよ。）

“ 司 ”

司「あれは。」

俺はどこかで見たことがある顔を見つけた  
あれは、確か……

司「ロゼリア、だったか。」

友希那「……あなたは誰？」

司「！」

どうやら、向こうは俺に気付いてるみたいだ

俺は5人の方に歩いた

司「柊木司だ。湊友希那。」

友希那「あら、私の事を知っているのね。」

司「お前だけじゃない。そっちから、今井リサ、氷川紗夜、宇田川あこ、白金燐子だろ。」

あこ「あこ達の事も知ってるの!？」

リサ「モルフオニカの5人から聞いたのかな？」

司「半分正解だ。」

紗夜「半分？」

司「ああ。残り半分はFUTURE WORLD FESからだ。」

燐子「成る程……」

俺はこんな時のために持ってきておいた菓子を出した

面倒だったから、取り合えず一番高いやつを買っておいた

友希那「これは？」

司「初対面の挨拶兼フェスの祝い兼広町たちをよろしく頼む、ってとこだ。」  
友希那「かなり兼ねるわね。」

リサ「つて、これ、かなり高級なやつじゃん！」

あこ「あこも見たことある！これ、ひと箱で何万円とか……」

今井リサははれ物にでも触るような手つきで

菓子を受け取った

何をそんなに気にすることがあるんだ

燐子「あの、いいのでしょうか……？こんな、高級なものを……」

司「構わん。金なんて腐るほどある。」

紗夜「……待って、まさか。」

リサ「どうしたの？紗夜？」

紗夜「あの、お名前は柘木司さん、でしたよね？」

司「ああ、そうだ。」

俺は氷川紗夜の問いかけに頷いた

すると、見る見るうちに

湊友希那を除いた4人の顔色が変わった

リサ「柗木司つて、あの!?!」

友希那「……有名なの?」

あこ「確か、すごい実業家で大金持ちだつて!」

燐子「世界的に見ても、34%の財に息がかかつてると言われるほど、だと……」

友希那「え?」

紗夜「政府ですら彼の意向には逆らえず、彼の所有する土地は治外法権のようなものになつていたりとか。」

友希那「そんな事あるの?」

湊友希那も目を丸くしてる

まあ、俺の名前を知つてる人間は珍しくない

だが、顔まで知つてる人間というのは一般人にはそう多くないだろう

リサ「TOKOに加えて、柗木司まで……月ノ森ヤバすぎ。」

紗夜「流石に驚きました。」

あこ「あこはもう、目が飛び出すと思ひましたよー。」

友希那「なんで、そんな人物がこのお花見に参加しているの?」

燐子「確かに、もっといい庭園とか、そんな場所してるものだと……」

5人は疑問のまなざしを向けて来た

まあ、普通ならそう思うよな

司「広町に呼ばれた。」

紗夜「広町さんに？」

リサ「でも、それで来るような人なの？」

司「恋人の頼みだ、そりや来るだろ（泣き替しだったが）」

ロゼリア「彼女!？」

司「？」

5人が突然、驚きの声を上げた

俺は首を傾げた

あこ「柗木くんって彼女いたんだ！」

リサ「へえー!意外ー!」

司「まあ、意外と言えば意外だな。」

リサ「まあ、座りなよ！」

司「いや、俺は——」

リサ「いいから☆」



俺は半ば強引に座らされた  
なんでこうなった

リサ「できでき、彼女のなんで好きになったの？」

司「どこが……？」

燐子「？」

どこが、と言われると

考えたこともないな

今一度、考えてみるのもいいだろう

司「あえて言うとするれば、広町だから、だな。」

リサ、あこ「きゃー！／＼／＼」

友希那「うるさいわよ、2人とも！」

リサ「だつてさ、友希那ー！」

あこ「シンプルに一番うれしい言葉ですよ！羨ましいなー！」

今井リサと宇田川あこのテンションが高い

他の3人がついて行けてないな

紗夜「あなた程の人なら、女性なんていくらでも寄つてきそうなのですが。」

司「興味もない。」

燐子「それって、彼女さん以外に興味がないととっても……？」  
司「構わん。」

リサ「うつわ、イケメンでお金持ちで一途とか最強じゃん！」  
あこ「かつこいいー！」

氷川紗夜と白金燐子が対応しだした

湊友希那はまだ若干ついて来れてないが

司（ん？）

後ろから視線を感じる

俺は後ろを見て、出所を探した

司（……何してるんだ？）

視線の正体は広町だった

顔を赤くしながら、俺の方を見てる

リサ「ねえ、柊木君！」

司「なんだ。」

リサ「柊木君的に彼女の一番かわいいところってどこかな!？」

あこ「あこも聞きたい！」

司「広町の一番かわいいところ？そうだな……」

俺は少し考えた

いくらでも選択肢はあるが

多分、一番はこれだな

司「からかい甲斐があるところだな。」

友希那「からかい甲斐？」

司「ああ。この前、あいつが急にキスをしてきたときにあつたことだが。」

ロゼリア「キス!？」

司「なんだ？」

紗夜「い、いえ。」

リサ「続けて続けて！」

司「広町がしてやったりみたいなの顔してたから、思いつき顔を引き寄せて——」

七深「——わー!!!／／／」

司「ん? どうした？」

俺が話していると、広町が話に割って入ってきた

俺はそれをやけながら眺めた

七深「柊木君、喋り過ぎだよ!／／／」

司「事実だろう?」

七深「うっ、そ、それはそうだけど……」

広町はモジモジしながら小さな声で喋ってる

俺は追い打ちをかけることにした

司「あのときは可愛かったぜ？強気な態度から段々、弱気になって行って、最後には

七深「柊木君、ステイー!!」

司「ははは！いい顔だな、お似合いだぜ？」

七深「むうー！」

広町は広義の視線を向けると同時に

俺の腕を掴んだ

司「なんだ？」

七深「ついて来て！」

司「まだ話してる途中なんだが？」

七深「柊木君は何言うか分からないからだめ！」

そう言つて、広町は俺を立ち上がらせた

そして、引っ張つてきた

司「まあ、こんな感じだ。可愛いだろ？」

リサ「そ、そうだね！（ああ……）」

あこ「か、可愛いね！（柊木君って……）」

紗夜（ドSなのね。意外でもないけれど。）

燐子「き、キス……」

友希那「さ、最近の高校1年生は進んでるのね……」

リサ（友希那が純情でかわいい。）

俺たちはロゼリアの5人から離れていった

俺は広町に引つ張られ

誰も寄り付かない物陰に来た

司「———なんでこんな所に来たんだ？」

七深「……」

司「広町？」

七深「んっ／＼／」

広町は突然、唇を重ねて来た

そして、3秒ほどして、離れていった

司「どうしたんだ？」

七深「だって、柗木君があんな話するから……」  
司「？」

七深「キス、したくなっちゃったんだよ……」

司「……へえ。」

俺は少し笑いながら

広町を見た

広町は俺をウルウルした目で見てる

七深「柗木君からも、キスして……？」

司「ふーむ、どうするか……」

七深「え？」

俺は考えるそぶりを取った

すると、広町の顔色が変わった

七深「して、くれないの……？」

司「そうだなあ、もう一回、俺好みにねだれたらいいぞ。」

七深「……」

俺がそう言うのと広町は顔を赤くしてうつ向いた  
スカート握って震えてる姿は何とも愛らしい

そう思っていると、広町が顔を挙げた

七深「柗木君の、ここに欲しいよお……こ／＼／＼」

司「!!」

七深「んんっ！／＼／＼（ふ、深い！／＼／＼）」

広町がそう言った瞬間

俺はすぐさま、広町にキスをした

さつきよりも深く、長く

流石の俺も息が苦しい

時間にして10秒後、俺達は離れた

すると、広町はその場に座り込んだ

七深「はあはあ……／＼／＼」

司「中々、弁えてるじゃないか。柄にもなく取り乱したぜ。」

七深「……あ、あんなのが／＼／＼」

広町は顔を抑えながら

小さな声でつぶやいている

聞こえてるんだがな

司「どうだった？広町が渡してきた漫画に載ってたんだが。」

七深「ほ、本当に、き、気持ちよかった……」

広町は恥ずかしそうにそう言った

こんな姿を見てると、なにか湧き上がってくるものがある

七深「柗木君に支配されてる感じがして、それがなんだか、気持ちよくて、それで……」

司「……」

七深「柗木君……？」

こいつは俺の感情を乱す天才か

なんか色々なものが込みあがってくるぞ

落ち着け、クールダウンだ

俺は自分にそう言い聞かせた

司「……それは、よかったな。」

出た言葉はひどく棒読みだ

それだけ心の余裕がない

七深「ねえ、柗木君……？」

司「……なんだ。」

七深「もう一回、欲しい……」



司「っ!？」

七深「もう一回、私を支配して……？／＼／＼」

その時、俺の中で何か切れたような気がした

それが何かなんて、どうでもいい

俺がとるべき行動は一つだ

俺は広町を壁に追い詰めた

司「…… 今度は本気で行くからな。」

七深「く！／＼」

それからの事はよく覚えてない

ただ、終わった後の広町の表情を見る限り

濃密な時間を過ごしたのは、確かだ

## デート

広町と交際を始めてから少し経ち、

季節は秋から冬となり、今日は12月24日

世間はクリスマスで盛り上がりを見せている

外は恋人やら男女のペアが多い

無論、俺も広町という、だが……

七深「——シロちゃん達あっちに行つたよ、柗木君。」

司「……俺達は何をしてるんだ？」

七深「勿論、尾行だよ。」

俺は何故か十条と倉田を尾行してる

横では広町が楽しそうにあいつらの方を見ている

本当になんでこんなことになつたんだ

七深「クリスマスにあの2人がデート……絶対に面白いよ！」

広町の目が輝いてる

確かにあの2人は面白いだろうが、

別に尾行する必要はないだろう

司「まあ、お前が楽しそうだし付き合ってやる。」

七深「やった〜！」

司「あんまり大声出していると十条に気付かれるぞ。」

七深「あつ。」

俺がそう言うのと、広町は両手で口を塞いだ

一応、可愛さの評価は100点をくれてやろう

まあ、尾行する者としては0点だが

司「この距離なら気付かれないが、もう少し近づいたら隠密を心掛けるんだな。」

七深「りよ、了解（ガチだ。）」

俺達はそれから歩きだし、

十条、倉田との距離を少し詰めた

“カグヤ”

今日は倉田さんとのデートの日

色々な準備を積んで、備えは完璧

司さんにも協力してもらったし、絶対に大丈夫だ（司への信頼100%）

ましろ「十条君？」

カグヤ「どうかした？」

ましろ「返事がなかったから、大丈夫かなって。」

カグヤ「大丈夫、倉田さんに見惚れてただけだから。」

ましろ「っ！／／／」

今日の倉田さんはすごくお洒落だ

薄くお化粧をしてて、髪もいつもより綺麗で

桐ヶ谷さんが仕立てたと言う青色ベース洋服もすごく似合っていて、いつもの可愛らし

さも残しつつ、大人のような美しさも感じる

ましろ（よ、よかった。私、変じゃないんだ……：／／／）

カグヤ「本当によく似合ってる。横で歩けることが嬉しいよ。」

ましろ「そ、そんな！／／／十条君の方が、その、かっこいいよ……？／／／」

カグヤ「ありがとう、倉田さん。」

倉田さんの変化は見ていて楽しい

まるで小動物のようにワタワタしてて、

心音も大きくてよく聞こえてくる

ましろ「い、行こっか／／／」

カグヤ「そうだね。倉田さんに恥を搔かせないように頑張るよ。」

そう言つて、

僕と倉田さんは手を繋いで、

クリスマススムードの街へ繰り出した

“ 司 ”

七深「お、おゝ……」

2人の様子を見て、広町はそんな声を上げた

こつちが恥ずかしくなる会話をしてやがるな

司「上手くいつてるようで安心だな。」

七深「それにしても、今日のシロちゃんは特に可愛いね。」

司「そうだな。」

いつもとイメージが変わるな

まあ、口を開いたらいつも通りなんだが

見た目だけなら芸能人や名家の令嬢に見える

桐ヶ谷透子、いい仕事をしたな

七深「……ふーん。」

司「なんだ。」

七深「横に彼女がいるのに他の子のこと可愛いって言うんだ。」

司「……………」

「広町はこつちをジトーつとした目で見てる

その様子を見て俺は溜息をついた

全くこいつは……………」

司（面倒な女だな。）

七深「むう……………」

司「ほら、行くぞ。」

七深「……………分かったよ。（うう、怒ったかな……………」）

司「……………」

なんか、落ち込んでやがるな

マジで面倒な女だな

俺はそんな事を思いながら、

広町をこつちに抱き寄せた

七深「!／／／」

司「残念ながら、俺はお前以上の女を見たことがない。そして見る予定もない。分

かったか？」

七深「柊木君……………／／／」

司「お前は笑つてろ。落ち込んだ顔は絶望的に似合わん。」  
俺はそう言ったあと広町を離れた

一瞬で元通りになったな

扱いやすいと言うかなんというのか

そこがいい所でもあるんだがな

司「今日、新しいピアス付けてるな。似合ってる。」

七深「き、気付いてたんだ……」  
／／／

司「当り前だ。」

十条と倉田の方を確認すると、

もう結構な距離が空いてる

これなら多少大胆に動いてもいいだろう

司「少し飛ぶぞ。」

七深「うん！／／／」

俺は広町を抱え

ジャンプして壁を蹴り、建物の屋根に乗り

尾行を再開した

“カグヤ”

僕と倉田さんは近くの商業施設に来た

ここにはたくさんのお店があつて、

女の子と出かけるのにはいい場所だつて、

モルフオニカのみんなに聞いた

今はその施設にある雑貨屋さんのいる

ましろ「これ、すごく可愛いね。」

カグヤ「どれかな？」

ましろ「これ！」

倉田さんはティーカップを手を持っていた

モルフオ蝶を模したデザインに丁度いいサイズ

カグヤ「まるで、倉田さんのためにあるようだね。」

ましろ「え？そうかな？」

カグヤ「僕はそう思ったかな。折角だし、プレゼントするよ。」

ましろ「！」

僕は倉田さんの手にもってるカップを取った

僕には少しだけ小さいけど、倉田さんにはぴったりだろう



本当に運命の巡り合わせだ

ましろ「そ、そんな、悪いよ……」

カグヤ「僕が買いたいんだ。また、倉田さんとティータイムでもと思つてね。」

ましろ「!／／／」

カグヤ「ほら、行こう。」

ましろ「うん／／／」

僕は倉田さんと一緒にお会計に行つた

また、2人でする楽しみが増えた

“司”

あいつら、マジで仲が良いな

元を辿れば似た者同士なわけだし、

相性がいいのは明らかなんだが

それにしても、運命かっつてくらい噛み合つてる

司「広町は、運命を信じるか？」

七深「え〜?それって、私達のことかな〜?／／／」

司「今回は十条と倉田のことだ。」

俺は流れをぶつた切るようにそう言つた

こいつ、浸りだしたら長いからな

しかも回りが全く見えなくなる

七深「あ、そっちかく。うくん、あの2人は確かに奇跡的な噛み合いかたしてるよね。」

司「だよな。」

ガキどもが幸せそうでいい事だ

俺が望んだのはこの風景だったのかもしれない

生きてる間に見れてよかった

司「……ふっ。」

七深「どうしたの？」

司「いや、なんでもない。」

七深（終木君、なんだか嬉しそうだなく。）

こいつらは何の心配もない

幸せな未来がハッキリと見えてくる

司「行くぞ、広町。」

七深「うん〜！」

司「バレるぞ。」

それから俺達は尾行を続け  
行った場所で俺達は俺達で楽しみ  
時間は過ぎてった

“カグヤ”

時間が経って、陽が落ちて

僕達は商業施設から外に出た

周りはこちらからがクリスマスマス本番とでも言うように男女のペアが増え始めている  
そんな中、僕達は夜景が反射する川を眺めてる

カグヤ「——あの、倉田さん。」

ましろ「どうしたの？」

僕が呼ぶと、倉田さんはこつちを見た

遠くからの街の光に照らされて

僕は一瞬、倉田さんに見入ってしまった

ましろ「十条君？」

カグヤ「あ、ごめんね。」

ましろ「大丈夫だけど、どうしたの？」

カグヤ「実はね、その、プレゼントを用意したんだ。」

ましろ「え？でも、さっき……」

倉田さんは混乱してる

僕は鞆に入れてある箱を出した

カグヤ「これ、なんだけど。」

ましろ「これって…… ネットクレス？」

カグヤ「うん。」

これは司さんに協力してもらって

職人さんにオーダーメイドで作ってもらった

倉田さんに合わせるためだけに作ってもらった

ましろ「わ、私には勿体ないよ……！」

カグヤ「ううん、そんな事ない。僕は倉田さんに付けていてもらいたいんだ。」

ましろ「……」

カグヤ「貰ってくれるかな？」

倉田さんの感情が乱れてる

嬉しいとか恥ずかしいとか不安とか

色々な感情が渦を巻くように混在してる

ましろ「その、十条君に付けてもらいたい／＼／＼」  
カグヤ「…… うん、分かった。」

そう言うのと、僕たちは向かい合った

そして、倉田さんの首の後ろに手を回した  
すごく緊張する

こんな緊張、生まれて初めてかもしれない  
カグヤ「じゃあ、付けるね。」

ましろ「うん……／＼／＼」

手が震えてる、心臓がうるさい

倉田さんの顔がすぐ近くにある

色々なことに心を乱されてしまう

でも、僕は何とかネックスをつけた

カグヤ「うん、やっぱりすごく似合ってる。」

ましろ「じゅ、十条君……？／＼／＼」

カグヤ「？」

倉田さんの方を見ると

何か、僕の方を見る

その目は何かを期待してるかの様で  
音でもそれを表してる

ましろ「私、十条君が大好き……………  
／／／

カグヤ「僕も。」

倉田さんはそう言った後、

僕の方に近づいて来た

倉田さんの顔は赤くて、瞳は潤んでてすごく綺麗だ

ましろ「だから、その、わがままなんだけど／／／」

カグヤ「？」

ましろ「キス、して欲しい……………  
／／／

カグヤ「え？」

僕はついそんな声を上げてしまった

耳は良いから聞き間違えたりしない

間違いなく、キスと言った

それで僕の心臓は激しく揺れ動いた

ましろ「ダメ、かな……………」

カグヤ「……………ダメじゃないよ。」

ましろ「!／／／」

僕は倉田さんの目をまっすぐ見た

正直、どうすればいいか分からない

けど、今に従えばできる気がする

カグヤ「行くよ。」

ましろ「うん……／／／」

僕は倉田さんと唇を合わせた

柔らかい感触と温かい口内

それに、心を満たすこの心地よさ

これが、幸せなんだろうか

ましろ「チュ……んっ……／／／」

カグヤ（倉田さん……）

ましろ「!／／／」

僕は倉田さんを抱きしめた

冬の夜なのに暖かい

倉田さんと今の関係になった日を思い出す

ましろ「ありがとう、十条君!／／／」

カグヤ「僕も、嬉しかったよ。」

抱きしめる力を強めた

倉田さんの存在を確かに感じられる

今はこの幸せを噛み締めよう

そう思い、僕達はしばらく抱き合ったままだった

“ 司 ”

七深「わ、わあ……／＼／＼」

司（ふむ、ちゃんと渡せたみたいだな。）

広町は恥ずかしそうに眼を隠してる

俺はあいつらの様子を確認し、

少しだけ笑った

司「それで、いつまでそうしてるんだ？」

七深「い、いや／＼／＼あんまりにもすごくて……／＼／＼」

司「別にお前もあんな感じだろ。」

七深「するのと同じく見るのは違うんだよ！／＼／＼」

広町は顔を真っ赤にしてそう言ってくる



のんきに恥ずかしかつてやがるな  
まあ、それも今の内だが

司「おい、広町。」

七深「え、なに——んんっ！／＼／／」

俺は広町が振り向いた瞬間に唇を奪った

広町は最初こそジタバタしてたが

少しすると大人しくなった

七深「ど、どうしたの〜……？／＼／／」

司「あいつらにあやかっっておこうと思つてな。ほら、これやるよ。」

七深「え……？／＼／／」

司「付けたければ付けろ。まあ、どうせまた渡すがな。」

俺は広町に指輪を渡した

これはマーキング的な意味がデカい

他にくれてやるわけにはいかないんでな

七深「ぜ、絶対付けるよ！／＼／／絶対絶対！／＼／／」

司「必死だな。」

俺は呆れたような声でそう言った

まあ、この喜びようなら渡した甲斐もあるか

司「じゃあ、行くぞ。」

七深「え、どこに？」

司「俺の家。クリスマスは24の晩から25の晩まで過ごすものだ聞いた。」

七深「ふえ……？ // // (そ、それって…… // //)」

俺は広町の手を取った

だが、歩こうとすると広町は動かなかった

司「なんだ？」

七深「あの、それって、つまり、そういう事……？ // //」

司「……？ (何のことだ。)」

七深「その、営みと言うか…… // //」

司「……」

こいつは何を言ってるんだ？

別にそんな意図は全くなかったんだが

俺は少しだけ考えた

司「お前が望んでるなら。」

七深「! // //」

司「ほら、言ってみろよ。」

俺がそう聞くと、広町はうつ向いた

そして、数秒の時間が経ち

俺の方に近寄り、もたれ掛かってきた

七深「……望む／＼／＼」

司「ふっ、可愛い女だ。」

七深「わっ／＼／」

俺は広町を抱き上げ、

昼間のように壁を蹴って建物の上に乗った

そして、家の方を向いた

司「精々、良い声で鳴く事だな。七深。」

七深「くっ！／＼／」

俺は七深に笑みを浮かべながらそう言い

家に向かって走ったり、

建物と建物を飛び越えたりした

さて、七深はどんな風に乱れるのか

俺はそれが楽しみで笑いが止まらなかった

## カップルの雑談

七深と恋人になって半年が経った

俺達は2年になり

生徒会長になったりして学生生活を送ってる

司「——ふう……」

色々と状況は変わってるが

俺は相変わらず、仕事に精を出してる

殺し屋はやめて仕事の効率が上がって、年収はかなり上がった

まあ、元から必要ないくらいあったんだが

七深『ひ、柊木君……』

司「七深か？入っていいぞ。」

仕事が一段落したころ

部屋の外から七深の弱弱しい声が聞こえて来た

俺は取り合えず、部屋に入れたが……

なんか元気がないな、どうしたんだ？

七深「仕事、終わってる……？」

司「ああ、今ちようどな。どうした、元気がないみたいだが。」

七深「ちよつと……いや、かなり大変なことになつちやつて……」  
司「？」

いつも雰囲気が緩み切つてる七深からは考えられないな

マジで深刻な事なのか

最も、俺に解決できない事なんて早々ないだろうが

司「なんだ、言ってみろ。」

七深「……ちやつた。」

司「？」

七深「妊娠……しちやつた……」

七深は消え入りそうな声でそう言った

妊娠、つて事は俺の子か

こいつには俺以外の相手なんていないしな

司「そうか。」

七深「やつぱり、まだ学生だし、墮ろしたほうがいいのかな……」

司（墮ろす？）

七深「柗木君にも迷惑かけちゃう……」

司「なぜ、そんな話になってる？」

七深「え……？」

こいつは何を言ってるんだ？

そういう行為をすれば、子供が出来る確率がある

そんな単純な事が分からない俺ではない

こういうパターンも勿論、考えてる

司「お前が学校をやめたくない、今の生活を続けたいならそうすればいい。費用も俺が出す。だが、そうではない場合の事も俺は考えてる。」

七深「そうではない場合って……？」

司「簡単な話だ。お前と俺が結婚すればいい。」

七深「……！！／／／」

俺がそう言うのと、七深は顔を紅潮させた

こいつは何を重く考えてるんだ？

学生の時に妊娠して困るのは普通の学生の話だ

俺にそれが当てはまるわけがない

司「俺と結婚すれば、お前は働かなくても生活を保障され、子供も安心して育てられ

る。何かしたいことがあるれば家政婦やベビーシッターでも雇えばいい。あの学校に通い続けたいなら、俺の力でどうにでもなる。お前が損をすることはない。」

七深「そ、そうなの!?!」

司「当たり前だ。俺をそこら辺の男と一緒にするな。お前を一生遊ばせるくらいの金があるんだぜ?」

全く、心外だな

俺が愛する女一人養えない甲斐性なしとでも思ったか?

残念ながらそうじゃない

司「七深、結婚するぞ。」

七深「!//」

司「ただ、結婚指輪は給料3か月分と聞く。俺の給料3か月分になる指輪など存在するのか疑問だが、まあ、見つかるだろう。」

七深「その心配、なんだね……//」

司「後はお前の親への挨拶だ。結納金はいくらでもいい。行くぞ。」

七深「え、今から!?!」

司「こういうのは早い方がいい。妊娠しているならなおさらだ。」

俺はそう言いながら七深の手を引いた

だが、動かない

後ろから引つ張られ、足を止められてる

司「どうした？」

七深「え、えつとー、ちよつとそう言うのは早いんじゃない？」

司「何故だ？お前は妊娠してる、俺にはお前と婚姻関係を結ぶ意思がある。ならばは行動に移すだけだろう？」

七深「い、いや、だから、その……」

七深は目に見えて慌ててる

そんな様子を見て、俺からは少し笑いが漏れた

司「くくつ……！」

七深「え？」

司「ははは！引つかかったな、七深！」

七深「なっ!？」

俺は笑いながらそう言った

この辺で種明かししよう

まず、七深の話は全部嘘だ

大方、俺が慌てた様子を見たかつたんだろう



七深「あく!! 騙された〜!!」

司「お前の心音と呼吸音で最初から気付いてたが、あえて乗ってやったんだ。」

七深「むううう〜!!」

七深はこつちを睨みながら声を上げてる

なんというか、愛らしいな

からかった甲斐がある

司「だが心配するな。お前と結婚する気があるのは本当だ。」

七深「そ、そこは別に心配してないよ〜! // //」

司「ははは、そうか。」

七深「嬉しいのに、複雑だよ……」

司「まあ、そう言うな。俺は俺でシヨツクは受けてるんだぜ?」

七深「え——っ!?! // //」

俺はそう言った後

七深を壁際に移動させ、顔の横の壁に手を置いた

さて、こいつをどうしてくれようか

七深「ひ、柊木君……? // //」

司「折角、お前と結婚する口実が出来たと思ったんだがな。」

七深「え……？／＼／」

司「なあ、実は出来てたりしないのか？」

七深「うひゃあ!!／＼／」

俺は七深の下腹部を撫でた

流石の俺も子供の有無は分からない

七深「あつ、ひ、柊木君……っ／＼／」

司「なんだ？」

七深「お腹、撫でるの、やめて……っ!／＼／」

司「なんでだ？」

七深「へ、変な感じ、するからあ……／＼／」

面白いな

嘘の礼にもう少し遊んでやろうか

それとも……

七深「柊木君、子供欲しいの……？／＼／」

司「ああ。」

俺はすぐにそう答えた

もちろん、相手が誰でもいいわけじゃない

七深だから欲しいだけだ

七深「……じゃあ、今から……」  
／／／

司「分かった。」

七深「あくまで練習、だからね……？」  
／／／

司「分かっている。」

それから、俺は七深を寝室に連れ込み

その時点での時間は3時ごろだった

次にそこから出た頃には陽が沈んでいた

何をしてたかは分かるだろう？

司「——と言わうわけだ。」

カグヤ「お、おお……」

ましろ「わ、わあ……」  
／／／

さつきまでの話は、今年のエイプリルフルでの話だ

その話を聞いた十条は驚き

十条夫人は顔を真っ赤にしてうつ向してる

七深「く、詳しく話し過ぎだよ!!」  
／／／

司「ははは、気にするな。」

七深「気にするに決まってるじゃんく!! // //」

七深はこんな感じだ

自分でしたことを恥ずかしがってちや世話ないな

カグヤ「流石は司さん。もうそこまでの進展を……」

司「何も不思議なことではない。」

カグヤ「いえ、僕達なんてまだまだ考えられません。」

ましろ「そ、そうだよね…… // //」

司「そう……か？」

十条夫人の顔はそう言っていないが

当の本人は気付いてないな

心音で察せないのか? こいつ

司「苦勞が絶えないな、十条夫人。」

ましろ「あの、その呼び方やめてください…… // //」

司「何故だ? 何も間違っていないだろう?」

ましろ「ま、まだ結婚してませんから…… 早いです…… // //」

こいつらが別れる未来は見えないし

どのタイミングで呼ぶかなんてどうでもいいと思つてた  
だが、意外とそうでもないらしい

七深「ちよつと気が早いよ。」

司「なら、数年後の楽しみとして取つておくか。」

カグヤ「それでは、僕も広町さんを奥様と呼んだ方がいいのでしょうか？」

司「ああ、構わん。」

七深「構つてよ!?!?!」

七深、うるさいな

今さら気にする事でもないというのに

ましろ「それにしても、柊木君つてすごい。もう、ななみちゃんを養えるなん

て……」

司「それを言えば、十条は次期社長だ。ピアノで金を稼ぐこともできる。倉田を養う  
くらいはできると思うが。」

カグヤ「勿論。今は経営を学んでいて、卒業すればすぐにでもという話になつていま  
す。」

七深「へ〜!もう動いてるんだね〜!」

カグヤ「倉田さんの恋人として恥ずかしくないようにしないのですから。」

十条、横のお前のよm…… 彼女を見る

すごい緊張した面持ちだぞ

鈍感が良いが、気付いてやれよ、全く……

司「おっと、もうそろそろ時間だ。」

カグヤ「これから何か予定でも？」

司「ああ、七深の家に行く。」

カグヤ、ましろ「!？」

俺がそう言うと、十条夫婦は目を見開いた

何をそんなに驚くことがあるんだ？

ましろ「な、何しに行くんですか……？」

司「決まってるだろ。七深をもらい受けに行く。」

七深「もう〜！／／直球すぎだよ〜！／／」

司「つつくな。」

七深は俺の体を指でつついてくる

痛くもかゆくもないが、うざい

だがまあ、照れ隠しだと思えば、可愛いものか

司「じゃあ、俺達は行くぞ。お前たちはお前たちで頑張るんだな。特に十条。」

カグヤ「は、はい(?)」

司「じゃあな。」

七深「お母さんとお父さん、どんな顔するかな?」

司「俺の顔を知ってたら、寿命が10年は縮むだろうな。」

俺はそう言いながら歩いた

七深は楽しそうに俺の横を歩いている

その様子を見て、小さく笑った

ましろ「ねえ、十条君、デート行かない……………? / / /」

カグヤ「え? 別にいいけど、どこに行くの?」

ましろ「えっと、お泊り、かな……………? / / /」

カグヤ「?」

なんか後ろから妖しい気配を感じたが

もうあいつらの問題だからとスルーし

俺はそのまま七深の家に車で移動し

この後すぐ、七深を嫁にすることが決定した

俺と七深が結婚したのは、この2年後だ

## 彼氏の話

今日はシロちゃん、三久さん、響さん、龍奈さんと集まってる  
その理由は恋愛相談……

もとい、最近は恒例になった彼氏自慢会

今回も私とシロちゃんは自分の彼氏を自慢する

三久「——すっかり、これも恒例になりましたね。」

龍奈「ははは！いいだろ、楽しいしな！」

七深「ありがとうございますす〜！」

ましろ（あ、相変わらず、このメンバーに慣れない……）

響「じゃあ、始めよつか〜！」

響さんの宣言で話が始まった

さあ、まずは何から話そうかな〜

話せることが多すぎて絞れないんだよね〜

響「七深ちゃんは最近どう？」

七深「変わりありませんよ。終木君、私のこと大好きなので〜！」



響「うん、知ってる。仕事の空き時間の雑談も七深ちゃんの事ばかりだしね。」

龍奈「俺とも可愛さについて語り合ったな。」

そ、そんな事してたんだ

龍奈さんとは男友達って感じだし

そういう話もしたりするのかな

三久「倉田さんはどうですか？」

ましろ「えつと、十条君はいつも優しく、紳士的で、ずっと素敵です……」

三久「まあ、彼ならそうでしょう。柊木君とは安心感が違いますね。」

響「司は基本的には性格悪いしね。」

七深「それは……否定できませんね。」

龍奈（柊木……）

確かに柊木君の性格はよくない

偉そうだし、なんでもハッキリ言いすぎるし

七深「この前も、柊木君と付き合いたい子が私を馬鹿にしてきたんですよ。」

響「そうなの？司、あれで人気あるからね。で、どうなったの？」

七深「それにムカついた柊木君が、『黙れブス。身の程をわきまえて、その汚い顔を

世間に晒さないように最大限努力しろ。』って言ったら、その子は学校に来なくなりまし

た。」

龍奈「それは、悪だな。」

三久（そう言えば、この間、どこかの会社が潰れたと聞いたような……。いえ、考えるのはやめておきましょう。）

ましろ（柘木君、やっぱり怒らせちゃダメな人だ……。）

柘木君は気に入った人以外にはあんな感じだしね

あの子の顔が別にそんなに悪くなかったことは別として

あの時はスカッとしたな

響「カグ君もましろちゃんの事になったらそんな感じだけだね。」

ましろ「え、そうですか？」

響「この前とか、縁談の話を通った時、相手があまりにしつこくて、相当酷い断り方をしたらしいよ？」

ましろ「え……？」

これには私も驚いた

十条君と言えば、誰にでも優しくして

それこそ、柘木君とは真逆の存在なのに

響（まあ、あれは令嬢側が肌の露出とかボディタッチが多くて、『下品な人だ。』って

振っただけなんだけど。」

龍奈「珍しいな。どんな相手にでも優しく対応しそんなもんだが。」

七深「正義の味方って感じですしね。」

ああ言う所、少しは柘木君に見習ってほしいけど

今さら十条君みたいになっても……

うん、なんて言うか気持ち悪いね

性格の良い柘木君とか柘木君じゃないや

三久「広町さんも、性格の良い彼氏が羨ましいと思う事はないのですか？」

七深「ないですね。正確が悪いお陰で……」

ましろ「？」

七深「い、いや、なんでもないよ」

危ない危ない

危うくまた自爆するところだった

最近、なんだかポンコツキャラになってるけど

基本的にはやればできる子だもん！

三久「ああ、夜のお話ですか。」

七深「!?」

響「あく、なるほどね。」

龍奈「性格が悪い方が良いってわけだ。」

ましろ「な、ななみちゃん……」

七深「ま、まって!?ご、誤解だよ〜!」

なんでバレたの!?

あ、天空時さんはそつちのスペシャリストだった

相手の考え読むのとか、お手のものか……

響「あはは、そりゃそつか!七深ちゃん、マゾだもんね!」

ましろ「あ、十条君に聞いたことあるかも。」

七深「なんで喋っちゃってるの!?!/!/」

ましろ「あの柗木君が楽しそうにしてるって、十条君は嬉しそうに話してたよ?」

三久「楽しんでるんですね。」

柗木君、そういうところあるしなあ……

デリカシーなんて言葉は消し炭にしてて

良くも悪くも気にする性格じゃないし

響「司曰く、『調子に乗った態度から大人しくなっていく様が面白い。』らしいよ!」

龍奈「楽しんでるな。」

七深「も、も〜!／＼／＼」

私も喜んでるから何も言えない……!

てゆうか、なんで自分のこんな話に!?

恥ずかしいってレベルじゃないんだけど!?

七深「し、シロちゃんも、なんかあるんじゃないの〜?」

ましろ「ええ!?!／＼／＼」

龍奈「いや、2人はまだだろ。」

三久「月ノ森が誇る清純派カップルですよ?」

響「カグ君にもましろちゃんにもそんな度胸ないでしょ。」

七深「ええ……?」

2人のイメージ、これはこれでひどいね

高校生なんだから、そんな話の1つや2つくらい……

ましろ「……っ／＼／＼」

龍奈、三久、響「え?」

七深「……え??(え、まさか?)」

響「ま、ましろ、ちゃん?えーつと?」

あれ?まさか?

まさか、ありえちやうの？

十条君とシロちゃんだよ？

へタレ同士だよ？

なのに、あるの？

響「もしかしてなんだけどー……やることやっちゃった感じ？」

ましろ「……はい／＼／＼この前の、デートで……／＼／＼」

龍奈「なにい!？」

三久「まさか、あの清純派へタレカップルが!？」

ましろ「清純派へタレカップル!？」

七深「わ、私も冗談で言ったんだけど。」

驚き過ぎて眼球が飛び出るところだった

しよ、詳細が知りたい

七深「な、なんで、そんな流れに……?」

ましろ「えっと、私が十条君にお願いして……ホテルに……／＼／＼」

三久(く……つ!可愛いです……つ!)

龍奈「あの2人がまさかだな。俺の全身の筋肉が驚いて痙攣したぜ。」

七深「ほ、ほんとだ、全身がピクピクしてる……!？」

龍奈さんの身体、どうなってるの？

筋肉1つ1つに自我があるの？

いや、今はそれを気にしてる場合じゃないよ

もつと重要な問題があるでしょ！私の横に！

ましろ「あの日の十条君は、すごく優しかったです……／＼／＼なんども抱きしめ

て、頭も撫でてくれて……／＼／＼

龍奈「七深とはえらい違いだな。」

七深「そんな事ないですよ！偶に撫でてくれます！」

三久「偶になんですわね……」

七深「うう……」

心が痛い……

そう、撫でられるのは偶になんだよ

頻度的には1か月に1回あればいい方……

七深「そうですね…… 柊木君は全然、撫でたり抱きしめたりしてくれないんです

よ……愛してるか聞いてみても『言うまでもない事だ。』としか言ってくれない

し……グスツ……」

龍奈「お、おう。」

七深「好きって言うのは伝わるんですけど、言葉に出してほしい事もあるじゃないですか……」

響「う、うん！あるよねー！全く司ったらー！（ひい、空気が重い重い!!）」

本当に、変な所で鈍感

これなら最初から十条君みたいに鈍感な方がいいよ

日頃そうじゃない分のシヨックだよ

七深「いつか骨抜きにしてやろうと頑張ってるけど、結局はあの理不尽なスペックのせいで勝てないし……いつまで経ってもマウント取れないんですよ!!しかも、それを喜んでるのがちよつと悔しいんですよ!!」

司「……ほう、そんな事を考えてたのか。」

七深「!?」

響、龍奈、三久、ましろ「あつ（察し）」

カグヤ「倉田さん、ここにいたんだ。」

……え、なんで？

なんで、ここに柊木君と十条君がいるの？

今日は、何か予定があるんじゃない……

七深（あつ、その予定が十条君と出かける事か。）



って、こんな呑気に考えてる場合じゃないよ!?

絶対にヤバイじゃん!

なんか、柗木君の後ろに黒いオーラ見えるし!

司「この俺相手に優位に立とうとするとは、中々見上げた根性だ。」

七深「ひ、ひえ……」

司「それ以外にも、面白い話を聞いた。有意義な時間だったぜ?」

七深「あ、え、えつとお……」

私は4人の方をチラツツと見た

けど、皆、私達から目をそらしてる

触らぬ神に祟りなし…… って所だね

まあ、目の前にいるのは、神なんて優しいものじゃないけどね! (自暴自棄)

まして「じゅ、十条君、いつから聞いてたの……?」

カグヤ「えつと、『すつかり、これも恒例になりましたね。』からかな?」

まして(最初から!?)

カグヤ「僕の事を褒めてくれるのはすごく嬉しいけど、少し恥ずかしかったかな、あ

はは。」

最初から聞いてたんだ……

これはもうダメだね（諦め）

司「七深、今日、俺の家に来い。泊りだ。」

七深「え——っ!?!?!」

ましろ「!?!」

柘木君はそう言いながら、私の顔を持ち上げた

目の前には、何とも整った偏差値の高い顔

なんであのスペック持つてて、顔まで良いんだろ

神様をどんなに脅したのかな

なんて、そんな馬鹿なことを考えてしまう

司「…… お前の望むように愛してやるよ。」

七深「あ、う…… / / /」

司「何でも言ってみろよ。」

耳元でそうささやいて来る

頭がボーっとして、魅了される

これをされると、反抗は許されない……

七深「いっぱい撫でて欲しい…… あと、愛してるって言ってみて欲しい…… / / /」

司「ふっ、いいだろう。というわけで、こいつは貰っていく。」

響「はいはい。ついでだし、ここのお金も払ってよー！」  
司「いいだろう。」

そう言つて、1万円札をテーブルの上に置いた  
こんなにお金かかってないけど

どうせ、財布の中にはこれしか入ってないか

基本的にはカードで払う人だし

カグヤ「じゃあ、倉田さんも行こう。」

ましろ「え？」

カグヤ「昨日、Morfonicaの歌詞のピアノアレンジが出来たんだ。是非、聞  
いてみてくれないかな？」

ましろ「ほんとに？じゃあ、今から行こ！」

カグヤ「と言うわけで、僕達もお暇しますね。」

龍奈「おう、お疲れー。」

シロちゃん達も行くんだ

まあ、向こうは健全そのものだから

そもそも種類が違うか

司「行くぞ、七深。」

七深「う、うん……」

司「…… 帰ったら、まずは何をするか。今日は長くなりそうだ。」

七深「うっ！／＼」

私は柘木君に店から連れ出され

2人で柘木君のマンションに行った

それからの時間は長くも短くも感じて

ただただ幸せで

翌日には、かなりだらしない顔を晒すことになった

## 授業参観（？）

この世には授業参観なるものがあるらしい

実際に授業を見て、分析し、改善の意見を出す

こう書けば意義があるように思えるが

実際問題、そう思ってる保護者は多くないだろう

って、こんな前置きも仕方ないか

カグヤ「——司さん、倉田さんたちの練習を見に行きましょう。授業参観（？）です」

司「は？」

今の問題はこいつだ

どうやら、授業参観（？）をしたらしい

いつもの無表情の癖に目が輝いてやがる

カグヤ「今日、倉田さんたちはバンドの練習があるらしいです。」

司「知ってる。」

カグヤ「練習にはいつでも来て良いと言われています。」

司「そうだな。」

カグヤ「そして、司さんは今日、お休みです。」

……子供に小遣いを強請られてる気分だ

行きたければ1人で行けばいいものを

なんで俺まで

カグヤ「行きましょう。」

司「1人で行けばいいだろう。」

カグヤ「1人で行くにはちよつと。」

司「……」

あれか

倉田はいるが男女比的にキツイ

そこで、何も気にしない俺を連れて行きたい

そんな所だろう

司「知らん、1人で行け。」

カグヤ「…… 広町さん。」

司「…… (なんだ?)」

カグヤ「司さんが来ないと、泣いちゃいますよ?」

司「…… !」

わ、割とありえる

正直、あり得ること自体がおかしいが  
それでも否定できる確率ではない

司「……チッ。」

俺は軽く舌打ちをして立ち上がった

はあ、結局こうなるのか

最近、こういうパターン多くないか？

司「行くぞ。今すぐだ。」

カグヤ「はい！」

司（たくつ、このクソガキが。）

七深のバンドの練習か

最後に見たのは1年の春ごろだが

どの程度成長してるか、見てやるか

というわけで、七深の家のアトリエに来た

ここにはあんまりいい思い出がない

俺の1つ目の死に場所だからな

流石の俺も入るの躊躇うぞ

司「まさか、またここに來ることになるとは。」

カグヤ「そうなんですか? てつきり、よく來てるのかと。」

司「俺の家に來た方が勝手がいいからな。こっちに來ることはなかつた。」

アトリエのドアは空いてる

まあ、どうせ俺達しか來ないしな

司「入るぞ。」

七深「——えっ? / / /」

司「ん?」

カグヤ(目を塞いだ)

アトリエに入ると、妙に肌色が多かつた

どうやら、着替えをしてたみたいだ(冷静)

司「ふむ、今日は緑か。」

七深「で、出て行って! / / /」

司「何を今さら。」

七深「他の皆も着替えてるでしょ! / / /」

司「俺は気にしない。」



七深「少しは気にして！／＼／」

カグヤ「司さん、一旦出ましよう。(目を塞ぎながら)」

面倒だな

来いと言ったり出て行けと言ったり

全く……

そんな事を考えながら、俺は一旦、アトリエから出された

七深「——ひーいーらーぎーくん!!」

司「なんだ。」

あれから少しして、俺は再度アトリエに入った

するとすぐ、七深が大声で名前を呼んできた

今日もうるさいな

七深「なんで着替えの途中に入って来るの！／＼／」

司「そのバカに練習を見に行こうと言われ、入ったら着替えてた。」

七深「じゃあ、なんでガン見してたの！／＼／」

司「見られ慣れてるだろ。」

七深「そう言う事じゃないよ!!／＼／」

全く分からん

七深の下着姿は何回も見てるし

今さら見られても恥ずかしいことも無いだろ

カグヤ「司さん……」

司「あ、心配するな。倉田は俺の視界に入っていない。」

ましろ「そ、その心配はしてないです……」

司「まあ、後の3人も問題ないだろう。特に二葉つくしは。」

つくし「どういう事!？」

なんか、面倒なことになったな

十条はなんか呆れてるし

透子「それは仕方ない。」

瑠唯「二葉さんに欲情したら犯罪ね。」

司「だろ?」

つくし「それって、私が小さいって事!？」

カグヤ「あ、あはは……(司さん、デリカシー持ってください……)」

ましろ(どんなにスタイルいい人がいても、柊木君は興味持たないだろうなあ。)

てか、本題はこれじゃないよな

俺はあくまで練習を見に来たんだっ

普通に忘れかけてた

司「で、練習はどうなったんだ？」

七深「これから再開だよ……… 全くもう………」

透子「折角2人が来てくれたし、やろつか！」

つくし「小さい、小さい……… 胸が………」

瑠唯「身長もよ。」

つくし「いーわーなーいーでー!!!」

二葉つくしのそんな叫びの後

七深達は楽器を手に持ち、練習を始めた

練習が始まって1時間ほど

演奏を見た感想としては

あいつらの腕はかなり上がっていた

月ノ森音楽祭で聴いた時よりも上だったな

カグヤ「かなりレベルが上がってますね。」

司「ああ、良い感じだ。」

まあ、ある程度は予想通りだがな

七深がいるんだ

このレベルになるくらいは簡単だろう

カグヤ「良い音です。1人1人の技術もさることながら、気持ちもいい。」

司「気持ち、か。」

それも分かるかもしれない

だって、さつきから七深と倉田はこつちをチラチラ見てるし

気持ちで音が変わるというのも納得だ

そんな事を考えてると、あいつらの演奏の音が止まった

終わりみたいだ

七深「柊木君く！どうだったく？」

司「悪くない。腕を上げたな。」

ましろ「十条君、私の歌、変じやなかった………？」

カグヤ「すごく素敵な歌声だったよ。」

ましろ「そ、そっか………  
／／／

透子、つくし（まーたいチャついてるよ。）

瑠唯（まるで小学校低学年の授業参観ね。）

これが授業参観か(?)

頑張った後の七深を見るのは悪くない

七深「柊木君?」

司「なんだ。」

七深「ん!ん!」

司「……?」

七深は俺の前で飛び跳ねてる

なにしてんだ?

練習疲れでおかしくなったか?

七深「頭!撫でて!」

司「ああ、そういう事か。口に出して言えよ。」

七深「察してよ!」

司「俺はエスパージャーじゃない。」

七深「ふあ……  
／／／

俺は七深の頭を撫でた

練習後で汗をかいてるからか、少しじっとりしてる

やっぱり、普通の女にあの練習はハードなんだな

司「汗のにおいする。」

七深「そ、そう言うことは言わなくていいの!! // //」

司「事実だ。あと、俺はそれを悪いと言ってるつもりはない。」

七深「うう：：： // //」

司「なんなら、この匂いには慣れてる。」

七深「わあく! // //」

七深の首元に顔を近づけた

ふむ、いつものだ

七深「デリカシー!! // //」

司「ないのは百も承知だろ。」

七深「流石に女子の汗のにおい嗅がないでよ!! // //」

カグヤ「あれは、いいのかな?」

ましろ「だ、ダメだよ! // //」

カグヤ「さ、流石にしないよ。」

向こうから失礼な声が聞こえるな

まあ、別にいいが

十条は後でデコピンかますか

透子「2人とも、もうその2人持ち帰っていいですよ。」

七深、ましろ「ええ!?!?!」

司「ほう、ちようどいい。」

カグヤ「僕も、丁度良かったです。」

時間的にデートに行くのに丁度いい

今日は時間もあるし

折角だ、十条と倉田も連れてどこかに行くか

司「七深、これから出かけるぞ。十条、お前たちもついて来い。」

カグヤ「どこに行きますか?」

司「それはもう考えてる。時期も時期だからな。七深の水着でも買いに行こうと思つててな。」

カグヤ「それは素晴らしいです!」

七深、ましろ（え、水着買いに行くの!?!今から!?!）

こうなれば決まりだな

桐ヶ谷透子からの許可も出た

カグヤ「よし、行こう、倉田さん!」

司「行くぞ、七深。とびつきり良いの着せてやるよ。」

七深「何着せる気!?!/ / /」

ましろ（十条君、すごく乗り気………/ / /）

透子（ノリノリのイケメンって怖いなー。）

つくし（2人とも、ガンバ!）

瑠唯（……… 苦労してそうね。）

それから、俺と十条はそれぞれの彼女を連れ出した

さて、俺はこれから七深で遊ぶわけだが

水着を着て恥ずかしがってる七深を見るのが楽しみだ



## 悪戯

“七深”

大好きな人と恋人だと、すごく楽しい

触れ合っていると嬉しいし、ずっとドキドキする

けど、その分、嫌なことだつてある

これは、そんな嫌なことの1つ……

七深「—— 柗木君、これは何？」

司「ん？—— つて、なんだそれは。」

七深「なんで、こんな本とDVDがあるの？」

今、私に手に持つてるのは本とDVD

いや、普通の物なら良いんだけど

けど、これらのパッケージには裸の女の人

これはよく聞く、年頃の男子が持つてるのだ

司「知らん。なんだそれは。」

七深「知らないわけじゃないじゃん！柗木君の部屋にあつたんだもん！」

司「そう言われてもな。てか、俺の部屋に勝手に入ったのか。」  
完全にとぼけてる……

むしろ、正直に言ってくれた方が良かったよ

それならまだ納得できたのに……

七深「柘木君だつて年頃の男の子だし、別に悪いとは言わないよ？けど、私以外に、そんな……」

司「そう言われても、心当たりがないんだが。」

七深「そんな事言つて、実はあるんでしょ……？」

司（ふむ、これは面倒くさい時の七深だな。）

柘木君はあくまで冷静

全く嘘をついてるようには見えない

けど、これで油断は出来ない

柘木君、平気な顔で嘘つくし

司「そもそも、俺はお前以外で欲情しない。それはお前がよく知っているだろう。」

七深「うっ、で、でも……」

司「てか、俺がそんな物をどうやって購入するんだ？」

七深「え？」

柗木君にそう言われて、私は首を傾げた  
どうやって、つて

今の時代ならネットでも何でも使えるよね？

司「ネットで買うにしても履歴を見ればわかるし、全世界に顔が知れ渡ってる俺は年齢だつてバレる。どこで買うつて言うんだ？」

七深「た、確かに。」

司「元から、疑うまでもないことなんだよ。」

溜息を付きながらそう言ってきた

でも、なら、なんでこんなものがあるの？

司「そして、なんでこんな物があるかだが。」

七深「！」

司「犯人はかなり限られるな。まずは俺か七深。」

柗木君はそう言いながら立ち上がった

もしかして、本当に違うの？

だとしたら、犯人は……

司「その様子を見る限り、七深はあり得ない。そして、俺も。」

七深「なら、誰が？」

司「俺と七深以外にここに頻繁に入り、尚且つ、こういう状況を面白がる奴と言ったら…… 一人だろ？」

七深「！」

そう言つて、部屋にある棚に手を入れ

その中から、小型の四角い機械を取り出した

カメラ、なのかな？

司「なあ、明石？こんな遊びをして、良い度胸をしているな。」

柗木君が喋ってる間

ずつと、ポケットに入ってる携帯が鳴ってる

本当に響さんなんだ……

何と言うか、納得しちゃったよ……

司「大方、俺の部屋にそう言う本やDVDがあればどんな反応をするか検証する遊びでもしてたんだろう。俺が見つけても七深が見つけても面白い、というわけだ。」

ベキイという音と共にカメラが粉々になった

相変わらず、そんな握力してるんだろ

世界記録の192 kgよりは絶対あるね

本人も強すぎて測れた試しがないって言ってたし



しかも、いつもより機嫌悪い

司「ちなみに、俺はメイドが好みだ。」

七深「……分かった／＼／＼」

司「さて、今日は何時間かかることやら。」

そのまま、私は柘木君に部屋から出された

それからの事は口に出すのは恥ずかしい事をされ

柘木君には一生敵わないと思いい知らされた

“ ましろ ”

ましろ（――あ、あわわ……／＼／＼）

私は今日、十条君のお部屋に来てる

ここに来たのは2回目です

しかも、前に来た時とは状況が違うから、すごく緊張してる

なのに、私はとんでもないものを見つけてしまった

ましろ（え、えっちな本だ……！／＼／＼）

明石さんが、男の子の部屋に行ったらベッドの下を見るんだよって言ってたから見た  
けど

まさか、こんな物を見つけちゃうなんて  
どうしよう、すごくドキドキする……

ましろ（ちよ、ちよつとだけ見てみようかな……）

そんな事を考えて、少しだけ本を開いた

その中には目を伏せたくなるくらい恥ずかしい写真

どの人も、すごくえつちな格好をしてる

ましろ（十条君、こういうのが好きなのかな……？）

読んでみると、結構勉強になるかも

私だって経験が多い訳じゃないし

十条君を満足させてあげられてるかと言ったら、そういう訳でもない

ましろ（こんな風にすれば、喜んでくれるかな？）

つつい、読み込んでしまう

もつと学んでおきたい気持ち強い

けど、彼氏の部屋でこんな本を見てるドキドキもある

ましろ（どうしよう、見られたら引かれるかな／／エツチな子だつて思われるかな

／／）

カグヤ「――倉田さん、どうしたの？ なんだか、変な音が聞こえるけど。」

ましろ「じゅ、十条君!?!?!」

カグヤ「つて、それは……」

十条君が私の手元を見てる

どうしよう、本当に見られちゃった

え、マズいよね、これ?

プライバシーを守らない女の子って思われたり……

カグヤ「その本、どうしたの?」

ましろ「十条君のじゃ、ないの……??!?!」

カグヤ「え?」

ましろ「……え?」

十条君は全く知らないって反応してる

ま、まさか……

カグヤ「そんなの部屋に置いた覚えも、ましてや購入した覚えもないよ?」

ましろ「……」

これ、本気で知らないときの顔だ

十条君は正直だから、よく見たら表情で分かる

私ならなおさらそう



ましろ「じゃ、じゃあ、これは……」

カグヤ「えっと……多分なただけ。」

ましろ「？」

そう言いながら、十条君は本棚のほとんど本の隙間に手を入れた

すると、そこからは四角い機械が出て来た

始めてみたけど、あれ、なんだろ？

カグヤ「小型のカメラだね。変な音が聞こえると思ったけど……まさか、こんなも

のがあるなんて。」

ましろ「小型の、カメラ……!?」

カグヤ「こんな事をする人は、1人しか思い当たらない。ね、明石さん？」

ましろ「！」

その瞬間、部屋にある携帯が鳴った

ほ、本当に明石さんなんだ

即答で名前が出る辺り、信頼ないんだ……

カグヤ「いつの間にこんな物を……全くもう……」

ましろ「あ、え、えっと……／／／」

カグヤ「倉田さんは、それに興味があるの？」

ましろ「!!／／／」

十条君にそう言われて、心臓が飛び跳ねた  
見られてて当然だよね？

だって、思い切り開いて見てたもん……

カグヤ「かなり興味がありそうな音がしてたから。いや、それを悪いというつもりは  
ないよ？」

ましろ「う、ううう……／／／」

恥ずかしい……

て言うか、立場が逆だよね？

普通は女子が言う側だよね？それって

ましろ「…… 十条君は／／／」

カグヤ「どうしたの？」

ましろ「十条君は、興味、ないの……？／／／」

カグヤ「え？」

なんてことを聞いてるんだらう

こんなの、痴女だよ……

で、でも……

カグヤ「今のままで十分だよ。興味云々は程々、かな。」  
 ましろ「そ、そうじゃなくて……！／＼／＼」

カグヤ「！」

私は十条君をベッドに押し倒した

顔に近い、良い匂いがする、体が密着してる

そして、すごくドキドキする

ましろ「私は、興味、持ってほしいの……／＼／＼」

カグヤ「え？」

ましろ「もつと、私にも……え、エッチなことにも、興味持つてほしいの……／

／／

カグヤ「く、倉田さん？」

上手く息が出来なくて、荒くなる

どうしよう、おかしいよ、私

なんだか、ボーつとして……

ましろ「こんな私は、嫌いかな……？／＼／＼」

カグヤ「……いや、そんな事はないよ。僕はどんな倉田さんも、好きだよ。」

ましろ「そっか……そうだよね／／／じゃあ……／／／」

カグヤ「! (い、いきなりだね……)」

ましろ「十条君の、貰うね……? / / /」

それから、私は十条君に顔を近づけて

最初に十条君にキスをしてから

長い時間、愛し合った

## 1か月前

七深「う……っ！」

ある日の朝、私はいきなり気分が悪くなってトイレに駆け込んだ  
ななか分らないけど、すごく気持ち悪い

七深（う、うくん……？）

別に熱があるわけじゃない

体調も、吐き気はあるけどそれ以外は問題ない

なんだろう、これ……？

七深（学校、どうしようかな……）

私は受験しないし、学校はほぼ自由登校

別に休むほどの状態でもないし

何より、残りの司君との学生生活を無駄にしたくない

七深「行こう、かな。」

体調が悪化すれば保健室に行けばいいし

熱もないから行ってもいいよね？

そう考えた私は学校の準備をして  
いつも通りの時間に家を出た

“司”

平日の今日は学校に顔を出してる

別に来る必要はないんだが、七深が来いと言うから来てる  
まあ、可愛いあいつの言うことだ  
聞いてやるのも恋人の務めだろう

七深「——お、おはよ。」

司「やっと来たか、七深。今日は少し遅かったな。」

七深「し、信号に引っかかり過ぎちやってね。」

司「……（なんだ？）」

今日の七深、様子がおかしいな

顔色が悪い、それに心拍数もいつもより多い

それに、学校に来たただけにもかかわらず息を切らしてる

司「おい、七深。」

七深「ど、どうしたの？」

司「お前、体調を崩してるんじゃないか？」

七深「そ、そんなことないよ？大丈夫大丈夫〜！」

司「……………」

…………… 明らかに何か隠してやがるな

これはどうするべきか

デリケートな問題なら俺が触れるべきではない

だが、顔色が悪すぎる

司（取り合えず、今は様子を見ておくか。）

七深「そう言えばね〜。昨日、可愛い猫グッズがあつて〜。」

司（視界にさえ入ってれば、どうにかなるだろう。）

俺はそう考え、取り合えずはいつも通りにすることにした

今日は七深から目を離せないな

〃七深〃

き、気分悪い……………！

そう感じたのは3時間目の授業の途中だった

朝は別に問題なかったのに、急に気分が悪くなった

お腹痛い、頭痛い、寒気する

なんなの、これ……？

七深（うう……）

泣きそうになって来た

なんだか不安になってくる

こんな不調、生まれて初めてだし……

七深（つ、辛いし、保健室行こうかな……でも、周りはみんな受験間近だし……）

司「——おい。」

七深「……！」

私が手を上げるのをためらっていると

司君が声を上げた

それで全員の視線が司君に向いた

司「体調が悪いなら正直に言え。下手な嘘つきやがって。」

七深「っ！」

司「馬鹿め。」

七深「ひうつ！」

司君は私の席まで歩いて来てそう言うと、軽くデコピンをしてきた



ちよつとだけ痛い

怒つてるのかな……？

司「下らん意地など張るな。」

七深「わっ！」

司君はそう言つて私を抱き上げて

教壇の先生の方に顔を向けた

司「七深を保健室に連れて行く。文句はないな？」

「はい、どうぞ、ごゆっくり。」

司「ああ。」

そんな会話の後、司君はそのまま教室を出た

その時、私はなんだか安心しちやつて

目じりから少し、涙が出ていた

保健室に移動してから、私は養護教諭にいくつか質問を受けた

その時、先生の顔色が変わつて

私はトイレに連れていかれ、ある物を渡された

七深（こ、これって……）

どこかで見たことのある、それ  
使い方はもちろん知ってる  
けど……

七深「取り合えず、やってみよ。」

説明書通りにそれを使う

もしかして、もしかしちやったら……

心臓がドクンドクン動いてる

もし、反応があつたら……

七深「——っ!？」

そんなことを考えてるうちに、結果が出た

それを見て、私はトイレを駆け出した

こ、これ、どうしよう

ほんとに、予想が現実になっちゃった……

七深「——っ、司君……!」

司「どうした。」

私は保健室に入って、司君の前に立った

変な汗が滲み出てくる

そんな状況で、私は一つ息をついた

七深「あの、あのね…… 体調不良の理由、分かった。」

司「そうか。なんだった？」

七深「そ、それは……」

そう言いながら、私は妊娠検査薬を出した

一応ちゃんと洗ったけど

なんだか触るのには抵抗がある

七深「に、妊娠、しちゃった……」

司「…… なに？」

司君も流石に驚いてる

それを見て、涙が出てきた

司「どうした、七深。」

七深「…… ごめん、ね。」

司「なにかだ。」

七深「ちゃんと、司君は気を付けてたのに…… あの日……」

私たちは普段はちゃんと避妊はしてた

けど、何回か、私が避妊を拒否したことがあつた

司君が止めるのを聞かないで……

きつと、そのどれかのせいだ……

七深「ごめん、ごめん…… 私……」

司「はあ…… なに早とちりして泣いてやがる。馬鹿め。」

七深「え——っ！」

司君は呆れたような声でそう言つて

私の頭に手を置いた

司「別にあれはお前1人の責任じゃない。最終的に了承したのは俺だ。」

七深「そんなこと……」

司「あるから言っている。1人で全て背負つてるんじゃないよ。」

七深「わぶっ……っ！」

司君に抱きしめられる

温かい…… 安心する……

そう思いながら、私は司君の背中に腕を回した

司「それに。お前の恋人を誰だと思つている？この俺だぞ？一生養うくらいは可能だ。」

七深「司君……」

司「一つ、文句があるとすれば。式が来年になることくらいだ。」

七深「!?」

その言葉に私の心臓は大きく跳ねた  
えつと、式が来年になる

って言うことは……

七深「つ、司君、それって……」

司「結婚するぞと言ってるんだ。安心しろ。世界一幸せにしてやるよ。最も、世界の  
幸せのラインを変えかねないがな。」

七深「!／／／」

偉そうで、ロマンチックとは言えないプロポーズ

けど、その言葉に嘘なんて一切ない

自信があるのが態度に滲み出てる

司「それで、どうする。」

七深「え?／／／」

司「結婚するのか?」

七深「…… 答え、知ってるくせに／／／」

司「お前の口から聞きたいだけだ。ほら、聞かせてみる。」

そう言われて、私は深呼吸をした

それで、司君をさらに強く抱きしめて

私は声を出した

七深「私、司君と結婚したい……！／／／これからもずっと、一緒がいい……！

／／／

司「ああ。分かった。じゃあ。」

七深「？」

司君は私から離れて行った

少しそれが寂しいと思っただら

すぐにどこかに電話を駆け出した

司「終木司だ。仕事の依頼だ。広町七深を俺の家に移住させる。親への連絡はこつち  
でしておくから、今日中に俺の家に運び込め。」

『かしこまりました。』

七深「え？」

私は首を傾げた

引越し？司君のお家に？

ていうか、今日中!?

そんなことを考えてると、司君はまた別の場所に電話をかけた

司「もしもし、柗木司だ。いきなりで悪いが、報告だ。」

七深父母『?』

司「貴様らの娘、広町七深は予定通り俺が貰う。今日、そっちに引越し業者がいくから通してくれ。」

七深母『ええ!?!』

司「正式な挨拶は後日行う。日程はそっちが指定しても構わん。じゃあ。」

そう言つて、司君は電話を切つた

怒涛の展開に頭が付いてこない

今、私の両親に電話かけてたよね?

しかも、報告済ませちゃったよね?

司「よし、準備は整つた。行くぞ、七深。」

七深「え、ど、どこに!?!/ /」

司「俺の家……いや、俺たちの家だ。体調が悪いんだろう。帰つてさっさと寝るぞ。」

司君はそう言つて私の手を引いた

もう、行動力ありすぎだよ

司「さあ、これからが大変だぞ。この俺の月収3か月分の指輪と言う、この世に存在しない物を見つけないければならないからな。」

七深「…… うんっ！／＼／＼」

そう言つて、私と司君は学校を飛び出した

この時で、高校卒業1か月前

1か月後の今は私たちは婚姻届けを出して、夫婦になりました

まだ、指輪も見つかつてないし、結婚式の予定も立ててない

けど、司君がいて、少しずつ大きくなつてゐる新しい命もいて

私は今、すつごく幸せです！



## 訪問

大学を卒業してから3年

私は専業主婦をしています

名前も倉田ましろから十条ましろになりました！

カグヤ「——— たいま、ましろさん。」

ましろ「あ！おかえり！カグヤ君！」

カグヤ「ああ、そのまま座ってて。」

ソファから立ち上がってカグヤ君の方へ行こうとすると、そう止められた

そして、すぐに私の隣に来た

カグヤ「今はましろさんだけの体じゃないんだから。ゆっくりしてて。」

ましろ（ちよつと移動するくらい大丈夫なんだけどなあ………）

カグヤ「ちやんと毛布かけて。」

カグヤ君がこんなに心配してるのにも理由があつて

私は今、妊娠6か月です

安定期には入ってるけど、カグヤ君はずっとこの調子で

しばらくは家事なんてほとんどできてません

カグヤ「すぐにご飯の用意するね。」

ましろ「私もするよ？」

カグヤ「いいよ。ましろさんは座ってて。」

そう言つて、エプロンをもつてキッチンに向かう

カグヤ君、何でも出来ちやうんだよね……

本人は司さんほどじゃないって言うけど

私からすれば十分超人なんだよね

カグヤ「今日は何してたの？」

ましろ「今日はね、この子の為にお人形作つてたんだー。見てー！」

カグヤ「ミッシェルさんだ。懐かしい。」

ましろ「今でも商店街にいるよ！声はちよつと変わったけど！」

カグヤ「そうなんだ。最近行ってなかったけど、なにかイベントがあるとき行こうか。」

ましろ「うん！」

料理をしながらも私の相手をしてくれる

出来過ぎてて、私の中の基準が壊れそう

(ピンポーン♪)

カグヤ、ましろ「？」

カグヤ君が料理を作ってる時

家のインターフォンが鳴った

今は夜7時だけど、誰だろう？

カグヤ「ちよつと出てくるよ。」

ましろ「うん。」

カグヤ君はそう言ってリビングを出て行った

ほんとに誰だろう

こんな時間に人が来るなんて珍しいし……

ましろ(だ、誰だろう?)

司「――邪魔するぞ。」

ましろ「!？」

カグヤ君が部屋を出て10秒ほどすると

司さんがリビングに入ってきて来た

なんか、すごい大荷物をもって

ましろ「ど、どうしたんですか!？」

司「おお、久しいな十条夫人。今日は祝いの品を持ってきた。受け取るがいい。」  
ましろ「えっと、これは？」

司「ベビーカーにベビーベッド等の数点だ。」

ましろ「!？」

金銭感覚!?

うちも十分裕福な方だけど

それでもこの辺りの値段は迷うのに……

七深「やつほく！シロちゃくん！」

？「しろおねーさん！こんばんはー！」

ましろ「あ、ななみちゃんに愛純ちゃん！」

司さんに続いて入って来たのはななみちゃんと2人の子供の愛純ちゃん

今年で7才になるはず

2人のいい所を取ったような外見に明るい性格

そして、司さんから引き継いであろう才能を持つてて

この辺りでは天才小学生と呼ばれてる

七深「わく！お腹大きくなつたねく！」

愛純「赤ちゃん、ここにいるんだく！」

ましろ「そうだよ。少し触ってみる？」

愛純「うん！」

愛純ちゃんは元気に頷いて、私のお腹に触れた  
ゆつくり撫でられているから、少しくすぐったい  
けど、それ以上に微笑ましい

七深「どう〜？赤ちゃんとお話できる？」

愛純「早く愛純と遊びたいって言ってるよ〜！多分〜！」

七深「そっか〜。」

ましろ「優しくしてあげてね。」

愛純「大丈夫だよ〜！」

優しいお姉ちゃんがいるのは頼もしいなあ

ななみちゃんたち家族はよく遊びに来てくれるし

七深「それで、しろちゃん。最近どう〜？」

ましろ「どうって？」

七深「困った事とかない〜？」

ましろ「あー……」

ななみちゃんにそう言われ

私はあることが頭をよぎった

まあ、さつきまで考えたことだけど

ましろ「カグヤ君が過保護すぎる事かな……」

七深「あー(察し)分かる。」

ましろ「ななみちゃんもそうだったよね。」

七深「うちは明石さんに仕事押し付けて、四六時中ボディガードしてたよ。」

ましろ「それは、私以上だね。」

まあ、司さん以上に強い人間なんていないだろうし

安心と言えば安心なのかな

学生の頃からの伝説、数えきれないし

司「——俺がいる空間で俺の愚痴を言うとは。肝が据わっているな。」

七深「あつ。」

司「流石は俺の妻だ。誉めてやろう。」

愛純「褒めてやろう〜！(フンス!)」

七深「あ〜！またお父さんの真似する〜！」

司「いいではないか。愛純は将来、この世の頂点に立つ逸材だぞ。」

司さん、家族には甘いんだよね

特に愛純ちゃんは生まれた時から可愛がつてるし  
仲のいい親子だなあ

愛純「おとーさん！抱っこ〜！」

司「もう小学生だろ。今日だけだぞ（n回目）」

七深「も〜！何回目の今日だけなの〜！」

ましろ「大変そうだね、ななみちゃん。」

七深「ほんとだよ〜！」

大変そう、だけど楽しそう

私たちもあんな風になれるのかな？

なれると、いいな

カグヤ「楽しそうですね。司さん。」

愛純「おとーさん、楽しいの〜？」

司「ああ、楽しいぞ。」

ましろ（わっ、こんな顔出来たんだ。）

すぐく優しそうに笑ってる

いつもの極悪笑顔じゃない（失礼）

か、替え玉？

そんなことを思っていると、司さんの雰囲気が変わった

司「楽しいは良いが、十条よ。」

カグヤ「はい？」

司「貴様はそこそこの規模の企業のトップと言う立場だ。色んな責任がのしかかってきて、疲れを感じて来てることだろう。」

カグヤ、ましろ「！」

司さんは真剣な顔でそう言った

すごい、当たってる

カグヤ君、最近疲れてる表情をすること多いんだよね

なのに、仕事のことは全然話してくれないし……

司「だが、貴様が最も大切にするべきは家族であるということを決して忘れるな。貴様が辛そうな顔をして最も苦しむのは貴様を世界一愛する者であると知れ。」

カグヤ「……！」

ましろ（司さん、気づいてたんだ。もしかして、今日来たのも、これを言うため？）

司さんは小学生の時から社長だったらしいし

いろんな経験があるんだと思う

きつと、カグヤ君みたいなことにもなったんだ



…… 想像はつかないけど

司「…… 何かあれば、俺を頼れ。お前は俺ではない。力を借りることなど何も恥ではない。」

カグヤ「司さん……」

司「礼は貴様らの家族写真が載ってる年賀状で良い。」

七深（もく、相変わらず甘々だなく。）

愛純（おとーさん、昨日の夜どこかにお電話してたけど、もしかして。）

司さんはそう言った後、軽く袖をまくって

そのまま、キツチンの方に歩いて行った

カグヤ「司さん？」

司「貴様らはそこに座ってのんびり話でもしてろ。今夜は俺が腕を振るおう。ついでに持ってきた食材もあるしな。」

ましろ「ええ!？」

七深（絶対ついでじゃない。）

愛純（こういうの何て言うんだっけ…… ツンデレって、おかーさん言ってたっけ？）

カグヤ「じゃあ、お任せしようか。ましろさん、隣座るね。」

ましろ「うん。」

カグヤ君はそう言って、私の隣に座った

なんだか、2人並んで座るの久しぶりかも

司「…… そいつ、そんな格好つけてるが。会社のデスクや鞆の中に十条夫人の写真を常備し、大事な会議の前に10分ほどそれを眺めるのが会社では恒例行事になってるぞ。」

カグヤ「なんで知ってるんですか!?!」

ましろ「か、カグヤ君…… / / /」

恥ずかしくて顔を覆ってしまう

司さん、爆弾落とすの上手すぎ……

一言で雰囲気変わったんだけど

七深「十条君、しろちゃんのこと好きすぎ〜。」

愛純「ラブラブ〜。」

カグヤ「か、揶揄わないでくださいよ……」

ましろ「あ、そ、その、私も、カグヤ君の事、愛してるよ…… ? / / /」

カグヤ「ましろさん!?!」

七深、愛純「ひゅ〜。」

テンパって考えて方喋れない

横からななみちゃんど愛純ちゃんと愛純ちゃんが押揃ってくるし

……でも、楽しいな

七深「それで、どんな写真なの〜?」

愛純「やつぱり、かわいいの〜?」

ましろ「か、勘弁して……」

カグヤ「き、企業秘密と言うことで。」

司「俺は知ってるぞ。確か――」

カグヤ、ましろ「勘弁してください!」

私とカグヤ君は同時に司さんにそう言った

そんな私たちを見て司さんは笑ってて

ななみちゃんたちは相変わらず茶化してくる

けど、その時間は楽しくて、高校の時のことを思い出せて

なんだか、すごく懐かしい気分になった

## 誕生

ましろさんと結婚して、4年ほどが経った

僕は親の会社を継ぎ、今は社長をしています

まあ、ここまでやれているのは、司さんの手助けのお陰なんですが……

カグヤ（は、早く終わらせないと。）

そんな僕ですが、今はものすごく焦っています

今、僕の奥さんのましろさんは妊娠中で

もう出産予定日近くです

出来れば、病院について行きたかったのですが、急な仕事が入ってしまい、そうもい  
かなくなっていました

（P r r r r r !）

カグヤ「！」

そんな中、僕の携帯に電話がかかってきました

片手でタイピングをしながら電話を取ります

響『カグ君！ましろちゃん、陣痛来たよ！』

カグヤ「もうですか!?! 予定日は明日のはず……」

響『早まったみたい!?! どう!?! これそう!?!』

カグヤ「い、行きたいのはやまやまなんですが、まだ仕事か  
ど、どうする」

ここで僕が行けば、社員の人たちが困ってしまう  
でも、ましろさんの出産に立ち会わないのも嫌だ

何か、何か案を――

(ズドンっ!!!)

カグヤ「!?!」

司「――おい、貴様はここで何をしている。」

僕が酷く慌てっていると、突然、扉が僕の横を通過していった

そして、重力を感じていないように右足を挙げた司さんがいた  
え、どうしてここに?

カグヤ「ど、どうしてここに?」

司「あ? そろそろ十条夫人の出産予定日だからな。手伝いに来てやった。」

カグヤ「え?」

響『司!?! いるの!?!』

司「明石か。ああ、今来たところだ。で、その焦りようつてことは。響『そう！もう、ましろちゃん陣痛来てる！』」

その会話が終わると、司さんは僕の方に近づいてきて、椅子から立たされた。そして、ドンつと背中を押された。

司「この程度の仕事量にこれほどの時間をかけるとは。まだまだだな。まあいい。」カグヤ「！」

司「さつさと妻の所に行け、バカ者が。」

カグヤ「は、はい！ありがとうございます！」

司「車を待たせてる。急げ。」

カグヤ「はい！行ってきます！」

僕はそう言われ、部屋から駆け出した。

司さんがここまでしてくれたんだ。

全力で急がないと

〃司〃

司「おい、けいた——もう行きやがった。」

あいつ、携帯忘れていったぞ。

どんなに焦ってるんだ。

急げと言ったが、冷静さを失ってどうする

司「まっ、そのくらい妻を愛しているから、俺は奴を買ってるんだがな。」

響『随分と優しいじゃない、司さーん。』

司「あ？まだ切つてなかつたのか。」

響「ちよつと甘やかしすぎじゃなーい？」

明石はからかうような声でそう言ってくる

甘やかしすぎか

まあ、確かにそうかもしれんな

だが……

司「俺は力など吐いて捨てるほどある。あの夫婦を助ける程度、造作もないことだ。」

響『甘々だね。』

司「無駄口を叩いていないで貴様は出来ることをしろ。俺はあいつの仕事を片付けるのと、扉の修理をしなければならんだ。」

響『いや、なにしてんの。』

司「勢い余った。」

響『ま、まあいいや。じゃあ、あとで来てあげなよ！』

司「ああ。」

そうやって、俺は電話を切った

本当に、世話のかかる奴らだ

まあ、さつき言った通り、力など腐るほどあるのでな

あいつらを助けるくらい、誰も責めはしないだろう

「カグヤ」

司さんが用意した車で、病院までこれた

携帯を忘れてこっちの状況は分からないけど

急げるだけ急いで、病院に入った

カグヤ「——ましろさん！」

ましろ「カグヤ、くん……」

カグヤ「大丈夫…… なわけないよね！えっと、えっと——」

響「落ち着いて。」

カグヤ「いた！」

僕があたふたしてると、響さんに頭を叩かれた

それで少し冷静になって、周りを見た

病室には、看護師さんと響さん、それに七深さんと愛純さんがいた



七深「出来る限りのことは私たちがしたから、落ち着いていいよ。」

愛純「痛いときはね！おててをぎゅーってすればいいんだよ！」

カグヤ「な、なるほど。」

そう言われ、僕はまず、手を洗った

そして、大きく深呼吸をして

ましろさんの横に立った

ましろ「ふふっ……今日は、あわてんぼさん、だね……」

カグヤ「ご、ごめんね。慌てて来たから。」

ましろ「大丈夫だよ……嬉しいから……」

ましろさんの音、やっぱりかなり弱ってる

けど、お腹の子の音も強くなってる

ましろ「進行、早いみたいだね、思ったよりもすぐ、出産が始まるかも……」

カグヤ「うん。僕も一緒に行くよ。」

ましろ「奥さん思いの旦那さんで、嬉しい……でも、ここから長いだろうから、少

し休んでもいいよ……？」

カグヤ「それは、遠慮しておくよ。今、ましろさんから離れる方が嫌だから。」

ましろ「そっか……」

それから数時間、僕はましろさんの手を握っていた

ましろさんから離れるのがこんなに怖いのは初めてかもしれない

いや、僕が恐れてる場合じゃない

今、一番不安を抱えているのはましろさんだ

僕は毅然とした態度でいないと

あれから、ましろさんの出産が始まった

僕はましろさんが分娩室に運ばれてから、また手を洗って、分娩用の服を着た  
そして……

ましろ「う、ぐっ、うううう………!!!」

カグヤ「ましろさん………」

さつきから、ましろさんの音がさらに弱くなった

お医者さんからは健康そのものとは言われてるけど、やはり不安になる

こんなましろさんはもちろん初めて見るから

カグヤ「ましろさん………頑張ってる。」

ましろ「かぐや………くん………!!」

カグヤ「僕は、ずっと一緒にいる。」

ましろ「う、ん……！」

それからの時間は永遠のように感じた

ただただ、ましろさんの苦しむ声を聞いて

これほど、自分の耳が良いことを恨んだことはなかった

ましろさんが感じる痛みを少しも引き受けられない自分が恨めしいと思った

ましろさんの握る手に段々と力が入って、どれほど頑張ってるのかは分かった

早く産まれて欲しい、無事であってほしい

僕にはそう思う事しかできなかつた

「頭出てきましたよ！もう少しですよ！」

カグヤ「！」

「頑張つて！」

カグヤ「ましろさん！」

ましろ「うんっ……！」

「手を胸の上に置いてはーはーはーと息を吐いてください！もう産まれますよ！」

ましろさんは目を瞑って、言われた通りに息をしている

もうすぐだ

僕は拳を固く握って、必死に祈った

その瞬間

「ふえん！ふえええん！！」

カグヤ「！！」

「生まれましたよ！元気な女の子です！」

ましろ「あ………… 私たちの、赤ちゃん…………？」

助産師さんが抱っこしている赤ちゃんを、ましろさんは眺めている  
その表情は、穏やかなものだった

心底安心して、嬉しそうで

ましろ「カグヤ君、見て………… 私たちの赤ちゃんだよ…………」

カグヤ「うん、見てる。可愛いよ。」

ましろ「あれ、泣いてるの…………？」

カグヤ「分からない………… でも、前がよく見えないよ。」

ましろ「ふふっ、珍しいね…………」

感情がグチャグチャだ

さぞ、今の僕の音は乱れてると思う

喜び、安心、愛おしさ

それらが混ざり合って、それが涙になって流れていくように感じた

カグヤ「ありがとう……。そして、お疲れ様、ましろさん。」  
ましろ「うん……！」

「旦那さん。ここから色々な処置がありますので、一度退室していただいてもいいですよ。」

カグヤ「そうですね。こんな顔でここにいるのも気が引けますし、一度失礼します。」  
「すぐに会えますので、お待ちください。」

僕はそう言われ、分婉室から出た

取り合えず、顔を洗いに行こう

赤ちゃんにちゃんと見せる顔がこれなんて、示しがつかない  
少しでも、マシな顔にしないと

分婉室から出て、僕は顔を洗った

取り合えず、少しは落ち着けたと思う

七深「カグヤ君！どうだった？」

響「ちゃんと生まれた!？」

カグヤ「七深さん、響さん。」

そんな僕の前に、2人が歩いて来た

こんな平日に来てくれるなんて、感謝しかない

おかげで、ましろさんの不安も軽減されたと思う

カグヤ「今日はありがとうございます。」

響「いいっていいって！それより、おめでと！」

七深「おめでと。よかつたね。」

カグヤ「ありがとうございます。」

司「ふむ。その様子じゃ、無事に生まれたようだな。」

愛純「ようだな。」

カグヤ「！」

2人と話していると、どこか威厳のある声が聞こえて来た

顔を上げて確認するまでもない

司さんの声だ

カグヤ「司さん。」

司「夫人の無事な出産、嬉しく思う。」

カグヤ「司さんには本当にお世話になりました。そう言えば、仕事は大丈夫だったんですか？」

司「もうすべて終わらせてきた。ついでに、向こう半年分は片付けてやった。」

カグヤ「へ？」

司「育児休暇が必要だろう。あ、扉は修理したから心配するな。」

カグヤ「いえ、その心配は特に……」

やつぱり、この人はすごい

まだ十時間くらいしか経ってないのに、そんな量の仕事をこなすなんて

やはり、次元が違う

司「赤子と言うのは、産まれた後の方が大変なことが多い。気を引き締め、育児にあたることだ。」

愛純「あすみも赤ちゃんと会いたーい！」

カグヤ「会えますよ、すぐに。」

響「うわー！楽しみー！」

皆、こんなに楽しみにしてくれていたのか

最近、他の皆さんからも連絡が来ていたし

報告の連絡を入れておかないと

司「して、十条。」

カグヤ「はい？どうかしましたか。」

司「……いや、後でいいだろう。それよりもまず、食事をとると良い。そして、貴

様の忘れ物だ。」

カグヤ「あ、携帯。」

司さんに渡されて、やっと存在を思い出した

そう言えば、忘れてたっけ……

よく覚えてないな……

司「食事は特別に用意させた。さっさと食って、夫人を迎える準備をしておけ。」

愛純「パパー、愛純もお腹すいたー。」

司「ふむ。もうおやつ時間だな。何か食べに行くか。」

愛純「わーい！」

七深「私も行く。」

響「奢ってよ司。」

司「いいだろう。では、俺たちは明後日、改めて何うとする。夫人の体調がすぐれない場合は連絡してくれ。」

その言葉の後、4人は歩いて行った

さて、僕も用意してもらった食事をいただく

あれから2日が経った



ましろさんは完全ではないけど、調子は良くなってる

あの日、愛純さんには悪いことをしてしまった

すぐに会えるって言ってしまったし……

愛純「わー！かわいいー！」

七深「美人になりそうだね〜。」

ましろ「ふふっ、ありがとう。」

そんな心配をよそに、愛純さんは赤ちゃんを楽しそうに眺めてる

司さん曰く、ましろさんの調子がすぐれないことは理解してたらしい

2日後に会いに行くことに賛成してたらしい

流石は司さんの娘さんだ

天才だ

司「ふむ。して、2人はこの子にどのような名前をつけるつもりだ？」

カグヤ「ああ、この前のあれはそれのことですか。」

ましろ「一応、2人で考えてはいるんです。」

司「ふむ。で、その名前は？」

色々候補はあったけど、昨日に赤ちゃんの顔を見て、なんとなく決めた

そう、この子の名前は……

ましろ「星に空で、せい星空。」

カグヤ「それが、この子の名前です。」

七深「良い名前だね。」

愛純「可愛いね〜！」

七深さんの愛純さんは好感触らしい

自分たちで考えたけど、良い名前だと思う

響きが綺麗で

司「ふむ。非常に良い名だ。では、せい星空……つと。」

カグヤ、ましろ、七深「ん？」

司「よし、出産祝いだ。受け取ると良い。」

カグヤ「え？」

司さんは綺麗な封筒に僕たちの名前を書いて

それを渡してきた

えつと、これは……

司「中に10億の小切手が入ってある。好きに使おうと」

七深「おバカ！」

司「！」なに、俺に攻撃を当てただと？」

ましろ（そこ？）

七深「一度にそんな大金貰っても困るでしょ！」

流石は七深さん

僕たちが言えないことを言ってくれた

と言うより、10億って……

僕の年収より遥かに多い……

七深「全くもう。そう言うのはもう少し小分けにしなさい。」

司「ふむ。」

ましろ（ていうか、10億あげることには反対しないんだ……）

カグヤ（七深さんも感覚がマヒしてる……）

司さんは規格外だ

これを素でやってるんだから

この人にとっては1万円あげてるくらいの感覚なんだろうなあ……

司「色々と金がかかると思ったのだが。」

ましろ「も、もう、ペビー用品なども貰ってるので。」

司「ふむ。では、祝の度に渡すでしょう。」

よ、よかった……

流石に10億なんてもらったら大変だ……

司「それにしても、なんだ。」

カグヤ「？」

司「俺も愛純が生れた時のことを思い出した。」

愛純「？」

司さんは愛純さんの頭を撫でた

すごく優しい表情をしてる

司「嬉しいものだよな。我が子が生まれるというのは。」

カグヤ「はい。」

司「夫人も、幸せそうだなによりだ。」

ましろ「は、はい。(本当に、優しくなったなあ……)」

司さんは僕たち3人を優しい目で眺めてる

そして、ぼつりと

司「俺もまた、その喜びを味わいたいものだ。」

七深「!?!?!」

愛純「愛純に弟か妹が出来るのー？」

司「さあ、どうだろうな。運命のめぐり合わせ次第だ。」

司さんは愛純さんに言い聞かせるように言った

あの、小学校1年生に求めることじゃないのでは……

愛純「えー！愛純はほしー！」

司「なら、自分で運命を変えることだ。」

愛純「どうすればいいの？」

司「よく学び、よく食べ、よく寝ることだ。」

愛純「はい！」

司さんはふつと笑うと、また僕たちの方を見た

司「では、俺たちはそろそろ失礼しよう。他の者も来るだろうしな。」

カグヤ「はい。」

司「じゃあな。また、そちらに出向くこともあるだろう。」

七深「じゃあねー！」

愛純「またねー！」

そう言つて、司さん達は病室を出て行つた

何というか、今度は僕たちがお祝いする側になりそうだ

なんとなくだけど……

ましろ「柊木さん、変わったよね。」

カグヤ「そうだね。愛純さんが生れてからは特に。」

ましろ「カグヤ君がどう変わるか、楽しみ。」

カグヤ「うーん、ご期待に添えるか不安だよ。」

ましろ「ふふふっ。」

少し悪戯っぽく笑うましろさんを見て、僕も小さく笑った  
これからは、父親でもある

ましろさんと星空の為に、もつと成長しないといけない  
司さんのようにはいかないけど、そこは僕なりのやり方で  
2人を世界で一番、幸せにしよう

## 休日

とある日曜日、私は育児、家事に勤しんでいます

出産したのは去年だけど、まだつい最近に感じる

けど、星空の成長を見ていると、時間が経ったんだなあつと思つて

なんだか不思議な気持ちになる

カグヤ「ま、ましろさん！」

ましろ「!？」

洗濯物を取り込んでいると、リビングからカグヤ君の大きな声が聞こえた

こんな声を出すのは本当に珍しくて、何かが起きたんだとすぐわかった

私はすぐにリビングの方へ走りました

ましろ「——ど、どうしたの!？」

カグヤ「星空を見て！」

ましろ「!!」

カグヤ君にそう言われ、星空の方を見た

すると、そこには……

星空「ままー。」

ましろ「あ……（歩いてるー!）」

カグヤ「もう歩けるようになったんだ!すごいよね!」

ましろ「しゃ、写真撮らなくちゃ!」

カグヤ「もう撮ってるよ!」

ましろ「ありがとう!」

星空が生れて1年と少しの私たちは親バカでした

星空の成長が楽しみで楽しみで

初めて喋った時なんて、それはもう狂喜乱舞した

星空「ままー。」

ましろ「か、可愛すぎるよ……っ!」

星空はよたよたとこつちに歩いてきてる

手を前に伸ばして、抱っこしてほしいみたい

なんかもう、可愛すぎて涙出て来た

星空「だこー。」

ましろ「おいで星空ちゃんー!」

星空「むふー。」



私に抱っこされて、星空は「すごいでしょー」と言わんばかりのドヤ顔をしてる  
本当に可愛すぎる

なんでこんなに可愛いんだろう

カグヤ「本当に可愛いね。」

ましろ「そうだね。」

洗濯物の途中なんだけど、戻れないよ

だって、こんなに可愛いんだもん

天使だよ、うちの子、間違いなく天使だよ

カグヤ「じゃあ、僕は洗濯物を干してくるよ。星空はましろさんの気分らしいから。」

星空「ぱぱー。」

カグヤ「ん？どうしたの？」

星空「うーうー！」

星空はソファを指さしてる

どうやら、一緒に座れと言ってるみたいだ

それを見て、私とカグヤ君は2人でソファに座った

星空「むふー！」

カグヤ、ましろ（可愛い。）

すると、星空はまたドヤ顔をした  
なんだか嬉しそう

ましろ「星空ー。どうしたのー？」

星空「あうーうー！」

カグヤ「ふむ。なんだか、何かを欲しがってるね。多分、この時間だと。」

カグヤ君は台所の方に走って、お菓子を持ってきた

星空は食欲旺盛で、たくさん食べる

だから、たくさん買ってるんだよね

カグヤ「ほら、星空。あーん。」

星空「あー。」

ましろ「美味しい？」

星空「あうー！」

お菓子を食べると、星空は満足げな声を出した

流石カグヤ君だ

ちゃんと星空の言う事を理解できるなんて

カグヤ「さて、どうしようか。これじゃ家事が進まないね。」

ましろ「そうだね。星空が寝るまで待とうか。」

星空「？」

私は星空の頭を撫でた

髪質は私たちと同じでサラサラ系で

撫で心地がすごくいい

カグヤ「こういう休日も悪くないね。」

ましろ「そうだね。」

カグヤ「なんだか、星空に休ませられたみたいだ。」

星空「？」

星空はきよとんとした顔でこつちを見てる

何のことか分かってないみたい

本当に可愛いな

そう思いながら、私は膝の上に乗ってる星空をぎゅっと抱きしめた

ましろ「多分、パパとママ一緒にいてほしかったんだと思うよ。だって。」

星空「むふー！」

ましろ「こんなにドヤ顔だもん。」

カグヤ「あはは、可愛いね。ついつい撫でたくなっちゃうよ。」

2人で星空の頭を撫でながら、談笑をする

こういう時間って、すごく幸せだ

正直、未だにこんな幸せな結婚生活をしてる自分を信じられないけどでも、これは紛れもない現実だ

星空「キヤ♪キヤ♪」

カグヤ「ははっ、元氣すぎて、まだまだ寝そうにないね。」

ましろ「そうだね。いつもはずっと寝てるのに。」

カグヤ「そのお陰で元氣が有り余ってるのかもね。」

今日の星空はすごく元氣だ

歩けるようになったのが嬉しいのかな？

それとも、褒めてほしいのかな？

どっちでも、可愛いなあ

カグヤ「そうだ。折角歩けるようになったんだし、星空と散歩を試みるのもいいかも。」

ましろ「近くの公園なら安全だし、いいかもね。ずっとお家にいても、退屈しちゃうだろうし。」

カグヤ「なら、靴を買ってあげないとね。どんなのがいいかな？」

ましろ「うーん。星空に見せて、気に入ったのでいいんじゃないかな。星空は何色が

好きかな？」

星空「まま！」

ましろ「私？」

星空「ぱぱ！」

カグヤ「僕も？」

まあ、意味はまだ分からないよね

好きの部分だけに反応したのかな？

星空「ちゅき！」

カグヤ、ましろ（か、かわいすぎる………！）

星空「〜♪」

星空は楽しそうに鼻歌を歌っている

多分、この前見てたアニメの歌かな？

最近、気に入ってるみたい

ちゃんとリズム掴んでる、これはカグヤ君の血かな

カグヤ「本当に、うちの娘は世界で一番かわいいね。」

ましろ「あれ？私が一番じゃなかったの？」

カグヤ「え?! い、いや、それとこれとは少し違って、ましろさんも一番だよ！」

ましろ「ふふっ、冗談だよ。私も星空が世界で一番かわいいと思ってるから。」  
カグヤ「ましろさんも冗談言うようになったんだね……」

ましろ「母は強し、だよ？」

星空「ちやー！」

私は変わったと思うけど、カグヤ君も変わった

親になって、大切なものが増えて

でも、それは良いことだと思う

だって、世界一可愛い娘がいるんだもん

私たちは、本当に幸せだ

親バカすぎるのは、治さないのかもだけどね……